

続 国民同胞感の探求

—35年夏大学生との“雲仙合宿教室”から—

大学教官有志協議会
国民文化研究会
共 編

理 想 社

はしがき

日本国内の激しい二つの対立は、最近やや小康を保っているというのが、一般的な見方とされている。『勤評闘争』が過ぎ、『安保闘争』が去り、一見小康を保っているかに見えるいまの日本の国情は、ある意味ではアラシの前の無気味な静けさのようでもある。

しかし宿命的ともいふべき二つの対立が、現実に尖鋭(せんえい)の度をうすめつつあると見るならば、それは錯覚もはなはだしい。この対立はしばしば世相の表面に見え隠れし、そのつど政治問題、社会問題化しているが、いまや国民生活の中にまで侵透しようとしている。時には、一家団らんのおもしろべき個人の家庭生活の中にすら、それが影響を及ぼしていきそうな気配も見受けられる。

こうした風潮の中で国民は、めざましい経済の成長に気をとられ、ややうわついたふん囲氣に包まれて、その日その日を送っているが、心ある人々は、経済の繁栄だけを見て心を許し、手離して

喜んではいない。なぜなら、経済の繁栄が、そのまま日本という「国」の安泰を保障し、約束してくれると思っていないからである。

いなむしろ、戦後十六年のきびしい星霜を力つよく耐え抜いてきた日本国民は、「衣食住」が足るにつれて、いまの政治と、いまの教育と、さらにいまの社会思潮などに、ようやく深刻な不安を抱き始めている。二つの対立が、あるいは目に見えないイデオロギーの形で、あるいは目に見える力の形で、まなじりを決して対峙(たいじ)したまま、全国民の眼前に展開されている。この二つの対立は、お互いに融合調和の可能性を少しもみせないし、いつまでたっても和解する見込みもなく、平行線のままそれぞれ勝手に独走している。こうした状態がこのまま推移して行ったら、どうなるであろうか。直感力にたけた聰明(そうめい)な日本国民は、この対立の行きつく果てが、いまわしい国家の分裂に立ち至らないとも限らないという、深い憂いを抱き始めているであろう。

日本の「国」の安泰を確立するためには、「まだ道は残されている」はずである。美しい日本の国土は、過去においていくたびとなく天災に見舞われても、なおかつ永遠の美しさをたたえている。すなおにものを見、すなおに人の心に感応することができた日本人。美しいものを美しいと感じ、まごころをまごころと受け取ることのできた、幅広い日本人の宗教的情操と芸術性・文化性は、た

くましく雄渾(ゆうこん)なスピリットとともに、どこかにおおい隠されてしまっている。階級の差も、外的環境の差別も、人間の価値の前にはつねに第二義、第三義的の意味にしかとらない豊かな人間性、しかし人間性そのものを冒瀆(ぼうとく)する行為には、心からの憤りを感じた人間性——それらはいったいどこに隠れてしまっているのでしょうか。すべてを二つに分けて考える安易な『公式で割り切ったあざやかな思考法』から、すべての日本人が、互いに手をさしのべ、力を藉(か)し合いながら、ともどもに勇気を振るい起こして脱出しようではないか。これがわれわれの切なる念願である。流動する人生をありのままに見る力を、われわれ日本人自身がしっかりと取り戻す以外に、この時代をきりひらく『残された道』はないのではなからうか。

このような観点からいまの時代を見直し、失われようとする『国民同胞感』を学問的に、また生活体験的に探求するため、三十五年夏、長崎県の雲仙に、大学生を中心として二百名のものが、四泊五日の『合宿教室』を行なった。本書はその記録である。安保改定をめぐる全学連の国会乱入事件の直後であった。

この書の題名を「続・国民同胞感の探求」としたのは、昨年刊行した「国民同胞感の探求」——阿蘇における大学生との『合宿教室』から——と合わせて、二部作としたためである。したがってこの『合宿教室』

の特徴である「合宿運営の方法」「チューターシップ」「班別討論の意義」については、前書に詳しく述べているので、本書では省略した。前書をご参照願えれば幸いである。

とくに本書では、前書と違って、参加学生の発言や所見にかなり多くのスペースをさいた。そして学生の発言を編者の叙述によってではなく、速記によって生のまま載せた。これは参加学生の所見をできるだけご紹介したかったためである。

三十四年夏の「阿蘇合宿教室」は前書の記録に明らかなように、現代の青年学生とその前代の人々との間に横たわる「時代の断層」に、全参加者が真剣に取り組んだところに、特徴があった。これに対して、この「雲仙合宿教室」の記録は「対立意識の過剰の反映」が認められたところに一つの異色があった。すなわち安保闘争の直後であったことも原因して、ごく少数ではあったが、階級史観・唯物史観の殻に閉じこもって、どうしてもそれから抜け出ようとしなれないものが見受けられた。しかし、合宿はそういう人たちを包括しながら、所期の目的を果たすことができた。

この合宿でなされた諸講義は、講師一人一人の人生体験に深く根ざして行なわれているのが特色である。観念的学理ではなく、いわば体験的学説であったということができよう。さらに木内信胤、佐藤慎一郎両氏をはじめ、各講師が、本書の出版のために、ご多忙中にもかかわらず快く講義を整理してくださったことを、

まことに得がたいご協力として深く感謝したい。

なお本書を手にとられる方々が、関連する諸講義のつながりと、それが班別討論に受け継がれていくこの「合宿教室」の姿を、行間に読みとっていただければ、編者の喜びこれにすぐるものはない。さらに率直なご批判、ご叱正を賜わるよう切望してやまない。

昭和三十六年五月二十一日

大学教官有志協議会
国民文化研究会

目次

はしがき……………一

現代の問題点……………二

一 初の宇宙人・ガガーリン少佐……………三

二 ソ連の教育と日本の教育……………三

三 全学連と大学自治会……………三

付、自治会活動への所感……………三
鹿児島大学生

“雲仙合宿教室”の目ざしたもの……………三
川井 修治

“雲仙合宿教室”の記録……………三
晃

班別討論……………	一三
講義「新中国建設の原動力」……………	佐藤 慎一郎…三
班別討論……………	一九
三 唯物史觀の横行を許さず(第三日)……………	二五
主催者側の自己紹介……………	二六
講義「日本文化の伝統と現代的意義」……………	黒岩 一郎…二七
班別討論……………	二六
講義「現代政治の批判と新しい指標」……………	羽田 重房…二八
地区別懇談会……………	二九
思いのままに訴う―大学六教官のあいさつ―……………	三〇
木下 彪 (二六〇)	野口 恒樹 (二六〇)
水野 武夫 (二七六)	峯 辰次 (二七六)
植木九州男 (二八〇)	津下 正章 (二八二)
全体意見発表……………	二八
四 經濟の諸問題とその研究方法論(第四日)……………	三二
―日本を世界的視―……………	野でとらえよう……………

講義「世界の経済と日本の経済」	木内	信胤	二九三
仁田峠登山（レクリエーション）			三六三
講話「良識について」	花田	大五郎	三六四
懇親会（コンパ）			四〇一
「開かれた日本人」へ（第五日）——ともに国民的同胞感を！			四〇三
所感「五日間の生活をともにして」		小田村寅二郎	四〇五
感想文執筆			四〇七
閉会式			四〇七
はしりがきの感想文から			四〇九
十日後に書かれた感想文から			四三三
あとがき			四三三

現代の問題点

一 初の宇宙人・ガガーリン少佐

美しい桜の季節も早や過ぎ去ろうとして、春がすみ人々の心をなごやかに包んでいた四月なれば、われわれ日本人が一瞬その耳を疑がうほどの大ニュースが飛んできた。モスクワ放送が臨時ニュースで「宇宙空間への世界最初の人間飛行について」というタス通信の特別発表を、全世界に向かって矢つぎ早やに報道してきたからである。(以下読売新聞から抜粋)

○一九六一年四月十二日午前九時七分、ソ連において地球を回る軌道に世界最初の人間を乗せた第一号人間宇宙船「ウォストーク」が打ち上げられた。宇宙船「ウォストーク」の宇宙飛行士は、ソビエト社会主義共和国同盟の市民である飛行士ユーリー・アレクセービッチ・ガガーリン少佐である。(時間はすべてソ連時間で、これに六時間を加えると日本時間になる)

○多段式宇宙ロケットの発射は成功裏に行なわれ、第一宇宙速度を得て、運搬ロケットの最終段階から切り離されたのち、宇宙船は地球をめぐる軌道を自由に飛行しはじめた。

○地球を回る第一号人間宇宙船の周期は八十九・一分。地球表面への最近接点(近地点)は百七十五キロ・メートル、遠地点は三百二キロ・メートルである。赤道面との軌道の傾斜角度は六十五・〇四度である。宇宙飛行士を乗せた第一号人間宇宙船の重量は四千七百二十五キロ・グラムであり、これには運搬ロケッ

トの最終段の重量はいっていない。

○宇宙飛行士ガガーリンによって往復の無線通信が開始され、継続されている。……ラジオ・テレメーター装置およびテレビジョン装置によって、飛行中の宇宙飛行士の観察が行なわれている。

○人間宇宙船「ウォストーク」が軌道に乗る時期を宇宙飛行士ガガーリンは、満足すべき状態で耐え抜いた。そして現在ガガーリンは良好な気分である。

○ガガーリン少佐は宇宙船上から数分おきにつきのように伝えてきた。

地球を観測している。視界は良好。気分よし。

飛行は良好に続けられている。地球を観測している。視界良好。

空間の一部は雲におおわれている。飛行はいぜん正常に続いている。すべてが優秀に働いている。先へ進む。

自己感覚は良好。元気。

○予定の研究を成功裏に行ない、飛行計画を遂行したのち、モスクワ時間一九六一年四月十二日午前十時五十五分、ソ連の人間宇宙船ウォストークはソ連の予定の地域に無事着陸した。二十七歳のガガーリン少佐は次のように述べた。

「党と政府ならびにニキタ・セルゲービッチ・フルシチョフに対し、着陸は正常に行なわれたことを報告するようお願いする。気分は良好であり、外傷、打撲傷はない」。

宇宙空間への人間の飛行実現は人類による宇宙征服の壮大な見通しを開くものである。

まさに前人未踏の宇宙旅行、一時間四十八分の天界旅行が記録された。人類が夢に描き続けた地上の幻想は、いまや現実の事態となって現われた。ソ連科学のこの輝かしい業績に賛辞を呈さぬ者は世界中に一人もいないであろう。それは人間として未知の世界を探求できる喜びを感じるからだけではなく、場合によれば、人間が地球上のいろいろの制約から解放されるかもしれないという課題を含んでいるからである。はたせるかな、翌日の新聞報道は一様にその問題を提起し、ガガーリン少佐の成功が、地球上の対立葛藤(かっとう)に終止符を打つかもかもしれない可能性まで論及していた。

しかしわれわれはガガーリン少佐とフルシチョフ首相の対談内容を一読するに及んで、強烈なショックを受けたのである。それはなぜか、というと、この二人の発言が何よりも「祖国愛」に深く根ざしたものであることが、ひときわ目立っていたからである。それはつまりこの二人が祖国の榮譽をたたえ、人類の栄光を、祖国ソ連の栄光の中に把握(はあく)しようとしているためであった。国家間のいまわしい争いも、やがては終わりを告げるかもしれないとわれわれ日本人が考えているとき、ソ連の当事者たちは、高らかに祖国をたたえ、祖国愛を絶唱(けつしょう)させているのである。ここでわれわれはもう一度同夜フルシチョフ首相とガガーリン少佐の電話対談に目を通してみよう。(以下毎日新聞から。傍点(ぼうてん)編者)

フ首相 われわれはあなたとともに、わが国民とともにこの宇宙征服の偉業を盛大に祝っています。全世界はわが国の能力、偉大なわが国民、わが国科学が何をなしうるかを見ることである。

ガ少佐 すべての国はわれわれを追いかけるがよい。

フ首相 まったくです。資本主義諸国は宇宙への道を開き世界最初の宇宙飛行家を送ったわが国を、追いかけるがよい。われわれは皆この偉大な勝利を誇りとしています。

フ首相 あなたはあなたの両親ばかりか全ソビエト祖国があなたの偉功を自慢にしていますよ。あなたは永久に残る功績をたてた……

ガ少佐 ありがとうございます。あなたと共産党、国家に対し、感謝し、今後とも祖国のどのような課題でも果たすつもりであることを約束します。

またガガーリン少佐は、着陸地に向いたソ連記者に対し、次のように興味深い心境を語っている。

「米国がわれわれに競争していることは結構だし、祝福を贈るが、この分野では常に第一位を保持したいと思う」

「私は少しも孤独感を味わわなかった。友人、ソビエト国民もすべてが私を追いかけていることを知っていたからだ」

「何よりも使命を果たしたことを喜んだ。とにかく喜びだけだった。私は『祖国』は聞いている。祖国は知っている」という歌をうたったものだ」

なんと誇らかな愛国心の表示であろうか。フルンチョフもガガーリンも「わが国の能力」をたたえ、「祖国ソ連の偉大さ」を世界に誇示している。「すべての国はわれわれを追いかけるがよい」という言葉の響きも、それを強く感じさせずにはおかない。そしてこれらの言葉がなんの不自然さもなくわれわれに伝えられてくるところに、見落としてはならない問題がある。世界最初の宇宙人を生み出した背後には、まごうかたなくソ連国家の政治的統一と、ソ連国民の祖国への忠誠が結集して躍動している。ソ連が宇宙人を生み出した真の原因がソ連科学の偉大さにあることはいうまでもないが、それにもましてその科学を体験させた意志、世界のいずれの国よりも早くそれを実現させ成功させようとした国家意志とその国民の意志力が、祖国の榮譽に向かって、ガガーリンその人にひたすらな前進を命じたためにほかならない。この偉大な成功の裏にあるものは、実は抽象的な人間愛や科学の探求だけではなく、それらを一人一人の人間の心の中に統御する求心点、すなわち強烈な愛国心である。愛国心といえばすぐにも偏狭なもの、と思いがちな日本の日本人にとって、もはやいつまでも等閑に付すわけにはいかない問題が提起されたとみなければなるまい。ソ連にはソ連なりの愛国心があり、ソ連国民としての共感の世界が敵として存在しており、自国が他国

よりもあらゆる意味において進歩前進することを要求している。その要求や願望が、他国からいか
に優越主義だとか、また帝国主義だとかいわれようが、国民的結束を強化して社会主義体制の勝利
を確保しようとしている。それが現実のソ連でありソ連国民の姿である。それは自由主義国家群と
その行き方の相違こそあれ、国家という自己の運命協同体に、最大の価値をみとめている点で共通
しているのである。強大な国々が、なぜこのような対立意識を捨て去ることができないのであろう
か。それを捨て去ることこそ世界人類の悲願ではあろう。しかしこの対立意識と優越的立場の確保
が、世界文化の向上に役立つ限り、それらはいつまでも世界中の人々からきらわれながら、なおや
むなく是認されていかなければならぬものに違いなからう。

ガガーリンの成功が、人類の久しい望みを達成したものであるからといって、米ソの対立がそれ
を生み出した近因であったことを見のがすことはできない。それゆえに、この成功が、はたして地
球上から国家の区分（地域的には数国家が連合して新国家を建設することはあっても）を除き去る
に役立つか、それとも国家の政治的統一の重要性が、再び全世界にクローズアップされてくるよう
になるか、それはいま予断しうるところではない。しかしこのガガーリンの成功をみて、いまの日
本の社会主義者たちが、これこそ社会主義の勝利だといっているのは、大きな問題だと思われる。

なによりも、世の人々はこの出来事をみて、ソ連の社会主義体制と日本でいわれている社会主義

体制とが、どんなに内容の違うものであるかに気付かなければならない。ガガーリンの成功のおかげに、一体どのくらいの国費が投ぜられたか。スプートニクの打ち上げに始まり、こんどのウォストーク号を成功させて帰着させるには、おそらく天文学的数字に近い費用が必要とされたに違いない。この多大な出費のかけには、ソ連における農民の貧困が犠牲にされている。また下級労働者の酷使も続けられている。コルホーズの生産地に雑草が生え、農民たちに衣食住さえ十分に行きわたらせることのできないソ連で、この天文学的数字を必要とする出費が、なんの矛盾もなく行なわれたこと、これに注目を怠ることは許されない。ソ連のいう社会主義体制というものでは、日本では当然に反社会主義だといわれるような政策が、少しも矛盾に感じられないで実行されるし、またソ連国民はそれを矛盾と感じてはならないことに決められている。日本でいわれているそれと、同じ名称でありながらなんと雲泥の隔たりがあることか。日本で社会主義体制の実現を望んでいる人たち、その人たちは、農民・労働者の犠牲において不急不要の国家支出がなされることを、最も悪質な政治といつてきた。国民同胞の生命財産を守るわずかの自衛力の整備についてすら、社会主義体制の立場からの否定が続けられた。にもかかわらず、それらの人々はガガーリンの成功をわれわれ一般国民とは違った角度から、すなわち社会主義国家の勝利と叫んで喜んでゐる。なんとというたわいもない喜び方をしているのであるか。その人々は、宇宙船に投じたソ連の膨大な国費が、なぜウクライナの人々の粗衣粗食や、フィンランドや、ルーマニヤに近いところの農民たちの貧困をな

おざりにして、このように大胆に、日本流の社会主義体制としては無謀きわまりない出費をもって投ぜられたか、に目をおおってすまそうとするのか。その人たちのいう社会主義体制と、ソ連のそれとがこれほどまでに相違している事実を、いつまで黙視し続けようとするのか。まことに不思議な現代世相の一端である。

いま一つ、ガガーリンの成功についての各界有識者たちの論評が、ただちに新聞・テレビで報道された。しかし、そのなかには、この宇宙船の成功をみて、自分たち日本人はどうしようとするのか、についてほとんど意見らしいものが見られなかった。すなわち、日本人も、それをつくり上げよう、という意見もでてこなかったし、とても金がかかりすぎてできる見込みがないから日本ではあきらめよう、という意見も出てこなかった。それでいて他人事を他人事にだけ見、その成功をたたえて喜ぶだけならまだしも、これで平和に近づいたとか、国家はやがてなくなるだろうとか、歯の浮いたような批評が羅列（られつ）されるばかりである。どうしてわれわれ日本人は、毅然（きぜん）とした自立意志からの発言をしなくなってしまったのか。立派なよいことならば、われわれもそれに乗りに出そうといって、なんの差しさわりがあるうか。それが国費のバランスと余りにつりあいのとれないものとわかったならば、十年・二十年・五十年の計画に及んでもよいではないか。進むもよし、控えるもよし、いずれにしても、世界の出来事を傍観するばかりの行き方は、もうこの辺でストップしなければなるまい。独立国家の名誉にかけても。

いずれにしてもガガーリンの成功を、日本の社会主義者たちが社会主義体制の勝利であるなどと揚言していることは、自己矛盾もはなはだしいことである。それよりも、われわれは目を転じて、航空医学の權威である大島正光医博が指摘しているとおりに、ガガーリンの精神力に注目しなければならぬと思う。すなわち

「 G (重力加速度) とか宇宙線のように物理的、化学的な恐怖にも増して、宇宙旅行の障害はブレット・オフ・フェノメノンといわれる心理上の孤独感だ。未知と危険の無音の空間を一人で過ごすには粘り強い精神力が必要とされる」 (四月十三日づけ読売新聞から)

と力説する。生と死の問題に乗り込むためには、強い意志と精神力が必要であることはいうまでもない。人が生死の問題を突きつめて考えるときは、多くは宗教的信仰によってわが身を託すに足る生き方を知るのであろう。しかしそのような方法によって偉大な精神力を身につける場合と違って、ガガーリンのように祖国の運命に自分の生命を託すことができたという立場も、決して見落としてはならぬところであらう。彼にとって祖国であるソ連は、単なる運命共同体というような生やさしいものではなく、祖国ソ連を生命体として感覚しているのである。それは過去、現在、未来につながるすべてのソ連国民が、彼にとって同志、同胞として信ずるに足るものであるということである。われわれは祖国のために身をささげたに等しいガガーリンを、また祖国の繁栄を信ずることのできたガガーリンを、さらにまた自分の生命を、大きな祖国の生命の中に託し得たガガーリン

を、まことに恵まれた、しかもすぐれた青年であるとたたえたいと思う。

二 ソ連の教育と日本の教育

それにつけても思い出されるのは、ソ連における教育、ことに小国民たちの教育についてである。ガガーリンを生んだソ連は、自国の子供たちにとどのような教育をしてくれているであろうか。いまずぐ思い浮んでくるものに、ソ連の小学生に与えられている「生徒守則」なるものがある。それは冒頭から国家への忠誠がきびしく示され、愛国心の涵養（かんよう）をもって、教育の出発点としている。このことはいうまでもなくソ連における人間教育は、はっきりと国民教育として出発していることを示す。すなわち

「すべての生徒は次のごとき義務がある」と「義務づけ」し、

一、教養ある文化的市民となり、かつ、ソビエトの祖国にできうるかぎりの利益をもたらすために忍耐強く、根気強く、知識を身につけること。

という書き出しにはじまり、また「しつけ」のきびしさについても、具体的な師弟の関係、親子の関係、長幼のつながりに分けて細かく示されている。

三、学校長と教師の命令に絶対に従うこと。

九、教師や学校長が教室にはいるとき、および教室から出るときには、起立して送迎すること。

一一、……宿題は全部自分でやること。

一二、学校長と教師には敬意を払うこと。道で教師や学校長に出会ったさいには、礼儀正しいおじぎによるあいさつをすること。このさい男子は帽子をとること。

一三、年上の者には尊敬を払うこと。学校内、路上および公共の場所では、節制をもつても礼儀にかなうよう振る舞うこと。

一六、老人、幼児、弱い者、病人に対して親切、ていねいであり、彼らに道や席を譲り、あらゆる援助をすること。

一七、親のいうことを聞き、彼らの手助けをし、弟や妹のめんどうを見ること。

二十項目にわたるこの守則の最後は、「規則を破った生徒は退学に及ぶ罰を負う」という、まことに厳重な結びで終わっている。(中共の小学生守則もほぼ同様であって、それには「国旗を尊敬し、人民領袖(りょうしゅう)を敬愛すべきこと」が付加されている)

ここに見られるソ連の教育方針を、日本人、ことに、道徳教育はいけなくない、しつけは好ましくない、といつて騒いでいる教師たちは、どう受けるのであろうか。ことばこそ違い、また表現こそ異なっているが、国を愛すべきこと、親を敬すべきこと、師を尊ぶべきこと、国旗に誇りをもつべき

こと、年長者をいたわり、幼いものをいつくしむべきこと、いずれも古くから日本に伝えられた、人たるべきの道と、どのように違うのであろうか。占領下に規定された日本の教育が、旧来の教育方針を一てきして、宗教的情操も、祖国愛も、祖先を敬う心もすべて混乱させてしまつて、無国籍のような人間教育にはいつていつた間に、ソ連では古い日本の伝統と同じような（いな、それは普遍的な教育方針であつたからして、ソ連は人たるの子の教育には何が必要かを正しく見ていたにすぎなかつたのであろうが）正しい方針を取り上げていた。祖国のために尊い一命をささげる若者が、つぎつぎに出てきたのもそのゆえであり、ガガーリンのごとく、祖国の運命に一身をささげながら、天界より帰来して祖国ソ連の誇りを高らかに叫ぶ青年も現出したのであろう。そして「未知と危険の無音の空間を一人ですこす」粘り強い精神力も、心より所を与えられた正しい教育によつてこそ生まれ出たことを知りたいものである。ソ連におけるかかる教育の基本方針は、共産主義国ですら、次代の国民に、祖国愛をはじめとする諸道徳を身につけさせなくては、小国民の人間育成そのものが達成できないことを十分に示しているといえよう。

これに反して日本ではこれらのことがどのように教えられているのであろうか。かりに愛国心一つについてみても、問題はまことに複雑である。まず愛国心を教えることは、偏狭な国家主義者をつくることになるから好ましくないという意見、これは敗戦後久しい間にわたつて有力な意見として

権威づけられ、それが子供たちに教育されていった。しかしやがて愛国心否定では、どうにも筋が立たなくなってくると、——実はいまその段階にあるが——愛国心についての解釈が勝手放題に意味づけられ、子供たちが教えられる愛国心は、その教師の愛国心の考え方によって、百八十度の差異を生ずるに至ってしまっている。たとえばABC三教師の見方を例にしよう。

A教師　いま自分たちが住んでいるこの国は、われわれ日本人の国です。この国を愛しましょう。しかし日本の過去は、封建的で野暮(やばん)な国でした。わたしたちは、過去の日本に別れを告げて、いままったく新しい国にしようとしています。階級の差ある現在の日本は、まことによくない資本主義の国ですから、これを労働者、農民たちの国にするようにしなければなりません。資本家たちに搾取されていた人々こそわたしたちの同志です。国を愛することはこのようにしてできます。よい日本、住みよい日本にしましょう。

B教師　いま自分たちの住んでいるこの日本は、われわれ日本人の国です。この国を愛しましょう。日本の国旗も大切にしましょう。しかしいまの日本の国歌「君ヶ代」は、天皇が政治をしていたときの国歌ですから、なんとか変えて民主時代の日本にふさわしいものになければならないと思います。また階級的なものも考えて、資本家と労働者と対立させてどちらかが一方を押えつけないといけないのでは、とうてい日本の安定は望めません。ですからそのような考え方は、日本を愛する道に間違いがあると思います。しかしそうかといって親を大切にしろとか、孝行がよい道徳であるなどということは、人間の個性をのびのびと育てることが出来ませんから、いまの新しい時代にふさわしくありません。また明治時代からの日本が帝国主義戦

争をして外国を侵略したことは、やはり恥ずかしいことであつたと思ひましよう。日露戦争では中国を戦場とし、中国の民衆の犠牲において戦争が続けられたことは、なんとも申し訳けないことであつたのです。新しい日本と古い日本の区別を心得ないような愛国心をもつことは間違ひです。

C教師 いま自分たちの住んでいる日本は、われわれ日本人の国です。この国を愛しましよう。国を愛するということは、国の独立を守り通す心構えがたいせつです。したがって日本の独立を守るために、尊い生命を祖國のためにささげた祖先たちを、われわれが軽蔑するようなことは、間違つていなかったでしょう。その時代がいまと違つた時代であるからといって、いまの尺度で過ぎ去つた時代がどうかだということとは、少なからぬ行きすぎではないでしょうか。いまわれわれが、こうして立派な國に生活できているのも、われわれの祖先が國のために尽くしたまごころと深い関係があつたことを知りましよう。たとえ戦争に敗れたことがあつたにせよ、またその戦争中にいたらぬ数々の間違ひがあつたにせよ、それらのことと、國を守り続けた尊い祖先や先人の愛國心まで否定してはならないと思ひます。明治時代の日清、日露の戦争にしても、歴史を正しく学ぶならば、日本が滅びるかどうかの境目に立たされて、正義のたたかいが宣せられたことを見のがしては、とんでもないことです。國を愛するということは、このように歴史を打ち切らないで、ものを考えることを意味しています。

これらA・B・C教師たちの間には、さらにA'・B'・C'らの教師たちもいる。愛國心の一つみてもこれほど千差万別であつて、社会主義革命を目ざすもの、日本の伝統に立つて復興を目ざすもの、その中間とまことに多彩である。教える教師の自由に任せられているこのような教育の実態の中で、日本の子供たちはどうして愛

国心の涵養ができるであろうか。自分の好きな国造りをそれぞれの好みに従って考えていくだけでは、どこに理解のつながりが生まれてくるだろうか。ましてや愛国心をともにする国民的共感共鳴の世界などは、どうして生まれるわけのものではない。

いまここに見るA教師B教師のいう愛国心は、いわば条件つき愛国心とでもいったら適切であろうか。しかし愛国心というものは、ソ連の生徒守則を見るまでもなく、本来「純粹なもの」、「一つのもの」であるはずである。一人の国民がその個人の生命を、そこに没入しなさげて悔いすることのない対象が国家である。国家とはそれゆえに生命体として成立しうるところに、より高次な姿がある。生命とはもとと分裂することのない全きものをいうのであるから、愛国心というものが条件つきであったり、各人各様勝手気ままに解釈してよいものでは断じてない。日本を愛するといいつながら、自分たちの生きている現在の日本人だけが日本人だと考えたり、しかもそのうちの一部にしかすぎない階級闘争者だけで愛国心を規定するなど、もつてのほかである。自分たちの祖国を、過去とのつながりにおいて肯定しないものを、どうして愛国心があるといえるであろうか。それは正確にいえば国を愛する心ではなくて、国を軽べつする姿でしかない。ときに不純なものが部分的に介在したにせよ、日本の建国いらいの歴史の中から、日本の輝きをじかに感ずることができない者たちが、いいかげんな論法をふりまわして純真な子供たちの心の中に、奇妙な愛国心を植えつけるなど、驚くべきことである。

愛国心一つをみても、このようなありさまである。むしろ愛国心を教えないでいたときの方がすつきりしていたくらいである。小学校の卒業式に厳肅な国歌「君ヶ代」の斉唱もなく、「仰げば尊しわが師の恩」というあの民族的な香り高い小国民たちの感激の歌もうたわせない学校が、ことしも東京のなかにたくさんに見うけられた。教師たちの錯倒した愛国心のおかげで、純真な子供たちは日本民族の誇りを子供ごころにも喜び合うこともなく、先生たちのいつくしみを深く謝する心もなく、ぼんやりと、ちりちりばらばらのおもいふけて卒業していく。一生の記念すべき門出を日本国民としての喜びにあふれてではなく、いな、いまわしい過去の日本を教えられてきた結果として、自分たちはなんでこのようなつまらない国に生まれてきたのであろうかという、うらみがましい思いさえ宿しながら校門に別れを告げていく者もある。大人に近づいていくという個人的喜びと、国家観念からへだてられた社会なるものに送りこまれていく空漠さの中に、精神の統一のより所を与えられない日本の子供たちは、ソ連の子供たちに比べるまでもなく、愛国心にもえた世界各国の子供たちから、遠くとり残されていけないとも限らない。

三 全学連と大学自治会

小国民が受けている義務教育の場から、ひるがえって、わが国の大学生の周辺に目を移してみる

と、ここにもまたそれに劣らない大きな混乱が見受けられる。教育の場における国家の病根は、さまざまな数限りなく目に写ってくる。一国の将来は、その国の青年学生 of 姿の中に予見される、という。われわれは他国の偉業をたたえるだけでなく、日本の大学生たちがおかれている環境を一日も早く正常なものに整えなければならない。大学生の現状を冷静に分析しながら、根源から立ち直らせる方途を見い出していきたいものである。

さて、革命の前夜を思わせるような、あの安保闘争の国会乱入から早くも一年が過ぎた。何万というおびたしい数で、あの一連のデモに参加した全国の大学生たちも、いまはさまざまな追想のなかに静かに当時を回顧していることであろう。デモの首謀者たちは、たしかに階級闘争の戦士たちであったし、現存秩序の破壊をめざして安保闘争を活用した人たちであった。しかし動員された人々（といういい方をすると参加者たちは、異口同音に、いや決してそうではない、自分は自分なりの考え方で自発的に行動を共にしたのだ、全学連の意識分子とは何の関係もなかった、と主張する）その人たちの一人一人は、事実さまざまな心境でそれに加わったようであった。なかには、「民族の独立」というそのデモのスローガンが、民族解放と階級闘争の旗印に利用されていることに少しも気づかず、日本民族の誇り高き独立を自分なりに連想し、安保改定が対米屈従を意味するのだと解釈してそれをいきどおりながら行進した人々も少なくなかった。もとよりそれらの人々は、対外屈従は相手がアメリカであろうとソ連であろうと、同じくきびしく拒絶する人たちでもあった

わけである。

また「安保改定即戦争介入の危機」というあのデモのスローガンも、平和を祈願する多くの学生たちの心を、錯覚させ、ゆさぶったことであった。戦争を心からにくみ、殺戮(さつりく)を伴ういっさいの権力行為をいみきらう気持ちだが、そのスローガンを文字どおり素直にその人々に受けとらせたからであろう。しかしその場合も、現代に起こりうるであろう戦争の具体的要因をきわめることがなかった。また同じスローガンを日本の国外から日本に向けて電波で発信している隣国が、実は権力万能の政治国であることや、つねに好戦的な対外進出を怠らない国々であることに気づかなくて来た。ことにその国々が他国よりもつねに自分の国を第一に考える自立意識のきわめて強烈なことには気づいていたが、中共、ソ連もまた日本にとっては他国であることを、考えようとさえしなかった。ここに大きな錯覚があったと思う。純真なそして若々しい情意をたたえた人々、正義の念を主観的ながらも強く抱いていた人々が、あのデモに参加したことをもって、はたして「動員された」と評した方が当たっているのか、はたまた各自のおおの意思で「自由に参加した」という方が正しかったのか、それはいまさら論ずる必要はなからうと思う。それよりも、それに加わった若き人々が、過ぎ去った尊いその体験の中から、悪性バチルスを識別する冷静な免疫性を身につけてくれたに違いないであろうことを切に祈りたいと思う。

だがそのこととは別に、全日本学生自治会総連合（全学連）が、いつまでもいまのままではいはずはなからう。全学連のたび重なる幹部会が、二つに分かれた三つに分かれたと報道されても、そのいずれもが共産主義の分派であることは、すでに世人のよく知るところである。それを大学当局が知らないわけもなからうし、文部当局、政府も十分承知しているはずである。しかも私立大学よりも、国費すなわち国民の税金によって運営されている国立大学において、この組織がよりよく完備していることは、さらに注目しなければならないことである。各大学の自治会の全国的連合体が全学連であるが、大学内の各単位自治会と全学連の結びつきの度合いには、各大学によっていきおい濃淡の差があるにしても、組織された全学連は、単位自治会の上位にあって中央執行部を運営する。したがって今日の全学連の中央執行部にみられるように、それが共産主義一色で塗りつぶされてしまったらば、各大学自治会の執行部も、当然にその色彩のものが選出されるようになる。この見方は、委員選出の具体的順序から見れば逆であるが、現実的にはこのように解釈することができると思う。

そこで、全学連の諸活動を改めて見なおすと、中央執行部の思想的色合いは、それが統轄するすべての行事、学究分科会を含めてあらゆる行事に浸透していくし、その色合いと異質の者は、全く異端者扱いをされて自然に近寄りにくくなる。でもなおかつ勇氣のある異質者たちが、その場に參加して堂々の所信を表明したり、敢然として所信に向かって行動を起こすと、たちまちにして、つ

るしあげ”なる悲劇に遭遇する。このようにして全学連は、すでに一つの政治結社にひとしい体制でかためられてきている。自治会が各大学の中で有志たちによる任意の少数団体である限りは、それも許されてよいであろう。しかし、労働争議が三池にあるといえば突撃隊の先鋒（せんほう）となり、新島でなにかあるといえばすぐに飛び出していく。政府のなすことにことごとく反対、現社会秩序の破壊に役立つことは、すべて実力参加するという行き方に立つ全学連が、いつまでも全学連の名のもとに行動しうるということは、どうにも理解に苦しむところである。さらにこのような全学連の実際運営の根原が、各大学の単位自治会にあることは明らかであるにもかかわらず、大学当局や文教当局がこれの規制と指導に依然として自信のないことも不思議なことである。いなそればかりではない。この全学連に直接間接の支持を与えているのが、実は文部省であり国立大学当局である。と評したらどういふことになるのであろうか。一つ参考までに次のことを記しておこう。昨三十五年六月の文部省調査によると、国立大学における自治会会費の徴収方法は、そのうち七二・七%が学生自身によって徴収されており、一五%は学校当局——すなわち国家公務員によって徴収事務が扱われている。この学生自身による徴収方法といっても適宜に事務局の便宜を得ている場合が多かるうから、間接的の協力が無いとはいえないとおもう。われわれ国民は、国立大学の内にある学生の自治会は、あくまでも国立大学としての使命のワタ内にあると考えるべきものであるから、思想的に政治的に一方に偏してしまつたいまの全学連ならびにその組織下にある学内自治会のあり

方については、深い疑問を表明せざるをえない。もし全学連がいまのように共産主義にかたまってしまった場合、そしてその方向で政治的に活動し、運動を展開する限りは、それは決して各国立大学内における全学的なものではないこと、すでに自明である。自治会の一派としてその活動が認められる可否は別としても、意識分子の積極的活動に対して、余りにそれがはなげなしいために、良識ある多くの学生が無関心になり、また遠のいてしまったときに、大学当局や文部省は、それでも学生の自治と自由の大義名分(?)のもとに、それを傍観してよいものであろうか。さらにそれに注入される自治会会費の徴収について、全学生になんらの注意を喚起しないばかりか、前述のように学内官僚がそれを代行し、あるいは便宜的協力を与えているような事態に、なんらの反省をなさないでよいものであろうか。つよく識者の注意を喚起したいところである。

次に大学にはそれぞれ由緒ある伝統も校風もある。とくに私立においてそれが顕著である。しかし国立大学には、学問の自由と真理の探求という名分があるだけであって、国家の伝統を否定する気風が濃厚であるのは、一体どういうことであらうか。大学はもとよりそのときどきの政府の御用機関ではないこというまでもない。しかし政府に協力することと、国家の伝統に立つということとは決して同一視すべきことではない。われわれは、今日の国立大学における思想傾向が反政府的なるがゆえに、それを非難しようとは思わないが、国史を軽蔑し、前時代を罵倒(ばとう)し、祖国の榮

光につらなる先人たちを敬することをしない学者たちに、国家の多大の費用を投じてよいはずはないと思う。全学連が私立大学におけるよりも、国立大学においてつよい根を張っている原因が、ここにも歴然とみられるのは遺憾至極である。共産党は大学生のなかに、直接明日の後継者を養成し、社会党が大学生のなかに同じく明後日の後継者をとらえているのに反して、保守党が大学生たちを軽く見のがしている所にも、保守政治における教育の劣視性がうかがわれる。いつになったら祖国の榮譽に若い紅顔の瞳（ひとみ）を輝かす学生たちが、国立大学の中に、ほうはいとして輩出してくるのであろうか。

さて大学自治会がどのようにして思想的に偏向し、政治的に意識化されてしまったか、それをさらに見ていきたいと思う。ことに新しく大学に入学した人々が、どのようにその自治会に導き入れられていくかも、多くの問題を提起している。全学連の組織の中にある各大学の自治会では、大学に入学した学生が、大学の教育を受けはじめるに先立ってイデオロギーの注入を行なっている。それも当局からは放任されたままのようである。次に引用する一文は、鹿児島大学一年に在学した学生が、自治会活動に参加して半年を経験したあとの感想文である。この大学は九州のはしではあってもこの国立大学の自治会の様子は、全国のそれとほぼ類似しているとみられるので、自治会の運営の一端を理解する意味で、また新入大学生たちがはたの想像もおよばない渦のなかで、もみくし

やにされているかをわれわれが知るために、参考までにその全文をここに引用することにした。

自治会活動への所感

鹿児島大学・文理・社・一年 浜田康助

入学してはや一年の半ばを過ぎようとしている。その間で最も印象の深かった五、六月ごろの事を思い出して、感じたままを述べてみよう。

講義が始まって間もないころ、必修の時間を担当教官からもらったと称して、自治会執行部の人が安保問題の話を持ち出した。その話しぶりはいかにも流ちょうで自信あり気だったが、私にとってはすこぶる難解のものだった。と言うのは、恐らく他の学友諸君も同じだと思いが高校時代にはむずかしい時事問題などについては、ほとんど無知と言ってもよい状態であったからである。そこで自分も、もっと勉強せねばならぬと思ひ、自治会から毎日のように配られるビラを読んだり、話を聞いた。その他安保問題に関する書物やパンフレットもあさってみた。そうする中に、自治会の役員の話や、ビラの内容、討議のやり方に対し、種々の疑惑がわいてきた。何にしてもあの人たちの話には、最初から固定したドグマがある。帝国主義とか独占資本とか、マルクス主義直訳の用語を盛んに連発して、説明しようとする。私などのような初歩の者には、その用語の概念規定や適用の当否が問題であるのに、そんなことにはいっこうおかまいなしで、特定のイデオロギーに基づいて黒白を決めるといふ強引なやり方がとられるのである。だからしてアメリカや

政府に対しては極端にか酷で、その反面中ソに対しては驚くべく寛大な結論が一方的に引き出されてくるのである。

私とても、自治会の役員たちが自分の利己的な利害を離れて、国家や民族の将来について論ずる情熱そのものは、よく理解できる。ただ単位を取るためや、卒業後の就職にのみ汲々しているような学生のあり方には、賛成できない気持ちをもっている。そしてあの人たちの話を一生懸命聞いて、自分でも理解しようと努めたつもりである。しかしそうすればするほど余りにも性急な、余りにも強引な、余りにも一方的な論断に対し、いよいよついて行けないものを感じたのが、正直なところである。こういう気持ちを抱いたのは、決して私一人ではなからうと思う。もう少し公平な見方をしてほしい、初めての人にもその人なりの考えを持つ余裕があるような説明法、そして反対の人でもその意見を静かに述べることができるようなふんいきを、望みたいものである。はじめから一方的結論を押しつけるような態度、そして反対の意見を表明する者を敵視し倒したりする態度、そのような態度は、自由なるべき大学生の思考の自殺である、と言わねばならない。

次にデモについての討議のやり方にも、疑問がある。朝校門にはいると、いきなりピラを渡される。読んでみると、何時にどこそこに集合、われわれ学生の意向を市民に訴えよう、ということである。教室にはいると役員が二、三人来ており、一人が前に出て討議が始まる。しかし討議といっても何のことではない。例の通り一しゃ千里にぶちまけるだけのことで、最後にストをやって全員デモに参加するよう言うだけのことである。初めのうちは余り反応がなかったが、状況の急迫と討議のやり方が若干変わってきたことから、参加

者もふえていったようだ。つまりクラスから選ばれた級友が議長役をやることによって、一応クラスの自主的決定を重んずるという方法を採用したからである。それが本当の自主的決定であり、そしてその決定が重んじられるのなら、私にも文句はない。がしかし、私の見たところでは、事実はずしもそうはなっていないかった。

なるほどいくら自由な発言も出てきた。問題が問題だけに、ただデモをやるか、やらぬかの二つの方向だけで解決がつくはずの問題ではない。デモをやるならやるで、その方法なり目標なりに何らかの条件がつけられるのは、言うまでもないことである。たとえばジグザグをやらぬようにとか、プラカードを限定せよとか、講義はつぶさないようにとか、真面目な意見が幾つか提出された。するとそれに口をそろえて強硬に反対するものがある。だったらクラス単位でコースも別にやろうと言うと、それにはアピールの効果はないと反論する。それではこういう意見がクラスからあがっていることを、自治会に伝えてくれと言うと、そんなことは聞いてくれなかったと言う。そして一たん校門を出てしまうと、全く自治会のリーダーの采配どおり、ジグザグでワッシュイワッシュイになってしまふのである。結局意見らしい意見は出るには出たけれど、それだけの話で一つも重視されない。クラスの決定で有効であったのは、ただデモに出ようという、最も初歩的な決定だけであった、というのが偽らぬところではなかったか。

私がクラス単位の決定に疑問を抱くのはこの故からである。一体クラス単位とはどういうことなのだろうか？ クラス全体を、統一された思想を持った一人格と見なしたのだろうか？ そんなバカな話はない。ところがクラス単位でデモに出ると採決（もちろん比較的多数で）されると、あたかもそれに拘束力でもある

かの如く錯覚されてしまう。恐らくここが自治会幹部の目のつけどころでもあるのだろう。今後もこのようなケースは繰り返されることと思うが、私はあくまでも個人の自主的決断、自分自身の信念に従ってのみ行動すべきことを、このさい声を大にして訴えたいと思う。いやしくも学業を放棄し、大学の講義を乱してまで街頭に出かけるといふのならば、それにふさわしい確信が必要とされるであらうから。

以上、感じたことを率直に述べたが、私は現自治会幹部の行き方には批判的ならざるを得ないけれども、自治会活動そのものを否定するものではない。要は、自治会活動は全学生のものであり、そこに伏在している種々な意見に対し、幹部が謙虚な気持ちで対処してくれることが、その進歩の根源になると信ずる。（三六・一・一五・鹿大評論 No. 2 より転載）

ここに引用した大学一年生の記述は、率直で虚色がない。読む人々の心になにかの感懐をひき起こさせる。純真な学生たちが、どのようにして自治会の渦に巻きこまれていくかも手に取るように理解できる。しかしこうした自治会が（おそらく全国同じであろうが）国家が国費をもって学ばせる国立大学のなかで、しかも多くの教授たちのとり巻くなかで、貴重な授業時間の割愛をうけて行なわれてよいものだろうか。国立大学の秩序とは一体何であるのか。無秩序は断じて秩序とは同じでない。自由は決して放恣（ほうし）と一つでない。学間の目的はここではないにすりかえられているのか。このようなことが放任されているのは、あるいは日本人としての歴史的人生観が学園にす

っ
かり影をひそめてしまったためかも知れない。

雲仙合宿教室の目ざしたもの

一 荒れ狂った全学連

昭和三十五年は全学連を中核とした学生運動が、異常なまでに過激化し、狂暴化した歴史的な年である。とくに安保改定をめぐる紛糾が最高潮に達した五月から六月にかけて、ほとんどの学園は連日ストとデモのあらしに巻き込まれ、勢いのおもむくところ国会乱入やハガティイ事件などの不祥事をひき起こした。この間にあつて、大学当局は全く為すべを知らず、学園の秩序は破壊され、良識はじゅうりんされた。甚だしきは公正で冷静なるべき大学教官が、デモの先頭に立つような奇怪事が白日のもとに行なわれた。しかも当時の社会的背景といえは、左翼諸勢力が広範な共闘組織のもとに結集し、海外から有形無形の支援を得て、短時間ながらゼネ・ストを決行、マス・コミもこれに好意的な報道を載せる状態で、まさに、革命前夜の観を呈したほどであった。そしてまた事実、全学連の最尖鋭分子の間には、不発に終わったとはいへ、そのような計画があつたといわれている。いずれにしても、ここ二、三年来全学連首脳部が「学生運動の革命的転換をなすとげる」とか、「人民革命の突破口を開く」とか呼号してきたことが、危うく実現しかけたわけで、まことに憂慮すべき事態であつた。しかも問題は今後であり、安保条約はともかくも成立したのであるが、全学連の革命意思は決して消滅したものでなく、政局の動搖に乗じて、再燃する可能性がまったくなくなつたわけではない。

一 学生思想問題は放任されている

次代を背負う学生たちが、正しい思想をもって堅実な道を歩むことは、一部の革命狂信者を除いて、すべての国民が熱願するところである。まして子をもつ親たちにとって、これはまさしく切実な問題である。ところが現状に関する限り、学生たちはまったく混とんとした状態のまま放置されているといっても過言ではない。学校当局がなしうることは、せいぜい学則をたてにとつて学内活動を規制するていどにとどまり——それすらも今回は果たせなかった——。一步踏み出して内面の指導に当たることなどは、とうてい不可能事である。かの物議をかもした茅東大総長の声明のごときも、ある意味ではこの無力の告白とも受け取られる。かくして、問題の根源は学生の思想状態にあるのに、この面にはなんら手を加えられないのみか、かえって手を加えないのが学生の自由な活動に理解があるのだとするような、およそ非教育者的な態度が一般化していた。大部分の学生たちは、素質的には革命主義者でもなんでもないのであるが、大学の門をくぐったとたんに、自治会のアジビラを配られ、講壇からは傾向的な学説を聞かされ、およそ自己凝視や自己確立のいとまもなく、ふん阻気に流されていってしまうのが実状である。まして今回のように、極左的指導部の意を受けた自治会が長期の浸透工作と巧妙な戦術を用い、教官内部で彼らの行動を原理的に承認するよるな声明などを発表したりしたのは、五・六月にみられたような事態が起こるのは、むしろ当然

の帰結とさえいうことができる。

三 めざめた学生の結集

私どもは早くからこのことあるを憂い、せめてその一角でも防ぎ止めんものと、微力を尽くしてきた。学生思想の健全化、学生運動の正常化のためには、根本的には文教当局の勇断と抜本的対策の樹立が必要であることは、いうまでもない。しかし適切な対策が講ぜられるまで手をこまぬいて待つのではなく、たとえ小範囲であってもみずからの周辺において、正しきを求める学生たちを結集すること、同時に前述のような事態にかんがみ、真に教育者としての責務を痛感される教官有志の決起と協力関係を実現することが喫緊の急務である。私どもがせめてこのことだけとは、貧しい念力を注ぎ尽くして過去五年間毎年一回の学生青年の自由参加による「合宿教室」を挙行してきたのは、この理由に基づくものである。昭和三十一年の霧島合宿（九二人）三十二年の福岡合宿（一二七人）三十三年の佐賀合宿（七二人）三十四年の阿蘇合宿（一六〇人）ついで三十五年の雲仙合宿（二〇〇人）としたいにその規模を大きくして営んできた。こうした協力の過程において、私どもが気づいたことは、多くの学生の中には正しい志向と素直な情意を抱いた学生たちが、少なからず存在しており、前述のような環境のさ中において、正しい指導の手を真剣に求めている、という事実であった。思えば今日の学生は、戦後の敗残と欠乏と虚妄の時代に成長してきた若者たちであ

る。かかる時代を招いたことに対して、彼らになんの責任があるであろうか。彼らはまさしく犠牲者ともいふべきものであって、主としてその責を負うべきものは、現代日本の表面をおおっている浮薄乱脈きわまる思潮、とくに今日のジャーナリズムを支配しているいわゆる進歩主義者達である。したがってここに学問の研究方法を根底から正し、精確な資料を取りそろえて、かの進歩主義者の空理と冗舌に汚毒された表皮を切開するならば、その下には若き民族の清純な血脈の波打っている姿が現われるであろう。

四 全国的規模の「雲仙合宿教室」

今回の安保騒動に対しても、これらの学生たちは各地大学において、はね上がった全学連の行き方に対し、批判勢力として勇敢に発言もし活動もしていた。しかし今回は、あまりにもセンセーショナルな事件が連続し、かつマス・コミの報道に偏曲が加えられたために、とうてい大勢を制するには至らず、無念の思いを胸にかみしめるのみであった。しかし半面、こうして全学連が狂気じみた行動に出れば出るほど、思慮ある学生たちがその限界を知り、冷静な批判を加え始めるのも必然のなりゆきである。一時は全学の半数以上をも街頭デモに動員した勢いも、興奮がさめればいつしか雲散霧消したことは周知のとおりである。しかし、今回のごとき挙動が学園の正常な学生生活に深刻な傷こんを残したことは否定し得ぬことで、これこそは将来の問題とも考え合わせて、厳密な

反省と検討に付されなければならない。とくに、学生自身の内奥において、自分たちのあり方がこのままでよいかどうか、真剣に問われるべき機会に直面したのである。このような大勢を察知し、かつこのような時にこそ私どもの年来の宿志である学生生活正常化のために、一段の努力が払われるべきであるという配慮から、雲仙の「合宿教室」は従来のように九州にのみ重点を置かず、遠く関東、近畿の学生たちをも大量に参加させる方法を講じ、総員二百名という最大規模の「合宿教室」を計画し遂行したのである。

五 国民同胞感の体認

「合宿教室」の運営、経過については別稿に譲り、ここに先ず特筆すべきことは、特定の少数者を除くほか、大多数の学生たちが多かれ少なかれ過般の全学連の行動に対し、批判的な態度を堅持していたということである。これはもとより、学生の指導に万全を期していた大学教官有志の方々の尽力にもよるのであるが、あのデモに加わった学生自身の口からも、そのような反省と告白がもたらされた場合も多かったのである。良識いまだ減びず、もって将来を託するに足るの感を深くさせられた快事であった。とはいえ問題はこのような気分的なことにとどまらず、全学連をあれまでに激化せしめた思想的根底にある。この点私どもが主たる着眼としたことは、精確な資料に基づく現状ならびに思想系譜(ふ)の分析、国民同胞という運命的連帯感の体認、学生生活正常化への決意――

の三者であった。この三つの方向に沿って、別掲のごとき講義がさまざまの角度から行なわれ、十数名の少人数で討論が行なわれ、また各種の形体の意見発表が行なわれたのである。そして帰着したところは、「開かれたる日本人」としての生き方というか、空理にとらわれず現実を見きわめ、固陋(ろう)を去りつつ、しかも世界の文化潮流の渦巻くなかで、き然とした民族的背骨を貫く人間像、そうしたものが単なる概念用語としてではなくて、体験的把握の対象として語り交わされたのであった。「合宿教室」全体の流れは、何せ若き魂の触れ合いの場のこと、真し率直、活発な躍動的ふん囲気のもとに終始したことであった。とりわけイデオロギーの相違をもって自他を区分し、お互いに排斥し合うという態度を捨てて、外的差別を同一国民として生きる内的平等感に純化して接するという高度の心理的体験が、全体を通じて参加者の胸中に刻印されたことを付言しておきたい。

六 我らの行くて

ともあれ、各地から集まった百六十名の学生たちが、ここ雲仙の中腹に四泊五日のきびしい研さんと交流を行ない、日本国民としての生き方の一端に触れたという事実は、当今の学園の実状と引き比べ、意味するところは重大であると信ずる。別れ難き思いを振りかわす手にこめつつ、山を下って行った学生たちは、今後それぞれの学門に帰って、必ずや現状革正の動きを開始することであ

ろう。こうした自覚と痛感に満ちた若者たちの動きが、とりも直さず民族復興の根底をささえる基礎作業なることを信じ、私どももまた全身の努力を傾け続けたいと念じている。（鹿児島大学助教

川井修治記）

雲仙合宿教室の記録



35-8-14

参加全員の記念写真

学生による全体討議

——合宿のスタート——

(第一日)



班編成・自己紹介（午後一・〇〇～二・〇〇）

標高七〇〇メートル、ここ雲仙獄の中腹に白亜の近代的建築が周囲を庄するようになびいている。四泊五日、参加人員二百名という大合宿が行なわれるユースホステルの偉容だ。昨夜から学生委員の諸君は準備に忙殺された。参加人員は班別に編成され、一班の構成員十六名（うち女子学生三名ずつ）、班ごとに色の違った名札もでき、日程表や班別名簿も刷り上がった。下界は三十四度前後の炎暑が続いているというのに、ここはさすがに涼しく、汗もほとんど出ない。十時半玄関前に受付の机を並べて参加者の到着を待つ。十一時ごろからバスの到着ごとに続々と集まって来る。学生委員は受付、案内に忙しい。定刻一時までにほとんど九割ていどが集合する。会場全体が活気づいて、これからのダイナミックな展開を予想させる。

参加者側

- 九州大学…七 福岡大学…八 福岡学芸大学…三 西南大学…一 長崎大学…一一 長崎短期大学…三 熊本大学…一四 鹿児島大学…二五 鹿児島経済大学…三 宮崎大学…四 山口大学…一 徳島大学…一 岡山大学…七 神戸大学…五 東京大学…八 東京教育大学…二 東京工業大学…一 お茶水大学…一 東京水産大学…一 東京学芸大学…一 東京都立大学…一 東京薬科大学…一 早稲田大学…一四 慶応大学…一 明治大学…三 法政大学…一 中央大学…一 亜細亜大学…六 高崎経済大学…一〇 東洋大学…三 神奈川県教職員…六 大洋造船社員…五 其の他…五 計一六四名（内女子学生二一名）

主催者側

大学教官有志協議会：一二　国民文化研究会：二四　計三六名　総計二〇〇名

各部屋の構造は、まん中に畳があり、左右上下それぞれ四つずつのベッドがある。つまり十六人の収容能力だ。近くは長崎から二時間、遠くは東京から二十四時間の旅路の汗をぬぐって、いまここに未知の者が最初のあいさつをかわす。自己紹介が進むにつれて、遠慮がちな気分も次第にほぐれ、笑声がわき、班という小さな、しかしなごやかな共同体がつくられていく。期待と不安が入りまじったやや複雑な気持ちたちが各人の胸を去来する。やがて大食堂に全員が集合して開会式が行なわれる。

開会式のあいさつ（午後二・〇〇）

——大学教官有志協議会を代表して——

熊本大学助教授　津　下　正　章

本日ただいまから第五回の研修会を開会することができましたことを主催者側、参加者のみなさまとともに大変うれしく存じます。

本年は学生諸君が非常に広範囲にわたって、まったく文字どおり西から東からまた南から北から集まり、私どもの予期以上の方々に参加されました。みなさんの生々とした元気に満ちた姿をみますと、かねて私どもそれぞれの学校において接している学生諸君とはまた変わった感じを受け取ることができません。

私どももこの研修合宿に対しては非常に大きい期待をかけておる次第ですが、さだめし参加される諸君もこのうした気持ちで胸ふくらましてこられたことと思います。お互いの努力によって立派な成果が上げられると思いますが、講師の先生方のお話、また諸君の兄さん株の国文研の方々のお話など、どうぞ扱われることなしにすなおなお気持ちで聞かれ、また考えられて、みなさん方ご自身の理性をここで十分働かしていただきたい。下界はいかにも暑苦しい、単に暑いというだけでなく、さわがしい状態でありますけれども、私どもがこうした場所を選んでやろうとすることが、本当に成果が上がるように、お互いに努力していきたいと思います。私どももせいっぱいの気持ちでこの会に参加しております。ですから、遠慮なく尋ねられることは尋ねる、また意見を発表するよう努力していただきたい。

国文研の方々が並みたくてでない努力をなさって、五回もこうした会を重ねられたことを私どもは非常に感謝しております。大学有志教官の私どもは、昨年の阿蘇に引き続き第二回目の参加でございますが、今日のこの成果をみましたのは、ひとえに国文研の方々のご努力だと思えます。みなさんもあとに続いて、どのような念願から、こうした合宿が催されているかを本当に考えていただきたいと思えます。しかし、決して国文研の方々なり、あるいはお手伝いをします私どもは、いろいろむずかしいことを注文するという気持ちでやっておるのではありません。要はみなさん一人一人が立派な成果を上げられるよう努力していただきたいという事です。非常に遠方のところをようこそ集まっていたというのが、ただいまの私どもの偽らぬ気持ちでございます。

意をつくしませんけれども、大学教官側の一人として、みなさんに対する歓迎の言葉として一言、ごあいさ

つを申し上げます。

なお、今回は東京からも多数の講師の先生方をお迎えすることができまして、私どもは、諸君とご一しょに勉強をしたいと、楽しみにしております。この五日間をほんとうに楽しく有意義な会合にしていきたいものと念じます。簡単ですが、これでごあいさつに替えたいと思います。(拍手)

あ い さ つ

—— 国民文化研究会を代表して ——

小田村 寅一郎

はじめてこの合宿教室に参加された方が多いと思いますので、主催者側の二つの団体について、簡単にご説明します。

大学教育有志協議会と申す会は、別にどこに事務所を持っているという会ではなく、日夜大学教育についていろいろと心労しておられる先生方の会であります。学園の外においても、若い学生さんたちの気持ちやうかがい、そしてまた先生方の心を伝えたいというご熱意から、そうした会合が生まれたものと拝察しております。のちほど皆様の前にも、そのお年をめされた姿をお見せになると思いますが、別府大学の学長花田大五郎先生は、昨年の阿蘇の合宿もそうでしたが、今回も合宿の全期間を通じて、若い学生のみなさんとひざをつき合わせて話し合う機会を持ちたいと申しておられます。その他おおぜいの講師の先生方も、講義をしてお帰りになるだけでなく、時間の許すかぎりご滞在くださる予定ですし、大学の先生方も講義をなさらなくとも、皆

さんといっしょにここで生活をともになさいます。

それからまた、国民文化研究会のほうも、大学教官有志協議会と同じく、事務所を持っておりませんし、組織を持っている会でもありません。皆さんがごらんになったとおり、皆様方より約十数歳から二十歳ぐらい年上の兄貴どもです。かつて私どもが学生生活をしておりましたときに、先輩の方々がこうした会を催してくださった。いろいろの見知らぬ学校からあつまってきた私どもは、合宿でお互いに知り合い、勉強する道を求めた仲間であります。学窓を出た私どもは、現在おのおのの職場を持ち、家庭を持って平凡な市民生活を送っております。私どもは学生時代に先輩から受けた恩恵を、なんらかの形でいまの学生さんたちにもしてあげたいという念願から、この企てを持つに至ったのです。年一回の行事ですが、今年で五回になります。第一回昭和三十一年は鹿児島県の霧島神宮。第二回は福岡県の博多、元寇の役で有名な百道海岸。第三回は佐賀市郊外の春日道場。そして昨年は阿蘇の外輪山にかまれた内ノ牧温泉で開催しております。

二つの主催団体とも、九州の地で生まれている関係から、合宿準備もいきおい九州の方々を中心となり、開催地も自然に九州ということになっていったわけです。いろいろな仕事の合間に、すべての準備を整えることは、並みたいいていのことではなかったと思います。この合宿も、会社勤めの人は有給休暇をもらってきていますし、自分で事業を営んでいる人は、なんとか一週間のつごうをつけてきております。一年一回だけの、皆さんといっしょの合宿のために、一年の生活をこめて期待している方々です。国文研の会員は、各班に分かれてお世話することになっておりますから、おのおの一家言の持ち主であるみなさん方も、あらゆる機会を活用して十分にお話し合いをしてください。大学の先生方も、大学での講義とは違った角度からみなさんにお話して

くださいますので、いろいろのお教えを受けてくださるよう期待しております。

今日の社会や、学生生活の内面を横から見ますと、平面的な面から生活指導を受けているという感じがします。世界の平和を念じ、人類の幸福を念ずるというテーマでものを考えても、現実に生きて動いている平面的な社会を、平面的に追求するという形の勉強の仕方や、追求の方法が流行している。また個人的な人間生活の面も、自分をみつめるそのみつめ方について、全体から離れた一人の人間としての自分の姿を見つめたり、考えてみたりしている傾向が強すぎるようです。すなわちどちらかといえば、平面的な面、孤立した面のほうが、学生生活でも、社会生活の面でも強く目につきます。こうしたときにこの合宿を開くわけですが、私どもは現代に欠けるものを補うことが何にもまして必要であることを痛感しております。このような見地から私どもは、平面的な面における社会生活を立体的に把握する勉強に主力をそそぐ、また孤立しがちな学生生活が実は横につながっている学生生活であるという角度から、とらえ直そうという方向づけをもって研究を進めていきたいと思えます。講義や討論を重ねている間に、問題点がだんだんわかかってこられると思いますが、みなさんの学生生活の中でつかわれている、友情という言葉一つをとってみても、問題の角度はずいぶん違ってきます。友情とは何か、本当の学生のつきあいとはどんなものだろうということも、平素はあまり考えないで過ごしてこられたかもしれませんが、それは実は学問の研究の対象として、改めて検討され、真剣に追求され直さなければならぬかもしれないのです。今日の大学生活の場とこの合宿とが、両々相補足し合うべき理由も、そこに浮かび上がってくるでありません。

人類の幸福を願ひ、社会の発展を願うことも、もとをたせばすべて人間の問題に帰すると思うのです。人

間は社会の中でつながって生きております。生まれながらにして、これは資本主義から、これは社会主義から生まれてきた人間であると区別せられ、運命づけられるなどということは案外つまらないことかもしれない。それよりも環境を克服しながら、人間はすべて平等に生き、かつ生活しているとみたらどういうことになるのか。生活条件こそ異なりあるいは環境こそ違っても、環境と条件を克服して、平等な人間の心の底にお互いに飛び込むことができないものか。そしてその人間の本心をつかまえようとする努力が、欠けていてよいものかどうか。人間生活の向上と発展と、さらに平等をねがう悲願がどんなに大切であるかをよく考えたい。この合宿にはいろいろな学校からきておられますが、学校差にとらわれることがあってはならない。学校差が強く意識されることは、同時に階級差の意識を是認することと結びつきます。それは決して喜ばしいことではない。学生間にも、あれはむずかしい学校の学生である、これはやさしい学校の学生であるというような差別が社会的には認められ、是認されておりますが、そういうふん囲気がこの合宿に出てくるようであつたら、この合宿の意義ははじめからなくなります。また来年卒業される方も、ことし入学された方もおることでしょう。そのような学年の差などすべて忘れていただきたい。学生たる立場において、日本の将来を考え、世界の将来を考えながら勉強している人間というはつきりとした立場をふまえて、この合宿にのぞんでいただきたい。また一般の方々も学生さんたちとの間に、社会的、年齢、地位などの差をとりはらって、ひとりの人間として相共にこの合宿をどのように運営してゆくかということに、われわれの期待する成果があげられるかどうかかかっています。

ここに約二百人の方々が一室に集まり、四泊五日の生活を楽しく、愉快に、そしてうそ偽りなく生活したい

と思う。ここにいる二百人が心を合わせ信じ合えないくらいならば、どうして日本全体が豊かな、心なごやかな国に戻ることができましようか。まして世界全人類が平和になろうとする道を求めるならば、この二百人のわれわれが、人間として同じく考え、人の心の中に存在しているにちがいない誠の心を、お互いのより所として生活できなければならないはずです。それができてはじめて日本の将来に、なんらかの光がさしてくるであろうと確信いたします。(拍手)

参加学生のあいさつ

(一)

長崎大学 坂東 一男

一年中で一番暑い盛りに、この涼しい雲仙の地で大教協の先生方、国文研の先輩たち、さらに全国各地の大学のみなさんと、四泊五日の合宿を送ることができすことを非常にうれしく思います。

私は昨夏阿蘇で行なわれた合宿に初めて参加し、ことしは二度目ですが、阿蘇合宿に対する自分の反省と、ことしに期待するところをお話しておあいさつにかえたいと思います。

現代の社会の混乱を救うものは、われわれ青年だといわれていますが、われわれに一番欠けているものは、やはり団体生活を通じての規律ある行動ができないということではないかと思う。そういう意味でも、この合宿のように、見知らぬ人たちが集まってきて、四泊五日間寝食を共にしながら過ごすことは、非常に意義あることだと思う。しかし昨年の合宿で僕はどうしても自分自身のからを打ち破って、合宿のふん囲気の中にとけ

込むことができませんでした。その時諸先生方から「自分を裸にしてみんなの前にぶちまけてみる」ということをたびたびいわれましたが、実にそれが非常にむずかしいことだということを体験した。真に祖国を救う方途は何かということについても、観念的でなく経験的に身体に感じ取るように努力するのがこの合宿でした。それには、思想至上主義では味わえない何ものかがあるはずだといわれながらも、為すところなく日を過ごしたようでした。だから僕はことしこそ、何らかの知識を得ようという「ケチ」な考えを捨て、自分をまったくの裸にして、みんなの前にさらけ出して、僕の気持ちを世の中の誰にでも訴えられ、しみじみと伝えられるような体験をしたいと思っています。

現代の混乱を考えてみると、原因の一つに年代の相違する世代の間に、ものごとの考えに隔たりがあるとよくいわれる。この合宿には十代から七十になられる方までの幅の広い年代、さまざまな職業の方が参加されているので、その意味でも非常にうるところがあると思う。

とにかく四泊五日の合宿が終わって、この雲仙の山を降りる時には、ああ気持ちがよくかった、来年もまた参加したいというような合宿であってほしいと願っています。

最後にこういう合宿を催してくださった国文研や大教協の先生方に厚く感謝します。（拍手）

(11)

東洋大学 行 武 靖 枝

私は過去三回この合宿に参加しましたので、その間考えさせられたことを思いつくままに一つ二つ話したい

と思います。

私は高校在学中から「古典を読みなさい」と、先生方によくすすめられましたが、なんどそれに取り組んでみても、なかなかなじむことができませんでした。しかし、この合宿に参加するようになってから、学究的でまた非常に誠実味のある合宿のふん開きの底に流れているなかに感ぜさせられるところがあって、それが一つのきっかけとなり、いままで古くさいとか、わからないと思っていたことが、急に生々と血がかよったように胸に迫ってきた経験があります。私にとって遠いところ、手の届かないところにあった古典が、身近に感じられるようになったのもそれからでした。古典に宿る先人の心を謙虚に学ぼうとすることを忘れては、着実に新しい進歩は得られないと思います。

ことしは例年にくらべて、女子参加者が多いので非常にうれしく思っています。またいろいろのお話し合いをいっしょに期待したいと思います。いまの時代では、男女同権ということも必ずしもすっきり理解され把握されているとは思えません。戦後の女性の地位が向上したといっても、女のもつ微妙な本質をなおざりにされてしまっただけは悲しいことだと思います。現代の女性観の角度だけから、過去の女性を批判することも問題がありますし、過去は過去なりに生きていたのでしょうから、その時点に立ち返って過去を見る見方も必要だと思います。この両面をどのようにとらえていけばよいか、これが現代に生きる女性にとって大切な課題の一つであると思います。このような問題も、政治や経済の問題と並行させて女性の参加者たちとゆっくり話し合いたいと思っています。(拍手)

参加学生による全体討議（午後三・〇〇～五・〇〇）

——学生生活の正しい建設のために——

司会者のことば

平 田 正 彦君（福岡大）

この全体討議では「学生生活の正しい建設のために」という議題で主催者側を除いて討論を行ないます。それにさきだち、皆さんから合宿参加申し込みと同時にいただいたアンケートを整理された長崎大学の田川君からまず報告していただきます。次にアンケートで求めた諸問題について、九州大学の横田君、鹿児島大学の湯通堂君、岡山大学の森定君の三君に意見発表をしていただきます。なお以上四君は昨年夏の阿蘇合宿に参加されております。このあとでこれらの発表者に対する反対意見、あるいはその他質問などこの壇上で発表してもらい、相互に討議していただきます。こういう順序で行ないますが、アンケートのまとめと三君の意見発表で約一時間、そのあとの全体討論に約一時間を予定しております。（拍手）



アンケート報告

田川 和 昌君（長崎大）

- 一、日本の現状についてどう思いますか？
- 二、将来の日本はどう進むべきだと思いますか？
- 三、現在の学生運動についてどう思いますか？
- 四、学生生活の中で何を心のより所としていますか？
- 五、その他とくに関心を持っていることは？

みなさんから寄せられたアンケートを整理した田川です。よろしくお願ひします。

この五問にわたるアンケートについて、僕らがみなさんのご意見をうかがおうということを決めたのは、ちょうど五月十九日の夜でした。ちょうどそのころ衆議院では安保改定の強行採決が行なわれた。その後の事態は、私たちが全然予期しなかった方向に進み、池田内閣が成立するまで、かつてない混乱が起こり、私たちも貴重な経験を積んでここに集まってきたわけであります。

現在はこのときの緊張のあとの虚脱状態と思えるほど非常に静かで

すが、こうした静かなときに、あのころみなさんの書かれたアンケートを読んでもおりますと、なにか激しい氣迫がよび戻ってきて、あのころの混乱した状態を、もう一度ほうふつさせるような感じがしました。なかでも東京方面から寄せられたアンケートには、私たち地方におりますものが、ジャーナリズムを通じて間接的に知ったこととは違って、直接的な体験としての感じ方、また実感としての意見が多かったように感じます。しかしそれを一々取りあげている時間の余裕がありませんので、一応問題提起という形で話を続けます。

第一番目の「日本の現状についてどう思いますか」という設問について——この設問に関しては「まったく情けない国になったものだ」とか、あるいは「非合法が公然と認められるようなきわめて憂慮すべき状態である」とか、あるいは「一体なにを信じていいのやらわからない状態である」とか、いずれも日本の現状を非常に憂えている意見が大多数でした。とくに、政治の貧困に対する不信感が非常に強くにじみでていて、樺美智子さんの死や、右翼の乱入や、あるいは全学連の国会乱入などに対して、それぞれ非常に強い批判がありました。

ある人はこういうことを書いておられる。

「同じ島国に住んで、そして同じ文化遺産を受け継いでいる日本人が、なぜこのように相争わねばならないのか。日本を情けないというのはいやだけれども、日本を情けないとあえて言わなければならないところに現在の日本の悩みがあるのではないか」と。

まったく私も同感だと思えます。しかし、このように表面上の政治的な貧困だけが、日本の現在の混乱を起

こしているのかといえますと——「そうじゃない、国民生活自身のなかに狂ったもの、なにか欠けているものがありゃしないか」——それがなんであるかについては、はっきりと口に出してはおられません、そのような意見も強かったと思います。ある人は、「現代の青年には夢がない。いい学校にはいり、いい成績で卒業し、いい会社に就職して、そしてなるべく月給をたくさんもらうこと、学生生活を含めた自分の一生をエンジョイしようという気分が若い青年にみながっている、これではいかん」というようなことをいっておられたが、これは単に僕らだけの問題ではなくて、あるいはいまの日本の状態が、すべてその一言に尽きるのではないかと思うのであります。

民主主義は破壊されたといわれますけれども、やっぱりぼくたちにはなにか一つの共通した広場というか、左右が相争うのではなくて、共通の広場を持つことができなものと考えさせられます。そういうものを待望している人も多かったと思います。

ではそのような国民共通の広場とか、国民の基盤とかいうものは一体なにか。それはこの合宿、あるいは今後の僕らの研究や生活に引き続く問題で、とても僕はここで結論を出すことはできません。あるいはこの合宿で結論が出ないかもしれないけれども、こういうものが一体あるかどうか。もしなければ今後われわれはどうすべきかということが、今度の合宿の大きな問題点であろうと思います。

第二番目の「将来の日本はどう進むべきだと思いますか」という設問について——表面的な面からみた意見ですが三つに分けられると思います。すなわち、政治面では「中立主義をとるべきである」というもの、「自

由主義陣営に加わってそれで進んでいくべきだ」とするもの、また「現在は自由主義陣営のなかにはいつていてやむをえないけれども、いずれは中立主義をとるべきだ」というもの、この三つの意見が大体同数でした。

この設問を経済的社会的な面からみたものとしてやはり三つあった。すなわち「資本主義国家としてこのまま進んでいくべきだ」というもの、「修正資本主義にすべきである」とするもの、「民主社会主義的な福祉国家にすべきだ」というもの、これもまた大体同数でした。なお「社会主義国家にすることを望む意見」とおぼしきものも少数認められました。

これらのアンケートのなかである人が、「この問題についてはともかくむずかしい、このことを聞きたいのです」と書いておられたが、共感を禁じえない所見であると思われる。

私はここで、この問題についても即断することはできません。こういう国の方向、あるいは政治的な方向、あるいは経済的な方向こそ、ぼくらはこの合宿で大いに話し合い、そして考え合うべき問題であろうと思いません。

しかしただここでいえることは、これらのアンケートの大部分を通じて、日本という国が人類の平和や世界各国の繁栄に向かって努力し進んでいくべきだということでは、一致しているという点であります。それで、振り返ってこの二カ月間の国内の混乱に思いをいたしますと、日本の国のなかには、統一された意見とか統一されたものがなくなっておりますので、こんなことでは外国も日本のいうことを聞いてくれないであろうし、一部の人のいうように日本は東西の橋渡しになるんだといってみても、いっこう効果的な実績は得られないと思います。一体いまのように、あれはこういい、これはああいいで、日本として非常に混乱した状態にあって

は、とても日本が世界に積極的に貢献することはできないと思うのです。それで、どうしても国民が心一つにするものを持ちたい、その基盤となるものは一体何なのか、こういうことも僕らはこの合宿で大いに討論しなければならぬと思います。これがぼくは一番大きい問題じゃないかと思うのです。

次に、第三番目の「現在の学生運動についてどう思いますか」という設問について——これはわれわれ学生として一番関心の深いものですし、また、一番しっかり考えなければならぬことです。それで非常に意見が多く集まりました。全般的にみるといろいろ批判が寄せられていますが、それも一応全学連が非常に学生から遊離している、おれたちのいうことはなんにも聞いてくれない、おれたちはそういうものではないのだと思うのだけれども、全学連と一緒に行動しなければならぬようになってしまった。一体こういうのをわれわれはどうしようかというような疑問が、大きく投げかけられたと思うのです。ある人は「現代の学生運動はナンセンスだとは思わない。比較的欲のない学生は世相を正確に批判できる」と述べておられたが、そのような意味からいっても、私たち学生が政治に対して批判をもつということは決して悪いことではなく、僕は堂々と意見を発表していいと思います。

そしてまた世の中の人々も、僕らのいうことに対して耳を傾けなければならないと思うのです。しかし、ただ僕らもっている意見を発表する手段がどうあるべきか、全学連の幹部のように三池になぐり込んだり、あるいは国会に乱入したりすることではたしていいのか、それ以外にわれわれとして有効な手段、このような混乱状態を救う道はないのか、そういうことも大きな問題になるのではないかと思います。

ある人は「なんらなすこともなく、いい加減な生活をしているものに、全学連を批判する余地はまったくない」あるいは「表面上は種々の行きすぎもあろうが、ものごとの本質を正確に把握しうるものは学生である。この点を評価せず、ただ自己の憶病と怠慢とをおおわんがために、全学連がどうのこうのと批判的言辭をろうする学生、教授、文化人こそ最も陰險な民主主義の敵である」といった激しい意志表示も見られた。たしかに僕ら学生は、ある面においては怠慢であったし、あるいは努力してもその努力が足らなかつたのではないかと、いえるところも多い。それで、とにかく学生運動に対してもっと積極的にぶつかるべきであるということは、否定できない事実であると思います。またある人は「全学連を放任している学生に責任があるのであって、各自がもっと身近な問題として真剣に取り組むべきである」ということをいっておつたが、僕はこれは非常な至言だと思ひます。全学連にしても学生運動であるというからには、われわれの運動であるべきであると思うのです。全学連の中の一部を占めているわれわれが、もっとも自分らの運動として、それを建て直していかなければならない時期にきているのではないかと考えます。

岡山の方が「大部分の学生はマルキストでも全学連の幹部でもない。ただ惜しむらくはわが方によりよき指導者なく、純真な学生の怒りを誤れる一部の指導者たちのもとに走らせてしまったのが残念だ」と述べておられたが、全学連の幹部とともに行動しなければ意思表示ができないというところに、現代学生の大きな悩みがあらうかと私は思います。

四番目の「学生生活の中で何を心のより所としていますか」という設問について——この問題については、

多角的な所見が寄せられたので、集約整理するのが非常に困難でした。

注目すべきことは「心のより所のようなものがないのが苦しい」という所見、また「そんなものはない。自分ばかりをなくした小舟のように世間を漂っているにすぎない」「そのようなものはない。また必要とも思わない」「現在の学生生活では心のより所などについて考える暇がない」というような意見が、多かつたことです。私自身も「一体君は何を心のより所として生活しているのだ」と聞かれたならば、多分答えに窮すると思います。そういうことは、ありふれた日常生活を送っている僕らの心の中にピンとこない。それで、人から聞かれてはじめて真剣に考え、答えが出てくるのが非常に多いのではないかと思われます。これは、ほくの憶測にすぎませんが、そのように考えます。

しかし、この「心のより所」について、私を含めてこれらの人々とは反対に「現在の努力が将来なんらかの意味で役に立つであろうことを期待する」とか、「新しい国造りに努力すること、あすの平和と繁栄に夢を描くことである」とか、あるいは「将来になんらかの意味で社会の発展、人類の幸福に寄与する土台を作っているのだ」というような心構えが、自分の生活や行動の基礎になっていると、はっきり述べられている人も少なからずありました。またより美しいもの、より真なるもの、より善なるものを探求するために自分は親鸞聖人の教を学ぼうとしているとか、あるいは芸術の分野に精神的な支柱を求め、友だちの間の友情や、グループ内の共同活動のなかに、精神的な支柱を求めているという方もありました。私はみなさんの求めておられるものが、この合宿のなかから生まれてくるかもしれないという期待をいだいておられます。

「その他関心をもっていること」というのが第五番目の設問ですが、この問題については多面的な所見が出ております。しかしここで特にご紹介する必要もないと思うので割愛させていただきます。

以上アンケートの説明とも感想ともつかないことを、私の主観を交じえながら取捨選択して報告しました。みなさん全員の意思の真の解説者にはとてもなり得なかったと思います。しかしこれから合宿が始められます。みなさんがアンケートに書かれたことをもう一度思い起こしながら、この合宿で互いに胸を開いて語り合いたいと思います。（拍手）

学生運動について

横 田 勲 夫君（九大）

私が九大に入学して最初に突きつけられたのは、自治会の執行部の方から、いろいろな様文を刷ったパンフレットでした。私は非常に片寄ったイデオロギーをもった考え方を押しつけられたという感じを強く受けた。九州大学の教養学部は、ご承知のように九州地方では学生運動の一番激しいところであり、いわば全学連の拠点と見なされているところでもあります。私は入学いらい一年半にわたって、ともかくも学生運動の真つただなかに加わっていました。その間ストライキ、授業放棄などが連続してありましたが、私はどうしてもこれは納得できないと感じ、学生大会におけるストライキ決議、あるいは授業放棄決議を提案すること自体に反対し、しかもその提案が決議されても、私はみんなの決議に従わずにずっと授業に出とおしたのであります。

なぜそういう態度をとったかについて、私の考えを述べたいと思います。みなさんのなかには私の意思と違う方も非常にたくさんおられると思いますが、率直にご批判願いたいと思います。（大学の役割——大学に学ぶということ——政治運動の正しい判断力の養成について述べたあと）これまで述べてきたような場合には、一般論ではなくて、今回の安保闘争のように、平常な状態を突き破るような危機感に襲われるような場合には、どうしなければならぬか。これが一番問題になるんじゃないかと思う。しかし今回の場合にしても、危機感を感ずるといっても、感じ方に違いがあり、はたしてそれが危機であるかどうかということは、おのおのによって違うのは当然ではないかと思う。それで現在の学生運動からみて、学生自治会の本質について考えてみたいと思います。

私は学生自治会というものは、学生生活をよりよくするための組織であり、あるいは課外活動やサークル活動のための組織であり、学校側の教育指導をよりよくするための補助的な手段であるというように考えます。したがって大学の存立と相反するようなものであってはならない。私たちは大学入学と同時に、自動的に自治会というようなものにはいってしまいます。生徒会会員というようなものになるわけです。それでこの自治会はどういう状態にあるかということについて述べてみたいと思う。

全日本学生自治会総連合（全学連）は、共産主義者同盟や革命的共産主義者同盟、それから日本共産党、国際共産党などに指導されております。しかし、全学連は全国各大学の学生自治会の連合体であって、われわれ自身もまたその加盟員——加盟員でないという方も多数おられます。——私たちの学校では加盟員であります。したがってその自治会は、特定のイデオロギーをもっているわけです。その自治会の指導者が大学とい

う特殊な状況を巧みに利用して、大学という「隠れみの」に隠れて運動をしているというのが、現状ではないかと考えます。私は学生自治会自体が、そういう特定のイデオロギーをもっていいものかどうか、ということに大きな疑問を感じるわけであります。

学生自治会の執行部とは、そういう論争から一步退いて謙虚であるべきではないか。私は自治会が、いまのような統一の見解を下すことが誤りだと考えます。だが、現在の誤った学生運動を狂信的に信じておられる方には、それを是正するかどうかということが問題になると思います。それでわれわれはそれにどう対処していったらよいかということ、問題の提起という形で一言述べてみたいと思う。

学生大会の決議が、拘束力をもつかどうか。私はもたないと判断して、さきほど申したような態度をとったわけですが、まず第一に学生大会の決議が、拘束力をもつかどうかについてはいろいろ意見があらましよう。私は学生大会の決議は大学の使命と責任に反するというか、大学のワタを逸脱するようなものである場合には、学生大会自体の存在意義がすでに失われてしまっていると考えます。今回の安保改定の場合、私は非常な危機感とは思いませんけれども、非常な危機感をもっておられた方が、当面する目的が同じであるからといって、全学連執行部の意図している統一行動に参加することが、はたしていいかどうかということです。これが非常に重要な問題ではないかと私は思うのです。

目的が同じであったらやってもいいじゃないかと考えて、やられた方が非常に多いのですけれども、そういう点に強く疑問を感じるわけであります。（拍手）

思想的混乱を根源から直そう

湯 通 堂 義 弘君（鹿児島大）

日本の現在の思想界は、歴然とひとつのラインを引いてしまつて、それが闘争の姿勢で対立しています。そしてそれを右翼であるとか左翼であるとか、あるいは資本主義であるとか社会主義であるとか、進歩だ、反動だというように極端にきめてしまつていること、その極端なきめ方に問題があると思う。一体こつた思想的な混乱を招いた原因はなんであるか、それを見きわめたい。現在、日本は二つの陣営に分かれています。一方、一つの陣営は一つの思想をもち、他の一つの陣営はもう一つの思想をもち、それが一方を打倒するまでは闘争の態勢を解かないというような形で、極端な対立が見受けられます。しかし、そういった思想的な対立や、一方が他方を打倒しなければ解決できないという物の見方、考え方それ自体は、一体われわれにとつて、どれだけの値打ちがあるというのか、私は非常に疑問に思う。古今東西の史実を調べてみて、そういった力でもって獲得した覇権ハクケンというものは、人間が望み求めていたものとおよそかけ離れたものとなつて、実現されているのが歴史の事実ではないか。

一番近い例でいうと、ソ連の革命、中共の革命のように力で獲得された政権は、結局は武力でもって擁護しなければならぬという悲劇を伴っている。社会的、政治的権力が需要であるにしても、われわれはやはり、思想の混乱が力だけで解決するとは思われない。われわれが小さなグループをもつたときでも、また一つの教室でともに生活するときでも、精神的な融和や、相互信頼の道がそこに確立されなくては、そこで人々が求め

ていたものは達せられないと思う。たとえば私が同じ教室に机を並べているもう一人の学生と議論する場合、まず「あいつはどういう思想をもっているだろうか」と考えて、足元を見られまいというような態度で、話を始めたとする——それは一つの例なのですけれども——理論は精密になって巧みになる。そして相手の欠点、相手と自分との意見の相違といったものを、異常にはつきりと感ずるようになってくると思う。そうすると、理論はますます冷たく鋭くなるけれども、結局はますます自分と相手との隔たりをますます強く感ずるようになってしまう。これではだめなわけです。同じクラスの学生であるわれわれは力を合わせて進んでいかねばならない日本の青年です。だから、たとえお互いの意見、思想が違っていたとしても、相手がどういうことを望んでいるのか、どういうものを心のより所としているのか、あるいはまた将来どういうふうにしていきたいと希望しているのか、そういったものをまず知ろうと努力する必要がある。私は自分の心を相手の心のなかに投げ入れてものを考えていく必要があるはしないか、そして相手を理解しようとする気持ちで取り組まなければならぬと思う。それからお互いのなかにある人間的、基本的な共通点の基盤を求めめることに努力し、それを深めていって押し広げていくことが一番大切なのではないか。かいつまんでいえば、われわれがお互いに結局理解し合わなければいけないのだという心構えをもつことが、なによりも大切なわけである。そして、そういう共通の心構えというものは、決して疑ったりあるいは反撃することでは得られない。そういう普通の心の持ちようというものは、まず第一にお互いに日本人だ、お互いに欠点だらけの人間なんだ、ということから始めなければいけないのだと思う。そして、日本人であるということを、ただ頭の中で理解するのではなく、実感として日本人だということを感じ取らなければいけないのではないか。それがすべての出発点になる

のではないかと思う。

われわれはお互いに貧しい四つの島に住んで、結局は社会的には同じ運命をたどらなければならない。こういった地域的なかつまた文化的な運命共同体は、なににもまして大切なものであるから、それを守り育てていかなければならない。お互いを人類として愛するという人もおりますが、宗教、文化、その他いろいろな面でも異なる国の人々と融和していく前に、まず地縁的なものを解決していかなければならないと思うのです。

いまの激しい思想的な混乱も、もとをただせば、地縁的、言語的、文化的、歴史的な人間性をあまりにもおろそかにしすぎてしまって、飛躍的に人類愛を唱えているところに、つまりお互いが日本人であるという感情を忘れているところに、原因があるのではないかと思う。私はわれわれ日本人は十五年前に戦争に負けたときくらい、次第に支離滅裂になっていったように感じています。外国の旅行者たちが、「一体これが敗戦国か」というくらい日本は恵まれてきたが、消費生活の向上もさることながら、それとともに精神的な人間相互の信頼感も向上しなくてはならないと思う。われわれの間でも、古い言葉などを口にする、なにか後ろめいた気持ちにさせられたり「おれは日本人だ」ということを自信をもっていうと、おかしなことをいうやつだとみんなして冷やかす、そういう世相の中に住んでいることは何という悲しむべきことであろうか。

人間相互の信頼の厚かった日本人であるにかかわらず、いまは歴史を失ってしまったような、また民族の文化に自信を持ち得なくなったようなわれわれ国民の風潮は、あるいは亡国の前兆かもしれない。トインビーとかフイヒテなどが警告している言葉のなかに、そういう言葉がたくさん出てくるのを見受ける。

私どもは若い世代で、前ばかり向いているのですけれども、温古知新——さっき横田君もおっしゃったので

すけれども——古い日本を知ることが新しい方向へ向かうために絶対欠かせない条件ではないか。われわれは外国からいろいろなことを学んでいるが、そういうものを根なし草のように受け取っていたのでは、決してそれは身についたものにはならない。そうではなくて、主体性をもって外国の文化を受け取ること、資本主義だ社会主義だといってみても、制度上のことだけを問題にしてもだめで、日本人の心にびったりくるような社会はどういうものなのか、それを求める努力をしなければならぬのに、それを忘れてくるような気がする。われわれはそこから始めなければいけないと思う。それがあってはじめて新しい日本の文化も築かれる。はれものにさわるように、古いといわれるものを遠ざけないで、かえって勇敢にはれものに触れてみるということが、この合宿でもとくに必要なのではないかと私は思うのです。

われわれの学生運動を見ると、結局、社会を変革しようとする異常な情勢がああいう結果になっているが、ソビエト革命にしろフランス革命にしろ、人間すべてを平等にする社会にしようとする努力したものの、非常に矛盾した結果を招いている歴史的な事実を見のがしてはいけないと思う。革命途上にはプロセスがある、いつかはソ連もすべての人が、平等になるというような夢のような仮説に、私は尊い自分の人生を試験に供することはできません。観念の上だけでよい社会を作るというのではなくて、赤裸々な現実のなかを正しく生きぬく道を求めたいと思う。それに鋭く目を向けなければならないと思うのです。（拍手）

主体性を奪い戻そう

森 定 信 司君（岡山大）

さきほど述べられたアンケートにありました問題は、各人がひごろ考えていたことを抜粋したものであったと思う。しかしいまの日本の政治や思想、また社会現象の混乱についていろいろ批判するが、その批判している人たちは、はたして混乱していない人間かというところじゃない。場合によると批判している人間ほど、ひどく混乱しているものがあるようにも見える。また「日本には国家がない」とか「共通の基盤がない」と簡単にいい放って平気である場合が多い。しかし一歩進んでみれば、共通のものをもたない人間同士が、なんで共通の基盤をもちうるのかという問題が起こってくる。これはなにも考えることではない。自分たちが日本人として生まれてきたことは間違いないことではないか。日本人であるにもかかわらず、日本人であるというのがいやなのか。それが日本人自身を憂えるという、なんと情けない立場に自分がおるのか。このように思いながら私の考えを端的に申します。

いまの社会状態のなかでは、平和を口にする人々ほど、平和的でなくてやかましいやつである。その実、その人間が本当に平和的な人間生活をしているかといえば、それははなはだ疑問視すべき人物であったりする。そういう不可解な人間を自分たちは目の前に見てきている。このような人たちは、いわゆる自己と比べてみても、他というものに対する自分の立場そのもののバランスが非常にくずれていると思う。それなのに自分の力というものを過信している。全学連の執行部は、自分たちの過信というものに気づかなくてはいけない。自分

自身の過信を反省できない人間に限って大きなことをいい、大きなことをしようとする。結局もののわかっていない人間に、ものわかったことのできるはずがない。眠けまなこで自分を甘く見る。それはいけないと思う。プラカードをもって走り回って、それで人が死んだのどうのこうのとなをいっているのか。なるほど私も学生の一人であるからには、全学連の執行部や代議員が普頭をとって議決したものにしがって、安保条約に反対しなければならぬかもしれない。しかし、そういうものに拘束されるためにわれわれは生まれてきたとは思わない。われわれは、本当に生きるために生まれてきたのであると確信する。なんのために生きているのか、そういうところに結局日本人もっている主体性のなさ、弱さ、いわゆる西洋人に対する劣等感の一つの弊害が、社会的にしる国家的にしる起こってきているのだと私は思っている。

それから、本当の民主主義ということに関してマスコミのとらえる問題意識は、いわゆる人間を離れて他をもって自分の主体性を守るといふ単なる理論武装的なものでしかない。結局そういうみせかけの人間が非常にふえてきている。

しかしながら、頭のとっぺんから足の先まで「おれは違っている」とはつきりといい切れるような人間が、いかに減ってきたことか、われわれは非常に残念に思う。その意味でこの合宿を通じて、自分自身を徹底的に鍛え、自分の内面を徹底的にたたき出して、それで自分というものの追求とは握が、なんらかの形で少しでもできれば、これはもっけの幸いだと思う。しっかりやるつもりですからよろしく願います。（拍手）

討 論

以上三君の意見発表によって、青年学生にとって身近な諸問題が浮き彫りされた。司会者が「自由に登壇して意見を述べていただきたい、時間は一人五分間程度」と発言する。希望者があいついで立ち上がり、結局、十二人が活発にあるいは意見をあるいは反論や疑問点を述べ合ったが、論点は学生運動の是非、やり方、とくに全学連の実態と批判に集中した。全学連の安保改定反対闘争は、なんとんでも『行動』だけの問題ではなく、いろいろな思想的背景をもっていたので、当然のことながら、デモに参加した学生からデモ参加の理由と主張が述べられ、これに対して反論が繰り返された。

目前に見た全学連の行動に疑問を投げかけ、学生の反省を促すとともに、全学連を批判する意見は次のようなものであった。

一、日ごろイデオロギーを十分研究し、これに固まった学生よりも、そうでない学生の方が多数デモに参加したのはどういふわけか。学生が利用されやすい地位にあるのではないか。

一、「平和、平和」と叫びながら、あのような戦いによって平和は断じて得られない。血や憎しみによって得た「平和」は、必ずいつかはくずれると思う。闘争によって平和を築いてやるのだといった偽善的な立場に立っているようでは絶対にいけない。

一、勤評を戦争に結びつけたように、安保を戦争に結びつけて、これに対して平和という言葉を使っ

いる。

一、学生自治会を特定のイデオロギーの下に立たせた原因を作ったのはだれか。われわれ学生であるといわざるを得ない。全学連は困ったものだといって、指をくわえてながめているふがいなさを恥じよう。このふがいなさから、世の流れといった一つのムードの中に育ていこうとする、すなわち安易な道を選ぼうとするのではないか。これは日本人のすべてについてもいえるかもしれない。真の意味の人間克服へ進みたい。

一方、全学連の運動の方向を肯定する少数意見として、次のような意見も述べられたが、安保の可否をめぐって日本の自由と独立をどこに求めるかについてさらにその反論がわき立った。

一、「平和、平和」と叫ぶのは、現在そうしなければならぬ時点にきているからである。自己を喪失したくないからこそ平和を叫ぶ。全学連の行動はニュートピアリズムの犯した誤りはあるが、ニュートピアリズムの精神は大事であると思う。

一、自分が安保反対だからデモに参加したのであって、全学連執行部に引きずられたのではない。しかし安保反対だからといって一方的に破棄することは考えていない。



一、われわれが無防備真空状態になって、もし侵略を受けたらどうするかに対しては、大内兵衛氏がいったとおり「もし侵略してきたら侵略されてもいいじゃないか」と答えるより仕方がない。また侵略の可能性を認めてはいない。むしろ安保のような軍事同盟を結んで、われわれの自由と独立はどのようなことになるかと問いた

い。

反論は、①安保を改定しないことで、われわれの自由と独立が保障されるかどうか。そうであるならば、世界の平和はとくに実現している②侵略されたらどうするかと心構えと、日本の自由と独立を守るために安保に反対するといふときの心構えにおいて矛盾があると思う。侵略されてもいいじゃないかというならば、米國と安保条約を結んで、たとえば属國になるといってもよいことになる③子供までも安保といえ「反対」と答える。学生は安保を改定すれば昔の帝国主義へ戻るといふ。なぜそうなるのかと聞いても理由ははっきりしない。この流行は一種の洗脳作用だ。このような情勢の中で、安保に反対してひたすら平和を叫ぶといっても、何かに利用されるだけであり、日本の独立と自由にはほど遠い結果を招くと思う——といったものであった。

合宿当初の全体討議で、左右両翼に分かれたような論戦が戦わされたことは、なみなみならぬ安保闘争の重要な断面と、学生をとらえている思想的対立の一面をさらけ出したものであった。心底から平和を叫んで全学連と行動をとるものにしていくといつてみても、主観にとらわれていないかどうか。それが日本の独立と自由を守り、日本が世界に貢献できる方法だと規定しようとしているのであるならば、これまでわが国が独立を守り、自由を確保してきた跡をたどってみるのが、先ではないかという問題も出てくる。この場合、双方のどちらがよいのか、という結論づけはもちろん、各種意見がどのような物の考え方と根拠に基づいて出ているかに、

参加者全員が取り組まねばならなかった。

入浴・夕食・散歩（午後五・〇〇～七・〇〇）



大浴場には、硫黄のほのかにおう湯がこんこんとわき、山々の起伏と木立ちの静かなたたずまいが見渡される。身も心もよみがえる気持ちだ。湯ぶねのなかでお互いに見合わず顔には、疲れをときほぐす喜びと、これから四泊にわたるはげしい未知の生活への気迫とが、自然に漂いあふれて、なんともいえない力強いふんいきを感じさせていた。これからどんな合宿がくりひろげられることであろうか。未知の世界に勇敢に取り組もうとする若き人々のつどいのかに。

午後七時から亜細亜大学教授夜久正雄氏の講義にはいった。最初の講義である。夜久講師は一時間半にわたって学生時代いらしい一貫して追求して来られた思想体験を、かんで含めるような言葉で語られた。同講師に対しては、主催者側として専門の国文学を離れてとくに講師自身の「思想と体験」の話をお願いしたものである。

体験と思想

亜細亜大学教授 夜久正雄

木の葉のそよぎに驚くものも小暗き林に一人わけ入り

小鳥のうたふに傾くものも荒波わけてすゝみ行きたり

三井甲之「理解」から

いまから五年前、国民文化研究会の第一回合宿が、霧島で行なわれたとき、私は、短歌を中心にしたお話をし、国民同胞感というものがどのようにして国民の間に形成されていくかという過程についてお話した。今回五年ぶりに主催者から、しみじみとした体験的な話をしろといわれて、この合宿に参ったが、いったい何をみなさんにお話したらよいかと非常に苦慮しました。どういふ話をすれば、自分の気持ちをみなさんに訴えることができるか、また、みなさんと私たちの間にあるいろいろな世代の違いを越えて、一つの普遍的なものに、どうしたらお互いに到達することができるか、それを非常に苦慮したわけです。しかし、先刻みなさんが午後の全体討議の時間に、自由活発に論じ合われた、あの素直なもののおじしなない気持ちを、私も心に宿して、自分がたどってきた時代

に対する感想と、自分の生きてきた生き方について率直にお話してみたいと思います。

さて、この合宿にみなさんやわれわれが、集まってきた根本の目的は何であるかと考えてみますと、それは「われわれお互いに自分たちがいま生きている生き方を話し合ってみよう」ということにあるのだろうと思う。あるいは「そんなわかりきったことを改めていわなくたっていいじゃないか」という人もあるかもしれません。しかし、こういうような集まりは、最初の動機というものをすっかり見きわめて、その意義を明らかにしておかないと途中でいやになってしまうのではないかと思う。つまり、自分のいっていることをみんなが承認してくれないと、すぐいやになってしまう。たり「ほかのやつはみんなこれこれこういうように考えているけれども、自分はそれと違うので、とてもいっしょにやれないから」といって、いやになってしまふようなことが出てくる可能性がある。そうなってくると、なにもかも行きづまってくる。われわれが、自分たちがいま歩んでいる生き方を、お互いが素直に語り合うことは、人生を生きていく上で非常に重要なことで、それができるとかどうかに、われわれ人間の根本的な生き方の課題があるといえましよう。これは決して軽視したり、見すごしていい加減にしてはならない課題と思います。

さきごろの、五月いらいの激しい国会周辺のデモ事件や、またいまなおこの近くで激しく争われている三池炭鉱における闘争などみますと——私はそれを新聞を通じてしか知らないが——深いおそれを感じないではられません。国民の間に非常に激しい思想の分裂が現われてきたと思うから

です。しかもその成り行きをみますと、その分裂をさまざまな力関係によって解決しようとしている。そうした動きが非常に強いと見受けられる。そういう動向を見ていると、私は心のしめつけられるような感じがして、これではいけないと強く心が痛みます。なんとか話し合いによってこの対立を解決する道がないのであろうか、この対立をなんとか解決して、調和に導く道はないものかと考えさせられます。結局、それにはやはり、共通の地盤を発見しなければならぬわけですが、それでは、共通の地盤とは一体何か、それを解いていかなければだめだと考えるわけであり、理論をたどって問題を解くよりも、自分のささやかな人生体験をたどって、この問題と取り組むことのほうが、より賢明であると私は考えます。そこで、自分の若いときからのさまざまな思想的経歴というものが、それはごく素朴なものでしょうけれども、しかし私にとっては真実の、かけ替えのない思想的な経験ですから、それに照らしてお話していきたいと思います。それでまずはじめに、生きていこうとする心組みについての話からはじめます。

まずわれわれはだれでも「自分が幸福になりたい」という欲求をもっていることに気づきます。これはなんとしても否定することのできない人間共通の、しかも基本的な要求であります。それはいいとか悪いとかいってみてもはじまらないことで、人間はすべて、この欲求にいたがって生きています。つぎに、自分が幸福に生きたいということを、よく味わってみると、自分一人だけが幸福に生きたいと考えているのかというと、決してそうではない。たとえば自分の家庭生活を考えてみ

でも、自分だけがおいしいものを食べていたり、好き放題のことをして、両親はせせと働くだけで、食べるものも満足に食べないということになれば、それでわれわれが満足できるかというと、満足してしまう人がまれにあるかもしれませんけれども、大体においてはそれでは満足できないのがわれわれの本心ではないでしょうか。親も自分の兄弟も、自分と共に、みんないっしょに幸福への道をたどれないだろうか、と考えるでしょう。あるいはみんながいっしょに幸福になれるものであろうかと心を痛めると思う。これがやはりわれわれの根本的な希望、念願であって、この念願に立ちながらわれわれはいろいろ行動したり、また話し合ったりしていこうとしていることが、気がつきます。つまり、われわれが家庭生活にあっても、家庭内が和気あいあいとしていること、だれでも願っているはずですが、しかしそれがなかなか現実には実現できないのですが、実現できないことが多いからといって、その願いが強くなる内在していることを忘れてはならないでしょう。とにかく実現できていないにしても、その願いというものの真実性は、どうしても否定することができないと思います。

これと同じく、国家の内部に激しい分裂があれば、われわれは心を痛ませながら、その分裂を調和に導きたいと念願します。つまり相対立しているものが共に一つの幸福をかち得るようにと、われわれはごく自然にかつ素朴に考えるのです。これをおし広げて世界人類の平和が、そのようにして実現できないものかどうかとわれわれは考えていきます。したがってわれわれの心のなかには自

分が幸福になりたいという念願があると同時に、すべての人と共に幸福になりたいという願いがあ
 る。あとでお話しますが、この自覚を聖徳太子は「共に是れ凡夫のみ」といわれたと思います。こ
 こにわれわれは人間としての「共通の地盤」といわれるべきものを求めたのであって、「我独り得
 たりとして」（聖徳太子憲法）己れを高くする「慢」は「悪の最」（聖徳太子三経義疏）たるものと考
 えたいものであります。この「慢」はまた支配意思にも通ずるものであって、「人にして人の上に
 立つ」（福沢諭吉）ことにもなるのだと思います。

したがって私どもがいまここに集まって、お互いの生き方を話し合うということは、お互いの生
 き方を話し合いながら、そこに一つの同じ生き方、原理的にみて同じ生き方に到達しよう、という
 ことであります。それは「お前が経済学をやるのならおれも経済学をやる」というようなことでな
 いのはもちろんであって、要するに、「共通の地盤」となるべき根底の一つの心持ちをともに味わ
 うことが最大の目的なのです。自分一人がみんなと違った考えをもっておることもありますけれど
 も、しかしそれでは孤独に留まるわけです。いくら苦しんでも自分はそれ以外に考えようがないと
 いうように自己を深化していく場合もあります。しかし、この自己を深化していくことは、
 同時に深化した自己というものが、すべての人に通ずることを信じて行なうのであって、自己の深
 化と共感の世界との二つは、決してはなればなれのものではないはずで、われわれはそれが一つ
 のものになるということを信じもし、願ってもいるのです。

だからわれわれがいまここに集まって、こうしてわれわれの生き方を話し合うことこそ、大切な生き方ではないだろうか。自分ひとり、ある特定の生き方がわかっているから、これをみんなに教えてやるのだ、というのもおかしいし、それから、自分はどうでもいいから、何かうまい生き方があったら、それをものにして自分の生き方にしてしまおう、というようなことはつまらないことです。われわれは自分の生き方を人に話す、そして人がそれに納得するということに一つになる喜び——一体感を獲得する道を発見するわけにあります。

したがって、われわれがこの合宿でしようとしていることは、人間の生き方の（非常に素朴ではありますがすけれども）基本的な心構えを、われわれがみんなで体得することにあるのだと私は考えます。これは、さきほどいきましたように、われわれのひとりひとりが幸福になる道であり、みんながともに幸福になる道でもあります。われわれはそれを言語の上に実現しようというのです。しかし、このような人間の自然の念願を実践し、実現しようとする場合に、そこにさまざまな思想、イデオロギーが介在して、対立や争いや、また進歩や破壊が起こるのであります。そういう考えから私は私なりに、この時代に生きてきた思想というか、感想というか、それをお話してみたいと思います。

前にお話しましたように、私は現代の国民生活の分裂の最大の原因の一つは思想的対立にあると考えています。それが今日の不幸な——私はそれを不幸と感ずるのですが、不幸と感ぜない人もあ

るかもしれませんが——安保反対デモや三池事件の有力な原因の一つと考えています。元來、思想は利害と関係があるものですが、必ずしも利害のみによって動かされるものではないので、ことに最近の事件は、利害を離れた思想的対立の様相を呈している。だから、その解決にはその思想そのものの検討を要するわけですが、思想の検討がまた思想的立場を離れては行ない得ないために、検討が検討を生み、対立は対立を生むのみで、はてしない分裂を続けるのでしょう。そこで、われわれは自己の思想を、前に述べたような、人間の根本的な自覚、自己の経験的事実に照らし合わせてみる必要があるわけです。私が本日の話に「体験と思想」と題したのは、このような省察を私自身に加えてみようと思ったからにほかなりません。

われわれ近代のインテリとよばれる者はだいたい少年時代の後半、いまの高等学校ぐらいのときに人生に対して目を開くといわれています。つまり、自分一人の生活ではなくて、他とのつながりにおけるさまざまな要求を心にいただくのだろうと思います。私も、やはり旧制中学の四、五年ぐらいから人生について考えるようになった。家が貧しいため家庭内に暗い日が多い。なんとかそれを明るくしたいというような願いに燃えていたわけですが、中学生の身として、経済的にどうすることもできません。だから、こう考えるのです。——この世の中にいる自分たちと同じような大勢の貧しい人々を、なんとか救うことができなものであろうか、つまり、片一方には非常に経済的に

豊かな人があり、片一方には非常に貧しい人があって、経済的に豊かな人が道徳的にえらいとか、思想的に正しいということも別にあるわけではない、貧しい者は貧しいなりに、なんとか自分の環境を打開しようと思つて一生懸命に働く、しかし豊かになる道がなりたない。この貧富の懸隔をなくして、この世の中を幸福にすることはできないものだろうか。それは社会正義というものに対する強いあこがれです。この社会正義の感情は、今日の一般的な傾向として、貧富の差のない社会を作つて、出来た生産物を平等に分配するという社会主義制度に結びついて考えられるものですから、社会正義の要求そのものも現代社会に対する変革意思と見られやすい。しかしそれはまた別の問題であつて、それにはやはり人間の真実の欲求が内在している。つまり、すべての人が幸福になりたいということ、自分一人が幸福であつたのでは満足できないので、すべての人とともに幸福を分かち合いたいという願いに立脚しています。この考え方が諸君の年齢よりも少し若い年ごろの私を強く動かしておつた感情です。そしていまも私の心の底に燃えている感情です。この感情にはおそらく、みなさんも共鳴してくださると思います。

それからもうひとつこういう考えがあります。それは自分の生活に生きがいがあるかということ。おそらくここに集まつておられるみなさんも、同じ思いをいだいていると思う。その思いをやがてわれわれの生活の末端にまで及ぼそうとする。たとえば、自分が勉強していることが、なにかもつと大きな、つまり多くの人のためになるというふうに直接に感ずることができれば、われわ

れはその生活に生きがいを感じる事ができるわけです。その生きがいを求めるというのは、人間は死ぬものだという基本的な事実からもくるのでしょう。だれでもほとんど多くの人は自分の親しい人の死とか、あるいは友人の死とかを見たり聞いたりして、死というものについてなんらかの経験があるので、だれでも人間の死を考えないではいられない。人間は死んでしまうと、なんにもなくなってしまうじゃないかという不安から、自分の生命をなにかにささげたいという強い欲求が起こってくる。私はそのころもまた後になっても、不思議に自分の生活の上で、金もうけとか立身出世とかについては考えなかった。それは私の性格にもよりましようが、また時代の思潮に導かれたのもあろうと思います。自分の経済生活について真剣に考えたり、生きて行くことを自己の全責任で遂行しなければならぬことを自覚したのは、三十何歳の戦後の動乱のさ中においてでした。

社会正義の主張と生きがいの探求という気持ちをして、私が人生に踏みこんだのは、ちょうど昭和七、八年ぐらいのことです。共産党が非合法時代であったその当時、ある友人が「赤旗」という雑誌——のちの「アカハタ」なのでしょう——を私にくれて「これを家に帰ってよく読んでくれ」というのです。それで、中をバラバラとめくってみると、貧しく苦しんでいる人のことがたくさん書いてある、労働者が資本家から迫害弾圧されていることなどがたくさん書いてある。私はそれを読んで、痛憤して「こんな事実が行なわれていることは実にけしからん」と考えて、家にもって帰った。そして兄に「こういうことが書いてある、実にひどいことをやっているではないか」と

いつて見せた。兄は「これは『赤旗』じゃないか、どこからもつてきたか」というので「学校の読書会で、上級学校から来た先輩がぜひ読んで見ろ、というので読んでいるんだ」といったら、兄は「それは大変だ、これをお前がもっていたらそれだけですぐ引つ張られるぞ」という。警察に連れて行かれるという意味です。この当時は共産党関係で警察に連れ、行かれると、いまのように黙秘権などで済まされませんからなかなか帰ってこられません。いまならば共産党関係で引っぱられても、組合のほうで使ってくれるとかいうこともありましょうが、当時もし私がその方面に進んだら、私の家庭はまったく悲惨な結果になります。それで私は非常に憤慨した。友人の非情に憤慨したのです。これではまったく落としか穴に落としか入れると同じで、貧しさに苦しんでいる者に一層の貧しさをしいると同じです。これでは、友情も思想も何もかも手段であるということです。なにかマルキシズムの本質に触れたように感じました。もう一つ、当時プロレタリア俳句というものが盛んだった。われわれも俳句を作っていたのですが、いっしょにやっているプロレタリア俳句派で、前の「赤旗」をおしつけた先輩などが、わたしの俳句に対して高飛車に、プロレタリア意識が低いと批評するのです。ところがプロレタリア意識が盛んだというものは、非常な財産家や有名なジャーナリストなんかの子息なのです。それですっかりお里がしれたような気がしました。このこととマルキシズムとの関係は、後になってから考える機会があり、説明を加える必要がありますが、ともかく、このようにして、前にのべた自分の思想上の動機——それはマルキシズムや共産党生活に進

む可能性をたぶんにもっていた——から共産主義あるいは共産党の生活へ進む機会は失われた。私はこのことを感謝しています。前に述べた社会正義の感情と生きがいの探求は、私たちと同年輩のものにあつては、深淺の差はあれ、多く共産主義にその道を発見する傾向があつたからです。当時をよく「頭の良い学生は赤になる」とか、「赤くならないのは利己主義者だ」とかいわれたのも、このゆえです。たしかに共産主義では、革命による社会制度の变革によって、社会正義の実現を期し、なにかをやつておれば、それが直ちに世界の平和とか共産主義革命に結びつき、人類の幸福を約束することになる。だから、革命に向かう一挙手一投足全部に生きがいを感じる事ができる。

共産党の細胞の人が非常に苦しい生活に耐えられるのは、この信念によるのでしょう。自分の生活が——ガリ版を刷っていることも、恋愛をしていることも、何でも直接人類の幸福につながっていると信じていることができる。ところが共産党員でないわれわれは、普通にはなかなかさういうことは感ぜられません。自分でお茶いっばい飲むのは、自分が飲みたいから飲んでいるわけですし、家を掃除するのは、あたりを清潔にして自分が気持ちよくものが書けるようにというためです。あるいは、きたないところについては健康を害するから、自分の健康をよくするためにしているのです、要するに自分のためにしているのです、人類の高尚な目的にはじかに結びつかないのです。

そこでわれわれは自分の生活は、ただ自分の生活のためだから、生きがいがないというふうに感ずるのです。自分は自分のことだけしかやっていないじゃないか、なにかもつと自分の生活がひと

のためになるような道がないものかというように感ずるわけです。そういう現代のインテリの不安に答えるものが共産主義にあると思う。したがって私の経験から考えても、人間の根本的な要求、青年として当然もつべき正しい希望願いと共産主義とが結びつく可能性があることは否定することができない。だから共産主義を信条としている人のなかには、政治的な支配欲から出発する人もあろうが、多くはこういような動機からはいっていった人だろうと思います。

問題はそういう願いが共産主義というような考え方によって、実際に実現できるかどうかということです。これが思想の問題です。これを、私はさきほどお話したように、人生のとはばなにおいて、友情の裏切りとして、またイデオロギーの絶対性として体験したわけです。それで非常な反発を覚えた。今日考えれば、それは人間性からの反発であつたということができましよう。

それからもう一つは、当時の共産主義はいまのそれとは違う。いまの共産主義は、民族の独立、平和——民族の独立を厳密にいうと共産主義のいうこととは少し違うのですが——といって、国家の独立とすることを認めているようですが、昭和六、七年ごろの非合法時代の共産党は、国家生活の権威などは全然認めないのです。当時共産党は、国家というものは当然消滅すべきもので、共産主義の敵である、革命によってこれを解消してしまうのだというようにいっていた。したがって日本人としての生き方などは全然問題外だつた。つまり国際共産主義は、国家を超越する——事実はソビエト・ロシアの主宰する——革命運動の組織であつて、日本人としての共産主義などといった

ら、共産主義のなにものたるかも知らないということになるはずの時代ですから、そういう日本人の生活に対して、あるいは日本人の信条というものに対する配慮は、当時の共産主義には全然なかったのです。したがって日本文化の価値を認めるとか認めないというような問題ではないので、そんなものの存在すら全然考えてないわけです。それが私には非常におかしなものだと写った。その理由は、当時俳句をやっていた私は芭蕉の俳句に心を引かれていた。それで、芭蕉というような人が出たのだから、日本だってすばらしい国じゃないか。教科書に外国の詩など出ているのを見たりするけれども、よくわからないが、芭蕉の俳句より特別によいというようには見えない。むしろそれ以下にしか見えない。したがって、共産主義の日本文化に対する非常な軽侮、あるいは日本人を手段として考えるという考え方に対しては、どうにも反発を禁じえなかったわけです。自然自発的の国家的感情による反発であったと思います。

昭和八年というと、日本の思想の歴史の上で、いわゆる滝川事件が起こった年です。その滝川事件についてはいま触れませんが、林健太郎という西洋歴史学者の書いたものを見ると、滝川事件によって日本のマルクス運動は完全に弾圧をされた、とされるされている。林健太郎教授は昭和八、九年ごろ東京大学を出たようですが、自分は最後のマルキストだったというふうに書いています。わたしは、そのころ旧制一高在学中ですから、ちょうどマルキシズム運動が弾圧された時期と、私がいまいったような心持ちで学生生活にはいつて行った時期とはほぼ同じです。だから私が大学には

いったときは、マルキシズム運動は表面には立たない時代だった。かえって、昭和六年に起こった満州事変の余波で、民族的感情、愛国的感情が強く表面に現われた時代なのです。

そこで、さきほどいったような、自分の生き方に生きがいを求めるということ、それから、日本人としての——自分たちの——生活というものを、伸ばし深め、豊かなものにしていきたいという気持ち、それから社会正義の感情——これはなかなか説明を要する言葉ですけれども、さきほど私がいったような意味での社会正義の感情というもの——そのような三つぐらいの感情、考えをもって出発したわけです。それには、われわれの生活の基盤となる日本文化を、もっときわめ研究していかなければならないと考えたわけです。自分自身というものが混とんたる状態ですから、その思想の展開をたどるのも困難ですが、マルキシズムに対しては、理論と実際との両面から、それが人間の、日本人の幸福を約束するものではないことを強く考えるようになると同時に、時代の推移と戦争の切迫によって、一種の国家主義に私の思想を向かわせました。そこに生きがいを感じ、国家の權威による社会正義の実現を夢想するようになった。一種の国家社会主義のようなもので、そうして国家の權威を、日本文化の世界的使命に求めたのです。

日本が太平洋戦争を戦っていたとき、私はマルキシズムに対する反動のような気持ちで、しかも一種の感激をもって「召集令状」を受け取ったことは、まぎれもない事実です。しかし私は戦争中——戦争そのものがかいいとか悪いかという問題もありますが、その当時はそれ以上にわれわれの心

を強くゆさぶったものがあつた。戦争の理論、すなわち戦争指導の方法、戦争のもってゆき方というものに非常な無理を感じたことです。それは戦争にはいると、ナチスの理論やムツソリーニのファシズムの理論が、日本の言論界に強く影響を及ぼしてきて、戦争中の思想界を支配するに至つたからです。それを一言でいえば全体主義というわけですが、その全体主義は、ドイツ、イタリアのナチズム、ファシズム、ソ連の共産主義、それから日本の全体主義を一つにまとめたイデオロギーで、それをもって自由主義国家群に対抗する思想原理とするというものです。またその戦争は思想の戦いであるから、とどまるところのない戦い、百年戦争だという意見が強く表面に出ていたので、世界における自由主義国家群を壊滅させて、世界を全体主義化するには、まず日本が完全に全体主義国化することが先決条件だ。したがって個人の自由は原則的に認められない。「滅私奉公」でなければならぬ。出征兵士を送るのに涙は流してはならぬというわけです。平和を論ずることが禁ぜられ、さらに国家総動員法ができて、言論の自由は極端に抑圧された。こうして個人は国家の道具となり、戦争の手段としか考えられぬようになったのです。

この戦争中の全体主義のイデオロギーには、私の国家主義的感情もついてゆくことはできませんでした。むしろ私はその全体主義に、マルキシズムと同じような人間性無視の残酷さを感じたのです。この合宿で開会のあいさつをされた小田村寅二郎氏らの思想運動が、このイデオロギー批判を敢然と行なつたため、その運動は「反戦反軍、平和自由主義」（当時の議会速記録による）として弾

圧されたことは、この間の消息を語るものでしょう。その結果がご存じのような敗戦になったわけです。そして、戦争中の思想は崩壊し禁圧されたが、その変革の基本になっているのはポツダム宣言です。ポツダム宣言は、思想的に日本の全体主義、軍国主義を完全に解体して、民主的な精神を復活強化しようとすることを唱えています。この宣言を金科玉条として戦後の日本は第一歩を踏み出したわけです。したがって占領政治の当初においては、アメリカの日本管理方式が表面に立ち、日本人の中に個人の自由を復活強化していこうという考えが支配的であったようです。しかし、個人の自由というものが尊重されたといっても、それは占領政策の範囲内においての自由であって、占領軍の政策を批判することは許されなかったことは、ご承知のとおりです。戦時中の国家主義は「超国家主義」の名によって弾圧されることになった。前記の小田村氏らの運動は、こんどは「超国家主義」の名のもとに戦後の活動を封じられた。私はここでイデオロギーというものの、また政治の非情を痛感した。そこで大ざっぱにいきますと、私が青年時代にはいった昭和十四、五年ごろから、戦争を経て、占領政策の終わりごろまでは、日本国民にとって本当の意味の言論の自由というものは確保されていなかったと思う。戦後日本が独立を回復してはじめて、思想言論の自由が実質的に復活したのではないでしょう。

なぞ「復活」というか、それは、多くの先輩のいうように「明治憲法」が成立して、思想言論の自由が確保されてから、この戦争前の昭和の初期ごろまでの間は、明治憲法による政治が行なわれ

たわけであります。明治憲法というとき、欽定憲法きんていけんぽうで天皇主義だから、さぞかし全体主義の憲法だろうと、みなさんは考えられやすいと思うが、あの第二章はいまのと同じように、臣民の権利義務というようになっておいて、言論とか集会とかについては、近代法治国家における通則に従って原則として自由が認められているのです。したがって、戦争中に全体主義が非常に盛んになったときには、それは明治憲法に抵触するものとして論議されたことがあるくらいです。つまり、「国家総動員法」とか「新体制」とか「翼賛政治」とか「軍政」とかは、明治憲法の所産ではなくて、かえってそれは明治憲法に抵触するではないかというように論ぜられたわけです。したがって、明治憲法によるところの体制は、明治二十年代から満州事変ぐらゐまで続き、それ以後戦争の終わるまでが全体主義の時代で、明治憲法の精神はもちろん国家体制そのものも非常な変化をとげ、敗戦によって、占領軍によるところの管理と、新憲法下の体制に移ってきた、これが現代の思想史の具体的事実でしょう。したがってポツダム宣言でも「民主主義的傾向の復活強化」といい、「創造」とはいいにくいのです。そこで、さきほど申したような国家主義的傾向の私どもの思想は、明治憲法の精神と体制に固執する点において、それゆえに、明治時代の個人主義自由主義的ムードを固執したために、戦争指導者から「反戦反軍、平和自由主義者」という焼印をおされるに至ったのだと思います。

もう一つ、日本の思想界を特徴づけるものとして、さきほどいったように昭和八年ごろマルキシ

ズム運動が弾圧され、それ以後戦争期間を通じてマルキシストの学者が、ほとんど大学の外に排除された。そしてそれに代わって国家主義的な人々が、官立の大学において支配的に動いていたわけです。それが戦争が終わると同時にまた交代して、国家主義的学者は超国家主義者ということで追放され、それと入れ替わりにこんどはマルキシストの学者が国立大学に帰った、大ざっぱにいえばこんな傾向が随所に見られたようです。この一つの例は、かつて東大の経済学部で教べんをとった土方成美という教授がはっきり書いておられる。東大の他の学部が全部そういうようになっていたわけではないでしょうけれども、東大の経済学部に関する限りは、戦争中国家主義傾向の学者が教授の大半を占め、戦後それに代わってリベラリストといわれる学者がきたのではなく、マルキシズムの学者が復活してその主流になっていると書かれてあります。そういうような傾向が日本の言論界、思想界の戦中・戦後における動きであります。それが今日われわれの国民生活の全体に大きな影響を及ぼしていて、こんどの安保デモでも、過激になればなるほど、それが共産主義革命につながる性質をもっているとおやぶまずにはいられないのです。

以上の現代思想史のデッサンを、国際政治に照らし合わせてみると、国民思想の動きの背景がいっそうはつきりしてきます。まず、ナチズムとかファシズムなどに引っぱられて日本の全体主義が盛んであった時代は、戦争中であり、日独伊軍事同盟の締結されておったときです。そして戦後の占領政策は、いうまでもなくアメリカの思想が支配的な傾向をもっていた。その次にきているとこ

今の現在のコミニズム、これは政治上の力としてどのていどかは知りませんが、一般の言論界ならびに思想界において非常に強くなっていることと対比して、ソ連、中共の力が日本に非常に強い影響をもってきたと見られます。これは国際共産主義の宣伝であるかどうかは別として、思想問題というものは、はっきり国際政治の力の関係と平行しているというように私は感ずるのです。したがって日本の独立は、やはりそういう意味で思想の独立を伴わなければならないと思う。

政治的な独立に先行する思想的な独立がなければならぬと私は思うのです。その思想的独立は諸外国の政治力を背景にする外来のイデオロギーのままに右往左往するのではなしに、自分たち日本国民の生活の本当の欲求というものを正しく感じて、それを守り抜いて生きて行くということにきわまるのではないだろうか。こういうように私は考えているわけです。

そこでただいま述べてきたところの時代思潮としての自分自身の人生観、一種の生活感情のみじめな遍歴を、もう一度概括してみましよう。社会主義・マルキシズム・国家主義・全体主義・国家社会主義・デモクラシー・個人主義——しかし、そのどれにも全面的にうちこみ得ぬものを私は感じてきた。なぜだろうか。また一種の遍歴の動揺を貫いて、今もなお一筋に私の心を占めている問題は何であろうか。それは最初に述べた人間としての基本的要求であり、その要求は、要するに個人と社会・国家・世界との調和をどのように実践するかということにかかっていることを知るのです。戦争を中にして私の青年時代をおおったものは、個人を全体のなかに没しようとする感情です。

が、戦後の世相混乱の中でわたしをとらえたものは、どうやって生きていくかという自己中心の感情でした。これは極限におしすすめられれば、いずれも個人と国家の壊滅を招来するものでありましよう。それは戦時中にいわれた「滅死奉公」が、誤って解釈されて、個人の情感すべてを否定して、ついに敗戦につながったごとくに、個人の自由の無制限の拡大は、やがて亡国となって個人そのものをも滅ぼすに至るでしょう。われわれの思想的独立とは、この個人と国家、国家と世界との間の調和をどのようにしてわれわれ自身の心中に実現するかにかかっていると思います。その道をもとに求めていこうではありませんか。

さて、最初に私は人間の生き方の基本は、われわれが互いに自分たちの生き方をありのままに表現し合っていくことだとお話しした。しかし自分の心持ちを正しく表現することは、非常にむずかしいことであって、なかなかできるものじゃない。しかし、われわれはそれを努力しながらやっていくわけです。この自分の生き方を表現することは、また同時にひとの生き方を表現した言葉をわれわれが味わうことと似かよった作用です。これを文学のほうでは、創作と鑑賞というふうにいっています。小説はだれでも書くというものでありませんから、ひとの書いた小説を読んで、書いた人の気持ちを味わうわけです。つまり鑑賞というものによってわれわれは創作というものの代用をやっているわけです。したがってわれわれが自分たちの生き方を求める、自分たちの生き方をあ

りのままに表現するということは、これはまた自分が本当に共鳴する生き方を現わす言葉を求めるということと私は同じことだと思ふのです。この態度は、ひからびたイデオロギーを求めるということではなしに、われわれと同じ人間の血の通った、真実の生き方を現わす言葉を求めるということでありましょう。混とんたる青春の希望や感情は、自覚と統一とを求めて、自己の理想像を内外の偉人に求めるのです。そうして、理想的人間の生き方に従つて生きようとするわけです。これは人間に密着するので、イデオロギーの遍歴から人を救いあげる道だと信じます。

私は諸君と同じ新制大学の二、三年ごろの年から大学卒業までを通じて、日本の偉大なる人物の言葉に没入した。そのなかでことに聖徳太子の言葉を心に焼き付けるようにして読んだ。このように古典を読んだことが、イデオロギーの争いの渦中にあつた私どもに、人間としての本當の姿を見失わせなかつた力だつたのだと思います。また日本人の生活を忘れさせなかつた力だつたと思います。なぜなら私どもはそこに日本そのものを、人そのものを見たからです。諸君、聖徳太子の言葉を読んだことがありますか。憲法十七条を知つても直接憲法十七条を読んだことはないでしょう。また読んでもそれは「こういうことをいっておつたんだ」ということだけで、われわれの現代における生き方と対比して考へるといふことはほとんどないのだからと思う。時間がないので詳しく説明ができないのですけれども、一番最初の第一条を読んでみましょう。

一曰。以^レ和^ク為^レ貴。無^レ忤^ク為^レ宗。人皆有^レ党、亦少^ニ違^ル者。是以或^レ不^レ順^ニ君父^一。乍^ニ違^ニ于

隣里^{トナリ}。然^{レドモ}上和下睦^{ウヘカミ}、諧^{ユル}ニ於論^ヲ事^ヲ、則事理自通^{ナラズ}。何事不^レ成^ス。

これは有名な「和をもって貴しとなす」という言葉で代表されるので、ときどき額などに書かれて、古い学校の講堂などにいくと「以和為貴」というところだけ額に掲げたりしておりますから、みなさんのなかにも知っておる人もあろうと思います。「和をもって貴しと為す」これは人生というものは調和、平和が理想なのであるということであらうと思います。だからこれは人生の根本原理です。「無忤為宗」「さこうことなきを宗となす」これは反逆は調和の逆で、生命の断絶を意味するのです。「人皆党あり、また達れるもの少なし、ここをもってあるいは君父に順わず、たちまち隣里に違^{たが}う」これはやはり聖徳太子の思想の特徴を現わしておるので、聖徳太子はあくまで人類の原理を、ただ単に周囲の人にお説教するのではなく、必ず自分自身の心にそれを味わい求めるのです。「和をもって貴しとなす」また「さこうことなきを宗となす」全体生活というものに反逆することがない、ということが、これが大切なのだけれども、しかし、人生の事実は「人みな党ありまた達れるもの少なし、ここをもって……」というように進んでいくわけでありませぬ。「しかれども、上和^{ウヘカミ}ぎ下睦^{ウヘカミ}びて事をあげつろうにかないぬるときは」というのは、これは「上下和解して事をあげつろうにかないぬるときは」こんなふうに読んだほうがあるいは簡単かもしれませぬ。上が和らぎ、下が睦ぶというよりも、上下一体となって、というような意味でしょう。全体が一つになつてそうしてこれが和気あいあいのうちに事をあげつろうにかないぬるときは、というのです。事を

論ずる基礎ができるときはということでしょう。すべての人が和して事をあげつろうにかなうことができれば、つまり、すべての人が和を求めることが、討議の基礎になっているということでしょう。そうすれば「事理自から通ず」ということです。連帯感情があつてはじめて討論が行なわれるので、それがなければ討議はただ争乱になるというわけです。したがって、この「和」というものが根本になるわけです。「和」が実現されるときには「事理自ら通ず」つまり、事はおのずから成就し、自然の開展をとげて「なにごとかならざらん」となるのです。これが人生の根本だということです。つまり人生というものは、さきほどいったように、対立分裂というものを克服して、和というものを導き出すということです。つまり和というものは、すべての人がともに幸福であるという喜びです、こういうものを導き出すことが根本なのだということです。そのすべての人が和ということに目ざめて、そうして事を論ずることができるならば、そうすればそのことの成功はおのずからできておるのだ、ひとりの幸福というものもなく、また人生の事実を遊離したひからびた全体があるのでもありません。個の自覚と全体との調和が説かれてるように考えられます。

二曰。篤敬三宝。三宝者仏・法・僧也。則四生之終帰、万国之極宗。何世何人。非貴是法。一
 人鮮二尤惡一能教從之。其不帰三宝一何以直枉。

戦争中などにあつた議論ですが、聖徳太子は仏教を入れたから日本文化に対しては敵だという考えがありました。が、「三宝」というのはいまの言葉でいう宗教と考えたらいいでしょう。具体的に

は当時の「仏教」であつたわけですが、いまの言葉に訳せば、その「宗教」も既成の宗教をさすのではなくして、宗教的な精神というものを考えればいいわけだろうと思ひます。「三宝とは仏法僧なり」といふ。仏といふのは永久の生命、法といふのはその仏が現実に法則となつて現われてくるもの、僧といふのは仏の法則を人生に実現する人であります。「すなわち四生の終歸、万国の極宗なり」といふようにいって、この宗教的信仰が人生の根本であるといふふうにいっておられるのであります。少し説明をほしよつてしまつて申し訳ありませんけれども、私はさきほど、人間はみんな幸福を分かち合ふといふか、一緒に幸福になりたいといふ欲求を基本的にもつてゐるではないかといひました。それがなければ家庭生活なども第一成り立ちませんし、人生は崩壊してしまひますから、そういうようにいひましたが、仏といふものは、やはりこの人生の理想を表現してゐるものであらうと私は考へるのです。

また説明が飛躍しますけれども、浄土真宗の開祖である親鸞聖人は——親鸞について述べると浄土真宗の信仰者なのかといふように考へられては困ります。私は浄土真宗でも、仏教の専門家でもありませんから、親鸞のいつてゐることをどれだけ正確に理解してゐるかは問題ですけれども——仏について阿彌陀仏にすがるといつております。その阿彌陀仏とは一体なにか、それは阿彌陀の請願と同じであります。しからは阿彌陀の請願とは一体何か、それは、一切衆生が成仏しないうちは阿彌陀自身は成仏しないといふ誓ひです。全部の人が幸福にならないうちは自分は仏にならない、

こういつているわけです。一切衆生が成仏するまでは自分も成仏しないという、——つまり人類のすべての幸福を願うという願いそのものが阿弥陀仏であるというわけです。その阿弥陀仏は、人生に内在している、それは人生にあるのだというのです。われわれはそれを受け持っているのです。「受け持つ」という言葉は偶然出た言葉ですが、そういう願いというものはわれわれも持っているわけなのです。われわれはみんなの幸福を願うという心持ちを持っているでしょう。したがってそれはわれわれの心のうちにやはり内在するところの人類意思です。それを実現するのはいつかわかりませんけれども、しかし、そういう意思に従って、われわれは生きようとするわけなのです。結局、与えられた人類全体の幸福を願う人類の意思を阿弥陀仏と親鸞はいつていると思います。仏・法・僧の仏というような言葉を私はこのように解釈しています。それはわれわれの人生に実現されてはいないけれども、しかし人間というものが本来もっておるところの、人類が与えられたというか作り上げてきたところのやはり最高の意思なのです。それを仏といい、その仏の願い、そういう人間の最高の欲求というものを表現したのが法であって、その欲求を実現するのがこれが僧だというように考えるわけにあります。

第三条の「承詔必謹」は、その大乘仏教の理想というものを国家生活に実現する原理を示したもので、それが聖徳太子の事業の基本になっているわけでしょう。つまり、そういう教えがあるというだけではないので、それを日本の国家生活の中に実現しようとするのです。また第十条には、有

名な「共にこれ凡夫のみ」という言葉があります。

十曰、絶^チ忿^フ棄^セ瞋^ン、不^レ怒^ニ人^ヲ違^フ。人皆有^レ心。心各有^レ執。彼是^ト則我非^ト。我是^ト則彼非^ト。我必^シ非^ズ聖、彼必^シ非^ズ愚。共是^レ凡夫耳。是非之理詎能可^レ定。相共賢愚。如^ニ鑽^ニ無^ク端。是、以^テ彼人雖^モ瞋^ム、還^テ恐^ニ我失^フ。我独雖^モ得^ル、從^テ衆同^ク舉^グ。

第十條の中にある「共にこれ凡夫のみ」という言葉は、お互いに足りない人間であることに目ざめることですから、やはり、さきほどからいっている生き方の根本に結びつくのではないでしょう。われわれはひとに教えてやろうという場合には、つまり相手はそういうことに對しては反発をします。やはり人間は、お互いに裸になつてつき合うところにはじめて感化というものもあるわけですし、これこれこういうようにしてひとを教えてやろうと思えば反発する。それは子供でもそうです。自分の子供に對してでも、これをこういうふうにしてやろうと持つていけば、必ず反對にあらう。それは自分が非常に高いところに立つて教えてやろうということでは、相手が十分に納得してくれない。お互いに地盤を同じくして話し合うということなくしては、話し合ひもできないわけですから。したがつて「共にこれ凡夫のみ」というこういう聖徳太子の考え方は、やはりこれがわれわれの生き方の根本を示しておるのではないだろうか、と私は考えるわけがあります。偉大な人物の言葉とその体験とを照らし合せて、そこに自分の生活との對比を求めながら歩いてこそ、われわれは一步一步確実に進んでいくことができるのであらうと思ひます。（拍手）

夜久講師略歴（旧制一高を経て昭和十四年東大文学部国文学科卒、現在アジア大学教授。

著者「三条実美歌集」梨のかたえ」とその研究」「ホイットマン草の葉抄」「歌人・今

上天皇」ほか）

班別懇談会（午後八・三〇～一〇・〇〇）

班別の懇談は、昼間の自己紹介を深める意味も兼ねて、夜久講師の講義を中心に展開された。遠くからの参加者は相当疲れているが、学生運動の問題点などについて、活発な討議が行なわれた。夜久講師の講義については、深刻な反省が促されたようであるが、少なからず体験的な言葉だったせいも、のみこめない点もあり、特に古典がとりあげられると、言語の抵抗がかなり強いことが指摘された。しかしながらこの合宿が頭の中で作りあげられた理論だけでは、どうにもならないこと、そこで語られる言葉は自己の体験の中から生まれ出たものでなければならぬこと、それを講義を通じて講師自身の切実な体語を語りながら、夜久講師が参加者の前に実際に示されたことは、この合宿が理論追求の根底において、人生体験を無視してはならないということを強調したことであった。この合宿のこの面における特性は、まだ漠然とではあっても、参加学生の心に感得されてきたようである。十時の消灯後も話はずんで、雲仙の夜は草むらにすだく虫の音とともにふけていった。

講義から班別討論へ

— 諸問題が提起された —

(第二日)





起床・体操・朝食（六・三〇）八・〇〇）

四階の屋上から見渡す眺望はすばらしい。冷たい空気を吸ってのびのびと体操する。

講義にさきだつて、国民文化研究会の加藤善之会員（山陽電軌社員）の意見発表を十五分行なう。参加学生諸君が合宿になじみ、その中にとけいってもらうために、先輩としての暖い配慮のことはが述べられた。

昨夜の夜久講師の講義に引き続いて、朝八時から二時間にわたり「現代の思想的課題」と題し、高崎経済大学教授齋藤知正氏に、専門の倫理学から離れて、講師の人生体験を述べていただいた。

現代の思想的課題

高崎経済大学教授 斎藤 知正

昨晩は月の美しい明るい夜でした。昨夜行なわれた全体討論のあと、部屋へ帰ってしばらくすると、東の山の端があかるみはじめ、やがて月が昇ってまいりました。なんとも言いようのない深山の月という感じでした。人工的な電燈の光が、神々しい澄み透った月の光を濁らせるように思われたので、思いきって電燈を消しました。すると月の光が部屋一杯にさしこんできて、まわりの人間臭いものすべてが、月の光に吸いとられ浄められるような感じがしました。あたりはしんと静まりよく耳を澄ますと、遠く谷川の水音がし、虫の声も聞こえてきました。ほんとうになんとも言いようのない気持ちになって、ひとり月に向かったままじっと坐っておりました。気がつくとも十一時半を過ぎていました。

月に対して坐りながら久しぶりに想い起こしたのは、次の道元禪師の山居の偈わ（梵語の音訳、仏徳を讚美し、または法理を述べた詩詞）でした。

夜坐更闌こゝろなほにして眠ねむいまだ熟せず

情まことに知る弁道は山林なる可きことを

溪声耳に入り月眼まなこに到る

此の外更に何の用心をか須もちいん。

日頃大都會で生活していると、こういう偈を想い起こして、しみじみとそれを五体で実感するという機会がありません。なにぶん大都會の生活というものは、あまりにも人間的といえますか、巨大な人工物の集積に圧しつぶされて、人為を離れた自然そのものにじかに触れることがほとんど出来ません。たまたまこうしてはるばる雲仙の山の中に来て、山に対し月を仰いでみてはじめて、ほんとうになんの作りものもない自然そのものに触れ、みずからの本然を取り戻したような感じがします。

夜坐更闌にして眠いまだ熟せず

夜坐禪をしている。しだいに夜がふけてゆくなかで、まだ眠けはもよおさない。それどころか神秘的な夜気の寂莫のなかで、じっと坐っていると、宇宙一杯の透徹した気持ちがあります。訝えわたってゆく。

まことに知る弁道は山林なるべきことを

弁道、すなわち道を仕上げること、道を行ずること、さらに言えば坐禪をすることは、山林にしくものないことを、ほんとうに身にしみて感得する。世俗の黄塵に汚されぬ山中においてこそ、

われわれはみずからのまことに立ちかえり、本来の自己をきわめるためのこの上もない場を見出すことが出来る。われわれが集まったこの雲仙の山中を、われわれもまたわれわれの道をきわめ明らかにするための場にいたしたいと思ひます。

溪声耳に入り月眼に到る

すべてをただ坐禅の中に投げ入れ、坐禅にうちまかせて無心なるままに、溪声と月光とが耳目に触れてくる。聞くものと聞かれるもの、見るものと見られるものとのすべての対立が尽きて、主と客、自と他とが一如である。主客の対立を絶すれば、溪声月色すべてが自己の全体であり、自己の全体がそのまま溪声月色である。そのまま宇宙一杯であり、絶対である。

此の外更に何の用心をかもちいん

人間の相対的な思慮分別の知性界を越えた、絶対的な靈性界とでもいうべき坐禅に身も心もまかせきるとき、人間を混迷せしめる相対界が、そのまま靈界により浄化せられ靈化せられた相対界としてよみがえってくる。光明を放ってくる。溪声も月色もその他あらゆる相対差別界の諸相が、そのまま一なる靈性を暗示する言葉として、われわれに語りかけてくる。靈が語り、靈が聞く。一切が靈界の消息となる。

東洋の古人は「知は争の器なり」と言ったが、単なる分別的知性は対立を生み、対立は更に対立を生んで止まるところを知らない。西欧の合理主義文明が、二十世紀に至ってとうとう断末魔的な

姿をあらゆる面で現わし始めたのも、その究極の原因にさかのぼると、どうもこの辺にあるのではないかと思われる。始めが終わりを決定し、終わりにおいて始めの正体が暴露されるように思われる。

分別的知性の立場でのあれやこれやの「はからい」は、どこまで行っても相対対立を脱け出るこゝとが出来ない。したがってたえず浮動し不安定である。人間の是非の議論も、聖徳太子が申されたとおりの「彼是とするときはすなわち我は非とし、我是とするときはすなわち彼は非とす」であつてどこまで行つても切りがない。しかしどこかで切りをつけないければ、世の中の問題はかたづけず、おさまらない。とするとこの最後の切りは、どうしても分別的知性を越えた何ものかによらねばならないことになる。人間の我執分別の上に立った騒々しい是非の論が、おのずからシンと鎮るよゝうな何ものかが現われなければ、世の中の真の平和は実現出来ないことになる。分別的知性の上での打算的取り引きや妥協的な約束程度のことでは、ほんとうの平和は実現され得ない。それはただ問題の解決を一時的に延長し、繰り越したただけのことで、やがてもっと拡大され深刻化された形で再び対立が生ずるだけである。

このことに気が付くとき、はじめて知性界を越えた靈性界への眼が開かれてくる。知性がその独立主権を固執する限り、それは、みずからの生み出した対立と矛盾の中で行きづまらざるを得なくなる。しかし知性の次元を越えたより高次元の靈性が現われ、それに支えられるとき、知性ははじ

めてその本来の力が生かされてくる。

この起死回生のいのちの原理を、古人は深刻な体験と工夫とを通して、われわれに伝えようと努力しておられる。道元禪師はそれを坐禪の一事に総括し究尽せられた。分別的知性を越えなければならぬ。ではどうして越えるか。分別的知性を分別的知性によって越えることは出来ない。越えたと思ってもそれは錯覚にすぎず、依然として分別的知性の内にあるにすぎない。そこに只管打坐しかんたつざ（ただ坐る）ということの深い意義がある。身をも心をも放ち忘れて坐禪の中に投げ入れ、坐禪にうちまかせ、坐禪から行なわれてゆくことが、只管打坐ということである。「ただ」（只管）ということは、分別的知性から分別的知性によってなされるのでなく、分別的知性を越えた絶対的な境涯を現わす言葉と解することが出来る。あらゆる妄念雑念の念を越えた世界（無念）に立ってはいじめてあらゆる念が正念として生かされてくる。無心であることによつてはじめてすべての心が光明を放ちうる。無念の念、無心の心、不思量底の思量、すなわち「非」思量と名づけられる絶対の思量こそ只管打坐であると言いうる。このぎりぎりの行きつく処まで行きついた最後の落ちつき場所に立てば「この外さらに何の用心をかもちいん」と言う外はない。このような道元禪師の山居の偈を昨晚久しぶりに想い起こし、雲仙の山の中で感銘を新たにしたわけです。

われわれはどうしても最後のところで、結局こういう世界にたち帰らねばだめだ、ということをつくづく感じさせられます。昨晚の全体討論のさいみなさんの中から、なにか心により所がないと

いう話が出ました。たしかにわれわれ人間は、ほんとうのより所を失ってしまっている。文明や社会が進歩したと得意になっておりながら、半面現代人の不安はますます増大しつつある。これは大変な矛盾というは外ない。いわゆる進歩がはたして真の進歩なのかどうか、もう一度よく反省してみなければならぬと思う。現代人は知性においてはたしかに進歩していると言えるが、靈性においてはむしろ逆に退化していると言う外はない。

ふだんわれわれがより所と頼み、それが得られると満足し安心するものには、さまざまなものがあるかと思いますが、その主なるものと言えば、金とか権力とか名誉や地位とかいったものがあげられる。こういう現世的欲望はあらゆる時代の人間に共通のものと考えられるが、とりわけ現代人は異常なまでにこれらのものに執着している唯物的な人間であると言える。これらのものが相対的な分別の世界である現実の人間生活において、相当に大きな役割を占めていることは言うまでもないことであり、したがって、それを一応のより所として、多くの人々がそれを手に入れたがっていることは否定できない事実である。しかしそれが果たして人間の最後のより所となりうるだろうかと考えるとまことに疑わしい。それらはひっきょうするに中途半端な相対的なより所にすぎず、最後の絶対的なより所にはなり得ないものである。それらはいずれもある程度まではより所となりうるが、そこまでで行き詰まってしまつて、それから先へは行けないような限界をそれぞれもっている。

われわれが日頃たのみとしているものは、たいがいこのような有限な中途半端なより所にすぎない。しかもそれが限界のあるものだということに気付かずにいる。それが確かな現実的なより所と考へ、かえって不確実な非現実的なより所にすぎないことを忘れている。誤って不確実を確実と考へ、非実在を実在的と考へているにすぎないという意味で単に観念的なより所にすぎない。頭で逆立ちしている転倒妄想に外ならない。

このようなことは二千五百年も昔にお釈迦さんが既に言つて居られることである。ところが悲しいかな、われわれ凡夫はそのことがなかなか納得できない。のみこめぬままに、ぼやぼやと生死流転を重ねている間に、二千五百年もの年月が流れて、人類の歴史もいよいよのつびきならない段階まで押しつめられてしまったような気がする。次々と皺しわよせせられてきた最後の皺の中から、全人類を壊滅させるようなとんでもない武器が現われてきて、全人類をその前に戦慄せしめている。

以上のような中途半端な相対的なより所、そしてそのようなより所の上に建立せられた世界に本来的に内在している限界が、限界としてはつきり自覚の表面にあらわされてくる通路の一つに、死ということがある。仏教で言う無常を観ずることがそれである。死は今まで自分が確実なものと考えてきたより所と、その上に立つ一切のものを、一挙にくつがえしてしまふものである。しかも死は、それがいつ自分に来るのか分からないという意味では不確実なものだが、遅かれ早かれ必ず来るといふ意味では、これほど確実なものはない。この死という確実な現実の前には、今まで確実な

ものとしてしがみついて来た一切のものは、夢かまぼろしのようなはかない空無なものにすぎないことに気がつく。しかしふだんわれわれはたいいてい、死がいつ来るか分からないという不確実な面とうまく妥協して、まあ当分来ないだろうということにしてしまう。そして必ず来るといふ確実な面から眼をそらして生きている。こういう点をとらえると、人間は真理を愛し求める動物であるというよりは、虚仮不実を好む動物であると言った方が当たっているような気もしてくる。

それはともかくとして、現代のわれわれは絶対兵器の出現と戦争の脅威とによって、全人類とその文明の全体が一挙に壊滅しはしないかという恐怖にさらされている。長い期間にわたって一人一人継起的に起こってゆく死を、一度に圧縮して人類全体の同時的な死という現象を人工的に作り出すという、従来思いもかけなかった事件が起こりかねないことになった。もつとも人類全体の死といった外延的に拡大された死の現象も、自分自身の死として内包的主体的に把握され、それを通じてでなければ死の本質は把握されず、したがって死の自覚を通路としての存在の真相はあらわにされ得ないことは言うまでもない。だがともかく現代人が漠然ながらも、何となくより所のない不安を感じているといったことの根底には、以上のような人類の全体と、したがってその文明全体とが一挙に死滅するかも知れないといった意識が、暗黙のうちに相当大きな割合を占めているように思われる。それは人類とその文明の全体が、更にそれらが従来よってもって立って来たより所の全体が壊滅しはしないかという恐怖である。

不安という言葉と不満という言葉は、それらがいずれも何らかの欠如の意識であるという点では似てはいるが、それにもかかわらず両者の間には根本的に異なったものがあるように思う。不満とは、ある相対的なより所はそのまま認め、その上に立てられた世界の中での欠如の意識だと言えらる。たとえば、金は何より大事だというより所には何の疑念もたず、その大事な金が入らぬところに不満が生まれる。これに対して不安というのは、そのより所そのものに疑いが生じたところに生まれる欠如の意識だと言えよう。現代人の不安とは、それを煎じつめてゆくと、現代の人類とその文明とがよつてもつて立っているより所そのものへの疑い、したがってその欠如の意識というのがその本質をなしているように思う。

このような不安が浅薄なレクリエーションとか類隨的な享楽とかによつていい加減にごまかされることなく、不安をどこまでも突きつめて行くことによつてはじめて真理があらわにされうと思ふ。不安は、いわばわれわれの意識にきざし始めた真理の前触れである。やがて昇ろうとする太陽に先立って、夜明けの空にあがる明星のおのきである。明星のもとに太陽があり、不安のもとに真理がある。あらゆる中途半端なより所に不安を感じてはじめて、人類の最後のより所たる真理が明らかになる。中途半端なものへの固執（邪）を「破」ることによつてはじめて、永遠に揺がない真実のより所（正）が「頭」^{カポ}「わされる。破邪即頭正とはこの意味である。そしてこの「正」の太陽に照破されてはじめて、あらゆる「邪」も「正」としてよみがえる。平等絶対の「正」に照らされ

基礎づけられて、あらゆる差別相対が、矛盾対立の「邪」を解脱して、大同調和の差別界として新たに建立されてくる。山は山として絶対であり、谷の深きをうらやまず、谷は谷として絶対であり山の高きをうらやまず争わない。山も谷も差別相対のままに平等絶対を現わしている。かかる真の大同調和は、あらゆる中途半端な相対的なより所が破せられ空ぜられ、最後のより所たる空の働きそのもの、より所なきより所としての絶対のより所に立ってはじめて実現されうる。

このような最後のより所を道元禪師は坐禅において示された。親鸞聖人ならば念仏ということになるのだと思います。雲仙に来て雄大な山の姿に触れましたが、山はちやうど坐禅の絶対の境界をシンボライズしているように思われる。今朝も山の頂に雲がかかり、雲が流れ去って行くのが見えましたが、雲はちやうどわれわれの心頭に去来するさまざまな相対の分別界における雑念妄念のように思われる。日頃われわれは分別的知性の生み出すさまざまな差別相対の諸相にとらわれ、それに固執して身動きならずにもがいている。人間の是非愛憎の葛藤の泥沼に落ちこんで、それから脱け出ようとしてもどうにもならずにもがいている。もがけばもがくほどますます深みにはまり、葛藤はいよいよ激しくなる。これは個人生活においても、国家や国際間の場面においても変わりはない。知は争いの器として用いられることによって、葛藤はますます深刻に大規模にかつ陰險なものとなる。分別的知性是对立を生み、対立は分別的知性によっていよいよ激しくなる。その克服解脱は分別的知性の能くしうるところではない。ここに分別的知性を越えた靈性がどうしても不可欠のも

のとなる。分別知の固執（邪）を破する力は、分別知にはなく靈性に求められねばならない。破する働きに靈性が現われる。それが顕正である。分別知は靈性に破せられることによって生かされ、否定されることによって肯定される。そのとき分別知は、単なる分別知ではなくなり、靈性によつた、靈性の現われとしての分別知となると言いうる。

山はこの靈性の姿を象徴しているように思われる。分別知である白雲が、いかほど去来しようとも、山は雲にとらわれない。追ひ求めようともしなれば、払おうともしない。山は只管（ただ）山している。只管打坐である。人間の是非を截断し、愛憎を絶している。山はみずからただ山の中に投げ入れ、山にうちまかせて、ただ山しているだけである。いや人間のようにこんな面倒なこととも言わない。白雲はおのずから来たり、おのずから去つてゆく。山は無心なる太古の姿のままじつと山している。しかしこの山と白雲との靈妙な調和は、見る人をして讚嘆せしめずにはおかないであろう。迷妄混濁のかたまりのような雲も山によつて一段の光彩をそえ、山も白雲の去来によつて氣韻生動の感がある。

分別知から湧き起こる迷妄の雑念も、坐禅を揺るがすことは出来ない。坐禅はそのまま相對的分別界を超越している。坐禅に対しては、一切の雑念妄念はギアをはずされた車輪のように空転するだけで、前に有していたと思われた支配的な力を失う。ここに転倒していた本末の位がその本来の姿に帰る。自己本来の面目、本来の主体が現成する。雑念妄念に駆使されず、逆にそれらを駆使

することが出来る。かくして妄念として人間の自由を奪う張本人と思われていた分別知は、坐禅によって空ぜられ、逆に再び正念として生かされてくる。念々が光明としてよみがえってくる。これが只管打坐、ただ坐るといふことの消息である。

ただ坐るといふと、一見まことに無意味なつまらないことのように思われるかも知れないが、なんでもないようなところに甚深無量の意味がある。真理と平凡とは盾の両面である。巧言令色のあるところに本当の仁はない。人間でも本物ほど作りものがない、なんでもないような顔つきをしている。世にいわゆる「ただほど高いものはない」のである。相対的な値段のつけられるようなものに大したものはない。

「ただ」の世界は絶対の世界である。「ただ」といふことは、少しこむずかしく言えば、理論的には空の原理であり、実践的には慈悲の精神であると言えよう。慈悲とか愛とかいうものは、人間生活を建立する最も根本の土台のようなものであり、社会生活の様々なレベルにおいて多かれ少なかれ不完全ながらも実現されている。もしそれが全く欠けてしまえば、そもそも社会生活そのものが成り立たなくなるであろう。たとえば、われわれを産んで育ててくれた母親の前では、われわれはどうも頭が上がらない。べつにしかつめらしく頭を下げてゐるわけではないにしても、心の中では結局死ぬまで頭の上がらないものを感じている。どんな悪党でも母親の前ではすなおになるし、どんなに立身出世しても母親に向かえばいぜんとして子供である。母親というものは大した権威であ

る。

では一体どこからこのような絶大な権威が生じてくるのであろうか。ひつきょうするに、それは母親のもっている「ただ」の愛、絶対の愛から生ずるものと言える。母親は子供を産んで育てる。日夜たいへんな苦勞をしながら育てるが、別にそれによって損得を計算しているわけではない。ただ子供の幸せだけを考へて、自分の利益を求めたり、自分の功績を誇ったりはしない。少しでも打算や手柄顔をすれば、それだけ愛の純粹性にしがみつく。それだけ愛が限られ、相対化され、ちっほけなものになる。人間の分別や思量というものは、こういう限る働き、相対化する働きであるとも言える。愛という靈性は、このような分別の作り出す相対対立を越えて、それを一つに包みこみ融合せしめる働きである。分別は愛に裏付けられてはじめて、愛を具体化し実現する手段として生かされ、人生を真に建設する道具となりうる。だが愛の根底を失った単なる分別は、あらゆる矛盾や対立を生みそれを激化せしめる原理として、人生を破壊滅亡に導くものである。たとえ母親といえども、その本来の愛を忘れて、単なる分別、単なる打算や力づくだけで子供に對するならば、結局は子供に背かれ親子の争いとなることは目に見えている。

だが幸いなことに母親は自分の分別から作り出したのではなく、分別に先き立ち分別を越えたあつものから、本当の愛を授かっている。それを宗教的な表現の仕方ではいへば、神仏の分靈であるというふうに言うことも出来よう。神は愛なりと言われ、仏の本質もまた慈悲に外ならない。「日月

下土を照臨してその功に誇らず」また「縁に対せずして照らす」と言われることも、この絶対の慈悲「ただ」の愛のことである。それをまた無所得とも言っている。親の愛はたとい自分の子供に対しての限られたささやかなものではあれ、このような「ただ」の愛、絶対の愛を本質としている。家族的人倫はこれによって立ちうるものであり、また現に成り立っている。これをみても「ただ」のところが本当のより所となっていることが分かる。分別に先立ち分別を越えた「ただ」の愛、神より生まれ神より分かれた、とでも表現する外はない靈性が、眞の土台となっていることが分かる。もしこれが失われれば、一軒の家でもごたごたが起きて、おさまりがつかなくなる。

このことは国家的人倫においても同様である。この人倫体もやはり眞の愛を土台としてはじめて成り立ちうる。もちろんその愛は、家族の場合のような感性的な、したがって無媒介的直接的な愛ではなく、より媒介されたより高次の精神的な愛であることは言うまでもない。したがってその包み得る範囲も家族的愛よりはるかに広範なものとなる。だがここでも、眞の愛が土台にならないければ人倫体そのものが成り立ち得ないことは、家族的人倫の場合と変わりはない。そしてその愛の本質は、単なる分別的知性の上に立った取引きや契約などによって作られ得るものでは決してない。まして単なる力関係の必然性から作られうる道理はない。分別より由来し、分別によって作られるのではなく、分別に先立って生じ、分別を越えた「ただ」の愛、絶対の愛、靈性の存在がここで問題になる。かかる絶対的靈性の分靈なしには、国家的人倫もそのより所を失うのである。眞のより

所を喪失した国は、みずからの本質を失った国として、紛乱闘争のうちに統一を失い滅亡する外はない。

ところで近代の市民社会がいわゆる人倫の喪失態と呼ばれる理由も、それが愛という真のより所を失い、単なる利害打算の取引き原理の上のみ作られた社会だからである。いわば靈性を失い、分別知によってのみ作られた社会、魂のぬけた社会である。内面的な融合調和ではなく、単なる外面的な自然的均衡のみが、かろうじて社会を一つに結びつけているにすぎない。同胞あい食む深刻無惨な闘争が止まるところを知らなくなるのはあたりまえのことである。たとえ私的所有を社会的所有に改変するといった外部的条件の変化によって、失われた自然的均衡を回復しようとしてみたところで、いぜんとしてそれが外部的な自然的均衡の社会といった魂のぬけた社会を目ざしている限り、人間の真の幸せをもたらし得る道理はない。失われた靈性を回復することなしには、個人も社会も、およそ人間というものは救われないのである。

現代はこのような魂のぬけた社会の中で、魂を奪われた多くの人間がもがき苦しんでいる時代である。われわれが日々の生活の中で何となくより所がないと感ずる理由はここにある。社会も人間も本当のより所の上に立っていないからである。不安を感ずるのは当然である。本来魂をもっている人間が、魂を奪われているのだから苦悶しなかつたら不思議である。魂が魂を求めるとは、眼が光を求め、鼻口が空気を求めるのと同様である。道元禪師が坐禪の境涯を形容して「竜の水を得る

が如く、虎の山によるに似たり」と言われたのも、魂を喪失した人間が、魂を回復した時のいのちの歡喜と躍動とを示されたのである。それは真のより所に立ち帰った際の靈性の高揚である。

結局現代のわれわれは、失われているほんとうのより所を何とかして取り戻し、その上に真実の人生をもう一度あらためて建て直す以外に、われわれの真のしあわせをはかることは出来ないと思う。ところで自分一人のしあわせは、もともとすべての人々のしあわせと切り離して考えることは出来ない。それを別だとするのは、本当の知恵がないからであり、道徳的に言えばエゴイズムによるものである。それが本来一つのものだと悟るのは、真の知恵の働きであり、情的に言えば愛とか慈悲とかの働きによる。このような自と他との本来的な不二・一如を悟る知恵や慈悲こそ、さきに述べた靈性の働きなのである。かかる靈性に支えられてはじめて自他を差別する分別知も生きてくる。これがかもし靈性の支えを失えば、自他の分別は、別れたまま対立と矛盾のうちに共に傷つき倒れる外はなくなる。

ところで近代人は自我を發見し自我を確立したことを大変に誇りとしているが、どうもこれはまだ本物ではないように思われる。靈性を失い魂を奪われた近代人の自我とは、結局自他の分別対立の上での自己にすぎない。それは自他の不二・一如の上に立った自己ではない。だから自他の仕切りをどこまでも固執し、他に対して区切られた自我にあくなき執着を寄せる。しかもこのような対立的な自我を無限に拡大しようとする貪欲な執念にとりつかれている。したがってみずからに課せ

られてくる如何なる限界にもがまんがならないような人間である。このようないわば無限への衝動というものが、近代人の本質的特徴の一つをなしているものと考えることが出来る。

ところで人間に対して外部から限界を課するものには、自然と社会とが区別される。近代人はまず自然に立ち向かい、自然の課してくる限界を次々と突破しおしのけて、自然に対する自我の自由の領域を拡大して来た。それに次いで更に近代人は、そのほこ先きを社会に向け、社会に対する自我の自由を拡大し始めた。このような自然と社会とに対する闘争と、闘争を通じての征服支配のための武器として、人間の分別的知性の産物である科学と技術とが使用される。このことよって確かに近代的な自我は強化され、その自由が拡大されたことは事実である。そしてそのことに多くの積極的な意義が存することは言うまでもない。しかしそれにもかかわらずこの無限への衝動こそ近代人の多くの不幸を生み出した根本原因であることを忘れてはならない。

このことはかりに二三の例を拾い上げてみても明らかである。自然を征服するために人間が作り出した科学技術文明は、半面その非情なメカニズムによって人間を圧しつぶそうとしている。ふるい社会を破壊して作り出した人造社会は、これまた血のかよわぬ巨大な機械のようなものとして、人間性を踏みにじりはじめている。近代人の作り出した近代文明は、全体として人間の手を離れて独り歩きを始めた非情にして巨大な機械の如く、到る処で逆に人間を征服支配し、人間性を剝奪し始めている。これは近代人の自縛自縛（じじょうじじょう）、近代文明の自己矛盾と言う外はない。

劍によって興るものは劍によって滅びると言われる。無限への衝動から発して、自我に対立する一切のものと闘争し、それを征服しようとする近代文明の本質には、何か霸道的なものが感じられる。それは靈性の支えを失って、単なる分別知の上のみ立てられた近代合理主義文明の有している限界である。それを貫くものは無限への衝動という、いわば近代人の業である。

この宿業を何らかの仕方で解脱しなければ、二十世紀に至ってはいよいよ終末的な段階に近づいたように思われる近代文明の矛盾を克服することは出来ないであろう。この解脱の道は、結局人間の本性たる有限性に目ざめること、それを通じて真実の無限を把える以外にはないのである。そのみが近代の悪しき無限を克服して、真の無限に到る道である。さきに述べた死の自覚も、まさに人間の本性にそなわる有限性の開示であり、それを通じての真の無限への悟入に外ならない。それは相対対立に固執する分別知が挫折し、その限界が自覚され、それを通じて靈性が開かれることを意味する。この靈性によって空ぜられ浄化されることによってはじめ、自縛に陥っていた近代文明も、その繫縛より解き放たれ、その本来の意味において新たによみがえらしめられ得るのである。かかる靈性への目ざめが、個人生活のレベルにおいて同時に、社会生活国家生活のレベルにおいても、相即的に行なわれ、すべての人々と自己一人とみなともに成道に努めること、同時成道への道を行くことにこそ、われわれの今後の課題がなければならぬ。

山を見ていると、山にはそれぞれの威儀があるということが感じられる。それは山が靈性のシン

ボルとして感じられることと同じことである。山のそなえている侵し難い威儀は、山を見て感得せられるその靈性より発するものである。それはまさしく坐禪の威儀である。只管打坐の無限感である。

個人の場合でも国家の場合でも、それが真実永遠のより所であるこの靈性に根ざすとき、そこにおのずからなる威儀がそなわる。威儀のそなわるところ、侵し難い權威が輝き出る。それは他のものをしておのずからに敬意をいだかしめずにはおかないものである。尊敬の感情は、カントが分析して示した如く、一面において恐怖の感情に、他面において愛著の感情に似たものを有するが、それらのいずれとも異なったものである。武力は他をして恐怖を抱かしめ、経済力は愛著を感じしめる。しかし武力も経済力も、他をしてみずからを尊敬せしめる力としては不十分である。それは靈性の有する精神的道徳的な權威のみが有する力である。個人も国家もその真実の威儀はここに根ざしているものである。

個人生活においても国家生活においても、この靈性をより所とし、それに裏づけられてはじめて武力や経済力もその本来の意義を発揮し、真の繁榮のための手段となり得る。しかし、ひとたび靈性という真のより所を失うならば、武力も経済力も、かえってみずからを滅ぼす兇器となるであろう。

さて省みてわが国の現状をみるならば、いわば国家的な精神分裂症ともいふべき有様で、国の威

儀はがたがたに崩れている。国内では絶え間ない闘争に明け暮れ、対外的には外国より公然たる侮りと威嚇とを受けながら、しかもみずから恥ずることを知らず、憤りの一字すら忘れてゐる。いかに敗戦国とはいえ、まことになさけない姿である。

しかし他の侮りの多くは、先ずみずからを侮ることより生ずる。みずからを尊敬し得ないものに他の尊敬を求める資格はあり得ない。みずからを尊敬しうるためには、自己の本来の面目である靈性に目ざめ、その実現のための絶えざる実践を怠つてはならない。かくしてみずからの祖国の本来性の自覚、国家の成道こそ、われわれの急務と言わなければならぬ。そこに国の威儀はおのずからにそなわるものと言いうる。（拍手）

質疑 応答

問い 国の威儀ということについてももう少し具体的に説明していただきたい。

答え 国に威儀のそなわるための根本は、国としての本来的自覚にある。そこで国の願い、国家理想の内容が問題になる。願いが真実の願いでなければならぬ。願いが間違っておれば、どれだけ努力しても無駄である。道元禪師は「発心正しからざれば、万行空しく施す」と言われた。では国としての真実の願いは何か。歴

史的にみて近代国家は先ず最小限の国家目標に制限された法治国家から、更に進んで経済政策、社会政策を織り込んだ政治国家、福祉国家へと国家理想が発展して来ている。将来は単に国民の物質生活への配慮に止まらず、更に国民の精神的道徳的完成を目標とする道徳国家へと進んでゆくべきものと考えられる。国家生活そのものが靈性に根ざし、それを通して国民の靈性への目ざめを助けようような国家生活のあり方が考えられなければならない。猥尊の言葉を借りて言えば、自利利他、自行化他の菩薩の本願、国民のすべてに人間としての真実永遠のより所を与え、真の幸福を分かちようようなあり方が、国の願いにならなければならないと思う。このような真実の願い、正しい国の心と、心に即した国の形、国の身体ともいふべき諸制度が必要となる。威儀とは心身一如のものでなければならぬ。このような道徳国家は、これを靈性国家と呼ぶことも出来よう。かかる国の靈性を万世一系の天皇において自覚するところに、わが国の尊さがあり、それを守護し、その本来の意義開示に努めることは、人類全体に対しても負うべき国民の義務である。

問い 禅の世界は分別思慮を越えた世界で、われわれ凡夫には近づく道がないように思われますが……。

答え 近づくも近づかないもない。只管打坐すればそのまま坐禅の世界で、一起直入です。凡夫の坐禅も聖人の坐禅も、坐禅に変わりはない。ぼつぼつ坐禅の世界に近づくのではなく、坐禅する当処が、そのまま絶対の坐禅の境界です。と言ってもなかなか呑み込めないのが普通ですが、それが分かっても分からなくても坐禅に変わりはない。分かるとか分からなるとかの分別知にこだわって足ぶみしているのを、一步踏み出させるものは、信ずるという働きです。信は一種の飛躍である。知だけではどうしても踏み出せない。生きるというこ

とは、どうしても信の力がなければならぬ。信は靈性の働きであるとも言えると思います。（拍手）

齋藤講師略歴（旧制水戸高校、東大文学部倫理学科卒業。東京農業大学助教授、東洋大文学部社会科学科助教授を歴任、現在高崎経済大学教授、兼東京農業大学講師。倫理学・道德社会学専攻）

班別討論（午前一〇・三〇～一二・〇〇）

齋藤講師の提出した問題——絶対、生命のよりどころ、近代人の自我、生死の問題、国家などをめぐって論議が白熱する。しかしまだ観念的な論理のやりとりが目立つ。このような深奥な人生観の問題と対決した経験のない学生たち——これがまた当今の学生の一般的な風潮でもある——にとっては無理からぬ点もあったようだが、なかにはたとえ体験は乏しくとも、今後このような問題についてまじめに取り組む必要があると真剣な思いを表白する学生もあった。たしかに合宿は完成された思想を注入する場ではない。それは友との触れ合いによって、前進への意欲を、意志をふるい起こさせる場なのである。「よくわかりません」と卒直に告白する友の肩をたたき、手を取りあって励まし合う光景があちこちで見受けられた。

これまでの二つの講義を基礎に中国研究家佐藤慎一郎氏の「新中国建設の原動力」と題する講義が行なわれ

た。講義は午後一時から質疑を含めて四時間に及んだが、中国問題が日本外交の大きな課題となっているとき、ありのままの中共を精密に分析、解明して深い感銘を与えた。また古来同文同種の日中両民族の真の提携についても示唆するものがあった。

新中国建設の原動力

中国研究家 佐藤慎一郎

講義項目

- 一 共産党中心の物理的統治体制
 - (一) 党組織
 - (二) 武装組織における党の優位
 - (三) 国家組織における党の優位
 - (四) 物的基礎における党の優位
- 二 共産党中心の心理的統治体制
 - (一) いっさいは政治に従え
 - (二) 大衆運動を組織する
 - (三) 思想を組織する
 - (四) 選挙を組織する

三 民族的愛国運動

(一) 私の参加した排日運動

(二) 国際共産党の極東における工作

四 むすび

五 質疑応答

約一千万平方キロメートルという広大な国土（世界国土総面積の七%）と六億八千四百九十四万人（一九六〇年度の推定人口、世界総人口の二%）と推計される膨大な人口を擁し、しかも複雑な種族関係をもっている中華人民共和国は、どのようにして有史以来の大統一を実現し、しかもその上、意欲的な社会主義建設を遂行しつつあるのか。

自ら立ちあがって統一を実現し、列強の侵略の前に、満身創痍（い）の状態におかれていた中国を独立させた新中国は、中国五千年の歴史、伝統を根こそぎに破壊すると同時に、共産主義思想による社会主義建設を進め、主要産業は十五年でイギリスに追いつき、追いこすのだと豪語している。対外的には、この新中国の出現は、自由・共産両陣営の力関係にきわめて深刻な変化をもたらし、直接的には隣接するビルマ・ラオス・インド・パキスタン・朝鮮および日本などに対してしつつような脅威を与え、東南アジア、アジア・アフリカなどの旧植民地の独立に対しては、不断の扇動と援

助を与えつつある。

いったい、そのような力はどこから、どのようにして産み出され、発揮されているのか。今日は主として、そのような新中国建設の原動力、革命の原動力、ならびにその発動のしかたなどについてお話してみたいと思う。

一 共産党中心の物理的統治体制

新中国建設の原動力は、まず第一に、中国共産党を中心とした物理的統治体制にある。権力の基礎としての物理的統治体制について、まず党組織ならびに武装組織・国家組織・物的基礎・その他における党の優位という面からお話してみよう。

(一) 党組織

毛沢東は中国共産党の組織者であり、中国革命の組織者である。中国共産党とは、階級的に組織された革命組織である。中国革命推進のための権力の中核、指導の中核は中共であり、毛沢東である。今日までのところ、権力が人民に解放される兆候は見られず、権力は党中央の少数の黨員の手に完全に独占されている。

このような中共に指導されて、中国革命の基本的な原動力となったものは農民である。新中国総人口の約八六%を占めている五億を越す農村人口、そのうち約六〇%を占める貧農、雇農階級が、

革命の主力となっている。中国革命は毛沢東の言うように実質的には農民革命である。党組織の大部分は農村にあり、党員の圧倒的多数は農民である。そこに中国革命の基本問題があり、人民公社の基本問題もひそんでいる。

まず、そのような党の指導権力を党員の構成から検討してみることしよう。

一九五六年九月の党大会で発表された党員構成を見ると、党員総数は一千七十三万四千三百八十四人（一九五六年六月現在）で、総人口の一・七四％を占めている。その内訳を出身別にみると

出身別	人数	党員総数に占める比率	備考
農民	七、四一七、四五五人	六九・一％	貧農五〇 中農一九・一％
労働者	一、五〇二、八一四人	一四・〇％	
知識分子	一、二五五、九二三人	一一・七％	
その他	五五八、一八八人	五・二％	

となっている。

党は、労働者階級の前衛組織だといながらも、一九五六年の労働者総数は、二千四百七十七万人で、党の基盤はまだ弱体である。労働者出身の党員は、党員総数の一四％を占めるにすぎず、党はまだ労働者選ばれた少数精鋭の人々による組織ではない。しかも、労働者といっても農民出身である。

農民出身の黨員は、黨員総数の六九%を占めているが、これは貧農と中農である。労働者黨員と農民黨員を合わせた八三・一%というものは、教育の機会に恵まれなかった。したがって大部分の者は文字を読めない、文化程度のきわめて低い人たちであり、知識分子黨員は、わずかに黨員総数の一一・七%を占めているにすぎない。

彼ら自身の説明によれば、プロレタリア独裁とは、労働者階級全体が権力を握ることである。として、新中国の現状では、事実、中国共産党とは、少数の職業革命家によって組織された革命組織である。

しかも、そのような中国共産党は、實質的にはプロレタリア階級に代わるだけでなく、全国民に代わり、国家に代わって一切を決定し、命令し、指導し、支配している。

党の基盤が弱体であり、知識程度が低いにもかかわらず、どうしてそのような強大な力が發揮されているのだろうか。黨員のこのような弱体と無知をカバーしているものは権力である。権力によって少数の党の意思を、全国民に強制していかうとしているため、弱体な階級独裁が、いきおい党独裁、党中央の少数黨員の独裁になっている。したがって中国共産党の現状は、實質的には少数の多数に対する独裁である。少数の多数に対する権力による革命の強行は、多数の人民の側に立たないばかりか、統治する者と統治される者とを区別し、人民をますます疎外していく要因となっている。

そのような党の権力構造の基礎は党組織である。中国共産党は、レーニンの示した組織原則に基づき、職業的革命家によって組織された革命組織である。

党が政治権力を確立するためにとられている最高原則は、党の統一ということである。党は統一せられた意思と、統一せられた行動を必要とするからである。一千万という党員数は、単純な数字の上での総和ではなく、一定のきびしい規律に従って組織された、統一的な有機体である。党規約は党員の思想統一を要求し、行動の統一を要求している。党員は絶対に服従すべき統一的、系統的な指導中枢をもっている。地方は中央に、下部は上部に、少数は多数に、個人は組織に、それぞれ絶対に服従することが要求されている。

中共でも党内民主主義ということが、さかんにいわれているが、日本に氾濫（はんらん）しているような指導のない民主主義、中心のない無政府主義的な民主主義ではない。中共では日本のような民主主義をブルジョア社会の民主主義として、冷笑し、絶対に排撃している。もっとも、中共においては、中心のある、指導のある民主主義という言葉で、民主主義そのものを圧殺し、絶対中央集権制がとられているが、そのようにして、まず党自体が思想的に、行動的に統一されている。このような組織構造の中から無限の力が生まれてきているのである。

党は党員の文化程度がきわめて低いという根本的な弱体を救うために、次の三つの方法をとっている。一つは、古い知識分子に対して思想改造を行ないながら、優秀な分子を党員として吸収して

いる。ただし、事實は最初から党と関連をもちながら、長い年月の間、敵の陣営に潜入させておいた連中が、もはや工作を継続する必要がなくなったので、思想改造を受けて、黨員となったという形式を踏んだだけの者が多いようである。第二は、建国いらい、土地革命で勇敢に地主を打倒したとか、反革命鎮圧運動で、反共分子を摘発したとか、三反・五反運動で資本家をやつけたとか、いろいろな革命運動で、積極的に階級闘争の先頭にたつて旧秩序を破壊した者を、黨員として吸収している。破壊の終わった今日では、すべての生産運動、建設運動に対して積極的な者を黨員として吸収している。黨員に登用してもらいたい多くの積極分子は、骨身を削って生産新記録樹立に狂奔しており、これらの人々の動向は、生産大躍進としての大衆運動の潮流を形成する大きな役割を果たしている。第三は、党の弱体を根本的に救うために、共產主義による高等教育を受けた労働者、農民出身の黨員・団員を養成することに専念している。すなわち、党は党による知識の独占を計画的に遂行しているのである。

まず、第一段階は全中国の小学生・中学生の中から、少年先鋒（せんぼう）隊員「ピオニール」が育成されている。一九五八年十月現在で、小学生九千二百万人、中学生一千五百万人、計一億七百万人の学生中、九歳から十五歳までの男女学生の中から、①貧困な家庭の出身であること②体力がもっともすぐれていること③知力をもっともすぐれていること④教育の重点である「五愛」を真剣に実行すること、すなわち「祖国を愛し、人民を愛し、労働を愛し、科学を愛し、そして公共財産

を愛する“学生であることなどの諸条件になつたものに、赤いネクタイをしめさせて少年先鋒隊員としてゐる。全国少年のあらゆる榮譽が彼らに与えられている。とくに年に一度、隊員から選ばれた中の最優秀なものたちは、中国共産党主席としての毛沢東に花輪をささげて、“五愛”を誓い、握手を賜わり、食卓を共にすることが、全国少年たちにとって最高の榮譽となっている。幼稚園の子供たちすら、早く“赤いネクタイをしめたい。”と両親にせがんで、両親を困らせているほど新中国の若い世代は成長しているようである。

しかも新中国においては、陸定一中共中央宣伝部長が“人間に教育が必要なのは、階級闘争をやり、生産闘争をやるためである。”と言っているように、階級闘争と生産闘争を離れて、教育は成り立たない。そのようにして教育され、闘争にもっとも徹した子供たちが、少年先鋒隊員となるのである。一九五九年五月現在で四千四百万人の隊員がいる。

第二段階は高校、大学の学生ならびに全国青年の中から、共産主義青年団員が育成されている。全国の高校、大学生七十九万人ならびに青年の十六歳から二十五歳までの男女で、少年先鋒隊員としての条件のほかに、さらに社会主義建設を理解し、信奉し、そしてそれへの無私の実践に情熱を捧げておる積極分子を、まず共産主義青年団の候補団員とし、さらに数年の実践過程を経てから、その実績によって団員に登用している。

共産主義青年団は、“共産党の指導する先進青年の大衆組織である。”と団規に規定しているよう

に、先進的な青年を結集して、社会主義実現のために奮闘させている。一九五七年七月の発表によると、団員数は二千三百万人で全国青年総数の一九％を占めており、一九五九年五月現在では、二千五百万人の団員が、党員の卵として活躍している。

第三段階は、それらの団員の中から、共産党員が育成されている。団員の中から、さらに社会主義、共産主義実現のための理論と実践において水準が高く、すぐれた指導力をもったものが、共産党の候補党員とされ、さらにきびしい選別と年月を経て党員に登用されている。

一九五一年に、大学で学習していた労農出身の学生は、学生総数の一九％にすぎなかったが、一九五六年には、三四・一％に達し、しかも党員学生は学生総数の八・八％、共産主義青年団学生は学生総数の五七・三％であり、党・団員学生は学生総数の六六・一％となっている。北京大学のときは、五六年度で全校生の八〇％以上が党員・団員となっている。おそらく、今日では、全中国大学生の九〇％近い者が党員・団員となっておることであろう。

以上のように、新中国の教育体系は、労働者と貧農の子供を階級的に育てあげる教育であり、新しい支配階級としての、共産党の後継者を養成するための教育である。その教育体系に密着させている組織は、少年先鋒隊・共産主義青年団・共産党という一連の組織体系である。共産党統治の指導的の中核の現状は

共産党員

一、三九六万人（一九五九年九月二十八日現在）



共産主義青年団員 二、五〇〇万人（一九五九年五月現在）

少年先鋒隊員 四、四〇〇万人（一九五九年五月現在）

である。

要するに新中国の教育体系は、それはそのまま党の強化体系であり、党による知識の独占体系である。このようにして党中心の統一的な権力独占体制の確立が企図されているのである。

(二) 武装組織における党の優位

党中心の統一的な権力独占体制をいっそう強力なものにしていくものは、人民解放軍↓公安部隊↓民兵という一連の武装組織が、全国的に配置されていることである。

毛沢東は、一九二八年江西省の井崗山にたてこもって、まず紅軍第四軍というゲリラ部隊を組織している。これが今日三百万といわれている人民解放軍の出発点である。毛沢東は「われわれの統一戦線、党組織、武装闘争こそ、中国革命において、中国共産党が敵に打ちかつ三つの妙法であることを理解した」と言っており、また「われわれの政治方針の重要な一部分は武装闘争である。……中国においては、武

装闘争を離れては、プロレタリアートの地位も、人民の地位も、共産党の地位も、革命の勝利もな
いということわれわれは理解している。……武装闘争がなかったならば、今日の共産党もなかつ
たであろう”と言っている。

武装闘争が中国革命の主要な闘争形態であったことは、その歴史が明示している。党に指導され
た農民暴動、農民から生まれた人民解放軍。この力がまず国民党から政権を奪取して、中華人民共
和国を建国したのであり、この武力こそが、その後の政権を維持し、社会主義革命を強行させてい
る強力な支柱の一つなのである。

人民解放軍は人民の軍隊であると発表されてはいるが、その内容については特殊な党員以外の者
に対しては極秘であり、まして人民には知らされていない。したがって現状について話すことは困
難ではあるが、知り得た範囲でお伝えしよう。

人民解放軍とは、階級的に組織された武装団体であり、その三分の二以上の者は党員であり、団
員である。しかも、その待遇は、新中国の労働者、官公吏その他に比べて最高であるといわれてい
る。この階級的に組織された武装部隊としての、人民解放軍の配置における特徴を理解しておくこ
とが、権力体制を理解するうえでの一つの重要なカギともなるであろう。それは党組織と、武装組
織と、行政組織が一体になっているということである。すなわち、党・軍・政それぞれの組織体系
が、三位一体の関係におかれているということである。

一九五四年、大行政区制が廃止されると同時に、大軍区制も取り消されて、新しい軍区ができているが、党・軍・政三位一体の協力体制はいぜんとして保持され、ますます強化されている。

現在、軍区としては、十区の一級軍区と、内蒙古軍区・新疆軍区・西藏軍区の三中央直轄軍区がある。

一級軍区はいくつかの二級軍区を管轄している。北京軍区とか、瀋陽軍区とか、南京軍区というように、都市の名称を冠している軍区は一級軍区であり、河北軍区とか、山西軍区というように行政区画としての省の名称がつけられてある軍区は二級軍区である。つまり、軍区と行政区画としての省とは同一区画なのである。そしてまた、その行政区画としての省には、必ず中国共産党の省委員会がある。要するに、一つの省を例にとつていうと、一つの省には党の最高指導機関としての省委員会があり、軍機関としての二級軍区司令部があり、行政機関としての省人民委員会がある。

①中国共産党〇〇省委員会は、省内の最高指導に任じており、省委員会の最高責任者は第一書記で、その下に第二書記第三書記……がいる。しかも第一書記は中央直属である。

②二級軍区司令部には、司令員（司令官といわない）と政治委員がおり、軍の最高責任者は政治委員である。司令員は政治委員の同意なしに軍隊を指揮することはできない。吉林軍区や安徽軍区の例でみると、その最高責任者としての政治委員は、その省の共産党の省委員会の第一書記がなっている。つまり、一つの省の党の最高責任者である第一書記は、同時に二級軍区の政治委員として

軍権を握っているのである。

③ 党の政策を執行する行政機関としての省人民委員会の最高責任者は、省長であるが、この省長は黨員である場合と非黨員の場合がある。黨員であっても、その省の党の席次からみると低い人になっている。たとえば、広東省長は第二書記であり、吉林省長は第五書記である。したがって省長は、その省の党の第一書記よりも席次が下級であり、当然第一書記に指導されている。省長が黨員でない場合は、なおさら第一書記の指導命令に服さねばならない。つまり、行政は第一書記に握られている。

要するに、省の第一書記は党の第一書記として党内の指導権を握り、軍の政治委員として軍権を握り、省長を指導することによって行政権を握っている。党・軍・政三位一体とは、このことをいうのである。

一級軍区の場合は、一級軍区は中央直属であり、だいたいその軍区画の管轄の下に、二級軍区が二つか三つある。つまり行政区画としての省が、二つか三つ含まれている。この場合、この二つか三つの省の中の最高席次の黨員が、一級軍区司令部の政治委員を兼務することによって、一級軍区の軍権を握り、その管轄下のいくつかの二級軍区を指揮把握する。たとえば、一級軍区としての広州軍区の政治委員は、広東省委員会の第一書記陶鑄であり、濟南軍区の政治委員は、山東省委員会の第一書記舒同である。このようにして、党・軍・政三位一体の統治体制が、中央直属の権力的中

核として構成されている。

公安部隊については省略することにして、次に武装部隊として民兵がある。民兵もまた階級的に組織された武装団体である。

「党の率いる民兵は、人民民主主義独裁の重要な武器の一つであり、また人民解放軍の有力な助手ないし設備力である。それは人民を守り、国内外の反動派に向かって独裁を行なわんとする人民大衆の武装組織である」（一九五八、
「数学与研究」）と発表されているように、民兵は誕生の最初から政治権力の重要な支柱として育成されて、今日に至っているものである。私が司会して行なった松村訪中使節団同行記者座談会記録によると

「A：民兵組織を握っているのは、政治委員です。これは必ず人民公社の党の一番偉い書記が、この民兵の政治委員を兼ねている。ですから民兵・軍事・治安の実権は党が握っている。公社の社長は九〇余%が黨員ですけれども、僕らの行った所では、どこでも、事がむずかしくなってくると、必ず党第一書記というのに、おうかがいをたてる。共産党の権力というものは、たいしたものです。

B：党の至上命令は農業生産の増産です。それが第一面であって、もう一面は民兵で、この二つが表裏一体の関係にあるのです。民兵という軍事組織は、あくまでも対外的なものでなくて、そういう軍事組織を握って共産党の組織を強化する、こういうものだと思う。

C：劉農業部副部長の説明を聞いたとき、その問題に触れると、民兵は社会主義体制を擁護するものだ、ということをおっしゃったね。だから民兵は、対外的なものではなくて、一つの現制度をになって維持していく、そういうものですね、これは……」

新中国の村役場、合作社などが合併してできた人民公社が、民兵に守られてはじめてその機能を果たしているのである。

要するに、中華人民共和国という国家政権は、人民解放軍・公安部隊・民兵という一連の武力的な組織の組み合わせによって支持されており、しかもそれらのすべての武装組織は、党によって、党だけによって握られているという事実は、この国を理解するうえにおいて重要な点である。

(三) 国家組織における党の優位

新中国においてはピラミット型に構成された国家機構が、同じくピラミット型に構成されている党機構と照応しており、しかもその二つの組織の二つのピラミットの頂点に立つ指導者は、ほとんど同一人の党員によって独占されており、国家の中央機構も下部機構も、その指導者はほとんど党員によって占有されている。

党員はこのように構造的に配置されることによって、国家諸機関の指導的核心となっているのである。彼らの言に従えば、国家機関とは、党の政策を執行し、無産階級専制の職能を実行する道具

であるということである。このようにして、党は国家機構という膨大な官僚機構を通じて、統治しているのである。毛沢東が全国民に向かって、『どんな意見を言っても保証するから、自由に意見を言ってほしい』と公開講演をしたり、党が文書をもって、同じ趣旨のことを保証して、国民の発言を促した。それで北京の光明日報の編集長の儲安平という人が

「解放前に私たちは、毛主席が党外の人々と連合政府を組織することを提議したのを聞いた。一九四九年建国した時には、中央人民政府の六人の副主席のうち、三人は党外の人であり、四人の副総理のうち二人は、党外の人であり、まだ連合政府の様相に似ていた。しかし、その後政府は改造され、中華人民共和国の副主席は、ただの一人となり、これまでの中央人民政府の非党員の副主席は、人民代表大会常務委員会に移された。それはともかくとしても、現在國務院の副総理は十二人もいるが、そのうち非党員のものは一人もない。党員でないものの中には、このポストにすわれるものが一人もないのだろうか。……党が国家機関の中の一部の中枢を掌握する必要があるということは、きわめて自然なことである。だが、全国的な範囲内において、大小の単位を論ずることなく、はなはだしいのは一つの課、一つの組にいたるまで、みな一人の党員を配置して、その長としており、事の大小にかかわらず、どんなことでも、みな党員の顔色を見て仕事をする必要があり、党員がよろしいと言えば、始めて着手することができるが、こうしたやり方は、あまりに行き過ぎではなかるうか」

と毛主席と周總理におうかがい申し上げたいと言った。もちろん、かれは右翼分子として他の多くの人々とともに痛罵（つうば）されて、処分されてしまったのである。

試みに一九五四年九月の憲法公布時における、国家中央機関の黨員比率を例示してみると

① 全国人民代表大會常務委員會（最高權力機關） 總員八十六人。内訳—黨員五十人で、五八・一％

② 中華人民共和國主席・副主席 總員二人。内訳—黨員二人、一〇〇％

③ 國務院の總理・副總理・秘書長・副秘書長 總員十九人。内訳—黨員十九人、一〇〇％

④ 國務院全体會議 總員四十七人。内訳—黨員三十四人、七二・三％

⑤ 國務院常務會議 總員十二人。内訳—黨員十二人、一〇〇％

⑥ 國防委員會 總員九十六人。内訳—黨員七十一人、七四％

⑦ 最高人民法院 總員五十一人。内訳—黨員五十一人、一〇〇％

⑧ 最高人民檢察院 總員四十七人。内訳—黨員四十二人、八九・四％

⑨ 國務院各部・各委員會の部長・副部长・主任・副主任 總員二百六十九人。内訳—黨員二百三十九人、八八・八％

⑩ 國務院弁公室（政策立案機關）主任・副主任 總員二十九人。内訳—黨員二十九人、一〇〇％

⑪ 國務院直屬機構の局長・主任など 總員八十人。内訳—黨員七十八人、九七・五％

これは国家中央機構における一部の例であるが、末端機関としての人民公社にしても同じことである。たとえば、松村視察団の見てきた金竜人民公社の最高機関である管理委員会の委員二十一人の中、党員は十七人である。残りの四人も、おそらく共産主義青年団員か積極分子であろう。要するに国家機構の重要ポストにおける党員・団員の占める比率が圧倒的に多いため、どのような政策でも、党の意図どおりに決定されるように、国家機構そのものが組織されているのである。

四 物的基礎における党の優位

中華人民共和国の誕生は、社会主義革命にはいったことを意味している。社会主義革命とは、資本主義的なもの、そして資本主義が生まれてくる可能性のある、すべての条件を消滅して、社会主義的生産関係を作りあげることだと言っている。人類のすべての不幸は、人間が生産手段を私有することから生まれ、階級の存在は生産手段の私有を前提とするものであるから、階級を無くするためには、私有制を無くして、社会的所有を確立しなくてはならないというのである。

古い中国にあった、ほとんどすべての財富は——資金も生産手段も——個人が私有していたものである。社会主義革命の一つの任務は、個人に私有されておった資金や生産手段を社会化して、みんなの共同の財富に変革していく、ということである。

農村について、具体的に話してみよう。中国の農村には、零細な資金と土地・役畜・農具などの生産手段を私有する一億二千万戸の単独経営の農民がいた。中共はこの私有経済を基礎として、分

散孤立していた農民を組織しはじめたのである。第一段階は農業生産互助組の組織である。

互助組というのは中国の農村に昔からあった方式で、私経済を基礎とする数戸の農民が、その持っている農具・役畜などを持ち寄って、各自の耕地で、簡単な共同労働を行ない、その収穫物は各自の所有とする助け合いの組織である。個人経済の積極性を導いて、互助合作という過渡的な組織のうえで、農民を訓練しながら、より高級の組織を準備していたのである。

第二段階は初級農業生産合作社である。初級社とは半社会主義的な性格をもった集団経済組織である。農民は土地と資金を出資し、資金・農具・役畜などの共有財産をもち、共同労働を行ない、各自の出資した土地と各自の働いた労働とに対して分配をするように、統一的な経営を行ないながら、社の蓄積をふやしていく組織である。

第三段は高級農業生産合作社である。高級社は社会主義的性格をもった集団経済組織である。高級社では農民の私有している土地を無償で社の所有となし、社員から借りている農具・役畜などには代価を支払う約束で、社の共同所有にしている。つまり、全社共有の土地と共有の生産手段——農具・役畜など——を使用して、共同労働による統一経営をなし、分配は労働に対する報酬だけとする。ノルマをふやして生産をあげ、農民個人に対する分配を押えて、共同蓄積をふやす組織である。ただ、各社員には自留地と称する、その地方の全耕地の五％を越えない小さな土地が残されていて、農民の自由耕作に任されており、小さい農具や家庭副業を営むのに必要な小道具・樹木・家

禽（かきん）などは、各自に残されていた。ところが、この高級社では実際のところ、農民は社から与えられた義務としてのノルマを、つねに回避しようとする傾向を示し、社員最大の関心とエネルギーは一握りの各自に許された自留地、つまり私有地に向けられている。ネコのひたいのような自留地からの収入が、総収入の二〇%以上、九〇%も占めておるものまである。しかも高級社からの収入は、一年の労働が終わった翌年の三、四月ごろに年度決算がすむまで、一労働日がいくらの現金や現物に換算されるのか誰にもわからない。農民はつねに現金不足に悩んでおり、農民をきわめて不安定なものにしている。

第四段階は人民公社である。人民公社とは、それまで郷村にあったいくつかの農業生産合作社を合併し、郷村にあった生産・金融・商業・武装・教育などのすべての組織を統合し、郷村の党组织と郷村政権組織とが、公社の中にはいりこんで、直接指導する共産党の末端統治体制として考えられた組織である。

「各農業生産合作社が合併して公社となった場合……一切の公有財産を公社に引き渡す」（河南省衛輝人民公社規定）と発表されたり、「従来合作社の集団所有であった土地・樹木・機械・農具・役畜・基本建設財産・公共建物および一切の積立金・福祉金・出資基金・貯蔵食糧などは、すべて公社成立と同時に国家機関に報告して、全人民所有制（国有）となす」（一九五八年九期経済研究）と発表されたりしている。

とにかく、農民の財産であったものは、一切公社のものか国有になつてしまい、農民に残された

ものは、わずかに身の回りの物だけとなったのである。六億以上の全国農民は、労働力以外は一物も持たない貧労働者となり、農民はもはや人民公社を離れて生きる道がなくなつたわけである。新中国では、このことを社会主義改造による所有制の変革と言っている。

とにかく、「ご飯はただで食わせる」という驚くべきスローガンを打ち出して誕生した人民公社では、たしかに「ご飯はただで食べてさせている。松村さんが視察してきた一番よい人民公社では、一カ月一人当たりの食事代（主食）は日本金にして九百円である。二番目によい人民公社では、一カ月六百円、一日二十円の食事代である。同伴していった日本の記者も、その一回分の献立は、とにかく、日本ではどんなに主婦がやりくり上手でも、ちょっとできないと思われようなもので……」と言っており、また「こういう姿を見ますと、地主の収奪ということはないけれども、かなり農民の生活は苦しく、圧迫されているということは言えると思う」と言っている。とにかく、人民には土地・農具など一切の生産手段はない。ご飯を食べなければ公社の命のままに働かなくてはならぬ。うんと働いて生産されたものは一切公社のもので、自分のものではない。政府は、人民に対する配給は少なく、公社の蓄積は多くせよと指示している。このようにして蓄積された資金が、新中国建設の資金源となっているのである。

人民公社の出現を生産関係からみると、資本主義的な生産関係が改造されて、社会主義的な生産関係が作り出されたことである。また所有制の面からみると、数千年来の生産手段の私有制が、社

会主義的な集団所有に変わったことであり、経営の面からみると、単独経営の農業が、集団経営に移行されたことである。さらに階級関係からみると、地主・富農階級は無力となり、貧農・雇農が指導階級に変わったことである。

一億二千万戸の単独経営の農民が、無数の互助組に組織され、それを土台として、一九五七年三月末には、全農家の九七％が、七十五万二千個の農業生産合作社に組織され、それが統合されて、一九五八年十月末には、二万六千四百二十五個の人民公社に組織されている。このようにして農村社会・農業・農民が、再編成・再組織されたのである。

要するに、この互助組↓農業生産合作社↓人民公社という組織過程は、農民の手から、その資金と生産手段を分離し、とりあげていく過程であり、それはそのまま、それを党が独占的に支配していく過程である。新中国では、このようにして一九五六年末までに、全中国の農業・手工業・資本主義工商業のもつ資金と生産手段の社会化を完了し、社会化された資金と生産手段は、党が独占的に支配しているのである。

資金と生産手段を独占的に支配する党は、当然その生産物を独占的に支配することになる。このようにして、党は全中国におけるあらゆる生産から流通、分配までを独占的に支配することによって、党独裁権力の物的基礎を強固にしているのである。

二 共産党中心の心理的統治体制

中国共産党は武力によって政治権力を奪取することはできたが、この権力は中国五千年の文化伝統を否定しようとするものであり、したがってこの権力には、その支柱となるべき伝統的な権威がない。

この権力が人民の納得する権威を形成するためには、人民に現実的利益と将来の楽園を約束することによって、人民の承認をとりつけなくてはならない。そのためには過去の権力の支柱であった文化伝統を暴力的に解体しつつ、人民の納得する新しい支柱を作りあげていかななくてはならない。

新しい権威を形成するための具体的な措置としては、教育・学習・宣伝・スローガン・説得・会議・批判と自己批判・革命歌・示威……などなどの際限もないくり返し、すなわち、大衆の圧力による思想改造と一定の行動様式の強制である。党の主観的決定を大衆のものとさせるために、おどかしを背景とした心理的暴力を利用して、人間を一定の行動様式に拘束し、かつ服従を強制している。この拘束、強制の技術にはすばらしいものがある。

具体的に話してみよう。

(一) いっさいは政治に従え

共産党中心の物理的統治体制が、人民に命ずる至上命令は、すべてのことは、政治に絶対服従

すべし”ということである。道徳も、恋愛も、教育も、生産も、配給も、貿易も、すべてが党の政治的要求に従わねばならない。

まず共産主義を支えている道徳についてみると、レーニンは、人間は憎しみと闘争の中で教育される必要を説いている。ある息子が、自分の父は旧地主だったのに処罰をのがれているが、どうしたらよいかと、中国共産主義青年団の機関誌『中国青年』に投書している。それに対して機関誌は「われわれ青年は正義の大目的のために、血のつながりを抹殺しなければならないとの公式の精神にのっとり、そのような人間を抹殺しなければならない。抹殺とは強制労働によって、人間改造を行なうことである。思想改造がすんだ後、なお父親が君に対して悪感情をもったり、迷惑をかけたりますれば、改めて告発しなさい。偉大な人民民主主義独裁の権力が君の背後にある以上、恐れるものはない」と激励している。

次に、人間自然の変愛はどうであろう。ある若い妻が、自分はいま夫を愛しており、幸福ではあるが、夫が反革命分子であることを発見した場合は、どうしたらよいだろうかと投書したのに対して、機関誌『中国青年』は

「もはや政治的基礎のない変愛は存在しない。何よりもまず社会主義にささげられた、共通の政治的信念の上に築かれねばならない」(笑)

と教えている。若い妻は「わたくしと敵との間に、明白な境界線を引くことを決心した」という決意をのせている。おそらくこの夫は妻によって、つき出されたことであろう。（笑）

次に、自由であるべき学問の領域はどうであろうか。自ら希望して中共地区に残留し、中共に協力してきていた板野博士が、今年消然として帰国し、公開の講演会ではっきりと「学問の自由はまったくない。すべてが政治的発言である」と帰国の理由を述べている。社会の悪徳に対してはどうであろうか。新中国で有名な小説家巴金は「キリスト教社会はたくさん聖人を産んだ。ところが悪がいぜんとして栄えているではないか。わたしたちの社会は聖人というものを必要としない。わたしたちは善を強制する権力をもっている。彼らを肉体的に悪の道に走ることができないようにする仕組みをつくるのだ」と言っている。新中国に泥棒がおらなくなった事情の一部が説明されているようである。

(二) 大衆運動を組織する

マルクスは哲学者の任務について、たんに世界を解釈するだけでなく、もっとも重要なことは、世界を変革することだと指摘している。革命とはそのように、あくまでも行動的・積極的なものであり、とくに共産革命において非常に重要なことは「革命を組織する」ということである。彼らにとって革命は起きるのではなくて、起こすのだ。革命が起きるように組織していくのだ。そのためには党自体も、軍隊も、国家機構も、大衆機構も、大衆運動も、思想も、学習も、会議も、選挙も、

農村も、都市も、生産も、教育も……すべてが党の意図のままに動くように組織されるのである。

いっさいを行動として組織するために、新中国ではすべてを運動の形成で認識させている。たとえば「これは馬糞（ばふん）である」と認識させるのではない。「馬糞は肥料である」と認識させることによって、大衆が「肥料とするために馬糞を集める」という行動を起こすように組織していくのだ。

すべてが前向きな認識であり、行動の認識であり、積極的な認識であり、変革の認識である。そこに革命の生まれる可能性があるのだ。次に、そのような認識を土台として、それを運動として組織する。毛沢東は「調査なくして発言権なし」と言っている。調査とは真理としてのポイントをつかむことである。真理とは事物の生活法則のことである。そのポイントをつかんで、対策を練り、それを集中的に組織して、大衆運動にもっていくのである。

たとえば、一昨年全中国で「四無村」とか「四無城」とか「四無県」というものが全国的に現われた。「四無」とは「ネズミ、カ、ハエ、スズメの四つの害が無い」という意味で、四害のない村・四害のない都市・四害のない県という意味である。スズメの害を無くするためには、まずスズメの生活法則を調査、研究する。スズメは巣をどこにどのように作り、朝何時ごろに飛び出し、餌（え）はどんなもので、どこに休むか、何時間ぐらい飛び続けられるか、何時ごろに巣に帰るか、また、どのような害があるかなどを詳細に調べる。つまりスズメを無くするために必要なポイント、

すなわち生活方則をつかむ。それを整理して、スズメの害を除く対策を決定する。スズメの害を心にスズメの習性についての学習を全国的に開始する。そのうえ、新聞・ラジオ・壁新聞あらゆるものが動員される。全国民がスズメについての認識をいやというほどつめこまれる。

そこでスズメの害を除くにはどうしたらよいか。みんなで力を合わせて捕えようじゃないかという気運を起し、その気運をスズメ取り運動として組織する。そのようにして全国的な愛国衛生運動の一つとしてのスズメ取り運動が展開されたのである。

このスズメ取り運動は愛国衛生運動と結びつけられながら、全中国の七億の大衆が、統一的な思想と統一的な行動体として組織されたことを意味する。

新中国で行なわれたあらゆる大衆運動は、このようにして行なわれたのである。土地革命・抗美援朝運動・反革命鎮圧運動・三反五反運動・思想改造運動はもちろん、最近の生産大躍進運動も、すべてこのような大衆運動によって行なわれているのである。

(三) 思想を組織する

新中国においては、思想は組織されるのである。ここでは共産主義以外の思想はすべて反動思想としてきびしく排除されるとともに、種々雑多な人間の思想は、統一された思想に組織されるのである。ここでは人間が自由な思考によって自分自身の思想を決定する必要がないばかりか、それは許されないのである。「会議は開く」のではなく、「会議を組織する」のである。会議を開いて、結

論を出すのでなく、会議を開く前すでに結論がきまっているものを、会議にかけて、結論が出た形をとることによって、大衆の思想を統一的に組織していくのである。（笑）

日本の国会にあたる全国人民代表大会ですら、一言の反論もなく、「賛成！」「賛成！」で決議されていくのは、会議が組織されているからである。

全中国のあらゆる機関・団体・企業その他、都市も農村も、明けても暮れても『学習』『学習』、『会議』『会議』をしつこく繰り返しているのは、思想を統一的に組織するためであり、行動を統一的に組織するためである。

訪中視察団の松村さんは、中国いたるところで、岸首相に対する反感の強いには驚いたと言っているが、私はあの中国通の松村さんにしてすら、そんな認識ではと一驚させられた。（笑）

新中国では、国内外の一切の重要政策は、中国共産党中央委員会の政治局で決定する。たとえば『安保反対・岸打倒』という一つの政策が決定されると、まず各機関・団体・企業などの一級党員を集め、『日本の安保改定にどう対処するか』という問題を提出して、一級党員たちに論議を尽くさせ、結論を出させる。結論が出てから、党政治局の決定を公開する。党員たちは、自分たちの結論としての分析・認識・対策が、政治局のそれとどの点が、どのように異なるかを再び検討し直して、政治局の決定した思想と対策とに一致させる。そのようにして一級党員たちの思想統一ができてから、彼らは、おのおのその所属する機関・団体・企業その他に帰っていき、所属の二級党員たちを

集めて、同じ問題を提出して論議させ、最後に政治局の決定を伝えて意識統一をする。次々にそのようにして全中国の全党員の意識を統一し、さらにそれが共産主義青年団員に伝えられ、ついで全国の大衆に伝えられていく。それが学習である。このようにして、安保問題のような全国的性格をもたせようとする問題については、全中国でただ一つの認識態度・方針・行動に統一される。全国民は米帝国主義と結ぶ岸はたたく、という結論から「安保反対・岸内閣打倒」というスローガンに統一され、「安保反対・岸打倒総決起大会」が各地で開かれたのである。

松村さんより、頭脳は良いかも知れない政治局の人たちによって「組織された思想」の力が、松村さんたちを感心させているのである。とにかく、このようにして、全国的性格をもった問題については、六億七千万の人民の答えはつねに一つしかない。それで私がことし新中国から帰って来た人に、「そんなバカな話があるか」と言ったら「真理は一つじゃないか」（笑）と言っていたのに驚いた。これも思想が組織されているからであろう。要するに新中国では思想が組織され、全中国人の発言は、党の忠実な録音盤の役目しかもっていないのである。組織された思想だけが、各個人に許された思想であり、これこそいわゆる頭脳の社会化であろう。

四 選挙を組織する

次に、選挙も組織されている。人民は自由に立候補することも、自由に候補者を選ぶこともできない。党だけが立候補者を選定することができるからである。立候補者は政見の発表も運動も一切

必要としない。すべての政策は党だけが決定することができるからである。人民はただ投票という手続きをとることによって、人民が選出したのだという確認の形を必要としているだけのことなのである。

たとえば昨年（一九五九年）四月二十七日、全国人民代表大会で、一千百五十七人の代表が、国家主席を選挙した。開票の結果、わずかに一票だけが董必武に投票され、残りは全員劉少奇に投票されている。董必武に投票された一票は、劉少奇が入れたものと言われている。（笑）なんらの混乱もなく国家主席が決定している。日本の場合だったら大変なことになるだろう。自民党の総裁を争うだけでも大変なのだ。私がある中国人に「あの広い中国から集まった一千名以上の代表が、自分の自由な意思で投票したとするなら、別な人に投票する人があっていいじゃないか」と聞いたら、「冗談じゃない、劉に投票しないやつがだれであるかは、その筆跡ですぐわかるよ」、と言っていた。そのことはその人の政治生命に関する重大問題となるのである。このようにして選挙は党の意図のままに組織されているのである。その他すべてがこのようにして組織されている。

大衆という集団的圧力の巧妙な運用によって、大衆自身が一定の行動様式を強制されており、それは、そのまま党中心の心理的統治体制として確立されていっているのである。

以上、私は新中国建設の原動力として、第一に共産党中心の物理的統治体制を、党の組織、武装

組織における党の優位、国家組織における党の優位、物的基礎における党の優位という面から説明し、第二に共産党中心の心理的統治体制について、簡単に説明したつもりである。

三 民族的愛国運動

次に申し上げたいのは民族的目ざめ、民族的立ち上がりということである。

(一) 私の参加した排日運動

私が北京で排日運動に最初に参加したのは、昭和二年の秋のことである。そのころ、日本は滿洲・北支をねらっていたようである。翌年の昭和三年の四月には、日本は山東に出兵する。五月には濟南事変を起こす。六月には張作霖を爆死させた。こういうふうには日本は昭和二年の秋には、對華進出の準備を進めていたようである。それにつれて北京には排日運動が起きていた。当時私は北京で勉強していた。日本公使館は北京在住の日本人に対して、生命財産を保証しがたいから、公使館区域に引き揚げると緊迫感をあふっていた。たしか外務省の留学生たちだったと思うが、北京の各大学で排日運動が起きたら、もう学校へは行かない。こんなやつらが外交官になるから日本はだめなんだ、と私は非常に憤慨したものである。ある日のこと、朝陽大学の中国の学生たちが「佐藤さん、きょう排日デモがあるんだが行かんか」と呼びに来る。私は寝台の中から「なんぼくれるかい！」と言うと、「一円三十銭」と言う。当時北京で人力車を一日中走らせると七十銭ぐらいの時

あったので、非常によいアルバイトだ。『よからう』ということだ（笑）出かけたものである。『打倒日本帝国主義』の旗を持った私は、中国人の大学生たちと一しょに和気あいあいと北京の町回りをしたものである。最後にピンをはねられて（笑）九十銭の弁当をもらった。学生たちは帰途弁当を持ち寄って、東安市場で一杯飲むわけである。学生の話は、今度の排日運動の資金はアメリカから出たとか、学長が大半くすねたとか（笑）そんな話が酒興を添えただけであつた。排日運動といつても、学生たちは私から日本の対華侵略とはどんなことかと聞き、私の説明になるほどと感心している程度であつた。そのころの中国の学生は、排日運動をまだ切実な問題として考えていなかったようである。

その後昭和六年の満洲事変、満洲国の誕生、華北進出……となり、昭和十年の下半期には、日本は殷汝耕と組んで華北の自治を叫び、冀東特別区を設定しようとして画策していた。

このような華北の情勢に対して、昭和十年七月から八月にかけて、モスタワのコミンテルン第七回大会では、スターリンの新しいテーゼとしての反ファシズム統一戦線戦術の採用を決定し、中国に広範な抗日反帝統一戦線を実施することを決定する。中共もまた八月一日、抗日人民統一戦線戦術の声明を発表している。私が第二回目に排日運動に参加したのは、そのような昭和十年十二月九日のことであつた。この日は学生連合会の呼びかけに応じて、北京各大学の学生を中心とする抗日請願大示威運動が行なわれた。その日、私は山東省の鄒平県に梁漱溟先生の郷村建設運動を視察し、

直接教えをこいたいものと考えて、妻と一緒に東安市場でそのしたくを整え、王府井大街わんふくじょうに出てきたとたんに、この激高する抗日学生運動の波にぶつかつたのである。さっそく先頭を切つて進む北京大学の学生の隊列にもぐりこんで、「反対華北自治」の旗をもらい、打倒日本帝国主义を絶叫する渦の中でもまれながら進んだ。王府井大街の突き当たりにある交民巷という各国の大使館のある区域になだれこもつて突進しているのである。交民巷の手前で待ち構えていた中国の消防隊のホースは、学生たちに真正面から強烈な冷水を浴びせかける。学生たちは水勢に足をさらわれて、ばたばた倒れる。軍警の警棒はようしやなく、学生の頭上にたたきおろされる。血が飛ぶ、頭をかかえて倒れる。怒声。毎日、排日、そして抗日に盛り上がるとする民族の激情は、同じ民族の手によって、またたくまにたたきつぶされ、散りぢりにされる。後から後からと続く激情の波に押された学生の奔流は、警棒にはばまれて、北京飯店の裏通りに折れ、東華門の方に向かつているようだ。私の目の前で、一群の学生がたたきのめされている。だれ一人として助けようとするものもない。道端で傷つき倒れている学生を介抱していたのは、私の見たかぎりでは外国の婦人ただ一人だけであつた。道の両側に群がる何千何百人という大衆は、まったく路傍の石よりもまだ無表情であり、だれ一人として学生の抗日の叫びに和するものはいなかつた。私は隊列をくずして右折、奔流する学生の後を走つた。北京飯店の裏通りである。「佐藤君！ 佐藤君！」と呼ばれる。領事館警察の青山さんだ。「きょうのは様子が違う。危いぞ」と言う。冗談じゃない。私はいま日本が中

国に何をしようとしているのか、そしてはたして日本は中国の真の敵であるのか、それともまた真の味方であるのか。私はこの目で、この身体で直接確かめなければならないのだ。今日のこの日において、彼らの真意を知ることにはできないのだ。散を乱した学生たちの群は、東河沿兎の北京大学の校庭になだれこむ。私も後を追ってはいらぬ。青山さんもついて来た。私がそこで見たものは、救いようのないほど、おどおどしている学生のぶざまな姿であった。憤慨してそこを出た私たちは、車をかけて東北大学に走った。銃剣づきの門衛のとめるのを押し切って校舎にはいり、学校当局と面談した。つばきを吐きかけたような日中親善論を聞かせられ、ここでも私はがっかりした。中国はまだまだダメだ。私はいよいよの憤りを感じてそこを去った。しかし激情に渦巻き、おどおどするこのような学生たちから、じかに感じとることのできたいま一つの気運は、毎日から排日へ、排日から抗日へと育ちゆく若い民族のはっきりした新しいぶきであった。

昭和二年、私が最初に抗日運動に参加した時からわずか七、八年の間に、中国の若い世代はたしかに大きく目ざめていたのだ。このような中国民族の目ざめ、立ち上がりという歴史の奔流に対する意義をはっきりとつかみ、それを基盤としていろいろな工作を行なってきたのが中国共産党であった。この十二月九日の抗日学生運動も、明らかに中共の指導によるものであった。胡華の『新民主主義革命史』（一九五一年 新華書店）に明記されているように、そしてまた中共中央委員の胡喬木の『中国共産党三十年』の中にも、当時国民党統治区における党の工作と各界人民抗日救亡運動は、劉少奇同

志の正確な指導のもとに回復と発展を見るに至った」と書かれているように、中国における抗日運動は、劉少奇によって組織されていったものであった。

その後中共はこのような抗日運動の中で発見し、訓練しえた各大学の左傾分子を集め宣伝団を組織し、翌昭和十一年一月二十一日には、保定で大会を招集し、その宣伝団を中核として、『抗日民族解放先鋒隊』を組織することに成功している。蘆溝橋事変を誘発させたのも、この抗日民族解放先鋒隊が中心であると言われている。劉少奇に指導されたこの学生先鋒隊は、緊迫するふんい気の中で対峙（たいじ）している中国軍と日本軍の中間に潜入して行き、両軍に対して同時に発砲しておいて、さつと身を引いた。そのため中国軍側では、それは日本軍からの銃撃であると思いきみ、日本軍はまた、てつきり中国軍側からの攻撃であると互いに錯覚し合い、満を持していた両軍は戦端を開始し、ついに泥沼のような全面戦争に引きずりこまれてしまったものであると言われている。

日中両国を衝突させることに成功した学生先鋒隊は、この蘆溝橋事変後、南下工作団として、北京・天津を離れて各地で活躍している。このような日中両国軍衝突の真状を知る国民政府としても、日本軍のあくなき野心を抑えることも、そしてまた激高する国民の抗日への意思を抑えるすべもはやそこにはなかった。

日中全面戦争を組織するために狂奔していた、中共の工作本部である西安の抗日民族解放先鋒隊総本部のごときも、昭和十三年六月七日には、国民政府のために実力をもって解散させられている

が、時すでにおそく、全中国の学校には、中共の工作拠点がしっかりと根をおろしてしまっていたのである。このようにして、日中両国の不幸な全面戦争は、中共によって組織され、高揚され、拡大されていった。

(二) 国際共産党の極東における工作

学生の抗日運動は、もともと民族の目ざめ、立ち上がりを示した愛国運動、民族復興運動であったのであるが、中共の抗日人民統一戦線の目的は、一つには国際共産党の世界革命路線の実践であり、一つには当時中共は、国民党の五回にわたる包囲攻撃に江西省瑞金の中華ソビエト共和国臨時政府は陥落し、国民政府の急追をのがれて、陝西省の延安で窮命していた。そのような中共は、挽回（ばんかい）を策していたのである。それは、抗日による日中両国の全面戦争を引き起こすことによつて、まず第一に、国民政府の打倒中共の鋭いホコ先を日本に向けさせて、日本軍の力で国府軍をたたかせ、その間に中共が抗日陣営の背後で自分の地盤と軍備を拡張しようとしていたのであった。

まず、国際共産党の極東における工作について見ることにしよう。

当時欧州においては、ドイツとイタリアのファッショ勢力は世界の脅威となっており、極東においては、日本は満洲国建設後華北に進出し、昭和十年下半期には、日本は長城線一帯に冀東防共特別区を設定しようとして画策していた。このような世界情勢に対処して、昭和十年七月モスクワの

コミンテルン第七回大会は、反ファッショ統一戦線戦術の採用を決定、中国に広範な抗日反帝統一戦線を構成せよと主張し、中共でも八月一日「抗日人民統一戦線」戦術の採用を声明した。

このような国際共産党ならびに中共の戦略戦術に従って劉少奇は、復興する中国民族の民族意識を基盤として、北京・天津の学生たちに学生救国連合会を組織させ、その暗躍によって昭和十年十二月九日抗日大示威運動を行ない、ついで抗日民族解放先鋒隊を結成、ついに蘆溝橋事件の誘発に成功したことについては、先刻申し上げたとおりである。

昭和十二年七月七日の蘆溝橋事件を機会に八月二十一日に、ソ連はすかさず中ソ不可侵条約を結び、九月二十二日には中共は国民党と国共合作の宣言にまでこぎつけている。ソ連の真意はとりあえず極東においては、中国における抗日戦の長期継続によって、日本の北進、すなわち対ソ進出を阻止することによって、極東の安全を図りつつ、一方、欧州におけるヒトラーとムソリーニのファッショ勢力に対処しつつ、ソビエト防衛の万善を図ろうとするにあつた。ソ連は昭和十三年七月には、満洲で張鼓峰事件、十四年にはノモンハン事件を起こして関東軍を打診しながら、八月には独ソ不可侵条約を結んでいる。その九月には、ドイツはポーランドに侵入して、第二次大戦が始まっている。あくる十五年三月、南京に汪政権が成立するときには、ソ連は日本に対して、いづれ承認するからと汪政権の成立を促したりしていたことは知周のことであろう。ソ連は日本の目をソ連から離して、南方にクギづけにしておきたかったのだ。ところが九月に日独伊三国防共同盟が結ばれ

たため、あわてたソ連は十六年四月満洲国を承認して、日ソ中立条約を結び、日本の対ソ北進策の緩和を図っている。中共もそのような国際共産党の工作路線にそって、抗日民族統一戦線工作のホコ先を緩和して、もっぱら内戦転化による実力の培養に努力していた。

ところがその六月には独ソ戦が始まった。日本では七月二日の御前会議において、満洲に「関特演」と称する関東軍の大増強の発動が決定されている。そのような日本の動向については、ゾルゲ、尾崎秀実を通じて、ソ連につつぬけになっていたと言われている。

そのころ北進論は主として陸軍、南進論は主として海軍によって支持されていたとも言われるが、さだかではない。北進論に反対する人たちの論旨は、酷寒のシベリアにはなるほど資源はある。しかしそれを開発するにはいったいどれくらいの国費と年月を必要とするか。日本のかつてのシベリア出兵で、その結論が出ているじゃないか。それよりも南を見ろ。第二次大戦のため欧州各国は、アジアの植民地を顧みる余裕はまったくない。この機会に日本は南方の諸民族に対し、民族独立のスローガンを与えて独立させろ。彼らは期せずして日本につく。そこには、すでに生産され開発されている食糧も、石油もそのままある。その資源と諸民族の協力によって立て。いまこそアジア復興の機会としてとらえるべきだ。しかし日本の南進は必ず英国の勢力とぶつかる。英は米を誘いこむに違いない。問題は米国だが、米国とは作戦上の問題があるだけだ。この機会に決起せよ……というようなことだったと覚えている。このような南進論を大東亜共栄圏の建設という言葉で、近

衛に建策したのは、国際共産黨員尾崎秀実であると言われている。

また私が中国の要人から聞いたところによると、そのころ中国における国際共産党ならびに中共の活動は、日本の北進論をいかにして南進論に転換させるかに、全力を傾けていたということである。とにかく、日本は北進をやめ、ソ連を突かずして、ついに南進に踏み切り、昭和十六年十二月、真珠湾の奇襲を執行している。

当時、国民政府は重慶に逃避して抗日戦を続けていた。日本の真珠湾攻撃の十日ぐらい前のこと、重慶駐在のアメリカの一武官が、国民政府の国際問題研究所の所長王芄生をたずね、戦跡見物に誘った。その時王所長は、すでに芝居の終わった舞台を見物したってつまらん。それよりもこれから上演されようとしている新しい芝居の筋書きに注意してはどうか。日本は近く貴国を攻撃しますよ。と言ったら、それは大いに結構。と言ってとりあわなかったそうである。戦跡見物後、王がその新しい芝居の筋書きを語り、日本軍の配置まで詳細に話したところ、米国の武官は、あなたは日本の天皇でもないのに、どうして軍の配置までおわかりですか。と笑いながらノートしたそうである。おそらく確度丙ぐらいで、ワシントンに報告されたものであろう。

ところがはたして、真珠湾の奇襲が行なわれた。あわてたワシントンは、ワシントン駐在の中国大使ならびに宋子文などに、その情報の出所経路などについての再調査を依頼したそうである。とにかく、このような確な情報の出所は、世人のあまり知らない国府の国際問題研究所だったので

ある。この事があってから、この研究所はがぜん注目を浴び、とくに太平洋戦争中、米・英・中国は、この研究所に多大な資金を注ぎこんで、そこを唯一の対日情報源としたとのことである。

一方、昭和十七年九月には、独軍がスターリンググラードに突入したので、ソ連も中共も国府に対して緩和政策をとっている。ソ連軍は十一月やっと反撃に転じ、十八年二月独軍をせん滅してはいるが、四月にはレニンググラードが攻撃されており、まだまだ危険な状態であった。ソ連は独ソ戦を「大祖国戦争」と名付けて、祖国防衛策に必死となっていた。ソ連は日・独からの重圧をのがれるために、まず世界の対ソ不信を解消しつつ、欧州における第二戦線をつくり、米国からの武器経済の援助を増大しようとして、五月には突然コミンテルンの解散を宣言している。

ところで緒戦において勝っていた日本もしだいに敗退し、十九年七月にはサイパンで玉砕、九月にはビルマ、雲南方面の日本軍は全滅、十月には米軍はレイテ島に上陸するといった状態で、ぜんじ米軍の日本本土上陸作戦がうわさされていた。

そのころ国際問題研究所長王芄生の戦局に対する見通しは、米軍が日本本土上陸作戦で百万人の犠牲を出すであろう。たとえ上陸したとしても、日本国民は一億玉砕してでも降伏しない。天皇を満洲に擁して、全中国の日本軍を華北・満洲に集結し、あくまでも戦う。関東軍は健在であるばかりでなしに、東辺道の山をくり抜いて、食糧をたくわえ、工場を造り、着々として自給自足の防衛態勢を作りあげている、という見方であったといわれている。しかもそのような情報も、米・英に

対して計画的、組織的に出されていたと言われている。おそらくアメリカは、このような情報をもとにして、昭和二十年二月蔣介石に秘して、スターリン、チャーチル、ルーズベルトの三巨頭によるヤルタ会談を開いたものと、関係ある中国人は見ている。とにかく、その会談で米国は対日大陸作戦に際し、閩東軍の来援を阻止するため、ソ連に非常に高価な代償を渡している。つまりソ連の対日参戦の代償として、外蒙古の主権とソ連が日露戦争以前に満洲でもっていた権益をすべてソ連に渡すことと、大量の物資をソ連に与える約束をしている。これが終戦後の極東の情勢を根本的に変化させている根底である。このようにして五月にはドイツが、八月には日本が、全面降伏したのである。

この際とくに私の申し上げたいのは、蔣介石がもっとも信任し、とくに米・英が唯一の情報源とした国際問題研究所の王所長は、国際共産党員であったということである。それがわかったのは、終戦後国民政府が南京に移ってからだということである。事の真偽のほどについては私にはわからないが、王所長と長年同じ機関で仕事を共にしていた中国人から、国際問題研究所は中国におけるゾルゲ機関であり、日本に関する情報は、日本のゾルゲ機関、満鉄調査部などの日本人の手を通じて入手されていたという詳細な状況を聞き、終戦前後の多くの疑問を解くことができるような気がしている。

中国を舞台にしていた国際共産党の戦略目標は、国際共産革命の最後の勝利を確保するために、

当面まずソ連を擁護する。ソ連を擁護するために、日本の北進論を南進論に転化させる。具体的に日本を中国との全面戦争に引きずりこみ、さらに進んで米・英戦争を起こさせる。日本はおそらくその緒戦においては勝つだろう。南方の諸民族も協力するだろう。戦局が長びくにつれて、南方の諸民族は独立のスローガンを与えられただけで、その物資はすべて日本の戦局に注ぎ込まれていくことがわかるようになってくる。戦局は日本にとってぜんじ不利となってくる。その時こそ、国際共産党は、日本も帝国主義、米英も帝国主義だ。真の民族解放は、帝国主義からの手を離れることである。ということ、日本を倒し、アジアの共産化を完成できる足がかりとするという見通しをもっていたものと言われている。

以上は国際共産党の極東における工作の一部であるが、中共はこのような国際共産党の対極東工作にあわせて、これまた驚くべき工作を行なっているが、省略することにする。終戦後の現在も、このような国際共産党ならびに中共の世界革命工作は、いぜんとして継続されているものと信じている。以上申し上げたように、中国共産党は中国民族の目ざめ、立ち上がりの気運を基盤として、中国共産党中心の物理的・心理的圧力による強力な権力体制・統治体制を構造的に組織しつつ、六億七千万の愛国的総動員体制の確立を企図しているのである。立ち上がりつつある六億七千万のすべての人々は、有無をいわずに物理的・力学的・心理的圧力のもとに行動的に組織されている。

行動は変革であり、革命につながる。いま大陸では六億七千万の総動員体制による革命行動が、やむことなく展開されている。これこそが新中国建設の原動力であり、対外膨張策の根源である。

要するに、中国共産党による革命の主要課題は、政治権力が永遠に共産党の手中にあるということである。新中国とは、中国共産党が政治革命によって獲得した権力を推進力として、社会革命を行なっている国である。権力構造の変革によって支配構造の変革を強行しているのである。

中国革命の場合まず政治権力を獲得した中共は、その権力の安定と永続を図るために、古い政治権力の基盤としての社会的経済的基盤を分解しつつ、新しい政治権力の社会的経済的基盤の建設を必要としている。すなわち経済的には未熟な生産力しかもたない生産関係を否定すると同時に、新しい生産関係による生産力の増強を図り、それによって政治権力の物的基礎を強化するという課題をもっており、さらにまた社会的には、五千年の文化・伝統を否定すると同時に、新しい文化を打ち建てることによって、政治権力の社会的基盤をつくりあげていくという課題と取り組まなくてはならない。このような破壊と建設という困難な革命を遂行するためには、強力な権力——独裁を必要とする。その政治権力を、彼らはプロレタリア独裁と言っているのである。彼らはプロレタリア独裁という新しい政治権力を推進力として、社会主義革命を行ないつつ、その社会主義革命によって、共産党支配の基盤を構造的に変革し、かつ建設し、そしてまたそれによって、政治権力をより強力に構造的に変革しようとしているのである。

以上私は第一に、中国共産党中心の物理的統治体制について、第二に、中国共産党中心の心理的統治体制について、第三に、それらに結びつけられた民族的愛国運動について、三つの面から、主として否定的な面を避けてお話ししたわけであるが、このような力学的・物理的・心理的統治体制はそのまま新中国革命の原動力となっているものであると考えている。

四　む　す　び

新中国においては、共産主義社会という魅力的な言葉は、若い世代の心をとらえている。未来がほとんどすべてである青年にとつて、現実に独立を獲得し、自ら建設している姿は、非常に大きな力の源泉となつているものと思われる。豪華な建設、驚異的な生活記録が続々と発表されており、またこれからも発表されていくことであろう。そしてまた広大な土地、豊富な資源をもつ国土が集中的に開発され、建設されてゆく限り、それは世界の力関係を変えていく大きな要素となつていくことであろう。にもかかわらず、私は新しい中国では、中国民族自体が何千年と歴史的に蓄積してきた文化の深さ、英知というものは、一切しりぞけられて、小ざかしい権力者の技術的な知識が尊重されすぎていきはしないかと思つている。

諸外国の力、とくに日本の圧力は、ついに中国の全民族を立ち上がらせ、目ざめさせている。このような民族の立ち上がりの基底を流れているものは、文化の失調から立ち上がりつつある民族的

な自覚である。そのような時に、毛沢東が中国に持ちこんできたものは、マルクス主義者の言うもつとも魅惑的な言葉としての「人間による人間の搾取のない社会を作る」という仮説とともに、憎悪の組織による闘争の哲学と実践であった。毛沢東は中国民族を圧迫するものへの憎しみを組織することに成功した。民族の独立を真正面に押し立てながら階級闘争を従属させ、中国の主権を回復し、統一戦線政策のもとに、あらゆる階層の人々を糾合して政権を獲得し、建設している事實は、なんといてもすぐれた党の力であることは否定できない。毛沢東に対する大衆の信頼は、けつして作爲的に強要されたものではない。しかしまたそれは、けつしてプロレタリア革命の勝利なのでなく、民族革命、中国文化、中国民族の目ざめの勝利だったのである。ところが、党が政権を握ったとたんに、このような民族的勝利を階級の勝利に置き替え、同じ国民を敵と味方に分け、党の指導性、党だけの独裁を主張し、階級闘争を通じての統治を行ない始めた時から、党と大衆は離反し始めている。

社会化という名のもとに、大衆の過去の蓄積であった資金と生産手段は、すべて国有か集団所有にとつて替わらされ、個人の手もとは一物も残されていない。六億の生産者を生産手段と生産物から引き離すことによつて、生産者を賃労働者としたのである。人民公社の出現で、労働力以外何物も持たない六億の賃労働者の群が生まれたのだ。その労働の蓄積は権力の介入によつて大きく蓄積され、マルクスが賃金奴隷（どれい）制としてその廃止を叫んだものが、それ以上の過酷な形で公然

と行なわれている。人間による人間の支配の終末をもたらしうる基本的な組織構造として想定された人民公社の中で、人間生活のいっさいが計画され、命令されている。人間を隷属から解放するためという名目によって、中国の歴史にいまだかつてなかった強大な権力が行使されている。

このような専制は力を生み能率をあげている。いっさいの価値の基準は生産量におかれ、集団の名において個人は無価値になっている。人民公社は合理化され能率化されているが、そこには人間そのものがなく、あるものは個性を失い、考えることを忘れた人間の集団だけである。たしかに人間は組織の中でおぼれかけているようである。

かつての中国文化の基盤は、人間そのものにおかれ、ここでは人間の尊厳性、人と人との関係が重視されていた。中国文化の生命は人間本位の生活であり、人間完成への指向をもったものであった。新しい中国においては、物に重点がおかれ、すべてを生産で割り切ろうとしているため、人間の尊厳性ははるかに遺のけられているのである。礼俗と謙讓による社会秩序は、権力的な規定に置き替えられ、人間本位の社会体制から、生産本位、能率本位、組織本位、そして共産党本位の社会体制へと権力的に大きな変革が試みられている。

人間のための生産であり生活であったものが、生産や組織のための人間に変革されつつある。しかも思い上がった共産党は、それらのいっさいを計画し命令している。このような人間変革の過程の中で、人間は物化され、手段化されている。おおらかで自在であった中国人や、豊かな人と人と

の關係は、みじんも見られない。そこでは人間的なものが否定されている。人間的なものの否定は文化の否定である。文化とは人間本質の実現にはかならないし、文化問題は人間存在のしかたの問題である。性急に打ち建てられようとしている権威は、人民に奉仕することの代わりに、粗暴な姿で人民に対する高圧的な要求となつて現われている。せつばつまつた革命そのものは、強制による人民の行動だけを必要としているのかもしれない。急速な社会の再編成に、人民の意識が追いついていけず右往左往しているのかもしれない。しかしそこには、人間関係を豊かにしうるような兆候はみじんも見られない。新しい文化がその民族の生命を継承していくためには、その民族の文化的伝統が近代的に批判されながら、新しい文化として成長していく以外ないはずである。中国文化の破壊と否定にたつ共産主義文化に対して、中国民族の伝統が反発し、党独裁に対して人間性が反発している。

いかなる権力も無制限に人間を破壊することはできないだろう。人間が人間であることをやめない限り、人間はついに人間にふさわしい世界に造り変えていくことであろう。私は人民公社は公社それ自身の成長の中に、再革命を準備しているものと信じている。（拍手）

質疑応答

問い 中ソの対日政策、とくに中立要求についておうかがいしたい。

答え 先刻いらい申し上げていた中共の革命の力、中国建設の力、それはそのまま対外工作の根源的な力でもある。中共は日共が国際共産党の日本支部であると同じように、その中国支部として誕生したものである。

国際共産党の目標と任務については、レーニンがはっきり示している。つまり、「ロシア革命の最大の歴史的課題は、国際的諸任務を解決する必要性、すなわち、国際革命を引き起こし、狭い民族的なものとしてのわれわれの革命から、世界革命への移行をなしとげねばならぬことである。そしてまた、勝利したプロレタリアトは資本家を収奪し、自分の国において社会主義的生産を組織した後には、他の国々の被抑圧階級を味方に引きつけ、これらの国々で資本家に対する蜂起（ほうき）を誘致することによって、その他の資本主義世界に対して蜂起し、そしていざという場合には、軍事的暴力を用いてさえも、搾取階級と彼らの国家に向かって、立ち向かっていくであろう」と断言している。

これは基本的な革命路線ではあるが、これを実現するための当面の戦略としては、一九五七年十一月、モスクワの革命四十周年記念大会で採択された平和宣言の中に、具体的に決定されているようである。この平和宣言に従って、打ち出された戦略は、資本主義国家との「平和共存」であり、それは共産党と社会党との共同闘争を中核として、平和勢力を結集することによって実現しようというのである。そしてまた、その世界革命の戦略としての「平和共存」を実現するための具体的戦術として、日本に対してとられた戦術は「中立政策」の要

求である。一九五八年十一月十九日、中共の陳毅外相は「日本が安保条約を廃棄して中立国家になるよう期待する」との声明を発表し、同じく十二月二日にはソ連のグロムイコ外相が、日本がアメリカの軍事ブロックから離脱して中立国家になれば、門脇大使に覚え書きを手交している。そのような中ソの要求に対して、一九五九年一月四日には、日共が安保条約の廃止と日本の中立化政策促進を決定し、三月十二日には、安保条約改正反対国民会議の結成による日共と社会党との共同闘争に踏み切っている。このように国際共産党という外部からの圧力で、日本国内が動き始めている点は、はっきりと認識しておくべき点であろう。

この際われわれは、共産主義者の「中立」に対する思想的根柢を見きわめておくことが必要である。レーニンは「中立主義は、ブルジョアの欺瞞(ぎまん)であり、偽善である」とか「共産主義と資本主義との死闘は、第三の道はない」と断言している。スターリンは、「中立政策は他国の侵略を黙認し、機をみて戦争で弱った者に自分の条件を押しつけるものだ」と言っているし、毛沢東もまた「中立は欺瞞であり、第三の道はない」とレーニンの言葉をまねているばかりでなく、「社会主義のソビエト同盟と、帝国主義との間の闘争が、もう一歩尖锐化してくるならば、中国はこちらの側につかなければ、あちらの側につくようになる。これは必然的な傾向である。どうかしてどちらにもつかず、中立でいることができないであろうか？ それは夢想である。全地球がこの二つの戦線にまきこまれていくのであって、いまからの世界で、中立とは人をごまかす言葉にすぎない」と新民主主義論の中で具体的に断言している。フランス共産党の幹部であるジャック・デュクロは「現代の世界に中立などというオアシスみたいな立場があるはずはない。しかし敵の陣営内に中立論が盛んになることは、わが陣営にとってプラスである」(笑)と言っている。

では次にソ連の中立に対する歴史的事実はどうか。ソ連が建国後、第二次大戦までに十数カ国と中立（不可侵）条約を結んでいるが、その隣接国との条約は全部一方的に踏みこじっている。ここにその国名、年月日、事実に関する資料があるが、省略する。

それで私は、以上の理論的根拠と歴史的事実の上から、中ソの日本に対する「中立」の要求は、あくまでも戦術的なものであり、したがって日本が中立策をとった場合の結末は、そこに如実に示されてあるのではないかと考えている。

問い 浸透してくる中共の勢力に対して、日本としてはどのような措置をとったらよいか。またわれわれ学生としては、どのような態度をとったらよいか。

答え 中国の歴史・伝統・文化の否定の上に立って、まったく異質的な文化を築きあげようとしていることについては、先刻申し上げたとおりである。そのような中国文化に深い影響を受けて育ってきた日本人が、どのように対処するかという問題は、非常に大きな文化の本質に関する問題であると思う。

中共の建設そのままが日本民族の文化、人間生活の本質にぶっつかる問題である。したがってこれに対処するためには、終戦後失われたと嘆かれている日本人の本体というものを、日本の歴史にさかのぼって、日本の歴史・伝統の中から、私たちの文化の本質を見きわめ、しかも新しい世界の進運をながめながら、日本文化を近代的に解釈し、その上に立って、共産文化にどう対処すべきかという方針を建てる以外ないのではないかと思っている。

中共によって打ち建てられようとしている文化は、先刻来申し上げたように権力による文化の建設である。新中国の国内建設が進めば進むほど、ベトナム問題が起きるし、ラオス、ビルマ、チベット、インド、金門・馬祖問題が起き、日本問題が起きてくるのは必然のことである。中共政権の考え方、またその構造その他のことから考えて、対外膨張政策は必然の方向であって、ひとり日本だけの問題ではないのだ。

中共にとって世界解放ということは、唯一最高の願望なのであり、アメリカ帝国主義に抑圧されている日本人民を解放するのだという使命観をもって、対外膨張策をとっているのだから、こちらがどうであろうと必ず積極的にやってくる。それは間違いない。しかも日本政府をあらゆる言葉でののしりながら敵としている。にもかかわらず、日本政府は中共問題に対して、無策の静観策よりとれず、研究所一つもっていない。このように消極的な態度で、あのように統一された力によってひたむきに進撃して来る中共に対処することはできない。政府ならびに民間の有志の人々は、真剣になって、日本民族をもう一度真の日本民族としての自覚を、新たにさせるところから出発させなくてはならないと考えている。（拍手）

問い 中共承認問題についてお聞きしたい。

答え 中共承認問題については、私は最初から承認すべきだという意見である。もちろん中共承認問題は、国際問題であって、ひとり日本と新中国だけの問題ではないが、われわれは終戦後世界の政治地図が大きく変わった事実を、事実として認めるところから出発する以外に、紛糾しているこの問題を解決することはできない。

中国共産党が十余年間中国大陆を統治しているということは、敢然とした事実である。このような新中国を国際社会からオミットしておくという自体が、やはり国際関係をより紛糾させている大きな原因ではないかと思う。ただし中共を承認したからといって、中共は世界革命という目標を放棄するはずはなく、国連その他を舞台として、ますますその工作が激化していくことは間違いない。しかし一方われわれには、なんとかして戦争のない真に平和な世界を招来したいという人間の切実な願望がある。そのような願望を積極的に生かすためにも、やはり技術的な問題、時期の問題など、いろいろ複雑で簡単にいかないと思うが、結論的には日本は自主的に承認の方向に進むべきだと思う。（拍手）

問い 台湾問題について。

答え 台湾問題は、現状においては日本が自主的に解決しうるための客観情勢も、能力もないものと思われる。また台湾は、それ自身の力で存在しているのではなく、国際情勢が台湾を存在させているものと思われている。しかし台湾問題を考える場合の根本は、台湾は中共文化に対立する中国文化を堅持しており、それは日本と、そしてまたアジア文化との共同の基盤の上に立っている、という点を見のがすことはできないということにある。

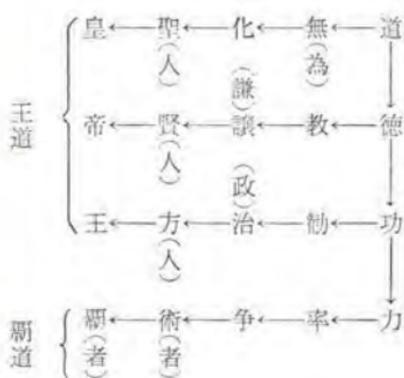
問い 人民公社ができたことによって、人間性がまっさつされ、結局中共は墓穴を掘るのではないかという意見もあるが、中共にルネッサンスをもたらす道があるのかどうか。

答え　いままで何千年来、われわれアジア人の心の支えとなり、生活の中核をなしてきたアジア文化というものは、今日のような東西あい対立抗争する世界において、再び発言する機会があるのかどうかという問題になると思うが、私はだからこそアジア文化のルネッサンスがますます必要であり、そしてまたその実現の機会は今後必ず来るものと信じている。

ただ人間性をまっさつし、アジア文化を否定する中共は、近い機会において崩壊するのではないかという問題になると、私は当面失敗しないと見ている。

後退に後退を続け、動揺している人民公社にしても失敗しない。人民公社を強行しているものは、スターリン主義者毛沢東である。毛はフルシチョフのスターリン批判に対して、はっきりとスターリンを擁護し、ポーランド、ハンガリーの働く人民を戦争で押しつぶしたソ連を、擁護した人である。これは共産主義の本質である。その本質を具体化したのが人民公社である。人民公社に反抗するものは武力で断崖されるのだ。かりに人民の反抗が中共政権を危うくした場合には、人民公社に対して批判的なソ連すら、必ず出兵してでも、中国人の反抗を戦車でたたきつぶし、中共政権を守るであろう。共産主義は物理的な力によって、世界統治を実現しようとしているのである。人民公社を基礎とした物理的な統治が可能であるかどうかは、ひとり中国の問題であるばかりではなく、共産主義の全人類に対する有史以来の挑戦であり、人類全体としての文化上の大きな世界的課題でもある。そのような背景をもつ人民公社は、当面かんとんに失敗することはないものと思われる。その上この人民公社は、中国民族の力に対する信仰によって支えられていると同時に、脅かされてもいるのである。

中国民族の力というものに対する信仰ないし解釈について、中国人から学んだことをお伝えしよう。古来、中国では「徳」をもった者は、天下を治めるといふふう言われている。これは「徳は得なり」ということで、「天下は天下を得たものの天下である」という意味である。



この表の意味は、万物の根源は道である。「道」の体得者は「無為」にして相手を知らず知らずのうちに「化」していく。そのような人間を「聖人」といい、その聖人が主宰者の地位につくと、それを「皇」という。

道は万人に「徳」となって具頭（ぐげん）されている。その「徳」をもったものが「教」えるという作用を行なうて、はじめの相手は「謙讓」な人間となることができる。そのような「有徳」のものを「賢人」といい、その「賢人」が主宰者の地位にいた場合、それを「帝」という。

道に発し、それぞれに「徳」をもっている人間が集まって社会をつくった場合、社会においては「功」というものになって現われる。「功」は社会の人々にいろいろなことをすすめて、行なわせていく。それで世の中は「治」まる。すなわち「政治」である。そのようなことのできる者を「才人」といい、その「才人」が主宰者の地位にいた場合、これを「王」という。

「道」から発して、各個人に体得されて「徳」となり、社会に現われて「功」となった「道→徳→功」は、

万物に対して「力」を与えるものである。「力」のあるものは相手の意思いかんにかかわらず、相手も「率」いていくことができる。それに対して相手は表面服従しながらも、心の中で「争」う気持ちがあわいてくる。それを反抗させないように権謀術策を考えてやっていく者を「術者」といい、そのような「術者」が主宰者の地位についた場合、これを「覇者」という。

「皇・帝・王」者の道を行なうものを「王道」といい、「覇者」の道を行なうものを「霸道」という。万物の根源である「道」は必ず「徳」「功」による「力」をもっている。「徳」もまた「功」「力」をもっており、あの人は「徳」のある人であるが、「力」がないという考え方は成り立たない。「道」は必ず「力」をもち、「有徳」の士には必ず「力」があるのだ。ない者にはせ者である。このように「道・徳・功」には必ず「力」が含まれているが、それらに含まれていない「力」もある。つまり、単独で存在している「力」もある。暴力である。暴力をもった者にはいやでも「率」いられ、服従するよりしかたがない。暴力に勝つために、それと「争」って勝ったとしても、それは権謀術策による覇者交替にしかすぎない。それは霸道である。霸道の「力」に真に打ち勝つことのできる「力」は「道・徳・功」にふくまれた「王道」の力である。

以上申し上げたことは、宋代の哲学者邵康節という人の説で、それを安岡正篤先生が講義されておったものを、私が中国人に中国人としての解釈を聞いたものであり、深遠な哲理からはるかに遠去つたものではあるが、これは中国人の「力」というものに対する解釈の一面であると思っただけならば幸いである。

それで中国人は深遠な哲理を生活に生かして「力」にたいしては無理をするな、従えと理解しつつ、時機の到来を待っている。易イの思想についても、中国人の解釈によると、漢民族のもつ「易」そのものの本体はいかな

る場合にも相対的觀念をもって物に対し、またすべての変化に応じようとする折衷主義であり、あらゆる場合において、その与えられた環境を積極的に破壊したり反抗することなく、これに順応して生きて行こうとするのが、中国人の生活態度の重要な部面を構成しているのである。だから日本が来れば日本に従い、蔣介石が来れば蔣介石に従い、共産党が来れば、一転して共産党に従うのである。昨日まで「国民党万歳！」を叫んだその同じ人々によって、今日は「共産党万歳！」が叫ばれているのであり、毛沢東に対する称賛の中には、中国思想からくる哲理がひそんでいることを、誰よりも深く知っているのは毛沢東であり、共産党なのである。

ところが共産党の企図する政権は「永久政権」であり、このような易世革命の思想を根絶せぬかぎり、中共の「永久政権」というものはあり得ないのだ。人民の服従の中には、つねに再革命に対する是認を残しているのである。中共が中国の思想・伝統・歴史・習俗を強く否定し、明けても暮れても「学習・学習」と思想改造に努力している根本理由はそこにあるのだ。文字改革によって、易世革命思想を内包している過去の中国文字や中国思想との断絶を図りつつある理由もそこにある。しかし中国にはまだ「家」が残っていた。中国の天子は専制ではあったが、それは家族を基盤とする自治社会のためにセーブされていた。中国思想によって是認された革命の天子も、家族体制から生まれていた道統を無視することは許されなかった。

毛沢東の独裁をセーブし、新しい共産文化に対して最後まで抵抗し続けているものは、そのような家であった。そこに人民公社による家の解体という大きな政策的意義がひそんでいるのである。

易世革命の思想がある限り、中国の文化・伝統がある限り、毛沢東はいっひっくり返されるかわからないのだ。中国文化の徹底的否定以外に、共産主義者の企図する永久政権はあり得ないのである。

とにかく天下は天下を得たものの天下であり、中国人は力の所在に従うのである。毛沢東はこの傾向を充分に知りつつ、それを利用して、人民が力の所在に従っておるうちに、中共中心の物理的・力学的・心理的な統治体制の中に全人民を組織してしまおうとしているのである。

漢民族は力に対しては従順であり、共産党員は力に対する狂信者である。だからこそ中国人の一番嫌悪しているソ連の力を背景にして、人民を抑え、ソ連の力を利用して武装闘争の力を強化しているのである。したがって、アジア解放に際しての最大の妨害者である米国の力をアジアから後退させ、米国を世界的に孤立させようとしているのである。

問い 中ソの対外政策に相違点はないか。また中共の対日政策について。

答え 中ソ両共産党はともにマルクス主義を信奉し、共通の世界革命を指向する限りにおいては、同一のコースを歩んでいるはずである。しかしまず第一に中ソ両国の政治的基盤としての歴史的社会的背景は、完全に異質的なものである。国際共産党の戦略としての「平和共存」政策をめぐる中ソ論争の根底には、そのような本質的な相違がひそんでいるのである。第二にマルクス・レーニン主義は、中ソ両国の民族がもっていた伝説的な選民思想に結びついておる。そのため世界革命によって人類を救済するのは、自分であるという使命観にまでなつて、中ソ互いに譲らない。中ソ論争にはそのような思想を背景とするフルシチョフと毛沢東との、主導権の争奪がひそんでいる。第三に中ソの革命移行形態に関する相違である。レーニンの帝国主義論などをめぐって、中ソ論争が展開されてはいるが、それは中ソ両国にとって、いまさら帝国主義論の講義などは必要で

ない。かれらにとって必要なことは、互いに各自が当面している現実政治を正当化するための解釈がほしいだけのことであり、マルクス・レーニン主義という抽象的な権威に仮託して、現実的な政治の矛盾を糊塗（こと）しているだけのことである。すなわち、ソ連は革命四十余年を経て落ち着きを取り戻しており、相当の成果をあげている。それなのに中共はフルシチョフの指導権を拒否し、国際共産主義の団結を乱し、戦略上の全般的計画を破壊するばかりでなく、独走し、暴走するおそれがある。このような中共をこのまま放任しておく、世界戦争を誘発する危険すらある。したがってなんとしても中共を国際共産主義運動の「平和宣言」の路線まで引き戻さなくてはならない。ところが、革命後まだ十年そこそここの中共にとっては、ソ連のような現状維持政策では革命にならない。あくまでも現状打破で積極的に行くよりしかたがない。そのうえ中国の伝統否定に立つ中共は、中国民族の反抗に直面している。中共はそのような国内の急迫した状態に対処するために、中国民族の対ソ反感を利用して、有利な取り引きをしようとして強硬に出ているのだ。

以上のように中ソ両国には本質的な、また現実的な相違点があり、したがって、中ソの具体的な対外政策には、相当な相違が現われているのである。

一例をあげると、フルシチョフは「レーニンが帝国主義論を書いた時と、今日とではすでに時代が違う。兵器が極点にまで発展している今日、もはや戦争はできない。帝国主義国家が企図している戦争は話し合いによって回避できる。共産主義体制と資本主義体制の優劣は、経済競争によってつけようじゃないか。お前は教条主義者だ」と中共をたしなめている。これに対し中共は「世界に資本主義国家の存在する限り、侵略はなくならないし、戦争の危険は絶対にある」とレーニンの帝国主義論を引き合いに出して、ソ連を修正主義者だとの

のしる。その後中共は折れて、帝国主義国家を孤立させ、環境を全部味方にする事ができれば、平和共存策は可能であると言っている。第一に社会主義国家が団結すること。第二に新興国家と団結すること。第三は資本主義国家内における平和勢力と団結すること。この三つの条件が確立した場合には、帝国主義国家を孤立させることができるというのである。つまり、中共の対外政策の基調は、まず第一に資本主義国家間の矛盾を突き、日本に中立政策をとらせることによって、日米離間を図ることであり、第二には資本主義国家と植民地・半植民地間の矛盾を突き、日本の孤立化を図ることであり、第三には日本国内の矛盾を突いて、社会党、共産党を土台として、平和勢力を結集して民主連合政権をつくろうとしていることを意味している。

中共の対日政策の動向を知る一つの手がかりは、中共の対日論調を知ることである。安保改定条約成立前の対日論調は、安保条約そのものは米占領下において、日本が押しつけられてきたものであることは了解できる。しかしこんどの改正は、日本の積極的意思によるものであるから、条約の性格は根本的に違う。それによって日本は米国の戦略体制の中にはいる。つまりそれは東北アジア反共軍事同盟の結成であり、それによって日本は中国を侵略しようとしているのだと、安保改定反対と反米とを直結させて非難している。

新安保条約が成立してからの対日論調は、台湾を米国に占領されている中国民族と、日本の土地をアメリカの軍事基地として占領されている日本民族とは、同じ立場、同じ運命に立っているのであるから、日中両民族は提携して、米国をやっつけようじゃないかと言っている。

次に京城事件が起き、トルコ政変が起きると同時に、韓国・トルコ・日本・中国の四民族は反米統一戦線を

結成して、反米に立ち上がろうと呼びかけている。つまり、日本の安保成立後の状況を国際的視野に広げながら、反米の戦線に統一していこうというのがだいたいの対日論調である。（拍手）

佐藤講師略歴（大正十一年弘前中学卒、昭和二年北京留学、同七年満州国民政部属官、同十二年大同学院教授、同十七年満州国総務庁参事官、同二十七年アジア問題調査会常任理事、同三十四年拓大海外事情研究所研究員）

入浴・夕食・散歩（午後五・〇〇～七・〇〇）

班別討論（午後七・〇〇～九・三〇）

佐藤講師の提出した問題は、客観的事実に基づく現代の全体主義体制の恐ろしさであった。その論述は共産主義と人間についてのきわめて衝撃的な問題提起であった。とくに中共外交の基本ともいべき「接触し、誘惑し、分析し、相戦わしめ、征服する」という戦術が、身近に効を奏しつつあるという指摘は、自分たちが引き込まれた安保闘争の側面を突くものであり、きびしい危機感をよび起こした。またすでに講義を終わった夜久講師や斎藤講師の論旨をめぐっても、人生観・宗教・自己凝視などの問題が山積した。大学教官たちもそれぞれの班に向いて討論に加わった。ついで九時半から一時間、学生の要望にこたえ、夜久、斎藤、佐藤の三講師に分かれて、テーマ別の討議が続き、合宿第二日目の夜はふけていった。



唯物史観の横行を許さず

(第三日)



起床、体操、朝食（六・三〇～八・〇〇）

すがすがしい雲仙の朝の空気を胸いっぱい吸いながら、体操のあとで、声をそろえて合唱を試みる。澄んだ朝空に流れる歌声が、遠くの山あいによこたましていく。参加者全員の心の結びつきも、ひとしお深まるように思われる。

主催者側の自己紹介（八・〇〇～八・三〇）

合宿三日目を迎えて、参加者側の希望もあったので、遅ればせながら、大学教官有志協議会、国民文化研究会の全員が自己紹介を行なった。国文研の会員には、大学の教官もおれば、新聞記者、米穀商、石炭商、婦人科の医者までいて、その多様さに参加者たちは目を見はらせたようであった。簡単なあいさつに笑声もわいて、会場はなごやかな空気に包まれた。

八時半、「日本文化の伝統と現代的意義」と題し、神戸大学助教授黒岩一郎氏の講義にはいった。講師はわが国の古典にこもる生命と価値を力説した。

日本文化の伝統と現代的意義

（講師の希望により旧
かなづかいで印刷）

神戸大学助教授 黒 岩 一 郎

非常にむづかしい演題であるが、結論として私の言ひたい事は極めて簡単である。所が、諸君達は、私をして言はしめるならば、日本人にして日本人ならぬやうな教育を受け来たった人ばかりである。さうした人達に、私がこれから言はんとしてゐることは、なか／＼容易に理解してもらへまいと思ふ。勿論、私は此の四十歳の半ばを過ぎるまで国文学の研究に身を投じて来た者で、その総決算としてこれだけの結論、信念に到達し来たつたのであるから、私なりに自信もあり、時間さへかけるならば、諸君達が日本人である限り、ある程度理解してもらへるのではないかと思ふ。しかし今回はとてもそれだけの余裕はなさそうである。だからその足らぬ所を補ふ意味合ひで、私が持つて来てゐる「日本の心」（テキストとして配布）を此の合宿の期間中なら一番結構だが、合宿中に読めなかつたならば帰省してからでもよいからゆくり読んで、これからの私の話をもう一度反芻（たづな）してもらへるなら此の上もない幸ひである。つまりそれ程私のこれからの話は、諸君達にとつては奇異に響く話であらうと思ふ。然しそれは私が特別変つた話をしてゐるからではなくして——私、

否、眞の日本人にはこれが普通の考へ方なのであるが——諸君達がそんなにも謬った、と言って悪ければ、日本人はなれのした教育を受け来たつてゐることの証左なのである。もつともこれは諸君達の罪ではなくして一部の愚かな文化人的学者や無定見な為政者の罪ではあるけれど……。日本の学者といへば、外国の理論の押し売りか「当てはめ」ばかりをやつてゐて、日本独自の貴重なものを発見してそれを教へようとはしない。だから教はつた諸君達が、これからの私の、当り前の話なんかをも奇異に感ずるやうな人間になつてしまふのである。——米国のライシャワー博士は東京で開かれた東洋史学会で次の如く講演してゐる。「日本の学者の大多数は、ヨーロッパの歴史からみた普遍の原則を以て日本の歴史にあてはめることに努めるが、逆に日本史の研究を通じて、ヨーロッパの歴史の普遍の原則になつてゐるものの誤りを指摘しようとしなさい。そこで将来日本史の価値を評價することは、我々外国研究家の任務となつてくるかも知れない」と。まことに歎かほしい次第である——。此の点諸君達は一種の「不具かたがわ」なのだ。（笑声）……今、諸君達は大いに笑つたが、決してこれは笑ひごとではない。また諸君自身身み資格などはないのだ。その事は諸君達が手にしている「日本の心」の中の「竜安寺と等持院に詣でて感あり」の一章を読んでもらへば分かる。これらの事を判りやすく肉付けして諷刺しておいたから……。然しそれも今の間に合はないから、此処では他の例を挙げることにして、いよいよ本題にはいつて行かう。

一 文化は独立民族のみが創り出すもの

さて問題の「文化」だが、諸君達は私が今、文化と言っただけでどういふものを頭に思ひ浮べたか？ 私は「文化とは果して何なのか」と諸君達に聞きたいのだが、恐らく諸君達の中には的確に説明できる人はないのではないかと思ふ。周知の如く日本は戦後「文化国家」を標榜^{ひょうぼう}して立つてゐるが、その文化国家の最高学府に学ぶ諸君達にして此の有様とすれば、実にすばらしい文化国家ではないか。これについて福田恒存氏が痛快な一文を書いてゐる。新潮社から刊行されてゐる「日本文化研究」講座の巻八の中にある「伝統にたいする心構」の一文で、言ふなら、私の言ひたいことをそっくりそのまま書いてをられるから、ぜひ一読をおすすめしたい。だから、それさへ読んで頂けるなら、わざわざ私がここで演壇に立つこともなかったのであるが、立った以上は何か言はなければならぬし、たとひ福田氏と同じやうな事を考へてゐたにしても、同じやうな説き方をしていては全く能^{あた}ない話なので、私流の説き方をして行くけれど、此処で特に私の強調したいことは、真の文化とは模倣でもなければ、まがひものでもなく、独立独歩する気概ある民族のみが、よくこれを創造し得る貴重なものであるといふことである。

福田恒存氏はエリオットの言を引いて「文化とは生き方である」といふことを種々外国の例を引

いて説明されてゐる。勿論、私もさうでなければならぬと思ふが、それが「生き方」であるだけに私は更にその上に、それが独自のものであるといふことを強調したのである。判りやすく言はう。

諸君!! 諸君達は朝鮮に文化があると思ふか。また台湾に文化があると思ふか。フィリッピンに文化があると思ふか。全学連の諸君は「朝鮮の学生に続け」と実に有難いお触れを出してゐるけれど、残念ながら以上挙げた諸民族には是等の民族を代表するやうな「文化」といふものはない。もしあったら教へてもらひたいものである。私は学生時代「朝鮮文学」には何があるかと思つて調べた所、何も無いのに全くびっくりした事があるが、建築にしる、工芸にしる、同じ事が言へるのである。台湾、フィリッピン、また然りである。ところが参考までにいふと、琉球にはチャンと「神歌」といふ琉球文学がある。今日米軍政下に置かれてゐるけれど、琉球はやはり日本民族の中に包含さるべきすばらしい民族である。

話が横へそれたが、一体これはどういふ事を物語つてゐるかといふと、朝鮮にしる台湾にしる、これらの民族は未だ独立したことがなく、従つて独自の文化を未だ生み出す迄には至らなかつたといふ事である。一体独立しないといふ事は、全く無知蒙昧もくまいの中におかれたか、他民族によつて絶えず征服されてゐたかのどちらかである。台湾が前者に属し朝鮮が後者に属してゐたことは説明する迄もない。此の点地理的な宿命もあるとはいへ、朝鮮は実に気の毒な民族であつた。即ち、開闢かいびやく以

来、日支いづれかの国に併合されることによって、辛うじて生き永らへて来た民族であった。蓋し（げし）征服されるといふ事は、被征服者が征服者の生き方を生かされるといふ事である。当然そこには征服者のものを模倣することはあつても、独自のものを創造する基盤は失はれてしまふ。とすれば、どうして民族を代表し得るやうなものを創り出し得よう。而してこの民族独自の生き方を表はすやうなもの、これが文化なのである。支那文化といひ独逸文化・フランス文化といふ文化を此のやうに理解する以外に、これが文化だと言ひ得るやうなものが果してあり得るか。日本では何でも一芸に秀でた人を「生きた人間文化財」と指定して尊重してゐるが、これらの人の何が文化財なのか。鼻か口かそれとも身体全体なのか。もし身体全体だとすれば、足が三本手が四本でもあるといふなら知らぬこと、常人と少しも変らぬ五体を文化財と指定してみても何になる。とすれば何を貴重なものとして文化財保護委員会は指定してゐるのか、静かに考へてみるならば自然と文化の意味してゐるものも理解できよう。と同時に「無形文化財」などと形容詞をつけて言つてゐることのナンセンスさも自づと判らうといふもの、もと／＼文化というのは無形なものなのである。

然し此の矛盾は既に福田氏が衝いてゐる。で私もこれ以上は言はないが、福田氏が指摘してゐる以上に更にナンセンスな、と同時にそれは如何にも日本人らしい笑ふにたへた用法がもう一つあるのである。何かといへば、それは進歩的文化人などといふ場合の「文化」である。勿論諸君達は進歩的文化人などといふと、世にもえらい人のやうに考へるだらうけれど果してさうなのだらうか。

現在我が国で用ゐられてゐる文化の語を少しく検討してみよう。

二 進歩的文化人といふ場合の文化

ここにカルチャー・パールズといふ語がある。カルチャーといふのはもとより文化と訳されてゐる英語。従つて、ここでもし私がこれを文化真珠などと訳したならば、諸君はこれをどういふ意味にとるだらうか。恐らく「養殖真珠」のことだと気がつく人はゐるのではないかと思ふ。勿論、カルチャーの語意を詳細に知つてゐる人ならば間違ひなく気がつくであらう。だが、此の場合、例へばカルチャー・パールズとは関係なしに「これは文化真珠です」などと言って私が取り出したならば、恐らく十人のうち九人までは模造真珠を思ひ浮べるのではなからうか。つまり、現在の日本では、文化とは「文化コンロ」といひ「文化風呂」といひ便利で安直で、時には人工で本物まがひの、さう簡単には真偽の弁別が出来かねる程巧妙につくられてゐる「にせ物」をあらはす言葉として用ゐられてゐることを知るのである。とするならば、文化人といふ場合、その場合だけ別の意味に用ゐるのは、私はおかしいやうに思ふ。文化コンロ、文化風呂、文化真珠、そして文化人でなければならぬ。とするなら諸君達は文化真珠に敬意を払ふ意味で文化人を尊敬すればいいし、文化人を崇拜する意味で文化風呂に三拝九拝してはいればいいことになる。須らくこれから入浴する時は齋戒沐浴して文化風呂にはいることだ。（笑声）いま、諸君達はドツと笑つたけれど、笑つた所を

見ると「文化」とはそんなものでないと気付いてくれたことゝ思ふが、上述のやうな文化論をさし当って福田恒存氏と私を除いて、如何なる「自称文化人」が説いてゐるか。福田氏も進歩主義的文化人からは、かなり毛嫌ひされてゐるやうであるけれど、私などは文化人の仲間入りさへさせてもらへない。とすれば、今日文壇やジャーナリズムの主流をなしている文化人達は、上述のやうな言動を保守反動視してゐる。ただその事だけから見ても、自分達に冠らせてゐる文化人の文化といふのは、ほかならぬ文化コンロの文化なのだと思つてゐることになるのだと思ふのだけれど……。諸君以て如何となすや。而してこの私の話は「勤評は戦争に通ずる」といふ廻りくどい議論より、もつと／＼直接的で、いはば「その物ズバリ」の議論であると思ふのだけれど……。

勿論眞の文化はそんなものであつてはならない。それでは「文化国家日本」の日本が泣き出さうといふものである。それを困つたことに「文化コンロの文化人」が、自分の顔に自分で泥を塗ることになるとも知らずに「いかさまもの」を文化と錯覚させてしまったのである。その結果が今日の文化国家日本の、此の植民地的な似而非文化の氾濫であり、民族の伝統と国史を忘れた祖国喪失症患者の横益なのである。これでは進歩主義文化人のいふ文化国家ならいざ知らず、正しい意味での「文化国家日本」と果して言ふことが出来るであらうか。

三 真の日本文化とは

限られた時間で、まだ／＼先きを急がねばならないので、此処で微に入り細にいった文化論を展開してゐる暇はないが、以上述べた事によつても、本来の文化といふものが如何なるものであるかといふ事は、臆気ながらでも分かつて頂けたかと思う。それは既に言つたやうに、気概と勇気のあつた独立民族の、その独自の生き方、それが文化なのである。とするなら、今度の戦争にこそ敗れたけれど、悠久二千有余年、それこそ世界に比類のないほど長い間、この東洋の天地においてよく独立を保ち、外国から侵されることのなかつた我が日本民族には、もとより輝かしい文化がある筈である。独自の生き方があつた筈である。ではそれは何か？ 結論は簡単である。それは、

此の上もなく平和を愛しながら——古くは国号を「大和」とさへ言つた——民族協同体の中心として皇室を戴き、これを精神的拠り所として、一朝有事の際には、上、天皇のもとによく民族的
大和と団結を図つて外敵を退け、今日までの繁栄をもたらしめた。

といふことである。私は率直に言つて、上に天皇を戴いて民族団結の統合とし来たつてゐる此の生き方を、それこそ世界に誇るに足る最大の日本文化だと思つてゐる。蓋しこれは日本文化の粹であり、エキスである。

所が、ここで諸君達に此の事について注釈を加へなければならぬことは、私の最も遺憾とする所

である。といふのは本日開口一番言ったやうに、諸君達は日本人にして日本人ならぬ教育を受け来たつてゐる人である。言ふなら此の日本で飯だけ食つてゐる外国人のやうなものである。それも無知ならばまだ判つてもらひやすい。それが臟腑くわいぶまでバターくさくさになってしまつてゐる諸君達に、刺身の風味ならとにかく、もっとく、デリケートな民族文化の根原の美味を知つてもらはうといふのだから、これはとても無理な話であり、これだけを判つてもらふだけでも、今度の合宿の全日程を費しても駄目だらうと絶望してゐる。しかし以上の事は絶対の真理なのである。そしてもし将来日本民族が、此の日本の唯一至善至美の文化的生き方を捨てるやうな日があつたならば、その日から日本人はもう永久に駄目な民族になり下つてしまふであらう事を私は確信してゐる。かのインカ帝国のやうに、そして蒙古民族のやうに……。私はそれを防ぎたいのである。そのために私は貧しい「日本の心」の著も配布したのだし、今はよしや馬耳東風の如く聞かれるにしても、一度でも諸君達の耳に入れておいたならば、将来何かの機会に思ひ出されて、今後の諸君の思考の一助ともなり得ることがあるならばといふ悲願から、あへてこんなことを縷々述べてゐるのである。だから、今日は、此の問題はこれ位にして先に進むけれど、諸君達にくれぐれもお願ひしておきたい事は、「なあーんだ、戦前型人間の迷信的言挙げか」と一笑に付さないで、虚心坦懐に此の問題を考へてほしいといふ事である。私は迷信などを叫んでゐるのではない。私の尊敬する先学に、九州大学の教授であつた佐藤通次博士といふ方がゐる。此の博士の著に「人生についての談話」（理想社刊、二

五〇円）といふのがあるが、博士は此の著の中で、西洋哲学、キリスト教、儒教、仏教等との対比のもとに、日本の神道並びに日本的思考をつぶさに検討して、上に皇室といふ中心をおいた日本の神道的思考は、実に世界に冠たるもので、日本人が生み出した至善至美至高の芸術品であることを強調されてゐる。謙虚にその著を読んでみて、それを論破できるだけの君達が、それこそ近代思考として尊敬してゐるであらう西洋哲学の深い素養でも身につけたならば、何とでも評してくれ給へ。私も謙虚に耳を傾けよう。それを何にも知りもしなければ判りもしない者が、最前述べたやうな文化人達の謬った言動に惑はされての、門前の小僧のお経的批判では困るのである。昨年私はある女学生から「教育勅語は戦争に通ずる」と言はれて、くつてかかられた事があつた。そこで「何処が戦争に通ずるのか」と聞いたところ、黙つてゐるので、「一体、君は一度でも教育勅語を読んだことがあるのか」とさらに聞いたら、「一度も読んだことはないけれど、学校の先生がさう言つたから、私もさうだと思つてゐるのだ」との返事だつた。これでは落語の「オチ」にもならないのである。

——此処でチョット雑談をさせてもらふ。そして此の事は「日本の心」の中にも書いてゐることであるが、私に台湾の友人があり、その台湾人が時々遊びに来て私に話すのだけれど、周知のやうに台湾島人は「台湾は中共のものではない。台湾島人八百万人のものだ」と反共反蔣の独立運動を起してゐる。私の友人もその一人であるが、彼がつくづく私に言ふのである。「日本の皆様は何故

あんなに貴重な皇室をお粗末にし、光輝ある歴史をないがしろにせられるのでせう。私達身を焼くやうな思ひを懐いて祖国の独立運動に身を投じてゐる者には、どうしてもその真意が判りません。私達にせめてその一つでもがあれば、今日が日にも八百万民衆は一つになれて独立が出来るのですけれど……」と。一本立ちできぬ民族の悲願察すべきである。そして、祖先達の輝かしい歴史と、世界に誇るべき皇室の存在によつて、あれだけの曠古の敗戦の憂目にあひながらも、戦後僅々十数年にして、既にこれだけの繁栄を来たしてゐる私達日本人ではあるが、天に恥ぢず、神を恐れぬ、愚かな、そして飽くなき貪婪さを持つてはならぬのである。ギリシャ・ローマが何故に亡んだか、殷鑑は決して遠くにあるのではない。ここらあたりで静かに反省すべきであらう。

四 過去を否定する者は今日の自己を否定する者である

閑話休題、私達祖先の根本的な生き方が以上の如きもので、そのために、よく二千有余年の独立と繁栄をもたらし得たとする時、その歴史が長く、その繁栄がすばらしければすばらしいだけに、その生き方を形象づけてゐるもの——これを文化遺産といふ——は、それこそ枚挙に暇がないのである。かの世界最古の女流作家といはれているメリー・ド・フランス（十三世紀初頭の人）よりも、二百年も古く世に出て、それこそ世界に比類のない文化の跡をとよめてゐる紫式部の源氏物語も、すばらしい文化遺産なら、世界最古の木造建築といはれてゐる大和法隆寺も、世界に誇るべき私達

の文化遺産でなければならぬ。このやうに数へて行くならば、正倉院の御物・空海の真言宗・土佐派の大和絵・写楽の浮世絵、さては謡曲・茶の湯・相撲等々と、ここで列挙するだけでも疲れてしまふであらう。だが、今日の主題はそんなことが目的ではない。よって文化論議はこれ位にして、ではこれらの文化の現代的意義は何なのか、といふ中心的主題にはいつて行くことにしよう。その際、此の結論も極めて簡単で、ただの教語に尽きるのであるけれど、前述の真正文化の結論と同じやうに、今それを持ち出しては諸君達の耳には、これまた余りに唐突に聞えようと思ふ。それで此処では少しく説き方を変へて、例の文化人達が今日大いに叫んでゐる主張に耳を傾け、それを批判することによって、私の言はんとしている所を聞いて頂くことにしよう。

先づ第一番に思ひ起されるのは、戦争憎悪の戦後の風潮に媚びる余りに、今次の戦争の責を一切我が国の歴史的必然に帰して、戦前のものをすべて否定し、「我々平和愛好者は過去の日本の歩みを否定して、須らくよりよき未来に生きねばならぬ、云云」といった趣旨を強調してゐる事である。ところが、おかしなことに、これがまた世にうけられて、現に、諸君達もそれが正しいかの如く教へられ来たつてゐる。即ち日本人でありながら少しも国史を教はらず、日本の大学を出ても、外国人さへ知つてゐる我々祖先の先覚者の名さへ知らぬ化物が巷に氾濫してゐる。然し、諸君!! ここで静かに考へてほしい。過去を否定するといふ事はどういふことになるかを。歴史の歩みは今日を以て静止するのではない。悠久に続くのだ。とすれば、今日過去を一切罪惡として否定するこ

とは、次の時代において又同様に否定されてしまはないことを誰が保証し得よう。つまり過去を否定することは、裏返して言へば今日を否定することになるのである。哲学を云云する諸君だ、此の理窟が判らない筈はないと思ふ。とすれば、理の当然として、真に正しく今日に生き、未来に生きようとしたならば、過去の国史の生き方を今日に生きるより方法がないことになって来るではないか。これを古典に生きるといふのである。蓋し、古典は私達祖先の過去の生き方の記録だからである。私達は古典を読んで国史に帰れ、伝統に帰れと声をからして言つてゐる所以である。

私達は戦前の行き方に少しも間違ひがなかつたと言つてゐるのではない。しかし、もし間違ひがあつたのならば、それを直せばよいのだし、その直す指針はこれを国史に求め、過去の古典に求めるしか方法がないことを言つてゐるのである。これを他人——外国に求めて何が得られる？ 日本民族が、これからの未来に真に明るく正しく生き続けようとするならば、宜しく国史にかへることだ。国史にかへる事によつてのみ、初めて未来に正しく生き続けられるのである。文化人達の子供だましのやうな議論に迷はされてはならない。

五 新しさ、合理性などについて

次に進歩主義派の人々は「新しい何々」「新しい何々」と無闇やたらに「新しさ」を言ひ、また「合理的に生きよう」などと盛んに合理性を云云される。それだけを、そしてその部分だけを聞いて

てみると、いかにも新しいものがあり、合理的に事は進んでゐるように思へるが、これもじつくり腰を落つけて考へてもらひたい。科学の世界なら知らぬこと、人生処世の道や人倫関係などに果して新しいものがあり得るだらうか。あつたらそれこそ見せてもらひたいものである。たとへば、親子夫婦の關係に例をとるなら、此の關係は①親あるひは夫が絶対的な権力を持つか②妻或ひは子供が持つか③それとも兩者協動的にゆくかの三つしかない。所が、此の三つはただ形式的にわけてみた場合の分類であつて、実際には、親子夫婦であり、親にして同時に子、夫にして同時に妻たることはあり得ないのであるから、子或ひは妻の立場からみれば①親或ひは夫を大切にするか②しないか、の二つの立場しかあり得ないのである。私は此の場合親を大切にしろ、夫を敬へと教訓してゐるのではない。粗末にしたければ、それこそ粗末にしたつて私はかまはない。しかし自分が子供である時は親を粗末にし、自分が親になつた時、子供に親孝行をしろと言つたやうな勝手な議論は困るといふのである。そしてこれ位な、といふのはたつた二つ三つしかない親子・夫婦關係の現実に臨んでのさまざまな葛藤などは、人類五千年の歴史が今日のこと新しい実験などを待たなくつたつて、とつくの昔に経験済みだと言つてゐるのである。だから新しいものなどはやあり得ないと断言するのである。それを進歩主義文化人はどう言つてゐるか。たとへば、かうだ。

「ここにテレビがある。子供は五チャネルにするというし、親は二チャネルが見たいといふ。かういふ場合、今日の世に新しく生きてゐる親子としては……」

実際「ふさげるな!!」と言ひたくなる。なる程、テレビこそ昔はなかった新しいものかも知れないけれど、親と子の意見が違った時、これをどういふ風に調和したら納りがよいかは、五千年の昔から経験し来たつてゐることだ。それこそ孔子様にも聞けば親切に教へて下さる。それを今日、母親大会などにおいて、莫大な経費と時間をかけて討議してゐるのだから、これだけは今迄になかつた物笑ひな新現象だ。

そもそも「経」といふ字は「タテイト」と読むが、それは治乱興亡、幾変遷を経ようとも、人間として絶対を守り踏み行はねばならぬ道のあることを示したものである。而して此の道のことを書き留めたものを経典といふが、キリスト教の聖書もこれなら、孔子の論語、仏教の様々の経典、いづれも皆これである。所が、今日の我が国においては、過去の一切の経典が弊履の如く捨て去られて、最も経を説くにふさはしからぬ俗人共が、経まがひの莠言（コトワザ）（善に似て、しかしその実、害をなす言葉）を説く所に、その混乱の因があるのであるが、これなどその尤（いよ）なるものと言へるであらう。私の知つてゐる倫理学担当の教授に——戦前はものすごい軍国主義者であつた——敗戦の日を境にして、旧来の道徳に疑を抱いたと言つて、目下マルキシズムを説いてゐる人がある。こんな人でも倫理学者なのかとおかしくて仕方がないが、戦さに敗れたからと言つて人を殺してよいものではない。泥坊をしてよいものではない。祖国を愛さなくてよいものではない。親を大切にしなければよいものではない。そこには人倫として絶対を守り通さなければならぬ「経」がある筈だ。そして、

此の経にもし新しく付け加へるものがあるならば、それを説く人は如何なる人であらねばならないか。釈迦や孔子やキリストや日蓮などの受難史を静かに思ひ浮べて、今日暖衣飽食してゐるこれら莠言の徒と相对比して頂きたいものである。今日よく「新しい愛国心」などと言はれてゐるが、新しい祖国への愛情などはあり得ないのである。ただもう祖国を愛するだけである。愛して愛しまくるだけである。そしてもし違つてゐるものがありとすれば、それは現はれ方の違ひだけである。ゆめ／＼本末を顛倒してはならない。

次に合理的に生きるといふ問題がある。然し、大分時間も残り少くなつたので簡単に話を進めたい。私自身、合理性そのものは決して否定はしないが、よりよき未来に生きるために過去を否定しろといふやうなことを言つて、此の上ない不合理な生き方をしてゐる連中が、いくら口に合理性を叫んだところで、そんな合理性には信用が置けないだけである。これについて私にはおかしくて仕方のないことがある。といふのは世の合理主義者の多くは進歩主義陣営に属し、封建性家族主義の欠点を言つて、男女恋愛の自由を謳歌されてゐる人々のやうに見受けるが、私などは恋愛ほど非合理なものはないと思つてゐる。もし恋愛が合理的なものなら、それこそ人生は大変なことになつて「雄の争闘」は絶へず、世上には所謂「売れ残り」のお多福が氾濫することだらうと思ふ。それが「山から蹴ころがしたやうな松の木丸太でも」結構結婚して幸せになつてをられる所に、人生非合

理のおもしろさがあるのだと思ふのである。世の諺に「縁は異なるもの味なもの」「たで食ふ虫もすきん」といふのは、これを言ふのである。此の点、世の進歩主義的文化人の方々は「さあ世の中をよくするために結婚しませう、接吻しませう」と言つて、子供を産んでをられるのであらうと、私など本心に心の底から敬意を表してゐるのである。（笑声）イヤなか／＼出来ないことだと感心してゐるのですよ……。

六 日本文化の伝統と現代的意義

此の他戦前から引続いて戦後も流行児となつてをられる文化人方の言挙ことばげにはいろいろあるが、大凡は右のやうなものであるので、それに時間もいよいよ迫つて来たので、此処らあたりで結論をつける事にする。しかし、その前にもう一つだけ言つておきたい事がある。それは最前、諸君達学生の自由討議の時間に、東京の某君が「私の尊敬する某学長が『無防備中立でいいではないか。そして侵略されれば、されたっていいではないか。侵略によつて民族は滅亡はしない。印度がそのよい例である』と言はれたが、私もその説を信奉する」と言つてゐた考へ方についてである。私も同様の言葉は左翼陣営の人からしば／＼聞いてゐる。だから、それは天下一般の此の派の人々の思考であるやうだけれど、此処でもう一度「真の文化とは独立民族のみがよくこれを創造し得るもの」といった本論冒頭の一節を思ひ出して頂きたい。重ねて言ふが、電車が走り戸毎にテレビがついてゐ

るやうな社会を文化社会といふのではない。それを支へる礼節あり気概ある精神が伴つてゐなければならぬのだ。汽車や電車なら朝鮮やインドネシヤでも走つてゐる。いや／＼それどころか上野の動物園の中でも走つてゐる。あそこでは猿が機関車を運転してゐるけれど、あの猿も文化猿といふことが出来るのであらうか。恐らく誰もあの猿を以て文化猿といふ人はなからう。蓋し、自主独立する能力も精神もない事を知つてゐるからである。それと同じことである。もし我が国が外国に侵略されるやうな事があつたならば、同じ地域内において、同じ文明の利器を駆使させられようとも、その生き方たるや征服民族のものであつて自分のものでない点、上野動物園の「人まねの猿」と少しも変わらないのである。誰か、こんな生き方を以て文化的生活と言ひ得ようや。此の点、最前の学生のやうな妄言を吐く者は、ただその一語によつても、彼が如何に文化からは縁遠き存在、此の場合たとへて言ふなら、人間よりも上野動物園の猿に近いやうな痴物しんぶつである事は言をまたないであらう。

かくては私達日本文化の道統を継がんとする者の、今後なさねばならぬ任務も自づと理解のいたことと思ふ。それは今日の世の似而非文化人達の提唱してゐる文化観を追放することである。彼等が文化人面おとこして、これが文化だなどと見せかけてゐるものが、如何に非文化的で、野蛮で、暗愚なものであるかを、日本人一般に知らせてやる事である。更に詳しく言ふならば、今日我が国の上下にみち／＼してゐる進歩主義のないし左翼的文化観並びに文化は、敗戦の悲境と占領政策の産んだ

奇型物であるが故に、その「実」はその「名」に最も遠く、極めて非文化的なものである。蓋し、それは民族を滅亡にさへ導き、人の世に退歩と暗愚をもたらすものである。これはすべからず日本はもとより、此の地球上から追放しなければならぬものである。此の追放の負托に応へるものは、日本のみならず世界真正文化の伝統精神でなければならぬ。我が日本文化の伝統もまたよく此の任に堪へるものの一つであることは誇つてよいと思ふ。かくて日本文化の伝統は、此の植民地的文化に対決する所に、今日的に生かされるのであって、此の対決に相向ふ者こそ、真に日本文化の伝統を踏へた者でなければならぬのである。これが今日の世における真の意味の文化人なのである。此の点、縁あって本日の講席に連り、私の話を聞いてくれた学生諸君にして、輝かしい日本文化の伝統を体し、祖国喪失といふ此の最も根本的な非文化性に対決せんと奮起してくれる人もしあるならば、私の喜びこれにすぎるものはない。それらの人の一人でも多からん時それだけ「文化国家日本」の到来の早からんことを私は信じて疑はない。何故なら、敗戦直後我が国が「文化国家」を標榜して立った日以来、我が国には真の文化はなくなつてゐるのだから……。今日恩師にお辞儀するような大学生は日本の大学には殆んどゐないのである。かくてはどこをさして文化国家と言へるのか。せめて諸君達の今後の良識ある判断と行動を望んでやまぬ。（拍手）

黒岩講師略歴（旧制姫路高校を経て昭和十二年東大国文科卒、応召帰還後母校姫路高校の教授奉職中、学制改革により神戸大学と合体し、助教授として現在に至る。著書

「香川景樹の研究」 「近世短歌」ほか

班別討論（午前一〇・三〇～一二・〇〇）

黒岩講師の提出した「文化」「伝統」「天皇制」などの問題をめぐって各班とも激しい討論が続いた。この問題は戦後の教育によって、歴史と伝統から切り離された現代学生の最大の盲点に触れている。「中等教育以上を受けた国民が自国の古典を知らなくなったとき、その国は滅びる」とは、歴史家トインビーの言葉であるが、古典に対する現代学生の無智と無関心が、どのように積極的関心に変わっていくかのポイントにぶつかつたわけである。古い因習ではなくてわれわれに残されたかけがえのない民族の遺産を、どのようにして現代の若い人々とともに再確認しようかとする問題である。天皇制——と言えばすぐに右翼だと思ひこんでしまう学生も少なくないし、日常生活の自然的な触感から、天皇をそれほどにきらっていない学生もいる。しかし過去の日本が断絶して現在の日本になつたとする見方を、なんとかして是正しようとする努力が、熱心に払われて討論は続けられた。歴史が途切れてしまっているのかいないのか、このような素朴な問題を、各自の感覚を生かして静かに反省した機会にもなつた。国民の心に深く根ざした日本人らしい敬愛の感情も、そこに自然とよみがえってきていた。しかし他面イデオロギーのわくを固守しようとする学生たちから、強い反論や疑問が数多く投げかけられ、心の触れ合ひ理づめの議論で時をすごさねばならなかつた班もあった。だが要するに問題は、理論の正否とともに体験の相違をよく理解し合おうとする努力が一同によって払われていたことにあつた。

ようである。真剣な学生たちのまなざしの中に問題解決のしよ光が認められたことはうれしい限りであった。

昼食・昼寝（二・〇〇）一・五〇）

昼寝は日程プランにはなかった。しかし連続した講義と、それに伴う討論によって、全員の疲労が目立ってきた。そこで運営についての対策が必要とみとめられ、昼寝一時間が決定された。それは全員にとって歓声をもつて迎えられ、雲仙の宿舎に時ならず静寂の真ひるどきをもつこととなった。つぎの羽田講師によるきびしい講義のためにも、この昼寝決行は有意義であったようである。

むずかしい講義と班別討論に疲れた心身をいやして、午後の講義を迎えた。鹿児島大学助教、羽田重房氏は「現代政治の批判と新しい指標」と題し、参加者全員の魂に食い入るような熱烈な口調をもって、二時間にわたりマルキシズムの病根をえぐり出した。

現代政治の批判と新しい指標

鹿児島大学助教授

羽田重房

講義項目

一 社会主義国家体制

- (一) 個人自由主義の問題
- (二) 十八世紀的社会主义
- (三) マルクス主義

二 ソビエト独裁体制

- (一) ソビエト独裁体制の根本
- (二) 共産党
- (三) 共産党員

三 日本における独裁体制国家への動き

- (一) 日本のエリートたち
- (二) そのための構想

四 世界国家の問題

(一) 白人帝国主義

(二) ローマ帝国主義

五 新民族主義

(一) 戦後の民族主義運動

(二) 新民族運動の方向

六 むすび

現代政治といっても、主として社会主義政治体制のお話になるかと思う。もちろん批判の対象としては、資本主義体制下における政治と社会主義体制下における政治に区別はない。しかし資本主義体制下における政治については、多くの批判がなされており、私どもが経験的にも知り得るのに反して、社会主義体制についてはあまり知られていない。それで、後者を中心にしてお話します。だが私が前者に批判の余地がないとしているのではないことは、前もってご了解いただきたい。

今日の世の中では、社会主義による資本主義的政治批判という方向が一般的傾向のように見られる。皆さん方は、その中に育ち大学にはいり一応その線の中で自分の思想ができたと考えられる。そして小智小見であるかもしれないものを基準にして、自分のと違った先輩や先人の学問や思

想に対して、大変思ひ上がった気持ちですぐ鼻先で冷笑する。自分の思想をもう一度検討してみるということせず、保守だ反動だと決めつける。しかし、きょうはそれらをできるだけ押えて、頭を柔らかくして聞いていただきたい。

一 社会主義国家体制

(一) 個人自由主義の問題

私どもが現代を考へる場合にどうしても見落とすことができないのは、四世紀から十四世紀までの一千年間の長きに及ぶいわゆる暗黒時代といわれているキリスト教支配の時代である。この時代をなぜ暗黒時代というか——人間の理性の輝きがすべてキリスト教の規律を受けて、本然の光を出さなかつたためである。四世紀の初めごろ、セント・オーガスチンが神の国という書物を書いた。そこには予見された神の国というものがあり、すべての人は神の国に行くべく努力しなければならぬという筋道が立てられた。だから人はこのように考え努力する以外しようがなかつた。

ルネッサンスは一応このようなキリスト教的支配から人を解放するが、しかしその場合人はどこに行くのかはつきりした目標をもたなかつた。ただともかくいまままで真理にしても、美にしても、權威者によつて社会的なものとして授けられていたものが、個人の能力によつて個人的な業として真理や正義、美や善というものを確立すべきものであると考えるようになったのである。真理発見



の業が特定の権威者の手から離れて個人の能力、個人の責任の問題となってくるということは、そこに個人に自由がなければならぬ。すなわち、自由の要求というものが出てくる。ルネッサンスが宗教革命をもたらし、また個人主義、自由主義となってくるのは至極当然なことであった。それはそれでよいが、元来、権威になれた者が不用意に自由を得た場合、ともすると享楽主義、利己主義あるいは幸福主義とでもいうような方向に流れるものである。近代個人主義や自由主義が、ご承知のように功利主義に走って行き、結局は功利主義の結果である弱肉強食の資本主義体制というも

のが出て、マルクスによりきびしく批判されるということになってくる。ついでにいうと、天才というのは混乱した社会の中に出てくるものだそうで、それは世の中が混乱し政治が不安になると世の中というものが頼りにならない、頼りになるのは個人だけだという結果からでしょう。程度問題だと思いが、あまり天才が出ていない現実の日本は社会が安定しているのでしょうか。

それはともかく十七世紀から十八世紀になると、個人自由主義というものは資本主義体制を作ってきた。経済的な財の獲得すなわち個人の幸福、物質的な幸福が第一である

と考えると、なんとか手っ取り早く財を得てこななければならない、そういう考え方である。これは近世功利主義につながってくる。功利主義と資本主義とはそういうように結合する。ジョン・スチュアート・ミルは自由主義者であるが、彼のお父さんのジェームス・ミルは功利主義者であり、ベントナムがその教祖と考えられる。このような功利主義の中から、その眼目とする所は、さきに述べたように財であり物である。われわれの生活手段として、われわれの現実の生活を幸福にする財の獲得である。唯物的といえる。この功利主義の中から近代の適者生存、優勝劣敗という政治的考え方、すなわちダーウィンの進化論的政治学説とマルキシズムとが出てくる。

(二) 十八世紀社会主義

社会主義といっても、必ずしもマルクス主義でもなければ唯物主義でもない。たとえばロバート・オーエンとか、フィヒテなどの考えている社会主義は、自由の中にわれわれの人格、人間性を高めていく、形成していく、という初期自由主義のよき面をもった初期社会主義であり、財産にしても、それは個人の文化的な活動の所産であり、文化的活動の基礎であると思われる。だから個人の経済活動を自由にして、結果において弱肉強食の形にしないという意味での社会主義なのである。そこで近代の唯物弁証法といったようなものは、近代功利主義の中から正統的に出てくるものである。この系統に属さない唯物思想というものはもちろんいま始まったものではないので、ギリシア哲学の中にはいくらかでもある。万物は水から成っていると、火から成っているとかがいふのはその

類であり、十八世紀の唯物論の中にもこの種のものが系統的にある。ただマルクスの唯物弁証法になると、根本的に異なっている。根本にあるのは近代自由思想、功利主義思想であり、唯物的経済的財をもつてする人間幸福主義の本質は、資本主義も同じであるが、その哲学的考え方および制度的表現においては本質的に異なる。まったく違う様相を示すのである。

大体十九世紀になると、人類の進歩とか世界の進歩とかいうことが考えられている。このような進歩が人間の価値的な努力によって、すなわち、あるべく望ましいものと人が判断し、それに対して精進努力して達成せしめられるものと考える代わりに、一つの自然科学的な法則たる進歩、すなわち人間の意思いかんに関せず一定の方向に進んでいくという考え方が出てくる。ヘーゲルがこれである。ヘーゲルによると、このような進歩の原因が精神であり、その精神はどこにあるかという結局は民族である。そしてヘーゲルも弁証法をいうわけであるが、彼の精神弁証法の究極はゲルマン民族である。すなわち進歩の主体者たる精神が、その客体として民族に表現され、最後にゲルマン民族が、客体たる地位を独占してしまうわけである。なぜ弁証法がドイツ民族でとどまるのかまたなぜドイツ民族であるのか、さらに根本的にいかにして、精神が主体的に民族を進歩せしめるのか、ヘーゲル自身もこれらのことについて詳しくは説明していない。したがってわからないものとされている。

（三）マルクス主義

マルクスの場合、そのような進歩の原因はそのような精神ではなくて物である。しかもその物は十八世紀的物では決してない。生産関係である。財そのものではない。財を生む生産手段もしくは生産手段を含む生産関係であって、第一の段階においては生産関係の主体者として、すなわち社会進歩の原因たる生産手段すなわち土地の客体として地主階級がある。次には生産手段の主体たる資本の客体として、生産関係の主体的地位に資本家がある。最後には主体は労働であり、その客体たる労働者がこの段階の主体的地位に立つ。マルクスの唯物弁証法もここで終極であり、それ以上に展開するものではない。私は哲学の専門家ではないのでわからないが、弁証法は「勝利の哲学」であって、停止の、それ以後は発展を認めない哲学のようである。ヘーゲルはドイツ人であり、ドイツ人の民族的勝利の哲学として、弁証法を考え出したように思われてならない。マルクスも労働者の勝利の哲学として、唯物弁証法を考えたものであらうと思われる。

もちろん人がどんな哲学を考えようと自由であり、それ自体は文化的財産として人類の頭脳的蓄積として尊いものである。ただし人類に害悪を流さない場合に限る。自然科学の発達を手放して喜ぶ人でも、人間の大量殺傷以外なんの役にも立たないもの、たとえば水素爆弾の発明のようなものを人類の文化的財として喜ぶ人はあるまい。哲学的思考の場合でも同じである。しかも哲学的思考には実験の方法がない。そうであるのかわからないのが説明できるということは、その説明通りに世の中があるということと同じではない。自然科学の場合、精密に考えられ計算されて、実験に移す場

合でも、理論通りにはなかなか結果は出てこないものだ。まして世の中を全体として思考する場合それがどんなにすばらしい哲学であり思想であっても、その哲学や思想が生んだ世の中ではあるまいし、理論通りの世の中なんてあり得るものではない。それを忘れ、無視して世の中を説明し、または理解するために考案された哲学的原理を、現実の世の中がそのように動くもの、動くべきものと考えて強引に当てはめようとし、またそれを現実に行ったのがマルクスを継いだレーニンだったといえよう。

マルクスは彼自身予言者だと言っている。予言者は人類の最高の宝かもしれない。しかしそれゆえに宝をめぐっての悲劇は、予言者を信じたあとに例外なく起こっている。それは歴史の示す通りである。予言者の予言に従って、人生や世界のことを推し進めたとたんに、人は知的にはバカとなり、行動的には狂人となる。そして知性と理性が、漸次予言の中から回復されて平静に動き出した際に、人が振り返って見た場合、もし予言者が出ていなければ、悲劇も殺りくもなしに達し得た段階に、やっと達し得ているにすぎないことを、しばしば気づくはずである。どうもマルクスが自ら予言者と言うように、マルクス信仰にはあまりにも多くの悲劇がありすぎるように思える。

共産主義共同社会というものが必ずやってくる、と人はいう。そしてそれは、人間の意思と価値の努力を一切無視して、自然科学的な必然として来るのだ、という。従って人の抵抗と選択を許さない。一步の後退も脇道も道草も許さない、鉄の行進すなわち「進歩」があるわけだ。まったく気

の狂いそうな宿命観的な予言である。この行進のためにマルクス・レーニン主義の使徒（エリート）たちは——共産黨員であるが、戦うのである。脇道へ行く者、停滞する者、反逆する者と戦うのだ。共産主義共同社会が出来上がるまでは、共産党によるこのような統制すなわち共産党独裁国家は続き、共産党との闘争の過程に横たわる悲劇と殺りくは続く。パートランド・ラッセルは面白いことを言っている。世の中や人類の進歩もしくは運命についてある定型を考え出すのは、ユダヤ人の癖であるとして、セント・アウグスツスとマルクスについて比較している。たとえばヤーヴエ神はマルクスの唯物弁証法で、選ばれた者はプロレタリア階級で、キリストの再臨は革命で、至福千年が共産主義的共同社会であるといったぐあいである。ただ私が不思議に思うのは、アウグスツスは別問題としてもマルクスにあつては、その共産主義的共同社会に住む人間の像が描かれていない。どんな人間が住むのかわからないことである。そこでは人は幸福であるのだそうだが、どんな人がどんな幸福を享受するのか考えられていない。それは天国や極楽浄土において善人が救われる、蓮（はす）のうてなというような浄土がある、神や仏を信ずるとそこで現世で救われない者が救われる、それらと同じである。人間像と幸福の内容がわからなければ飛びつきようがない。痴ほう的幸福も一つの幸福であることは間違いないでしょうから。もっとも人間像ということ自体がブルジョア的で、そのようなことを考えることがすでになつていないのかもわからぬが、幸福の条件と幸福そのものを混同してはならないという私どもの立場からみるとはなはだ納得がいかない。

二 ソビエト独裁体制

(一) ソビエト独裁体制の根本

世界や人類の進歩をどのように理解して、共産主義社会の実現までは——それはいつ出来上がりだれが出来上がったと宣言するのか知りませんが——マルクス・レーニン主義の使徒たち、すなわち共産黨員による独裁体制がしかねなければならぬとするのが、いわゆる社会主義国家なのである。前にも述べたように、どうも頭の中で考え出したものを実際社会にあてはめていこうとする。一体哲学というものは、ミネルヴァのふくろうというのですか、日が暮れてから飛ぶように、まず事実があり現象があつて、そこから真実を知ろうとするために、考え出された思考の産物にはかならない。それを思考する実体がそのままあるかのようにわれも人も信じて、世の中の現実をそれに合わせるように仕直しするということは、かつてわれわれ人類はフランス革命で経験している。ヒルティが哲学的に思考された政治的原理を實際の人間世界に適用した場合、どんな悲惨なことが起こるかを最もよく示しているのが、フランス革命であると言つたそうだが、同じようなことが一九一七年のロシア革命にも昭和二十四年以後の支那革命にもいえると思う。ただそのためには西欧資本主義体制下の議会政治の問題もあわせて考えてみなければならぬ。

このような恐ろしいことを生んだ原因が、フランス革命前のアンシャン・レジーム、ロシア革命

以前の資本主義体制である限り、それを見おとしてはならない。しかし与えられた時間は短いので立ち入った話をするのは省略する。それに藍（あい）は藍より出て藍より濃いとかで、資本主義体制の有する悲惨さよりはるかに悲惨な面を有する共産党独裁体制が、警戒すべきものであると思うので、それについて述べるにとどめる。諸君の方でよく引き比べて考えてもらいたい。角を矯（た）めて牛を殺すことにならぬようによく考えてもらいたい。

ソビエトの独裁体制とは、共産主義社会を実現するために、ブルジョア社会から移って行く過程において、プロレタリアが独裁体制をしくことを許されるが、この独裁体制の中心的装置をソビエトというので、ソビエト独裁というのです。文字通りにはソビエトは会議の意味だが、もちろんそれだけのものではない。マルクスは「政治的な国家の成立というものは、ブルジョア社会の独立的個人への分解と共に完成する」と言っているが、マルクスの言とどういう関連があるのか知らないが、ソビエト体制というのは、分割して統治する最も完全な形ではないかと思う。これは大体、単位ソビエトからみていくと、そこには村または町ソビエトがある。ロシア国家は十五の共和国から成っているが、それぞれの国家に最高のソビエトが一つずつあるわけだ。単位ソビエトが地方に四千八百八十六、都市ソビエトが五百四十四、工場その他に三十六とまあ大体こんな程度です。日本の町村が約三千、市が約五百五十だから地域としてはずっと広いことになる。そして一番上のソビエトが連邦最高会議である。この単位ソビエト、たとえば村ソビエトについていえば、元来村とい

うのは領域団体である。一定の土地を区切り、その区域をもって一つの統治団体とし、そこに住む者はその意思いかんにかかわらずその団員となる、村民となる、こういう団体である。このような団体を領土団体という。国家や都道府県、市町村がそれに当たる。だから領土団体に住んでいる人たちの思想も目的もばらばらで、ほとんど共通したものがない。そこで権力というものをもってばらばらにならぬよう結合を強制している。だから領土団体というのは、はなはだままとまりの悪い結束の弱いものだ。これに対して人的な団体たとえばクラブとか会社とか組合とか学校もそうでしょう、一つの目的に対して人の意思によって結合した団体は、思想的にも親近性があるが目的がはっきりしている関係で、結束が領土団体に比べてはるかに強い。すべての民族は最初は人的な結合から出発している。そして面白いことには、人的結合団体は領土団体に比べて必ずしも大きな権力を必要としないで、比較的に民主的である、しかしはなはだ自由でない場合が多い。遊牧民族や移動期の民族について考えたらすぐわかる。近代国家においては、国家の基本は常に領土であって、領土を考えない人的団体はない。

ところで右に述べたソビエトは、この二つの団体の性格を兼有している。村という場合領土団体であるが、それをソビエトでとらえる場合人的団体である。ソビエトは村を統治する権力をもって人的団体たる村を構成する人——共産主義的共同社会へと行進するという一つの目的に結合された人を支配する。要するに領域団体的権力をもって人的団体を支配する。しかも支配者はマルクスの

使徒である共産黨員である。だからソビエトは極めて民主的である形式を有するが、統治権力と地域社会に保障されたその人の意思にかかわらず、支配に服するという点からする不自由と、何よりも異端者、落こ者を許さない人的団体の仕組みによって人はひっ息せしめられる。地域団体の短を人的団体によって補充している仕掛けが、共産主義的共同社会実現のための共産党による独裁であり、そのための有無を言わさぬ行進に対してのきわめて強い結合社会が、ソビエト体制である。ここでは、人民の目下の幸福または自由は第二義的なものでしかない。そのような装置としてのソビエトである。実に巧妙な精巧な機械的仕組みだ。

しかも、そのソビエトを支配しているのが共産党である。共産党というのは憲法上のものではない。憲法以上のものとして憲法を生む勢力である。だからソビエトのように憲法に定められるものではない。ソビエトの大部分の議員は共産黨員だといわれているが、そんなことより右に述べたようなソビエトを監督、指導していくものとして共産党のあることを注意しなくてはならない。だからソビエトは独自に、勝手に立法し執行し、要するに統治することは出来ない。すべて共産党——ソビエトに対応して地区には地区の、中央には中央の共産党、または党の代議会や幹部会があるわけだが、その共産党によって監督され指導される。だから人民は二重にも三重にもかからくりされた仕組みの中で他律的に動いている。この仕組みは権力分立の関係でなく、権力統合の、しかもすみずみまで行き渡っての権力を共産党が握ることの出来る仕組みなのだ。ソ連邦最高会議に対応する

のは共産党の中央委員会、結局は最高幹部会がそれだ。最高会議は日本でいえば国会である。国会より実質的には実力があるだろう。それを指揮し指導しているのが共産党最高幹部会である。その共産党は憲法以上の存在として憲法に規定されていない。ざっとこんな形がソビエト体制である。ずつと昔ゲルマン民族にこのような仕組みがあった。まだ移動期のゲルマン民族に。まさかその故知にならったわけではあるまいが、はなはだよく似ている。もちろんそれよりもソ連体制の方がずっと進んではいるが。

（二）共産党

このように、ソビエトの共産党は憲法上の機関ではない。ソビエトであるとか、最高会議であるとか、内閣であるとか、裁判所であるとか、みなソ連憲法上の機関である。だからソ連の憲法は、ソ連のこれらの機関については色々な規定をし、これらの機関は、その規定通りに組織されたり運営されたり、また権限を行なったりしなくてはならない。しかし共産党は異なる。憲法の規定は共産党には及ばない。共産党は政党ではない。日本では共産党は政党とされており、また考えているようだが、政党というのは、国民の政治的意見を最大公約的に国会や議会に反映したものである。組織された団体であり、憲法上の機関である国会や議会の運営上に出てくるものであるが、共産党は違う。極楽浄土たる共産主義的共同社会を作るべき使命を帯びたマルクス・レーニン主義の使徒たちが、現実の経過していく社会について規定した憲法に従うのは、順逆転倒の理論である。彼ら

の責任はマルクス・レーニン主義の実現について、マルクス・レーニンに対して負うのであり、現実の国民に対して負うのではない。共産党は憲法を作り指導していくものである。だから憲法上の機関はすべて憲法により、その奥にある共産党により指導され監督されている。こういう体制、仕組みなのである。

ソビエトがどんなに政治的の基盤だといってみても、それはただ憲法の上でそのようなものとされているに過ぎないのであり、憲法外の共産党の支配を何らの制限なく受けている。このようになってくると、共産党というのは憲法に関係なく憲法外の規程に従って、憲法上の諸機関を支配することによって実質的に政治を行なっている。憲法外の規程を憲法上に持つてこず自分だけがそれに従うものとし、その他の者は憲法に従うべきものだというのが共産党独裁の本質である。そのようなことはプロレタリア革命の中から、革命以前から存在する革命の原理として、革命の成功の中から得てきたものである。そこで憲法や法律についての最高の解釈権も共産党が有する。日本では最高裁判所だがソ連では共産党だ。これはソ連では当然のことである。だから立法についてもまた行政についても最高の権限は共産党にあるわけである。

元来ソ連にとって憲法とは何であるか、共産党を拘束しない憲法とはどんなものであるか。私どもの憲法という場合には、政治家がみだりに行動して国民の自由や権利を侵さないように、一面国民の自由を保障し保護しながら他面、国家の統治活動の仕方と方向を定める、現在から将来にわた

って規定するといふものである。だから憲法は、国家の統治活動のすべてについて原則を定める規
準であり、従つて憲法を守るといふのは、およそ人が政治をする場合、いかなる場所、いかなる時
またいかなる人でもそれに従つて行動するといふことである。ところがソ連にあってはどうもそう
ではない。一九三六年いわゆるスターリン憲法が出来たのだが、その際スターリンは「憲法とはわ
れわれの過去の闘争の結果獲得した記録である」と言つてゐる。そこで資本制国家にあっては、憲
法は現在から将来に對しての規定であるのに對して、それゆゑに憲法上の諸機関——立法機関とか
司法機関、行政機関とすべての機関が、憲法に従つて常に行動しなければならぬのに對して、ソ
連の憲法はどうもそうでない。共産党が戦つて獲得した結果の記録であり、その証拠にほかならな
いのであるから、その戦い、闘争に關しては憲法は知らない。それは共産党が、他の基準、憲法以
外の基準に従つてやるのであつて、憲法の関知する所ではない、といふことになる。もちろん憲法
上の諸々の機関は憲法に従つて動くわけであるが、ある闘争、要するに共産主義的共同社会を実現
するための色々な闘争は、これら憲法上の諸機関の及ばない所であつて共産党の専売特許である。
憲法の解釈もしたがつて憲法上の諸機関の権限の行使や組織について、共産党の指導や監督を受け
るのは当然なのだ。ソビエト独裁体制といふのは、実は共産党支配のことであり、非憲法的基準に
よる共産党の憲法支配のことなのだ。そのような仕組みである。

(三) 共産黨員

一体このような共産党を構成している共産黨員、労働者と農民を代表しているという共産黨員はどのようにして黨員となるのか。決して国民、労働者や農民によって選挙されるものではない。大體についていえば十八歳以上の者について三人の共産黨員が推薦する。その推薦された者が色々ステを受けて黨員になる。現在共産黨員は約八百二十万人おり、共産党候補者が約百万人いる。この候補者というのは、右に推薦され審査されてパスし、なお試験期間として約一年ぐらいおかれている者のことである。一年して成績がよければ正式黨員となる。悪ければダメになる。共産黨員として成績の悪い者も候補者に落とされる。まあこういったふうにして黨員が生まれる。決して私どもの考えているような意味で国民の代表でも何でもない。彼らが単なる代表者でないことはレーニンも言っているところである。

共産黨員は要するに国民の教師であり指導者でなければならぬ。選ばれた人なのだ。だから彼らは鉄の訓練と規律に服す。生やさしいものではない。テレンパランな日本の学生生活のようなものではない。観念的なマルクスボーイや社会主義者であるのではない。マルクス・レーニン主義の実践者でなければならぬ。元来マルクスの認識論が、受け身によって主体が客体を認識するのではなく、主体と客体の交換関係において、行動的な関係において行動の一部として考えられている。ましてその使徒たる共産黨員である。使命に対する自覚とその自覚の下の訓練と規律に鉄の強さがあるのは当然ではないか。

ところでその鉄の規律を示すよい例がある。一九五二年の第十九回中央共産党大会で採択された彼らの規律の第五十二条だったかと思うが、そこに「権威は下から規律は上から」という文言がある。しばしば説明されている言葉だがその意味はどうかというところ、一切の共産党の役員——上級共産党地区の構成員たる役員は、すべて党員による選挙による、それは対立候補のない信任投票に過ぎない選挙ではあるが、そこに権威は下に発して上に昇って行く。従って最高の権威は現実には最上級の役員会すなわち最高幹部会——かつての政治局である——にある。観念的には最下級の団体から淵源（えんげん）しているのだが、現実には完全に統一集中されている。そしてそこから逆に党員に対する規律は流れ出るのである。一つの例は、少数者は多数者に絶対服従することである。会議の少数派は、多数者によって決定したことを批判してはならない。少数派の場合によっては一人のこともあるが、このような一人が権威を委託されている多数者の決定に従わない時は、そのことのゆえに自己批判が強制されるわけであり、そして一般国民には、この人とした自己批判だけが知らされる。場合によっては、少数派の考え方を国民が知ってこれに共鳴することもある。いな、かえって多いだらうと思う。

しかしその首唱者が、あれは間違いであったと自己批判し、それが国民に知らされると、国民はこの善し悪しよりは、その自己批判に反ばつて、裏切られた憎しみがその少数者に対してわいてくる。やっちゃえという気持ちになる。同時に国民の側においても、強くそれに賛成したような

人は目の敵とされてくる。こういったことが多数者、すなわち民主主義の独裁的権威となつて、結局共産党という一枚岩の重さで政治にも国民生活にもしかかつてくるのだが、何よりも黨員には、その一本化を乱すような「自由」が許されてはならないのである。そしてそこにはついに、心ある人の心をゆりうごかすような殉教者もでなくなつてしまふ。殉教者となるような人は必ず自己批判の上に葬られるからである。共産黨員はそれだけの力と能力と訓練の上にあるし、一度失脚すると、永遠に社会の最下底に沈められる。

さて共産黨員はソ連全人口の五％足らずであり、その人たちが憲法によらずマルクス・レーニンテーゼによつて支配する。憲法上の機関であるのは最高会議であり、内閣、裁判所であり、ソビエトであるが、それを動かすのは、憲法に基づくそれぞれの機関人ではなくして、憲法外に存在する共産黨員である。少なくとも中心的活動は共産党がやる。これが西欧民主主義国家の場合と違う。西欧民主主義は憲法が担保し、そこで憲法に従い政治や行政や裁判が行なわれるから国家の統合が民主主義的に行なわれる。国民の自由が保障される。そういう西欧民主主義に対してソビエトの民主主義は共産党独裁ということにある。人民の代表者である共産党が何ものにも拘束されず、もちろん憲法にも拘束されずただマルクス・レーニン主義に従つて行動することが民主主義の本質であるとする所に共産党独裁がある。そこでは憲法は自由と民主の保障をするものではないのである。

三 日本における独裁国家体制への動き

(一) 日本のエリートたち

日本にもこれを当てはめていこうという動きは、はなはだ活発であるが、やり方はなかなか巧妙ではじめからはっきり正体を出さない。プロレタリアートの独裁すなわち社会主義社会の実現というものを目的とするが、いまは一つの過渡期であるから、という方法をたてる。いつまで過渡期が続くかわからぬが、いまは日本の憲法を護るという建て前を取っている所から、過渡期的な作戦を国民の前にだし、素直に共産党または社会党独裁をいうことをしない。それをいうわけにいかないからでもある。そもそも日本の共産党も社会党も表面的には政党という立場をとっている。つまり憲法上の機関である国会運営上に、国民の部分的政治思想を反映している団体として存在している。内心ではマルクス・レーニン主義が日本国憲法よりは高い地位を占めていると考えている人たちであることは間違いない。ただそうは言えない。少なくとも憲法否定の立場をとるなんておくびにも出せない。だからむしろ積極的に憲法の擁護という立場をとり、実体を隠す。

そこで、共産主義的共同社会の実現という立場を、うまく平和主義と民主主義とに換えて、民主的、平和的國家の建設という政治スローガンを掲げた。日本は平和と民主とに進まなくてはならない。そのために憲法を作った。しかしその憲法上の色々な機関、国会とか裁判所とか内閣とかが、

平和と民主とに従って行動するかどうかを監督する者、指導する者たちがいなければならぬ。要するに国民が獲得した平和と民主とを、国民に代わって憲法を保障させる、つまり憲法上の諸機関に対して指導、監督する人たちがおらなければならぬ。憲法は平和と民主のために生まれたのであるから、憲法より以前の、憲法よりもっと平和と民主そのものを直接に現わしている人たちが、つまり平和と民主の使徒——エリートがいなければならぬ。国民がいなければならぬと考えるのではない。彼ら自身が自分たちがそのエリートだとするのである。

はっきりした意識をもってやっているのかどうかはわからぬが、筋として立てられている路線は、ソ連体制における共産党のような立場に立ちたい人たちが日本にもいることである。しかも、不思議なことには、この平和と民主をソ連国家の路線とつなげるという構想を、いつの間にか作り上げてしまったことである。発生的にはアメリカ式の平和と民主というものであったはずのものが、いつの間にかアメリカは帝国主義的非平和国家とされてしまい、ソ連国家が民主と平和の国家とされてしまった。そうすると、この平和と民主とは、そのままマルクス・レーニン主義の別名となる。

しかし、そんなことをあからさまに言っただけが悪いので、ソ連は平和と民主国家である、中共は平和と民主の国家であるという。平和と民主の別名はマルクス・レーニン主義であるのだが、マルクス・レーニンや共産主義的共同社会の実現と言うことはぐあいが悪いので、平和と民主、平和と民主国家の実現と言う。平和と民主国家の実現とは、いうまでもなく、社会主義国家の実現と

いうことにほかならない。共産主義的共同社会の実現のために、共産党独裁の国家になるといふことなのだがそれは言わない。「その条約はけしからんじゃないか、その条約は民主と平和に反するから引っ込ませろ」とか「その法律は民主に反する」とかその人たちが言う。国民の声として言うのではない。国民の声として言うように見せかけているが、実際は平和と民主のエリートとして、つまり憲法以前のテーゼの使徒の立場からのお声がりなのである。手段としては、労働組合や色々な人を集めてデモをしたりストライキをやったりして、いかにも国民の中の声のような形態をとるが実際はそうではない。国民や一般の労働組合の人たちはそういうお声がりをお助け、援助する手段に過ぎない。だんだんこのようにしてこの人たちの考えている立場が固まる。体制的になると、平和と民主とがマルクス・レーニン主義に代わり、その人たちが共産党に代わる、実際は同じです。ですからすぐ出来る。それまでは、条約がけしからん、法律が非民主的だ、裁判が反動的だ、多数党独裁だと、事ごとに憲法外から国民的立場をよそおって判断を下し、国民になるほどそうだ、あの人たちの言うことが正しい、あの人たちに従って平和と民主を守らなければならないと考えさせる。それがねらいなのであり、また独裁をねらう以上、このように体制的なものを作らなければダメなのだ。先立つものは、はっきりした目標である。スローガンはつねにそれに利用されているだけである。

全学連の人たちは全学連内閣を作るおつもりのようなのだが、体制的独裁でなければダメなのだ。そ

の点浅墓なものだ。それに比べると、総評の人たちはちゃんと力の入れ所、ツボを知っている。最近では総評では余り人がつかない。またかという気があるので、原水爆禁止国民大会とか安保改定阻止国民会議とか母親会議とか、色々の子会社を作ることによってエネルギーに動いている。憲法外勢力にノシ上がるかと狂奔している。これを国民は知らないのだろうか。

(二) そのための構想

向坂教授といえは三池争議の理論的指導者だが、あの人がたしか中央公論の昨年四月号かで言っている。日本の革命は武力によるものでも説得によるものでもない。全学連の人たちは二万人あれば革命は出来ると言っているそうだが、まだ二万人はないのですかね。向坂教授とは対決するんです。向坂氏の考えているのは、私が今まで説いてきたような構想で、平和的に日本に社会主義革命を成就せしめようとしているのであろうと思う。もちろん向坂氏は憲法外の団体の理論的指導者であり、そしてもちろんやがてブハーリンのように粛清される人ではないはずである。総評の方や向坂氏から、お前は何を証拠にそのような言いがかりをつけるんだ、などと言われる心配はないと思う。あの人たちの行動の中に、裁判所や内閣や国会——自民党が中心であるが——に對しお前たちは憲法に違反している、法律に違反しているという発言は始終あるのだが、まだ一度も自分たちは憲法を守る、憲法の上に行動するとは言わない。あたかも憲法は自分たちが作ったのだ、法律は自分たちの下にあるんだ、お前たちはその憲法や法律に従わんけりゃならん。しかしオレの

ことはオレたちが知っており、お前たちから憲法上、法律上のこととやかく言われる筋合いのものではない、こういうように考えているのだろうかと思う。

国会や裁判所や内閣はもちろん厳格に裁判を守ってもらわなければならない。国民は厳重に監視しなければならない。しかし国民は代表者によって監視してはならない、自分で直接に監視し、その結果については、憲法の定める手続き、方法に従って審判しなければならない。かりそめにも憲法が予想しない団体に、この国民の権利をゆだねてはならないし、第一そのような団体の存在を認めてはならない。かつて昭和初期に陸軍の、それもろくに世の中のことがわかりもしない青年将校とかいった人たちが「われわれは国会の動きを厳重に監視する」と言ったものだが、実に思いついた実に恐るべき発言を、武器を背後にもちながら言ったものだ。そしてこの陸軍こそは、帝国憲法外に根を張る独裁的体制的なものになってしまったが、総評の発言やストライキという實力をもつ実体を考えると、実によく似ている。自民党あたりで「昔陸軍今総評」と言っているのはどんな意味か知りませんが、総評が憲法外の力にノシ上がり、憲法を意のままに支配しようとする考え方であれば、言語道断である。われわれの平和も民主も憲法上のものであり、憲法外の力を認めることがあってはならないものなのだ。私は一昨年警職法の流産以来、しばしばこのことを説いてきたが、ついに安保闘争で激発した。幸い国民が冷静であったから救われたが、あの動きが成功していたら大変だった。一挙に体制的変革まで持って行かれる可能性をもっていたと思う。

四 世界国家の問題

(一) 白人帝国主義

最近世界国家とか世界連邦とかいうことが漫然と行われている。しかし私どもは過去の白人帝国主義というものを忘れることが出来ない。白人の、主としてはラテン、ゲルマンであるが、その帝国主義の恐怖を忘れることは出来ない。白人帝国主義の根本にあるのは白人による世界支配であるが、その場合の白人にも二つあって、アングロサクソンを中心にする世界支配は、領土の拡張ということよりは他民族、特に有色人種の支配ということを第一にするものである。植民主義、植民地の獲得といっても、彼らの商業資本または産業資本の客体としてそこを考えるというよりは、民族の従属関係、隷属（れいそく）関係の確立がそこには第一義的に考えられる。その背後にあるのは武力と経済と宗教であるが、民族優越の原則に立っての、民族による民族支配という植民地主義である。何といっても根本にある考え方は民族の区別、区別して白人種が優秀民族であり、従って劣等民族たる有色民族を支配する、こういう考え方である。白人帝国主義を資本主義の内在的なものであるとかいって説明するのは浅薄なものであって、それはほかならぬ白人支配の本質を体制に求めただけであって、彼らの白人優越の偏見に求めていない点において間違っている。

ご承知のように、大体五世紀の半ばごろにアングロサクソンがケルトを追って、大挙イングラン

ドにはいる。イングランドにはいつても、アングロサクソンとケルトは同化しない。物すごい闘争を行なう。ケルト人も白人だが、種族が違うので同化しないでしょう。それに反してノルマンがはいつてくると、上層部は別として同一種族であつたので同化する。他民族とは決して同化しない。もちろん決して対等に考えない。常に優劣の觀念において支配闘争をやる。白人帝国主義は、有色人を征服し支配し、その結果として領土を支配する。こういうことです。インドやビルマ、インドネシア、アフリカも支那もそうでした。決して同化しない。同等に考えない。常に一段下に見てすべての部門で区別し差別する。なるほど個々の場合そうでないかもしれないが、全般的にはそうである。常に治者と被治者が、民族的關係において存在する。決して越えることの出来ない關係において、そういう先天的宿命において存在する。武力において征服者と被征服者の關係において存在し、經濟において富者と貧者、主人と奴隸の關係において存在し、それらを秩序づけるものとして政治とそしてキリスト教がある。キリスト教は、宗教としてよいとか悪いとかいつているのではない。しかし、キリスト教の有する罪惡史的面は蔽として消すことが出来ない。特に被征服国に行つてその不幸を慰め救済を天国に求めさす。もちろん改宗のことは余り成功したとはいえないが、政權と密着するキリスト教は、政治家につづいて牧師が入り込み布教する。これは一種の思想帝国主義である。まあキリスト教のことを余り悪く言つても何ですが、私はキリスト教の人間に対して与えた禍害の歴史は、注目されなければならないと思つてゐる。

だからたとえファイヒテらが世界国家的構想を有することは、それが永久平和または人間主義の立場からのものではあろうとも、白人中心主義・キリスト教の支配が考えられている限り賛成出来ない。ファイヒテについては、南原氏の著書もあり、私もまた高くその人の思想を買うものではあるが、しかしその世界国家の理念には反対だ。絶対に賛成出来ない。ファイヒテがヘーゲル流に考えたにせよまた考えなかつたにせよ、私は非常に危険だと思つてゐる。白人帝国主義が別の形で出て来るからである。たとえば国語を統一するという場合、いま存在するすべての国の言葉を捨ててしまつて、エスペラント語のような新しいどここの国語でもないものを作つて、それを世界の言葉にするのではない。英語とかドイツ語とか、要するに今ある言葉に統一するということになる。世界国家という場合にもどうもそうなる。その中心的な所にアングロサクソンとかゲルマンとかいった民族がすわりキリスト教で思想統一するといふのでしよう。それはいけないことである。

(二) ローマ帝国主義

もう一つの型の帝国主義がローマ帝国主義といふ得るものである。ゲルマン民族の帝国主義のチャンピオンがアングロサクソンなら、ラテン民族の帝国主義のチャンピオンは、少し古過ぎるがローマ人である。ローマ帝国主義の特徴は領土拡張、領土欲である。病的ですね。私は新ローマ帝国主義はソ連すなわちスラブ民族が今日代表してゐると思ふ。あわせて考えていただきたい。この新ローマ帝国主義の領土欲、ソ連人の領土に対する執着、妄執ともいふべきものは想像以上だ。案外

みんなは知らないのではないか。それが社会主義、国際コミンテルンとか何とか仮面をかぶって現代にあらわれてきているが、実体は領土欲である。独ソ戦争の時でも、ソ連領土内における場合とそうでない場合とでは断然強さが違う。領土内では実に勇敢に戦う。いずれにしても土地支配、領土拡張というのが第一であって人民支配ではない。モンテスキューのローマ帝国盛衰原因論を讀んで、当時のローマの帝国主義の方式と今日のソ連帝国主義の方式とを比べてみると実に惻々（そくそく）として迫るものがある。

ローマという国はひどいことをやっているのであって、たとえばAとBという国が戦争する。Aが勝ちそうになるとBの方を助ける。Bが勝ちそうになると、こんどはAの方を助ける。そして両方ともコテンコテンに疲れるのを待って両方ともいただいてしまう。また条約を結ぶ。自分に都合のよいように解釈して、それがダメならその条約を一方的に廃棄してしまう。全く権謀術数の限りをつくす。そして領土を拡大していく。彼らが支配するのは民族を支配するのではない。民族を支配して国家を植民地にしてしまうのではない。国家を支配する。ローマという国家を中心に連邦とまではいかないが、多くの国をはべらせる。大国家主義である。国家が解体してローマ国家にはいつて来るのではない。道はローマに通ずで、国家がありそれにローマからヒモがついている、構成国家相互間には余り連絡はない。縦の關係でローマに結びつけられており、横の關係においてはむしろ相互はにらみ合っている。伝統的な夷（い）をもって夷を征するという思想、かつて支那の伝統

といわれたものがローマにもあるのだ。ケンカさせておいて両方ともいたたく、こんな考え方なのである。だから相互は仲が悪く、相反目してチョイチョイ争っていて、それがローマにとってではなはだ都合がよい、治めていくに一番よい。相互が仲よくなり結束するとローマは困るのである。どうもこのローマの現代版がソ連の帝国主義である。ソ連人の領土欲、寸土といえども人にやらない、人のは取るといふ考え方、それは何もマルクス・レーニン主義の考えから来たのでなく、あの伝統的に常に領土——よりよい領土を求めてさまよった伝統的領土欲がスラブの本質である。

日露戦争で日本が勝ったのは満洲で戦ったからだ、ロシア領土内の戦いであつたら、乃木大将の勇をもってしても負けたかもしれないといわれている。第二次大戦のスターリングラードの戦争だつてそういえるかもしれない。ポーランドではすぐ負けるが、一步自らの領土にはいると見違えるほど強くなる。実に異常である。ハボマイヤシコタンが返還されないはずである。このソ連がマルクス・レーニン主義という帝国主義的大義名分を掲げ、そして夷を以って夷を征する。各民族内、国家内において階級闘争を行なわしめる。ローマの場合と同じである。帝国主義の代わりに解放、民族解放という名目である。革命は戦勝、征服である。夷をもって夷を征し、また夷をもって夷を治める。すなわち階級闘争による革命と共産党独裁、そして道はモスクワに通ずる。そういう式のロシア帝国主義であり、解放された国家はそのままにしておいて、共産党により独裁的に支配せしめ、その共産党をソ連が握ることによつて、ロシア帝国すなわち新ローマ帝国は進んで行く、こう

いうことである。

五 新民族主義

(一) 戦後の民族主義運動

エルスブリーがその著『一九四〇年から一九四五年に至る東南アジア民族運動における日本の役割』という書物の表紙に「第二次世界大戦後の極東における劇的であり、かつ逆説的な大事件」として書いている東南アジア独立について考えてみたい。長い間白人帝国主義のムチの下にあえいだ植民地体制の解体と、新しい国家の出現という劇的なものと、日本の敗退と連合国の勝利によって、再び戦前の植民地体制が復活すべきにかかわらず、ついにそのようなことはなかった、という意味の逆説的事態が生まれた。これは全く世界史の大事件であり、これは百年後二百年後には、まことに大変なことになる事件なのである。そのきっかけと成立とに日本が主役を果たした。いやいや日本はそのために関与したのである。政治家や軍人の高級将校の人たちは、どのように思っていたか知らないが、われわれ国民は実はそのために戦った。

アジアの民族独立の運動すなわち白人帝国主義打倒の動きは一朝一夕のことではない。戦後の民族主義運動は、むしろ具体的な新国家建設の運動であり、民族主義運動はるか昔にさかのぼる。日本のそれについての関与も、五十年の歴史をもっている。フィリピンに例をとってみよう。フィ

リピンは、一五四三年以来スペイン領であったが、一八九八年日清戦争の直後であるが、米西戦争の結果米國領になった。その当時、台湾からフィリピンに渡った日本人が、独立運動を具体的に進めている。もちろん民間人である。日本の政府は直接にそのようなことが出来るはずはないが、民間有志たちがこれをやった。ちゃんとエルスブリーがそれを言っている。フィリピンは第一次大戦末期すなわち一九一六年自治権を認められ、その後だんだん憲法も作って独立国らしくなったが、やはり完全に独立を得たのは、昭和二十年いっさいの戦争が終わったその年に独立国家となった。ともかく私どもが注目しました感激することは、フィリピンはスペイン統治の時代以来ずっと独立運動を続けて来たことだ。自分の国家はどこからも干渉されない、自分たちで自分たちの国家を持ちたい、として、このために何千、何万の人がヤミからヤミに消えていったかわからない。ついに四百年來の宿望を達して独立国となったのである。一八九五年には革命委員会まで作っている。ともかく民族は自分の国を独立国としてもたなければ話にならない。

次にインドだ。インドは大体八世紀にマホメット教の洗礼をも受けている。現在別れているパキスタンの方がその中心であろう。もちろんインドは老大国で、ヒンズー教の民族であり、世界的慈悲の宗教——仏教を生んだ民族であるが、一五一〇年ポルトガル人によってまず最初の略奪を受け、のち英国もこれに入り込み、東インド会社などを建ててインド経営に乗り出した。それ以来、完全に英国の植民地となってしまう。ガンジーのような偉人が出てもついに何とも出来なかった。長

い苦しい独立運動が続きそのたびに多数の人が死んだが、やっと第二次大戦後一人前になった。第二次大戦中は必ずしも日本と同調せず、ガンジーやネールは日本の戦争をむしろアジアの侵略戦争とみて日本を非難している。しかし結果的には一九四七年二月二十二日であるが完全に独立国となった。同時にパキスタンとは別れている。インドネシアもまたそうだ。十六世紀以来オランダに支配されて、オランダの植民地となっている。いちいち述べる時間もないが、東南アジアの民族運動が一応成功すると、中近東の民族運動が火を噴き、次にアフリカの民族運動が燃え出した。

まずイスラエル。それはユダヤ人の国である。しかし最も注目しなければならないのはエジプトである。エジプトは回教徒の国家であり、紀元前一六〇〇年も前に王国を建てた古い国である。それが地理的条件や色々な関係もあって、ある時はトルコに、ある時はフランスに、またある時はローマに支配された。しかしそのたびに根強い独立運動をやっている。一七九六年フランスのナポレオンに敗れるまでの二百年の間は独立を享有したのであるが、ナポレオンに屈服し、次いでトルコその後はインド支配とスエズ開通を機に英国、フランスが支配権を握る。一八七五年ころから激しい英国からの独立運動が起こり、そのたびごとに失敗して多数の血を流している。そして一九五六年度のスエズ問題以後はつきり独立の宣言をして共和国となり、今日に及んでいる。

またアルジェリアのことをみておこう。面積は二百九十九万平方キロ、日本の約五倍の広さで、人口九百六十二万、そのうち白人は一割足らずの九十三万人、この九十三万人のうち仏人は八十九万

人、これが八百七十万のアルジェリア人（アラビア系）を支配している。元来一六〇〇年ごろからトルコの支配に服していたのが、一八三〇年以後はフランスに服している。第二次大戦中フランスはここに臨時政府を置いたりした。民族主義者たちが立ち上がったが、アメリカの欧州作戦の基地でもあった関係上アメリカにたたかされた。これがご承知のように一九五一年以来今日まで、フランスに對して独立戦争をやっている。フランスの命取りとなっているのである。

このほかにアフリカには、なお多くの問題を持ったそれぞれの民族が立ち上がっている。これらをまとめて言い得ることは、アフリカの民族は余りに長い間土人として、文化の世界に遠ざけられていた。それには白人帝国主義の罪もあるうし、宿命的な地理的、民族的悪条件もあるう。いずれにしてもその有する歴史は余りにも暗い。新しい民族独立といってみても、二十世紀後半の今日、彼らはよるべき伝統も有せず、また訴えるべき文化も持たない。彼らは独立と自由を求めて立ち上がっているが、理想を有せぬ者の自由が墮落であるように、無用意に立ち上がった民族には混乱がある。コンゴの問題はそのよい例だと思う。彼らには指導者が必要である。決して野心を有さない真に彼らの味方である指導者が必要なのだ。

最近中共が非常に根深くはいつているといわれる。彼らの白人きらいは徹底しており、ソ連さえ余り歓迎されない。中共によるアフリカ指導——マルクス・レーニン主義を生地のまま持っているとは思わないが、彼らの要請もあって中共がはいつている。この事実を私どもは見忘れて

はならない。おそらく中共による指導は成功するであろう。中共とソ連との間に默契があるのかは知らない。しかしマルクス・レーニン主義をソ連の手から離れて、中共が独自に広げられることをソ連は喜ばない。すでに述べたように、マルクス・レーニン主義はソ連のコーランであり、右手の剣は帝国主義の光を有するものであって、ただだれでもマルクス・レーニン主義を広げてくれるのを喜んでいのではないのだから。

ルネッサンスのころローマ法王はアヴィニョンとローマに分かれた。鉄の支配を続けた一千年のローマ法王の支配の中心が二分した。これは重大である。このローマの法王はルネッサンスの動きを助けた。このルネッサンスのドイツ版がリフォーメーション（宗教革命）であるとすれば、ずいぶん歴史は皮肉なものだ。私はモスクワに対して北京を、直ちにアヴィニョンと言うつもりはない。しかし表面だけでなくおそらくはアフリカ経営において、中ソの確執があることは確かである。マルクス・レーニン主義についてモスクワに一つ本部がある。中共に一つ本部がある。ソ連のねらいは世界赤化とかマルクス・レーニン主義による世界の解放とか言っているが、本質はそんなものでなくして自分の手によってそれをやりたい。そこでまあアフリカに中共がはいる、そこが共産主義国家となるということも、世界的にまた今後にとり大きな問題だが、そこを具体的舞台として中ソの関係がどう展開するかもまた、大変面白い重大な問題であろうかと思う。

これに対して回教国家は違う。前にいったアルジェリア、アラブ連合、パキスタンはすべてマホ

メット教の民族だが、これは非常に興味ある問題を有している。パキスタンの憲法というのが出来るが、これは完全に宗教と政治、宗教と国家との一体である。西洋においては近代国家の大きな特徴は、国家と宗教との分離であった。なぜそうであるのか、そしてそれは近代国家の一般的特質なのか私は知らない。ただ事実として、パキスタンは完全にその範疇（はんちゆう）を脱している。

その憲法の前文は言っている「仁慈にして慈愛深きアラーの御名において、全宇宙に及ぼされる至高権は全能なるアラーのみに属し、アラーの示し賜う制限内でパキスタン国民が行使する権能は神託であり……」要するにアラーの国家であり、民主主義も自由、平等もすべて回教によって示されている、とする。エジプト憲法も第三条に「イスラムは国家の宗教である」としている。すなわちアルジェリアにしても、エジプトにしても、またパキスタンにしても、歴史と伝統、文化と道義とを固有する。そこに立ち、他民族から解放されて自らの文化と道義に還る、そこにしっかりと国家の礎（いしずえ）を定めて世界の文化に立ち向かい、自らの文化の価値を問う、こう言うことである。これは議論でも意見でもない。事実である。これを西洋流にみると異端であり、反動であり、非近代的であろう。しかしどこの国が自らの規準で、他を非難することが出来るというのであろうか。それこそ一種の帝国主義であり、他者支配的思想である。他の個性を認めそれを尊重する。これが真の自由主義であり民主主義である。そこにのみ平和は確立する。私どもはこのような回教国家の将来については十分に注目しなくてはならない。

さて最後にかつて仏教を生み、その流布したインド、ビルマ、インドネシアなどいわゆる第三勢力を形成している国はどうであらうか。彼らには極めて長い歴史と伝統がある。文化と宗教がある。しかもそれは複雑な社会情勢、民族構成、地理的関係の国であり、歴史と伝統の余りにも重い圧力が、身動きならぬほど現在にかぶさってきている国である。彼らは十分それを知っている。この解決のための四百年間は、彼らの苦難の時代であり、夜明けと共に彼らが立ち向かわなければならなかったのは、十六世紀初頭におけるそのままの彼らの文化と道義に加えて、四世紀間にゆがめられた人民の奴隷（どれい）根性であった。時間をかけて一步一步自分たちの手で解きほぐしていく以外に方法がない。そこに彼らが第三勢力として世界に平和と正義の行なわれることを期待しつつ静かに自ら努めていく姿がある。特にインドの如きその最たるものであらうかと思われる。東欧的なものも西欧的なものも、自らの暗中模索的努力に利する限り利用するが、自らを放棄することは決してしない。これが実情であると思われる。

(二) 新民族運動の方向

このようにみえてくると、新しい国造りに直進している民族でそこにのつとるべき伝統的文化、精神的基礎がある場合はそこによって立ち、そこから世界に伍（ご）し得る文化と道義―精神活動の蓄積と社会秩序の根本的理念を打ち立てようと努力しているのである。これを正しい意味においての民族運動もしくは民族主義といふことが出来ると思われる。民族主義を帝国主義に関連せしめて、

その別名の如く考えるのは白人主義に過ぎたものであり、それは決して世界支配の理念ではない。民族が自らの文化と道義とをひっさげて世界に価値を問うことである。民族主義は、民族の自らの主張であり、それを精神活動においてすることである。武力や経済力をバックにしない、文化と道義をもって個性と存在を主張することである。今日世界は米ソ二大国家の対立において存在している。この対立はもちろん政治的、軍事的対立であるが、その根本にあるのは政治理念の対立、場合によっては宗教的な対立とも考えることができる。アメリカの政治体制がいいのかソビエトの政治体制がよいのか、アメリカの社会理念、経済理念がいいのかソビエトのものがいいのか、比べて見ようではないか。世界の人たちはどちらをよしとするか競争してみようではないか、こういうふうで考えられる。それがだんだん尖鋭化して、早いとこ結着をつけたいために時に軍事的対立となるが、根本的には理念の対立である。

それならば、単にアメリカとソ連の対立だけでなく各国が、また政治理念、社会理念だけでなく文化とか民族固有の精神活動の蓄積や、またその根本理念において対立してもよいではないか。何もこれを米国とソ連に代表的に集約させる理由はないではないか。ここに今後の世界の平和の根本を築くカギがあると私は思う。真に世界の平和という場合、差別ある平等でなくして、差別のない平等、セパレーションのないイコリティがあつて、その上に築かれたものでなくてはならない。差別や優劣や上下のある——宿命的にそれを背負わされた平和は、真の平和ではない。奴隷の平和

でも平和がよい、などといっている人たちがあるとすれば、その人たちは平和ということについて余りにも無知というほかはない。この平和の本質は民族の相互尊敬、相互尊敬の本質は尊敬に値するものを有することであって、それなくしては、平和とか平等ということは、成り立つものではない。私は、正しい平和はこのような所にだけあると考える。

二つの対立を解消せしめるものは二つの中からではあるまい。第三勢力、第四勢力、第五勢力というぐあいには、無数の価値の主張がある所に、そして、その対立を純粹なかつ精神的なものとしていく所に、真の平等と平和、相互の尊敬と友好があり得る。弱小民族——それは要するに軍事と経済において弱いというに過ぎないのであるが——その弱小民族の存在価値、存在の値打ちというのは、その世界においては無限のものであり、ちっとも弱小ということはできない。

文化というもの、道義というものは、元來軍事的、経済的な力を背景にするのでなく、純粹に人間間的であり得る。それ自身においての絶対価値がある。弱小民族はそれゆえに文化をもって、その場合最も適切には固有の文化をもって、世界に問う以外生き方はない、日本にしても日本的なものを基礎にしてそれを世界的にしていく以外、真に生きる道はないのではないか。私はそう思う。

六 む 十

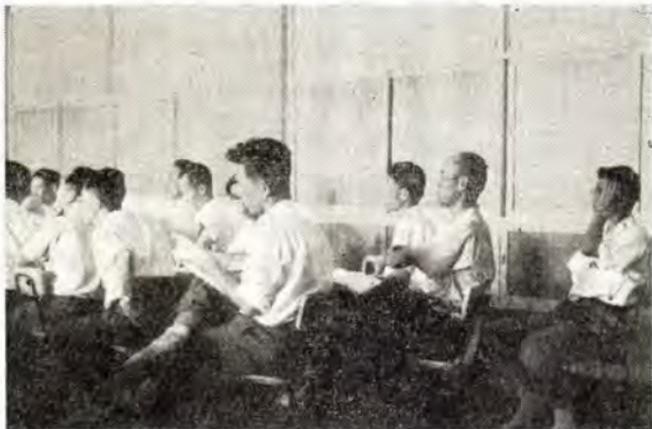
私どもは常に進歩を求めそのために改革を必要とする場合がある。ただ私どもはいかなる場合に

おいても、目的に急にして過程の検討を怠ってはならない。もちろん過程の検討の中に、目的を見失う愚を演じてはならないが、目的はその目的にふさわしい手段によってのみ、達成すべきものであるということを忘れてはならない。

一八二五年帝政ロシアの青年たち、すなわちいわゆるデカブリスト（十二月党員）たちが民主革命を求め、暗い外国支配に連なる帝政ロシアに民主主義と共和主義を持ち込むために立ち上がった。この際この人たちは二つのことを忘れていた。

一つは民族の伝統を忘れて、すべてをフランス革命的に過去の断絶において考えたことである。もちろん全面的にそうではなかったが、たとえばレーニンが共産革命を起こしていながらも、ロシアは本来のロシアの歴史に還ったのだと言うような民族認識は、確かに彼らには不足していたと思われる。

二つには手段むしろ過程において間違った。すでに目的が抽象的、一般的であり現実的、生活的、民族的でなかったがゆえに、そこには多くの同床異夢の人たちが集まった。特に無政府主義者や共産主義者たちとさえ手を握って、それがツアールよりいかに恐ろしいものであるかに気づかずに進



んだ結果は、打倒目的の帝政ロシアを倒した後に、全面的な彼らの追放、思いもよらない政権の誕生ということになってしまった。民主国家の建設、議会制国家の誕生を夢見た彼らは、ボルシェビキの激しい圧力に外国に四散していった。A・J・サツク、彼もその一人であった。彼がロシアデモクラシーの誕生の序文で「しかし私はなおロシアの民主主義を信ずる。恐るべき教訓の下に、温和で建設的な思想が、再び若者たちの手によってよみがえり、新しい生活の日が程なく来ることを」と言っている。ボルシェビキのあらしが新経済政策に後退し始めた一九二〇年に、彼がワシントンで書いたものである。それから四十年。サツクの望みは、なおかなえられていない。そこには漸次目覚めつつある若者たちの群はあると思われるが、動きがとれないまでに体制は伸びている。

一度革命のあらしが吹き始めると、それは人間を全く狂人にする。フランス革命がそうであり、ロシア革命がそうであり、中共革命がそうであり、ハンガリー事件がそうであり、今日のチベットがそうである。狂態が収まり、人々が深いあらしの恐怖からおそるおそる頭を上げた時、人々の頭の上の空は全く違っている。それが日を経るにつれて前どおりになるには、大変長い年月を要する。しかも何のために、物すごいあらしを人は通過したのかわからないという結果しか出て来ないのである。サツクは生きているのか死んだのか私は知らない。しかし全学連や総評、社会党や進歩的人たちの欲する世界が出て来た時、このサツクの叫びをあげる第一の人たちは、やはりその人たちではないのか。元気があつたのも、岸政権打倒を貫くのもよい。しかし、目前の政権争奪の中に恐る

べきプロセスが進行しつつあることは十分知ってやっていたきたい。（拍手）

羽田講師略歴（七高、東大法学部卒、現在鹿児島大学文理学部助教授、憲法行政法担当）

じゅんじゅんと論じられる羽田講師の気迫には、犯すべからざるものがあつた。前日の佐藤講師の中共批判と合わせて、現代日本の危機をひしひしと訴える講義であつた。だが―それゆゑにこそ、いま何にもまして要求されるものは、かかる外来思想を正確に批判すべき日本民族自身の内的充実である。それなくしては、それとアメリカの間には、漂うごとき思考が続けられるならば、そこには民族の破滅以外のものもない。それを痛感させられながら次の日程を迎えた。

地区別懇談会（四・〇〇）五・〇〇）

各班は各地域からの参加者が入り交じって編成されているので、同地域の人々の会合をもちたいという要望がたくさん出てきた。このためわずかの時間ではあつたが、その集まりが開かれた。

東京、神戸、岡山、福岡、長崎、熊本、鹿児島、宮崎などに分かれて自己紹介、今後の連絡などについて話し合う。もはやわだかまよりもしこりもなく、お互いに十年の知己でもあるかのようになごやかなふん開気の中で懇談が続けられた。

入浴・夕食・散歩（五・〇〇～七・〇〇）

午後七時から約三十分間、この合宿で講義をもっておられない大学教官有志協議会の教官方六氏に、一人五分か十分間程度の短い時間ながら、学生青年に寄せる言葉をお願いした。この六教官は昨年度講義をされた方々でもあり、この合宿教室の意義を高く評されて来会しておられる方々であるので、そのお話は、親しみと慈愛にあふれて、参加学生たちにとっても、なごやかなひとときとなった。

思いのままに訴う

—大学六教官のあいさつ—

一

岡山大学教授

木下

彪

われわれ大学教官の仲間で、近畿方面を主としてある一つの会を作っている。毎月一べん会って話をするが、ことしになって、文部省の役人を招いて話を聞いたことがある。その時の話に、ユネスコでこんな話が出たということ聞かされた。それは世界各国が盛んに自分の国のことばかりを主張して、お互いに国家主義できしみ合っている、これではどうも世界の平和はこない、こんなに激しい国家主義思想が起こっているのは、子供のころから学校の教科書でそういうようなしつけをするからであらう、各国の教科書であまりひどい国家主義の思想を植えつけているのは、注意しようじゃないかということになって、各国の教科書を集めて調べたという話だった。その結果、どの国も自分の国ぐらいすぐれた国はないというように、祖国を非常に賛美していることがわかった。どこの国も歴史の教科書になると自分の国を賛美して、それを子供に教えている。なかでもドイツがもっとも強く祖国観念を生徒に植えつけている。しかもドイツは、外国の教科書を調べて自分の

国に不利なことを書いてある文章があると、必ず外務省からその国に向かって抗議している。「あなたの国の教科書は、こういうけしからん文章を載せているから訂正してくれ」と強硬に申し入れる。こうして教科書を調べてゆくうちに、どこの国も大同小異であったが、ひとり不思議な国のあることが見つかった。自分の国のことをちつともよくいわない、自分の祖国について少しも教えない、のみならず自分の国のことをむしろ悪く教えている国がある。それはどこかという日本であった。(笑)世界にただ一つ、自分の国の学校の生徒に祖国という観念を植えつけない国がある、それが日本だというのだ。

一方、排外記事をもっとも多く載せているのが中国だ。かつて中国の国民政府は四カ条の教育方針を決めたことがある。驚くべきことにその一カ条には真っ向から「排日」のスローガンが掲げられており、これを教科書にどんどん盛り込んだ。そして中国の敵国がどこであるかを児童によく教えることを力説した。日本の外務省が調べたところ、排日の教材は五百種類もあったそうだ。諸君は中国の排日教科書を読んだことはないだろうが、私はたんに読んでみたものだ。それはとても読んでもおれないほどひどい。このため日本はその当時、国際連盟という国際機関にこの問題をもち出そうじゃないかということになった。国際連盟にいまのユネスコのような組織があったのだろう。そこへ中国は排日教科書で日本のことをウソや本当のことをとりまぜてこんなに排日記事を書いていると提訴した。ところが「どこの国でも自分の国のことはよくいう。排外的な記事はどこにもある

もんだ。これはしょうがないから問題にしないでもよからう」という結論が出された。これは今から三十年あまり前にあったことです。

そこで日本の教科書にはどういう問題があるか。イギリスの新聞記者が、日本の教科書を読んで「ロバの歴史だ」と批評したことがある。「こんなバカな教科書、これはロバの歴史だ」と批評したという。つまり戦後の日本の教科書は、国家観念を植えつけることはほとんど罪悪のように考えて、少しも祖国意識を植えつけることはしない。ことにはなはだしいのは、占領軍によって歴史記述の内容が非常に干渉された事実だ。いままでのような歴史の教え方をしてはいかん、「社会科学」の中でチョッピリ日本史や西洋史をやれ、ということにされてしまった。その結果、気の毒だけれども諸君が習った歴史は、本当の歴史ではない。日本の歴史が非常に曲げられたりちよん切られたりして、いびつなものになって諸君の頭にはいつている。これを諸君は信じないかもしれないが、われわれははっきり主張することができる。私はことに近世の日本史を諸君が正しく教えられないと主張する。実は私の大学で学生から歴史に関してアンケートを取ってみたところ、まったく驚くべき結果を見たことがあるからだ。

それはともかくとして、私は許された二十分ばかりの時間で、近世の百年間——日米修好百年というが、日本が近代国家としてスタートしてことしでちょうど六十年ぐらいの計算になる。日本歴史のうちで対外的の歴史をごくかいつまんで諸君に話そう。なにしろ何時間かかっても足りない話

だけれども、それをこくかいつまんでいえるかどうか、この二十分間でいってみる。（笑）

私の演題は「外交史」となっているが、私は大学で外交史をやっているのではなく、文学をやっているのだが、外務省におったとき日支関係について講義していたことがあるので、そのように書いたのだと思う。

日米修好百年というその百年は一八六〇年から一九六〇年までです。なぜ日米修好百年かという、一八六〇年は日米修好条約が交換批准された年。これからくしくも百年目に日米安保条約の改正ができ、批准された。一八五一年、ペルリが黒船四隻を率いて浦賀にやってきて、日本に開国を迫った。そのときの歌に

太平の眠りをさます蒸気船 たった四はいで夜も寝られず

というのがある。日本人は夜も眠れぬほど驚いてしまった。一九四五年、たった一機のB 29が飛んできて、日本中が眠れなかったことがある。終戦後マッカーサーが厚木にやってきて、ミズリー艦上で日本は降伏の文書に調印した。彼はそのとき、ペルリが昔やってきた軍艦旗を博物館から出して来てミズリー艦上に掲げた。どういうつもりでそんなことをしたかは、マッカーサーに聞いてみないとわからないが、ペルリが日本にきてちょうど百年目にペルリの日本征服の宿志を果たしたというのだろう。

それとあわせて思い出しておく必要があるのは、明治十二年、米国の大統領を二期勤めてやめた

グラント將軍が、世界漫遊の途中日本にきたことだ。そのグラント將軍に対して、明治天皇はわだかまりなくいろいろお尋ねなされた。これからの日本は国を開くが、先進国としていろいろ教えてもらいたいというわけです。この記録はいまでも宮内庁に残っているが、実に立派なものだ。彼は二カ月間にわたってこれから国を開いてゆく日本に対して懇切にいろいろのことを教えていった。これと対照的に今年は大統領を二期勤めたアイゼンハワーがやってくるようになっていたが、それが変なことになってしまった。（笑）そうしてみると、この百年間で日米が再び振り出しに戻ったような感じがする。

諸君も知っていることだろうが「歴史はくり返す」ということは……。（笑）日本の近代の外交に関する書物の中で、石井菊次郎という外務大臣を勤めた人の書いた「外交余録」という本ぐらゐ外交記録として立派な本はない。近代のもっとも傑出した外交上の書物だと思う。この書物のはじめに「歴史はくり返す」というけれどもじつにこれは名言である。自分の国の外交政策を立てるに就いては、歴史を参考にする以外になんにもない」ということが書かれている。それに対して日本の西洋歴史の大家の坪井九馬三が、「ばかなことをいうな、歴史はくり返すなどということがあるもんじゃない。同じことが二度くり返されてたまるか。だんだん変化していくばかりだ」といって論争したことがある。この「歴史はくり返す」という名言は、日米修好百年でもくり返している。百年たつて日本は征服されたとはいいたくないが、敗戦で日本は四等国にされてしまった。

諸君は四国条約（一九二一年）を知っていますか。四国条約は、日本と英・米・仏が、日英同盟の廃棄の代わりとして結んだものだ。ここで注意しなければならないのは、こんどの敗戦で日本は四等国にされたが、この四国条約を結んだときの日本は——この前年に世界大戦が終わってパリの講和会議がすんだ——アメリカと対立した二大強国であつたのだ。諸君はこんなことをいうとホラを吹くように思うかもしれないが事実だ。ヨーロッパの第一次戦争がすんだあとは、戦つた国はみんな疲れ切つた病人のようなものだつた。敗けた国はベシヤンコになつてしまふ、勝つた国でも半病人だ。少しも傷つかないで強大になつた国はアメリカと日本だけだ。それで、いま米ソが対立しているように、日米の対立があり世界的な対立だつた。当時の日本はアメリカと五分五分の力をもつていた。つまりいまのソ連と同じような状態だ。それだけの強大国であつたのだから決して卑下することはない。アメリカという国はいまでも英仏を誘つてソ連と対抗している。英仏がついていなければ力が足りないのではない。フランスはそう強大な国ではない。欧州大戦後アメリカは世界の強大国になつたが「成り上がりもの」といわれるのがいやなので、英仏の由緒ある両国を自分のほうにつけて、英米仏三国の共同体制をとろうとする。だから、そのときも英米仏三国が日本を相手にして、四国条約を結んだわけだが、じつは米國と日本との条約みたいなものだつた。これはどういふ条約かという、日英同盟がひきつづき効力をもつておれば、アメリカは日英に対抗する力がなない。どうしても日本をイギリスから切り離してしまわなければならなかつた。そうすることによつ

て日米が対立できたのだ。それで四国条約は、日本をこれ以上アジアにおいて発展させない、という目的をもっていった。これはワシントンで結んだので「ワシントン条約」と呼ばれているが、この条約で日本海軍の比率は英米の六割に切られてしまった。当時日本は八八艦隊建造計画をもっていた。「八八艦隊などんでもない、そういうものを作られてたまるものか」ということになった。そのときの日本の造船能力はアメリカ以上であった。だから、これを押えるために四国条約を結んでそれで日本を金縛りにしてしまった。パリの講和会議がすんだころから、世界の情勢は日本とドイツに不利に動きつつあった。このとき日本はそれにいくら抵抗してもしょうがないので、涙をのんでこの四国条約を結んだのです。

もう二つ、三つ大事なことがある。一九〇四年の日露戦争の最中に、日本で「開国五十年史」という本が出版された。これはベルリが日本にやってきて、開国してから五十年間の日本の発展史を書いたもので、国家的に作った書物だ。これが世界各国語に翻訳されて出されたが、ことにこれを一生懸命に読んだのが隣の中国だ。中国語で訳した本を読んで非常に感動し、自分の国のみじめな姿に比べて、小さな日本が五十年間にこれだけ驚くべき大発展をしたことは世界の奇跡である。どうして日本があんなになったのかと、これを中国人は非常に読んだものだ。

諸君は日本に長くいたピコットというイギリスの少将が書いた「断たれた絆」という本——翻訳されて数年前に出た——を読んだことがありますか。この本は、明治時代の日本のことを非常に賛

美している。彼は日英の関係が非常に緊密であったあと、日英のきずなが断たれて日本も不幸になったが、イギリスも不幸になった。そしてその全盛時代を回顧し、日本がいまみじめになっていることを同情して書いている。この中に「西欧諸国とアメリカの尊敬と信頼を集めていた日本の黄金時代」という言葉があるが、それはこのころから明治末期くらい時代のささっていると思う。日米修好百年というがこの百年間に日本にはしばしば転期がきた。その転期を踏みはずすと国家の興亡にかかわる。私は五、六回くらい転期があったと思う。現在は安保条約の転期、その前は日独伊同盟のとき、これが非常な転期だ。その前はワシントン会議、その前は日露戦争、前の明治三十五年に日英同盟ができた時、これまた非常に重大な転期だ。その前はそれより七、八年前の日清戦争、これが明治開国第一の転期だ。この五つの転期が日本を興すか亡ぼすかの重大な転期であった。明治時代は英まいたな明治天皇と賢明な政治家が、その転期を見事に乗り切って黄金時代を築き上げた。大正にはいってからは日本が衰え出し、三国同盟さらに近ごろになると話にもななくなったものじゃない。このところでも十分お話ししたいけれども、もう時間が経ってしまった。しょうがないから——（拍手）来年またまいり、三時間ほど時間をいただいでゆっくりお話ししたいと思う。（拍手）

一一

長崎短期大学教授 野口恒樹

ことしは日米修好百年記念で、岸さん一行がアメリカに行った。その返礼という形でもないけれども、アイゼンハワー大統領が来日されるはずであった。ところがハガチー事件が起こって大統領は来日できなかった。それで私は日本の修好使館とハガチー事件とを結びつけて、ちょっと感じていることを申し述べてみたい。

一八六〇年はわが国の年号でいえば万延元年で、安政七年三月に桜田門の事変が起こって改元した。その前年の安政六年の秋に、新見豊前守、村垣淡路守、小栗忠順の三人が江戸城で大老らからアメリカに使いする役目をおおせつかる。そして安政七年一月にアメリカから迎えにきた軍艦に乗ってハワイに寄ったのちサンフランシスコに着き、パナマに下って川蒸気や汽車に乗って大西洋岸に出た。そしてまた軍艦に乗り北上してワシントンに着き国書を手渡した。その後ニューヨークに出る軍艦ナイヤガラ号に乗り、大西洋を南下して喜望峰を回り、インド洋を横切つて、ジャワ、パタビヤ、ホンコンなどを經由して品川沖に帰りついたのが、その年の九月だ。ちょうど九カ月で世界を一周したわけです。

このときの副使村垣淡路守が航海日記を書いており、私は三、四十年前から珍藏している。今年

は百年記念で時事通信から出版された。この書物は私は大変意味が深いと思う。日本人がはじめて西洋の文物に触れ、その感想を述べているからだ。日本精神が西洋の文明にぶつかってはじめて感じたことが虚飾なくしるされている。つまりこの本は、日本の精神と西洋の精神とが出合ったその記録であつて、そういう意味で非常に面白い。記念切手も出たが、一枚は烏帽子をかぶり狩衣を着て袴をはいた日本の使節が、大統領と軽く会釈をしておるところ、もう一枚は威臨丸という帆船が太平洋の荒波にもまれていて、護衛の意味で随行したというけれども、護衛どころではなく、むしろ軍艦のほうから護衛されているかっこうだ。そのときの船長が勝海舟だ。諸君はこれを見てなんと思ふかしりませんけれども、西洋の諸国は軍艦をもっているが、日本は一隻の軍艦もたなかつた。わずかに帆船を作つて太平洋を渡つたのです。

私は、この切手のすみに今日世界の造船国の一位から三位ぐらいまでをグラフに書いたらいいと思う。今日日本は世界第一の造船量を誇っている。日本の使節はこのときはじめてアメリカ海軍工所や熔鋼炉その他を見て、軍艦の造り方を見たのだ。百年のちの今日では、建艦の技術において、造船量において世界第一。私はもうひとつ、記念切手を作るならば、チョンマゲをゆつた三人の武士がミシンを使っている女性を熱心に見ている切手を作つたらよかつたと思う。そして、この片すみに、今日アメリカに日本が輸出しているミシンの台数でもグラフにして書いたらいい。百年前にはじめて船の造り方を見、ミシンというものを見た。百年後の今日は世界第一の造船国になり、そ

してその当のアメリカにミシンを輸出している。じつにこれは偉大なものだ、物質の文明において西洋人に追いついた、追いついたのみならずこれをしのいでいる、その原因はなにか。日本人は科学を解する力があるのだ、技術の能力があるのだ、あるいはとくに手先が器用だ、そういうことは一応の説明にはなるかもしれないが、そういうことだけではないと思う。それは物質文明は驚異的に発展したけれども、精神文明のほうはどうであったか。こういうことを考えてみたいと思う。烏帽子を脱げばチョンまげだ。あれを見て当時の日本は未開であったと思う人があつたかもしれない。しかしながら私は正直のところ、百年後アメリカに行った岸首相の一行の中に一人でも、この村垣淡路守一行のような精神的にしっかりした人物がいたかどうか疑問だ、いなかったと思う。なぜそういうことをいうか。それは淡路守の日誌を見ればよくわかるが、江戸城で重大使命を受けて家に帰り妻子にそれを知らせた。すると妻は、万里の外のアメリカの国に使いをするのは大変なことだ、再び会えるかどうかともわからないというので悲しんだ。それに対して淡路守は、万里の外に使用して海外に皇国の光りを輝かすのは男子の本懐だという。しかしそうはいったけれども、これを誤れば神州の恥辱になることを思えば心苦しきこと限りなし、というような文章が日誌に書かれている。井伊大老は勅許を仰がなかったために桜田門で殺されたけれども、使節一行は皇国の光を海外に輝かし、神州の恥辱になることはしないという覚悟と責任感をもっておつた。論語にも君命を受けてそれを果たせないということは大恥辱であるとの言葉があるが、そういう覚悟と責任感であ

る。総勢八十何人かの一行はハワイで慰安のためダンスなどに誘われている。けれども、夜は出歩かぬ——夜は出向せぬ国風であるからといって断わっている。今日では西洋に行けば西洋の風俗にこれ従うことのみを努め、日本の風俗はすぐ捨ててしまふ。西洋でのみならず、日本に帰っても西洋の風俗に従うものも少なくないが、一行は日本の風俗を守って、夜は出歩かぬといつてきつぱり断わっている。

ところで、国書を捧呈する前々日ぐらいになって、一体国書はどういうようにして渡すものか、向こうはなんら用意していないという。日本では習礼といって前もって予行演習をする。こちらは事を大切に考えるから、そうすべきでないかと申し入れている。先方では「なるほどもっともである、大統領に相談して決めるから、ちょっと待ってほしい」といつて相談している。「日本の使節のいうことはもっともだが、あす一日しかない、あすがさしかえるならばきょうやったらどうか」という。こちらは「きょうこれからやると夜にかかる、夜は出歩かぬ、そういうことなら、もうやらんでもよろしい」といつて、アメリカのほうが引きずり回されている形だ。——向こうは未開国の人間を連れて来たつもりでいるけれども、そうではない。今日の言葉でいえば主体性といいますが、自主性というか、そういうものを決して失わずに応待している。

国書を手渡したのちも、東洋君子国の一行は非常に珍しがられ方々から引っぱりだこた。ここかしこからきてくれというけれども、大事な役目がすんだうえはすみやかに帰りたい、物見遊山ウツクに来

たのではないとこれも断わっている。（笑）ナイヤガラ号の修理のためいやでも滞在しなければならなかった。そのときなども、ナイヤガラ州の知事がナイヤガラの滝を見せようと州の予算を組み、歓迎プログラムを作り使節に来てくれと頼んだが、なかなかこしを上げない。そこで大統領側近にまでお願いしたが、それでもちっとも動かない。とうとう行かない。アメリカ側では「それでは体面が立たない」というが、そういうものには応じない。しかし大事なところ、たとえばさきほども申した海軍工所はじめ図書館、天文台、議事堂、病院などの施設はほとんど見ており、しかも詳細に観察している。議事堂に行つて、アメリカ大統領は四年ごとに選挙することを聞き、この国の大統領は四年ごとに入札で決める、こういうような国の建て方で、はたして長続きするであろうかという疑問をもち、こういう大統領は本当の国の君主ではない、などといっている。

いろいろ失敗談も述べている。向こうでは、ワシントン始まっていらい、日本の使節団を迎えるために人が出た。これほどたくさんワシントンに人が出たことがない。アメリカの国民詩人ともいうべきホイットマンも一行をまのあたりみて詩をよんでいる。淡路守は、自分たちが大ぜいから珍しがられたことについて、西洋からアメリカに来る使節は風俗、習慣、服装などもほぼ同じだから珍しくもないだろう、だがわれわれは第一服装が非常に違う、そして八十何人の大ぜいである、だから大ぜい見にくるのも当たり前だといって、決していい気になつておらない。ある席でアメリカの婦人から、「アメリカの女と日本の女とどちらがよいと思うか」と問われて、それに答えて「メ

リケンのはう色白くてよし」といったところ、みんなささやき合つて喜び合えりとするし、その次に「愚直の性質なれかし」と書いてある。「アメリカの女は色が白くてきれいだ」とほめられれば、それをそのままほめられて喜ぶのは、いかにもすなおであるけれども、ひとに向かつて「あなたのところとどっちがきれいか」と聞かれれば、お世辞でも「あなたのはうがきれいだ」といわざるを得ないだろうが、それを真に受けて喜ぶのはばかだ（笑）といっているわけです。

淡路守一行は、アメリカのどの施設を見ても驚ろきはしたであらう。しかし恐れるとか、これではとてまかなわんとかいう気持ちにはちつともいだかなかつた。海軍工所では目の前で大きなかりを作り、何百発という弾丸を作つて見せる、それを見ても、恐れるとか、かなわんというようなことをもらしているところは少しもない。「これはわが国でも取り用いたならば国益を増すこと甚大であらう」といい、天文台を見ても、「航海術というものはこれから先は大事だ、留学をさせて学ばせたらよからう」といっている。こういう見どころが実に立派で、一行の乗つた軍艦のポーハタ、ローノック、ナイヤガラ号は当時アメリカが世界に誇る軍艦だ。そういう軍艦に乗つてもほんやり乗っているのではなくして、細かく観察している。「その三隻はメリケンが宇内に誇る巨艦であるけれども、精兵は十二、三人」と詳細に観察をして、精兵の数も計算している。そして「ひとたびわが国の技をもつてこれを微塵に砕かんことは、いと易きことなり」こういうことまで書いている。だから向こうみずとか、無鉄砲とかいう批評は当たらない。フィラデルフィアの町を通つた

ときの観察などでも、ちょっと素通りしただけでよくもこんな観察ができたものだと思うような観察をしている。そういう点で非常に感心させられるが、当時アメリカの新聞は「日米の国交を開くことは、両方の国にとって非常によいことだ。少なくともアメリカは日本の厚い義務心に学ぶことができる」と社説で論じている。それから約五十年後、日露戦争が起こって日本は世界が恐れていた強大なロシアを破り、世界各国を驚歎させた。当時アメリカの哲学者でザザイヤ・ロイスという人がいた。ヨーロッパの哲学者はロイスをもっとも尊敬している。そのロイスが一九〇八年 *Philosophy of loyalty* 「忠誠の哲学」——という書物を書き、その中でアメリカの個人主義の弊害を説いて、日本人の忠義に学ぶべきである、といっている。忠義がわからないという人は、新渡戸さんが書いている「日本の武士道」を読んでほしい。日本の武士道の事実を見るならば、武士道の昔の忠義は、決して個人主義者が反対するようなものではない。つまり、忠は最高の道徳であるという主張だ。ロイスの本はかつて岩波から訳されていたが、いまは絶版になっている。自由主義思想がはいりその訳本が出たとき、その本は「ロイス・道徳哲学」という名前で訳された。そのころから「忠義」などといういいかたは封建的というか古臭いというか、それじゃ本が売れないと思ったのだから。それで「ロイス・道徳哲学」というような訳名にしたわけです。

それから約五十年たったことしアイゼンハワー大統領が来るはずだった。そして新聞係秘書のハガチー氏が羽田におりたつと全学連が暴力的デモを行ない、自動車のガラスをこわししばらくの間

軟禁状態にした。「こんなことではとても大統領はこれない」という日本政府の判断で大統領の来日は中止された。ところで当のハガチー氏はなんといったか。「日本は伝統的に礼儀正しい親切な国民であった。とりわけ忠誠であった。これらの学生は、国家に対する忠誠すらもないものと思われる」ということをハガチー氏はいった。いまから百年前、初めて国交を開いたとき、アメリカが非常に違った日本人とその文明に接して、なにを学ぶことができなくても、われわれは日本人から厚い義務心を学ぶことができるといった。そして約五十年のち日露戦争があったとき、アメリカ第一の哲学者が、アメリカが日本のこの忠を学んで個人主義の弊をためなければならぬと、アメリカは一生懸命に日本の忠を学び取り入れようとしたのである。そして現在アメリカは実際にロイヤルティーということを重ねている。日本人は第二次大戦においても、日露戦争に劣らない忠義の精神を軍人も銃後の人も發揮したと思う。ただこの戦後の十五年の間そういうものが無価値のようにされてしまっている。一方物質文明は西洋をしのぐようになっていく。その原動力となったものは、やはりそういう精神であったらうと思う。ところが現在の日本人は、その精神の抜けがらのようになってしまっている。私はこれでよいだらうかという強い疑問を感じるわけだ。（拍手）

えみしらもあふぎてぞ見よ東なる 我が日の本の国の光を （村垣淡路守）

三

熊本大学教授 水野武夫

今まで後ろ向きの話がたくさんあったので、私は前向きの話をしたと思う。いま人種の問題でなにか一番問題になっているかというところ、いうまでもなく黒人の問題である。

アメリカでもアフリカでも、いま世界を飛んでいる電波の多くの部分は、アフリカのコンゴ問題や、大統領選挙でいかにニグロの問題を取り扱うかということだ。そこでわれわれはどういう色をしているかというところ、黒い色ではなく黄色の色をしている。そうすると、黒と白との間にあって一番いい仲介ができるのは、われわれ日本民族ではないかと思うのです。その大事な、偉大なる使命をもっている日本人が「夢がない、夢がない」といつているのは、まことにもったいないと思う。われわれはわれわれのインテリジェンスと言葉をもって、どんどんアフリカに出かけていく必要がある。これまでの移民は食いつめ移民だといわれたり、内地にいてもどうにもならないから朝鮮や満洲に行こう、ブラジルに行こうということであった。いままでのようにパントマイムで歩いても十分な効果を上げることにはできない。諸君もパントマイムを解決するために、その国の言葉を十分マスターするよう勉強していただきたい。そのつぎには、柔道と剣道など大いにやってもらいたいと思う。これは暴力を揮うことをすすめるものではない。ずいぶん背たけが高い外人たちに決し



て負けるか、という気迫をもつためには、どうしても柔道であいつを投げてやるぞ、ステッキ一本持っておればあいつに負けるか、というような気迫をもって、大いにアフリカをはじめ全世界に活躍していただきたい。（拍手）

そして「夢がない、夢がない」で、日本ばかりのなかでぐずぐずしている必要はない。私の学問の農業経営の問題では、もうすでに行き詰っている農民諸君をどうするかということになるが、私は、いままでの経済の技術的な面からいって、五十万とか百万とかのものを出すということはなかなか容易でない。一騎当千という言葉があるが、いまはインフレ時代であるから一騎当百万でいい。（笑）一人でも百万人分はやる、くらいの人を進出させなければならぬ。そして「あとの人は日本でフナでも釣っている、おれが食べさせてやる」というくらいの人材が、諸君の中から続々輩出してほしいと私は念願している。さきほどから、かつての日本は世界一になりつつあった、ということをお話になっている。それならわれわれも前向きでひとつ「世

界一になる一くらいの気迫をもって立たなければならない。私はとくに青年のみなさんにそういう気になってほしいと思う。

最後にみなさんがさっき召し上がったご飯が、みなさんの知恵才覚を作っている。ものが精神になっておる、どこが境かわかりますか。ものは精神につながる、精神がものを作り出していく、そういう気迫、大いなる気迫をもって今後日本民族は世界に活躍する、こういう気持ちで今日のこの集まりをぜひひとつ「光りは雲仙から」というふうにお願したい。（拍手）

四

長崎大学講師 峯

辰 次

私はみなさんから話を聞こうと思って来たのでありますが、いま手作りの話をひとついたします。（笑）

私はいまの日本を「病める犬」と思う。かつてこの犬は、非常に忠実でしかも元氣はつらつ、家をよく守ったのであるが、ある日フトしたことから鎖を切り走り出した。ところが向こうから大きなシェパードがやってきたものだから道をよけていた。またそのあとから、今度は大きなブルドックが（笑）やって来た。けれども、生まれつき強い日本犬ですから、ひとかみシェパードに食いついたところが、うしろからブルにやられ、さんさんいためつけられてもう戦う余力がなくなった。そ

こで、血みどろになったまま家に帰って小屋にはいろいろとすると、入口にはクマ犬が待っている。そうしてそのクマ犬は傷ついた犬をみて、一気に首に食いついた。たまったものではありません。もう完全に力尽き軍門に下るにあらずして犬門に下った。（笑）

その犬は、小屋にはいってから、どうしてもこれは情けないことであると傷口をなめながら考えていた。ところが、また向こうの方から今度はけんかをしたシェパードが来て、骨と牛乳と肉とをもってきてくれるのです。「お前はこれを食べしてみろ、そうするとだんだん元にかえる」というので、それを食べていたところだんだん大きくなった。

ところが、手足、体は大きくなるが、立つとどうもフラフラする。そこで「これはどうもおかしい感じがする」というと、こんどは三Sのついた注射液をもつて来た。「これを注射してもらえ、そうすると立ちどころに健康になる」といわれたので、その三Sの注射を試してみた。すると三Sが、スクーリン、セツクス、スポーツという形に現われて、非常にその犬はじょうぶになった。しかしどうも立ってからよろめくものだから、背中のほうに足を曲げてさわってみたら、どうも背骨のあたりが柔らかい。注射がきいて背骨が抜き取られてはいないけれども、コンニャクのようにやわくなりかけている。「これは困ったものだ」と思ったけれどももう遅いのです。しかし、背骨はやわくなっても、これはなんとかなるだろうと我慢をしていたとき、こんどはまた玄関のところで見つけたクマ犬が来て「これを注射してみろ、この注射はよくきくぞ」というものだから注射し

でもらった。ところが、すぐきいてちやうどウイスキーを飲んだように非常に勇ましくなり、ものすごくほえ出した。そして、そこらじゅうの人にかみつく。これではどうもならないのでみてもらったところが「どうもこれは無色透明であるべきセキズイの中が濁っていないか」というので注射器でとり出してみたところ、案の如く少し赤く濁っておった。（拍手）そこで、これでは困るとつないでいたのですが、その飼い主は、この犬はかつては、日本の純芝犬で、主人をよく守り家を守り子供を守り、じつにまじめに働いたものであるから、どうかしてこれをなおそうとしたけれども、近くにこれをなおすべき注射も薬もない。この注射や薬を作り出すべき人は諸君たち若き学生にあらずしてなに人でありましょう。

私は、諸君にこのことをお頼みして今晚のお話に代えます。（拍手）

五

長崎大学教官 植木九州男

私は現実はこの眼で見、またこの耳で聞いたもつともうれしく、愉快なことをたつたひとこと申し上げたいと思います。

それは、安保反対闘争激しいことしの六月十七、八日ごろのことであったと思う。某大学において学生大会が開かれた、その席上に約五、六百の学生が集まっていた。私もたまたまそこにオブザ

「パーとして列席していたが、そのときの委員長は「この会場に集まった諸君はすべて安保条約に反対しているものである。同志諸君よ、ともにいまからデモ行進に移ろうではないか」と叫んだのです。ところが学生の一人がき然と立ち上がり、「反対のあるところ必ず賛成がある。自分はデモ行進に参加するのは反対だ」といってその会場を去ったのです。そのあとを静かに私は見送ったのですが、会場の後ろのほうにすわっていた諸君もそれにひきずられて、クシの歯が抜けるように抜け去ったのが私の目に映じたのです。

世の大人の人たちは、いまの若いものは、いまの青年には骨がない、腰がないというが、それは青年諸君の真実を見ていない証拠だ。ここにこのように気骨あふれる青年がおることを私は知ったのであります。その事実をひとこと述べ、諸君もまたこの青年と同じように自分の所信に忠実であり、勇気をもっていただくようお願いしたい。（拍手）

六

熊本大学助教授 津 下 正 章

私はほんとうにだ足を添える役目で最後に立ったわけですが、いま先生方からいろいろとお話をうかがって、合宿のめざすところのものとわれわれの気持ちとは、諸君に了解ができたのではないかと思う。実は、大学の学生生活のなかで割合にゆるがせにされているのは、教授する立場に立つて

いるものが、学生諸君のあいだの友情の育成について、案外手ぬかりがあるのではないかと思う点である。

漢の時代の著作で「礼記」という本の中に「楽記」という篇がある。これは古い東洋の教育精神を説いた書物だが、その中に、学生相互の交友についてはつきり取り上げている。それとともによい師を選ぶ、また師を尊ぶという項目が出ている。私がいま礼記のことを申ししたが、諸君はそれを非常に古いことをいうと感じられたかもしれない。しかし決してそうではない。いま日本の音楽界に関心をもっている方なら知っていると思うが、鈴木鎮一というバイオリンの演奏者で教育にもたずさわっている方がいる。ノーベル賞候補のかけ声まで起こっているほど有名な人である。その方が三十年かかって築き上げた教育法は、今日学芸大学あるいは教育学部というところでやっている音楽教育法よりも、はるかに進んだ教育法だといわれている。その進んだ教育方法はなにかというと、実はその礼記の中から取っている。鈴木さんの教育法は、礼記の中の言葉からあみ出されたもので、最近出版された著書の中にはつきり書いておられる。これなどは、古典というものが今日いかに生かされているかというひとつの例と思います。

その礼記の中に「友情を大事にすること」「よい師を選ぶこと」この二つの問題が取り上げられている。今日の大学ではそういう点が案外欠けているという感じがする。この合宿には私も誘いを受けて、若い諸君と一緒に勉強できることを非常に有意義だと思ったので参加することにしたのだ

が、諸君と話をしているうちに、この友情をつちかうという意味を、改めてつくづく大切なことと考えさせられた。みなさんの一人一人がここで本当の友を作るようになさったならば、この会は大成功ではないかと思う。私は実はこういうと非常にせんえつかもしれないが、現代の学生だけでなく、現代のすべての世相の中で私をもっとも憂えることは、人間がごうまんになっていることである。無意識にせよ、その「ごうまんさ」のために、人と人との交わり、真の交友が、なんとなく浅薄皮相なものになってしまっている。そのためにお互いに相手のいうことがよく理解できなくなってしまう。このごうまんさというものを私はせめてこの会場だけでも取りのぞいて、ほんとうに和気あいあいとしたお互いに信じ合うふんい気の中ですごしていただきたい、と切に祈ります。

実は、私どもが言うことに対してもさだめしいろいな疑問も起こって来ると思うが、私どもが話していることは、自分で経験し信じたことをそのまま訴えているだけです。昨年の阿蘇合宿のときにもちょっと話しましたが、日本人の文化というものは、植物性文化だと考えてもいい。あなた方の周囲にあるものも大体植物で出来ているもので、食べるものも、食器も、体にまとうものも植物です。こうした日本人は、当然に植物的な思考方法をとっていく。じつに穏やかなやわらかな思考方法をとって成長していく。そういう行き方は、日本の文学の上にもはつきり表われていると思う。そこへ今日のような異質的な文化が流れ込んできてそこに混乱が起こっている。ただいま峯先生は「病める犬」という例をお引きになったが、私どもの健康なときには、私どもは胃がどこにある

か、腸がどこにあるかということとは意識しない。ところがひとたび病気になるとうが痛い、腸がどうも変だと感じる。それを「違和」という。この会場にいても諸君の気持ちの中にそういう違和感があると思う。これは二つの流れが交錯しているからそういうことになるのだと思う。その違和感をどのように、深い友情にまとめあげるかに、諸君の人間の努力がかけられている。

私はさきほど「友」ということを申ししたが、この字は二つの手を握る姿である。これは手を象形した文字だが、この会場を友情のるつぼにしていたきたい、手を握っているその調和の姿にもっていきいたいものだと思う。私も教官の側も、諸君とせひそういう気持ちに結び合いたいものだと思う。また「情」という言葉があるが、これは心の純粹なるものである。すべて、純粹なるものは「青」であり、お米をまっ白に仕上げたのは「精」である。お天気の良いのは「晴」である。人間の一番きれいなところ、これは眼青であり、ひとみである。それで、私はこの合宿に集まった諸君が、ひとりのこらず、ひとみをかがやかしたすがすがしい心で、お互いの友情をここに生み出し、この会を友情に生きる集まりにしたいと思うのである。

さきほど私は「謙虚な言葉が望ましい、ごうまんさが一番困る」といったが、終戦後二年目か三年目のころ久留島武彦という先生がある小学校にきて、子供さんたちにこんな話をした。「お釈迦さまが歩かれたあとは、その足あとにきれいな花が咲くということを仏教のお話で聞いています。あなたが歩かれたお父さんお母さんが歩かれた日本軍のあとには、花が咲いたでしょうか、咲いたと

思う人は手をあげて下さい。咲かないと思う人は手をあげなくてもよろしい、自分でほんとうに思うことをいって下さい」といった。しばらくして子供たちの大半が手をあげた。周囲にたくさんいた小学校の先生たちは、みんなキョロキョロと見回して変な顔をしている。先生たちは日本の軍隊はひどいことをやって侵略をやったのだとこれまで教えてきているから変な顔をしているわけだ。「あなた方のお父さんやお母さんが行ったそのあとに花が咲かなかったか」と聞かれたので「咲いた」という子供たちの態度、これはまことに自然だと思う。それで久留島さんは、「私もそう思う、あなた方の考えに賛成です」と言った。しかもそのあと久留島さんは「フィリピンも独立しました、その他の国もつぎつぎと独立しはじめました。これは日本が言っていた大東亜共栄圏——東亜の遅れた国々を一緒に起ち上がらせるのだというそのことなのです。こんな立派な花が咲いたじゃありませんか」といったのである。童話作家にはそうしたきれいな童心があつて、すなおにものを見ることができのさだろう。グリム兄弟は童話作家として名前を残したが、あのグリムは歴史学者としてご存じのとおり立派な学者です。彼が歴史の学問の業績をほめたたえられた会の席上で「私は学問ではめられるよりも、私が死んだときに、彼は愛国者であつた」というただそのひと言をいってもらえば、これに越した私に対する贈りものはありません」ところいったと伝えられている。

私どもはいま愛国とか、祖国愛ということばをいうことを、はばかるような世相のなかにいる。

こういう今日の現状を、私はすなおな健康体であるとは思わない。やっぱりそれは和にたがえた、調和を失った国の残念な姿であると思う。それを本当にもとに戻すのは諸君である。（拍手）

六教官が思いのままに意見発表を終えると、こんどは、これまでとかく聞く立場の多かった参加学生が、のびのびとした表情で、元氣よく登壇し「全体意見発表」に移った。明日の講義のためにすでに来宿されている経済評論家木内信胤氏や諫早市長の野村儀平氏、旅中立ち寄られた林正義氏（月刊「流れ」主宰者）をはじめ主催者側の大学教官有志協議会の諸講師も、国民文化研究会の会員も、みなカタズをのんで学生たちの自由発言に聞き入った。

全体意見発表（午後八・三〇～一〇・〇〇）

六教官の登壇に引き続き、全員ひと息入れたあと、参加学生による『全体意見発表』の最終日課にはいった。学生たちは合宿で行なわれた講義や班別討論などを通じて、感じたこと、全員に訴えたい所見などを率直簡明に発表した。主催者側は、この日課で、第一日の「全体討議」より数段充実した意見発表や討論がなされることを期待したし、残されたあと二日間の合宿をどう運営するかのパロメーターともしたい、と考えてのことであつた。

司会者の「一人持ち時間は三分」との説明にこたえて、登壇希望者は一斉に挙手、結局、二十二人が選ばれ

た。ちょうど台風が四国から本土をねらっており、むし暑く、雷鳴しきりに聞こえ、満場気合いのかかった最中に停電という一幕もあった。

意見の多数は、合宿に参加した喜びを素直に語り、これまでの学生生活の反省や合宿中に開発された広い精神の世界を淡々と述べるものであった。たとえば

一、私は、ひごろ青春をいかに生きようかと悩んだ。政治のことも勉強したい欲求にかられたこともあった。しかし合宿生活を送っていま考えてみると、いままでは自分のことばかり考えていたことがハッキリわかった。広く意見を受け入れられる心構えがようやくできてきた。これからの残された合宿が大事だ。

一、予想以上の勉強になった。全学連も、また全学連批判派も、国の前途を心から憂えている点で共通であることを発見した。またこの両派のミソと誤解が大きく深いものであることも認識した。したがって話し合っていく糸口はあるし、現代の混乱を收拾していかねばならないという勇氣も出てきた。

一、実社会で働いていると、学生時代に考えていたことと、実社会との隔たりを痛感する。学生時代の勉強に何かユガミがあるのではないか。それではいけない。われわれは、学生時代も実社会にはいっても、一貫して変わらないものに向かって進もう。

一、この合宿のような経験はこれまでなかった。このような生活があること、それが一番たいせつであることがわかった。諸講義は初めてきくものが多く、すぐにはのみこめなかった。しかし真剣に考えているのだということが身にしてみた。

一、日本民族の一致団結。右翼も左翼もないしみじみとした祖国愛。心の中から素直にこういう実感をわ

きたたさせるのが若者の使命だと思ふ。

一、日本人同士が、たとえば平和といった単語のいじくり合いで争っているのではないか。初めて顔を合せて少しも話が合わないような班の諸君とも、きょうまでくる間に、ずいぶんお互いに理解できるようになった。これからも徹底的に話し合おう。

などの意見である。合宿三日目を終わろうとして参加者の心は激しく動いている。たとえば表現に不十分な点があったにせよ、これらの意見の間から主催者も参加者も、心に伝わってくる尊い真実を感取することができた。

しかし、初めから自己の主張とか問題をひっさげて、合宿に乗り込んで来たのではないかと思われる意見も出てきた。これに対する激しい反論もあったが、もし既定の主張を言うだけ言って、異論には耳をかさないという態度で、意見発表がなされたとするならば、それはこの合宿の性格に全くそぐわないものであった。なぜならば、合宿では相互に開発され、そして一筋の共鳴の世界を真剣に求むべきものであり、主催者側の予期する所もここに一つの重点がかかっているからである。主催者側は特定のものを与えようとしているものでもなければ、また合宿を世にいう修練道場と心得ているものでもない。参加者相互の間から生まれてくるものを予期しているのである。さらにまた言い放しの甲論、反論し放しの乙論——の悪循環が、時代の病根ではないかと考えているし、甲論と乙論の中間に本当のものがあるといった安易なことも考えていない。したがって、二つのものを並べた中間に正しいものがあると考えれば、これに対してはきびしく求道の間を要求したのである。既定の主張だけを言い放して、その立場から他を非難することに懸命になったり、両論の中間を行こう

とするような心構えに對しては、合宿の全期間を通じて、思想の誤り、として是正するため、細心の注意がは
らわれた。

全体意見発表表の中で一学生から「講義は一方的で政治色が強すぎる。アメリカとソビエトという言葉がどれ
くらいの割で出てきたかをみれば政治的傾向がわかる。全学連を筆頭にした暴力を国際共産主義に結びつけて
文句なしにいけないという前提に立っている。しかし政治を論ずる場合にまず第一に必要なのは、純客観的現
状分析である。全学連の暴力的行動はいけないので、この事態を解決するのは日本精神であると言ひ、その日
本精神の中心に天皇をもってきたりする。政治はそんな甘いものではないので、大きな客観的分析に基づく研
究が必要だ」との意見が述べられた。これに對して直ちに反對論が展開された。主催者側は發言を控えて注視
していたが、講義に對する非難と、いわくありげな主張を取り混ぜたこうした意見が、合宿の目的を全く理解
していない点から出發していることをみて、極めて残念に思つた。講義を一方的に受け取つてみたり、日本精
神を勝手放題に規定したり、日本精神というよりも「心」とか「精神」という社会生活における重大な要素と
取り組もうともしないで、引いては、客観的分析なるものをひとり占めにしようとする考え方——むしろこの
ことは人間として劣弱さを示してはいないか——に問題があろう。このような思想の病根は異常な熱意をもつ
て、これから残された合宿で解きほぐしていかなければならなかつた。

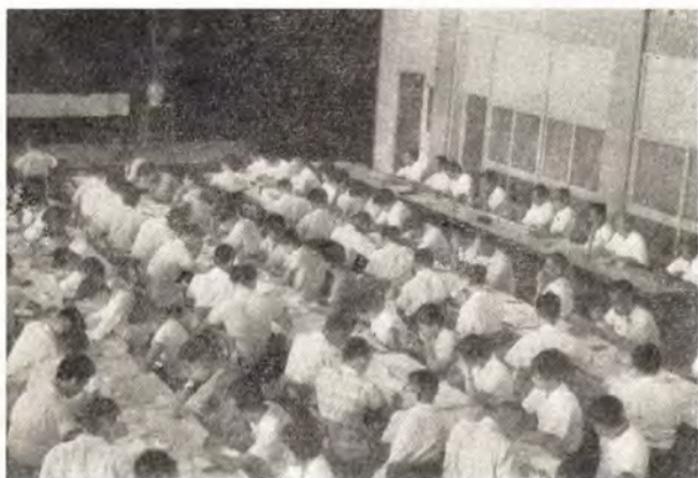
全体意見発表は活発に続き、「自己の世界観の展開」「現代に生きる不安」「青年学生の使命」などについ
ても熱弁がふるわれ、夜のふけるのも忘れてドッと拍手がわいた。

經濟の諸問題と

その研究方法論

——日本を世界的視野でとらえよう——

(第四日)



起床・体操・朝食（午前六・三〇～八・〇〇）

合宿は四日目を迎えた。連日講義や班別討論が積み重ねられ、一日の日課が終わった後も、学生諸君は夜ふけまで、二、三人あるいは集団ごとに熱心な話し合いを続けた。このような真剣な話し合いをみると、主催者側も「早く寝なさい」と注意しようと思っても、つい言いそびれてしまう。こういう状態で合宿にまったくけ入っている半面、参加者たちの心身の疲労はかくせない。しかし講義を聞くにも、班別討論で自分の主張を開陳するにも、本当に勇気がいる。参加者たちは肉体の疲労にも負けず、しだいにあらゆる面で興味と関心を新たにしてきたようであった。また他面では、国際情勢の実証的分析、学問の研究方法論、内外の経済動向についても、いっそう実相を深めたいという欲求がわいてきたのではなからうか。きょうの講義にさきだち、鹿児島大学助教授川井修治氏が主催者側を代表して登壇、疲労感を払いのけ残り少ない合宿でお互いに前進しようではないかと前置きし、前夜の全体意見発表について若干の感想を述べた。とくに講師の話を第三者の立場で聞くのではなく、現代の学生諸君に対して講師の訴えかけずにはおれない気持ちを十分にくみ取ってほしい、まして、講義を一定の立場から「精神偏重」と曲解するような愚劣さを避けねばならないことを指摘した。また、昨夜の意見発表の中で科学的分析が大切だという意見については、科学的という言葉を正しくその発言者が使っているかどうかについて注意を喚起した。すなわちマルクスが科学的のといっている場合でも、それは自然科学の研究部面でのことを、そのまま人文科学に当てはめようとする研究方法上の誤りがありはしないか、また世間はその誤りを見すごしたままではないか、などについて注意を促した。そして、きょうの木

内講師の話について、現状の具体的認識と人文科学の研究のきびしさを、改めて聞きとるように強く要望した。ついで世界経済調査会理事長、木内信胤氏の「世界の経済と日本の経済」と題する長時間にわたる講義が開始された。（以下第五日目の午前に追加講義された補講と合わせてここに集録した）

世界の経済と日本の経済

世界経済調査会理事長 木内信胤

講義項目

まえがき

- 一、東西の対立
- 二、三十年代以後のアメリカの変容
- 三、新しい欧州
- 四、後進国の現状
- 五、先進国と後進国との離ればなれの現状
- 六、ソ連の擾乱攻勢
- 七、共産圏の内部事情
- 八、日本の経済について
- 九、通覧して何がいえるか
- 十、研究方法論について（速記のまま）

まえがき

私の講演が活字になるについて、若干の説明をしておきたい。

これは八月十四日の午前八時から十二時に及ぶ長い講演で、その速記録は二百字詰めで六百枚以上にもなった。それをほぼ三分の一に縮めたのが以下の本文である。

どう縮めたかという、雲仙合宿における私の話では、はじめに「私自身の大学を出てから今日に至る経歴」を相当長々と話した。その話のうちに、私が遭遇したいろいろの事件のことを折り込んだ。およそ人の話をきくにはその人がどんな人間かを知っていることが、非常に助けになるものだから、その意味で私の経歴を話したのであったが、同時に、そこに折り込まれた事件についての知識は、それ自体としても知っていてほしいと思うことだし、またそういう事件をそのように眺めつつ暮らしてきた私の経験の集積が、今日の話の基盤であることを知ってもらいたいためであった。

当日は、私の経歴を前置きに、本論として、いまの世界経済と日本経済をどうみるかの話をし、「締めくくり」として「ものを考えるための参考」のようなことを話した。そのあと相当長い質疑と応答があって、またそのあと特に一時間ほどの時間を割り当てられ、「私がこういう認識に到達するについての方法論」のような話をした。

右のうち、「本論」とその「締めくくり」の部分については、前もって次のような「講義要旨」のプリントが配布された。

〔講義要旨〕（プリント）

世界の経済と日本の経済（35・8・4）

世界経済調査会理事長 木内信胤

一、序——話のねらい

(一) 世界の経済の中に日本の経済を浮かべて眺めることによって、両者に対する理解を深めたい。

(二) そのためには双方について「事実」を相当知らねばならないが、それは短時間でできることではないから、そのうち特に大事なものを、シンボリックに取り上げる。

(三) ねらうところは、それらの事実を知ってもらうことを通じて、もの見方、とらえ方について、自己反省をってもらうことである。ひいては現在の社会科学のあり方の問題を考えってもらうことである。

二、世界の経済について

(一) 「東西の対立」——この軍事・政治・経済・思想の全面にわたる対立の現実の姿をどう理解するか——

その人類の歴史上における位置づけをどう見るか——政治と経済との関連問題として、そこに何を発見するか。

(二) 「三十年代以後のアメリカの変容」——若干の重要な事実——その社会主義思想上の意味——世界にお

けるアメリカの位置づけ

(三) 「新しい欧州」——欧州共同体と欧州自由貿易圏——その歴史上の意味（「列強意識」の消滅と植民地の不用化）——新しい欧州の世界における位置づけ

(四) 「後進諸国の現状」——「停滞もしくは低下」の現状とその理由——その行くべき道——民族主義の見直しと国家概念の吟味

(五) 「先進国と後進国とのはなればなれの現状」——その姿——その意味

(六) 「ソ連の擾乱攻勢」——その現状——その意味——その将来の予想

(七) 「共産圏の内部事情」——ソ連の変容——その理由とその意味——中共の「躍進」の評価

三、日本の経済について

(一) 戦後の日本経済の上昇とその構造変化

(二) 重要問題の回顧

(三) その特異性

(四) 日本経済の世界における位置づけ

四、通覧して何がいえるか

(一) 「既成概念」打破の必要

- (一) 学問のあり方、研究方法についての反省
- (二) これからの日本を構想するための参考

右の順序による講演の速記を活字にするについて、私のしたことは

- (一) 最初の私の経歴の部分は、残念ながら全部割愛した。
- (二) 本論は約半分の長さに収約するとともに、相当文章に手を加えた。その集約の仕方については、一の「序——話のねらい」は全部カット、三の「日本の経済について」と四の「通覧して何が出来るか」という二つは大いに縮めて要旨だけにした。

(三) その代わり方法論を述べた補講の部分は、逆に速記をほとんどそのまま、多少の修文をするだけにして載せることにした。この補講部分は、上記四の主要部分の敷衍（ふえん）であるが、こういう問題は短くは表現できないのと、一部分でも講演そのままの文章が載ることは、あるていどそのときの気分を再現することになって面白いと思っただからである。

(四) 質疑応答の部分は、この会の性質上からみても、またその実際の内容からみてもはなはだ重要なのであるが、これも遺憾ながら全部割愛した。

以上四点の考慮によって印刷に付されたのであるが、これを読んでくださる方は、どうぞそのこ

とを心に止めて読んでいただきたいと思う。この印刷の目次は、右の順序にお構いなく、「通し」でつけてある。

一、東西の対立

軍事、政治、経済、思想上の全面にわたるこの対立の現実の姿をどう理解するか。人類の歴史上におけるその位置づけをどうみるか。政治と経済との関連問題としてそこに何を発見するか、ということをねらいに考えてみたい。第一に現実の姿を正しく知ることが大事です。東西の対立とは、いうまでもなく軍事、政治、経済、思想、全面にわたる対立ですが、その中で軍事面が一番こわい問題です。一步誤って世界大戦にでもなれば人類の破滅にもなりかねない。

この恐ろしい対立を「恐怖の均衡」といいますが、この恐怖の均衡について大事なことは、煮詰めていえば、どっちが強いかということです。私はアメリカの方が格段に強いとみます。格段に強いということは、昔ならば実力差をそのまま指したのですが、いまはその実力差が、そのままにはものをいわない。ということは、仮にソ連がアメリカに闘たたかいをかけたとするなら、一挙にしてアメリカは吹っ飛んでしまうであろう、壊滅するであろうと行って、まあいいでしょう。いまそうでもないとしても、もう二、三年すればそうなるでしょうから、いまから二、三年先を対象に考えて、そういつていいと思います。すなわちソ連がアメリカに対して闘たたかいをかけたとすれば、アメリカ

本土を吹っ飛ばすであらうだけの実力をソ連は身に付けてしまった。ソ連は大変な国です。ソ連は大変な力をもっている国だと思います。

さてアメリカは、仮にその本土が吹っ飛んだとしても、残ったものをもって、やはり次の瞬間には、ソ連を壊滅してしまうことができる。これがアメリカの方がソ連よりその力が上だという点です。その残るものは何かというと、その一つが「基地」です。だから、安保問題にも大きな焦点がかかってくるのです。ソ連側からみれば、日本がアメリカに基地を提供していることを止めさせた。日本ばかりでなく全世界において、アメリカに基地を提供している国を一つ一つ脱落させて、アメリカを基地なき国家にしようということに全力をあげている。なぜならアメリカの本土が壊滅したのちでも、その残った基地なるものによって、ソ連も壊滅させられるであらうから。ソ連はアメリカを壊滅させるのはうれしいだろうが、自分も壊滅するのはいやだから、やはりアメリカに対して戦争を仕掛けることはしない。このように、いまは相互に抑制する力をもっているから戦争が起こらない。これがご承知の「恐怖の均衡」といわれるものの実体です。

ところで、話を変えて、アメリカがソ連に開討ちをかけたとしたならば、ソ連は壊滅してそれで終わりです。残るもので多少のことはできるでしょうがたいしたことはできない。だからアメリカの力のほうが格段に上だということです。アメリカ側の残るもので一番大事なものは基地だといいましたが、日本の基地は、日本人がブーブーいうので原水爆は置いてない。だからたいして役に立た

ない。だがトルコとかイタリアとかイギリスとかの基地は、全部そういうときに役に立つ。ですからソ連は、自分が生き残ろうと思ったならば、アメリカのみならず、いわば全世界を壊滅させなければならぬという仕儀になるのです。ですから私はソ連はやらぬだろうと思っているわけですが、基地ばかりではなく、基地から原水爆をかかえて飛び上がり滞空している飛行機もある。しばらく前には、空軍基地の半分の勢力が常時滞空していたといわれております。それは基地がやられるかもしれないからです。基地にいきなり圍討ちをかけられるかもしれないので、そのときにもこれが残っているから、それが出て行って所要の仕事をするから、やっぱりだめですよ”といたいたためです。この原水爆を積んで常時滞空していることは、最近だいぶ減らしたそうですが、五月のパリ会議決裂後はまたふやしているという話です。それほどまでして、いやが上にも用心するというのが、彼らの考え方であって、これはぜひ知ってほしいと思います。日本人はどういうものか、やられるならやられても、それでもいいや”という気があるのか、本当にそういう点はのん気ですね。そののんきなところが経済なんか大いに進歩する所以ゆゑでもあるのです。財産をすつてしまおうが破産しようがあまり気にしない。私はもともと銀行家ですから、アメリカのバンカーなどずいぶん多数知っていますが、わけのわからない後進国なんかに行つて盛んに仕事をしようとする、そういう日本人の向こう見ずなことにはまったく恐れ入つたといった人がいます。これは日本人の不思議なのん気性です。このことは日本の文化、日本人の精神問題にも関係があると私は思います。日

本人というのはこの世の中を「仮の宿り」と思っている。徒然草（つれづれぐさ）でも読んでござんなさい。『仮の宿りとは思へど……』と書いてある。だから、世界が吹っ飛ばうがどうしようが、あまり気にしないようであるのは、これも仮のものであると思っただけからかもしれない。そんなことをつらつら考えたくなるような、日本人と西欧人との感覚の相違です。彼らはいやが上にも綿密な準備をし、またそういうふうな状態にものごとをおいておるわけです。

もう一つあるのです。潜航艇です。潜航艇にIRBM——ポラリスといいますね——を積み込んでいて、それが場合によっては北極の氷の下に潜っていたりするのですが、いかにソ連でもこれを全部やっつけるわけにいかない。だから所要の数が残っておれば、やはり結果において、ソ連は壊滅状態になるということです。これが今の現実の状態です。

先のことをいいますと、アメリカ本土のICBM基地は全部地下に潜ってしまったて、いかなる爆撃を受けても、爆撃されたあとすぐに顔を出してきて、同じことができるようになるそうです。そうなったら日本は中立になってもいいのだという議論が出てきますが、まだまだ今のうちは、中立になるわけにはいかない。世界の平和というものは、辛くもそういう状態、基地その他の存在によって保たれているという事実は、私は遺憾ながら疑う余地のないことだと思っております。もっとも、平和だけを保とうというのであればわけはない。きょうの日に、われわれはじめ全世界の人々がフルシチョフの家来になったら、それで平和です。たとえば、バートランド・ラッセルはちよっ

とそれに近いことをいっています。『共産化される方が戦争するよりいい』ということ。昨晚どなたかとお話していたら、『占領されてもいいじゃないか、それでも自由がある』とある学生がいったというのを聞きましたが、みんな、そういう気持ちになれば平和ではあります。しかしそういう状態はいやだ。共産化されるくらいなら、またフルンチョフの家族になるくらいならば、生きていく価値なしと考えれば、平和はいま話したようにして護られるほか、いまのところ方法がない。

さてそこで、世界がこういう状態になっている原因を、どこかの政治家が悪いからだと思っっているかのような方をしますが、実際世界はそうならざるを得なかったのです。第二次大戦中、日独伊に対してソ連、アメリカ、イギリス、フランスおよび蔣介石の中国の連合軍は、実に仲よく手を組んで戦っていた。そして彼らは戦後も同じように、この連合軍は仲よくやっていくのだと思っていたのです。この想定のもとに、国連をはじめとしていまの世界の仕組みを作ったのです。その証拠に、国連の組織をみればそれが一番よくわかる。その他いろいろな国際協定の作り方も、そういう前提に立ってできているのみならず、アメリカは戦後一度は非常な軍縮をやったのです。ところがスターリンのソ連は、周囲をどんどん攻略し、彼の支配下に置いた。そしてとうとう、その矛先は、ギリシャ・トルコに及ぶという段階に至ったとき、アメリカがとうとうみこしを上げ「トルーマンドクトリン」なるものを出して、『もしギリシャ・トルコに手を出したら、ソ連に対して戦争する』とっておどかした。それではじめてソ連の攻略は止まったのです。だから、

もしこのとき「戦争するぞ」ということをいわなければ、世界がもつともつと共産化されていったのは事実です。その同じことが、だいぶあとになって朝鮮でも起こったというわけです。

ところで、それより前に、なぜ朝鮮とドイツは二分されたのかということ、ここで考えておく必要がある。西ベルリンだけが辛うじて西側に残ったとはいうものの、ドイツが二分されたというその事情は、おそらくスターリンの深慮遠謀というものでしょう。『こうしておけばドイツは復活しない。ドイツが復活しなければヨーロッパは復活しない。ヨーロッパが復活しなければ世界を共産化することは易々たるものである』と彼は考えたのだらうと思います。そうでないと思わせる事実はないので。それでは朝鮮をあそこまでやったのはなぜか。日本についても北海道を取りたかったのでしょうか、日本の占領行政にもつと関与したかったのでしょうか。そうしたら日本の復興はなかったわけです。そうすれば東洋の復活というものはないし、世界の赤化というものは易々たるものであると彼が思ったとするならば、その考え方はまさにすばらしかったといべきです。ドイツが復興せず、ヨーロッパが復興せず、日本が混乱していたら、赤化していない世界を想像するさえ困難であると思います。だから、彼がそういう作戦を立てたとすれば、それは実にワンダフルであり、彼は実にえらかったと思います。

ともかく、そういうことを予想せねばならないような状態の展開があつて、アメリカはびっくりして立ち上がり、自国を「再軍備」すると同時に、ヨーロッパは早く復興してほしい、日本も復興

してほしいということになったわけです。この日本が復興してほしいということ、それはアメリカ人の親切心からでもあったのですが、それ以上にソ連との対抗上早くよくなつてほしいという希望があつたことは事実です。ヨーロッパに対しても同じで、それだからマーシャルプランというものが出てきたわけです。マーシャルプランが、出発しようとしたときは、ちょうどイタリアの総選挙（一九四六年）のときで、この選挙に負けたら、イタリアは共産党の天下になりかねなかつた。いまでもイタリアは共産党が多い国ですが、そのイタリアに対してマーシャル援助が送られるのです。その選挙の直前当時のイタリアは、当時の日本と同じようにものすごく飢^うしい国だったので、選挙の一週間前にどうしてもアメリカから最初の小麦のシッブメントを出したいということになった。マーシャルプランの初期のトップマンになつた人は、ポール・ホフマンという人です。当時彼は日本にきており、賠償問題などの研究をしていたわけですが、その帰途ハワイにいたとき彼にトルーマンから電話がかかり、「こんどマーシャルプランというものをやるので、その綜合本部を作るからその本部長になってくれ」と要請されたホフマンは、ロサンゼルスに住んでおるのですが、家に戻らずまっすぐワシントンに飛んで行き、日本にきたとき着ていたブルーの背広そのまま、セクレタリー一人を相手に必要な人と電話で連絡しながら、オフィスを作る。それがやがて、一つの大きな官庁になるのですが、とりあえずイタリアの選挙に間に合うように小麦の最初の積み出しのドキュメントにサインするところまで漕ぎつけて、はじめてロサンゼルスに帰つて

背広を着替えたという話が伝わっていますが、そういうエピソードでマーシャルプランは始まるのです。そしてそれによって欧州の復興は始まるのですが、あれは三年ぐらいで大体済んでしまい、それからいまのNATO（北大西洋条約機構）に発展してくるのです。

さてそれはそれとして、いま申した恐怖の均衡による防衛体制は、アメリカにとっても「集団保障」というものによらなければだめなのです。アメリカがどんなに強くてももし孤立していたら、閣下をかけられてそれで終わりですが、集団安全保障体制を作っていれば、残るものがあるからソ連はアメリカに閣下をかけられない。その結果世界の平和がともかくも保たれ、また共産化も免れるということになるのですが、これらのすべてを通じて、これはソ連の戦後のやり方が、戦時の甘い期待とはまったく反対であったという事実に驚かされて、アメリカが止むを得ず作り出した体制であるという事実をここで再認識していただきたいのです。

そういうことを少しも考えずに、現状だけを見て、殊にアメリカのほうが少し強そうだというところだけを見て、資本主義というものは、元来が帝国主義なのだという既成概念を頭にもって、アメリカのほうがあグレッシップであり、ソ連が平和勢力であるように考えるのは全然違います。それではソ連はなぜアグレッシップになるか、それは私にもまだよくわかりませんが、ソ連はなぜあいう軍備をし、なぜあんなにスプートニクに一生懸命になるか、それをどうぞみなさんも考えておいていただきたい。

「恐怖の均衡」というものの理解は、以上のようであつてほしいと思いますが、要するに集団安全保障体制によつて辛くも世界の平和が保たれている、世界の共産化も防がれているという事実は、どうしても知らねばならない。ですから、たとえばアメリカ人が、アメリカといえども国防はアメリカ一国ではできない」というのは、文字どおり本当です。したがつて、日本が安保体制から独立して、いわゆる中立になるとすれば、それならパキスタンもタイもフィリピンも、日本と同じように中立になるといふふうに考えてごらん下さい。結局、それはアメリカを丸裸にすることになります。丸裸にしたらアメリカは、いまお話しした論理に立つことが出来ないから、世界は共産化されるほかないのです。ですから、もし日本が脱落し、トルコも、パキスタンも脱落する方向に世界が動くなら、アメリカはそれにさきだち、まだ力のあるうちにおそらくやるかもしれません。いいかえれば、日本が脱落することは、アメリカをして止むを得ず戦争に走らせる行為になりかねない。それは人類の破滅かもしれません。ですから日本の集団平和維持機構からの脱落は、遺憾ながら世界の平和がそういう機構によつて保たれている現状からみて、平和に対する「反逆」です。私はそのように考えねばならないと思つております。日本の新聞はそのように書かないから、そんな話をはじめて聞かれた方が多いのではないかと思ひますが。

私は安保の話をしにここに来たのではないけれどもついではいへば、日本が中立になることは、アメリカからみれば実に大きな問題です。しかしその前に、もう一ついわねばならないことは、日

本の中立になりたいという考えについてであります。それは「戦争はいやだ」ということでしょ
ね。

若い人であれば、自分が兵隊に行くのがいやと思うかもしれないませんが、これからの戦争を、徴兵
で「おいちに」「おいちに」とやらされ、満洲か支那へつれて行かれて鉄砲をかつぐのだと思つて
おるとすれば、これは何たる考えの足りないことかと思ひます。これからの戦争は、兵隊であろう
となかろうと危険の点では同じだと思ひます。苦勞の点も同じでしょう。だから自分が兵隊に行く
か行かないかを中心にものを考え、または世間のお母さんたちが「息子が兵隊に」ということで考
えるのは、何たる精神薄弱かと私は思ひます。それにもう一つ、日本人が中立になりたいと考えて
いる中立は、無防備中立です。ところが、世の中には無防備の中立はないということも知つておい
てもらいたい。あの有名な中立主義の国インドですら、せいっぱいの軍備をやつてゐるのです。
われわれ経済を気にしているものからいへば、「インドがああ巨大な軍備をもたなかつたらいいの
になあ」と思ひます。それほど軍備をもち、それを拡大しようとしてゐる。最近チベットがああ
いうことになり、中共に国境を侵されたから、インドはアメリカから最新兵器を買うそうです。ス
イスは有名な中立国の模範国みたいなもので、日本人のあこがれの的ですけども、これがすごい
軍国です。スイスは国民皆兵です。私はスイスに何回も行きましたから、その訓練ぶりをみたこと
があります。国民に全部兵器を渡してゐる。どうして悪用されないで済むのかと感心します。お



そらく民主主義の模範国だから国民を信頼していいのでしょね。そして、その軍備があったために、ヒトラーはスイスを侵さなかったと言える。守る意思および能力があるからです。そのスイスは、最近では原水爆を装備するといっている。もうすでにしているかもしれない。それに対してフルンチョフが文句をいいたら、スイスは「お前に文句をいう資格があるか」とやり返しております。

フィンランドも中立ですが、フィンランドは現実にソ連と戦った経験があります。それだけの軍備をもっている。ですから、私も、私たちが外国人に向かって、「日本は中立になりたいのだ」といったとしたら、真っ先に彼らは「お前、それにはいからかかると思う」と聞くでしょう。それは、日本が独力で国を防備しようとしたら、どんなに巨大な軍備をもたなければならぬか、そこをお前はどうか考えているのか、という質問です。ところが日本人が考える中立とは、軍備をもたないということです。そういったら彼らは「おやまあ、そうか」といって開いた口が塞がらない。「それでどうして国の安全が保てるのだ」と彼らなら真っ先にその方を考えるからです。

安保問題であの騒ぎになったとき、私の知っている若い人で、しかもずいぶん物を知っている人でありながら、デモに参加した人がたくさんいましたから、私もその人たちにあとでいろいろ聞いてみたのですが、彼らは「無防備中立」ということがありうると思っていたことを発見して、実は私も大いに驚きました。大変な錯覚です。もう一つ、日本人の考え方についていうと、日本人は自分の国を過小評価しています。——これはのちほど詳しくお話しますが——日本を、非常に小さく評価している。日本のようなあわれな小さな国は、貧乏でかわいそうなんだから、大きな国同士がお互いにいくら戦争しても仕方がないが、そのときにも、日本はどうぞ脇の方にそっとしておいてくれ”といつてもいいはずだ、という自己評価をしているのです。だから、私はいつも「世界中に日本を浮かべてみる」というのです。日本は実に大きな国です。世界に、およそ百二十ぐらゐの国があります。そのうち国連にはいつているのは、この間まで八十二、三、やがて百ほどになります。その中で人口一千万以下の国が何と半分以上です。一番大きなのは中共、六億とか七億とかいう。次がインドで、四億と称しています。これは特別の事情によってできている超大な国です。ソ連二億、アメリカが一億八千万。その次が日本の一億弱です。日本の次にくるのがパキスタン、インドネシアの八千万です。その次がブラジルの六千万、あと四千万、五千万というのがイギリス、フランス、ドイツなどです。メキシコの三千万、そういうのが全体で二十ぐらいしかない。五千万以上の国は十しかないのです。日本はその五番目です。工業力も五番目だと思いますが、そ

の他多くの点で日本はすごく大きな国です。国連加盟国のうち、人口一千万以下の国が半数以上あるといいましたが、百万、二百万という国もずいぶんある。小さいところでは、ルクセンブルグなど三十万しかありません。だからここで申し上げたいことは、どうか国という概念を再吟味していただきたい。人口ばかりではありません。民族が統一していて、知的レベルが高く、同じ言語を使っている、国の中に分裂がない、そういう国が日本です。民族というものは形成されるべきものがあります。形成されなければ民族はできない。人種と民族とは違います。アメリカもソ連もイギリスも多人種の国です。長い歴史の過程を経て、民族というものは形成されるものですが、日本は島国であって、長い歴史のプロセスの中で、おのずから、民族の形成ができていく稀有の国家です。ところが、あなた方は、国というみんなそういうものだと思っていらっしゃる。最近コンゴがあらんな暴動事件を起こしたので、「これでも国か」ということを考えていただくのもっともいい機会が与えられた。コンゴは民族主義の新興国家で、みんなベルギーが悪いのだと考えてしまうのは、とんでもない話です。あれが一つの国といえるのか。大学卒業生は、十四人しかないということですが、国連におけるコンゴの代弁者は、ベルギーの大学を出た二十七歳ぐらいの青年です。それが一人アメリカにきているから、コンゴにはあと十三人しか大学卒業生はいないのです。人口は千四百万です。あとで後進国についてもお話しますが、要するに国というものの概念の再吟味が必要です。あなた方は自分が思っている国という概念を投影して、国と名づけられたものはみんなそうだ

と思つて同情してみたり、恐ろしがつてみたりしているが、そうはいかないので、私は国というものの観念は、これから変わるのだと思つております。

そこで「東西対立」の本論にはいることにしますが、要するにソ連とアメリカの軍事的対立は、さきにお話したような経過を経て起こり、そしてその形で辛うじて平和が保たれているのですが、次にそのような対立の人類の歴史における位置づけをどうみるかを、考えなければならぬと思ひます。それには一体なんだつてソ連はああいふ国になつたのであるか、ということを見る必要があらります。共産主義というものを振りかざして、なにがゆえにそれ以外の国に対して一種のアタック（攻撃）をするのかということですが。

私は歴史に詳しくはないが、私が読んだ本で非常に感心したのは、アーノルド・トインビーの本です。われわれが簡単に読めるのは「試練に立つ文明」「世界と西欧」という二冊の本ですが、私はそれらに書いてある彼の解釈というものが非常に面白いと思ふ。トインビーはご承知のとおり、人類の歴史を国の興亡ということよりも、文明の接触ということで説いている。その文明の中には古代支那の文明、古代エジプトの文明から始めて、インカ帝国の文明なども入れて約二十の文明と名づけられるものがあつたそうですが、そのうち現に残っているものは五つしかなく、あと十五はみんな滅びてしまつた。現存する文明は、一つは彼がウエスタン・クリステンダムというところの「西欧キリスト文明」で、これが欧州およびアメリカによって代表されている。その次が「ギリシ

「キリスト教の文明」で、彼はいまのソ連というものはこのギリシヤ正教の文明だという。これを二つの違うものとして対立させている。第三は「イスラム教文明」であって、これはマホメット教の世界です。中近東から西はモロッコ、東はマラヤ・インドネシアに至るまでの非常に広範な地域に、イスラム教の文明というものがありません。第四の文明がインド「ヒンズー文明」です。第五の文明が「東洋文明」です。東洋とは支那・朝鮮・日本、現在ならば台湾がもちろん重要な一分子としてはありますが、それらの国々です。

この五つが世界に現に存在している文明ですが、現在の世界においては西歐文明がばかに強い。これが世界中を押しまくっているのが過去二、三百年ぐらいの世界の状態です。世界というものは、そういうふうに眺めるべきものらしい。どうもそうだろうと思つて、私はそう見ているのですが、そこで、現在悠久なる人類の歴史という見地から見ると「意味のある事件」*matter of significance*はどこに起こっているかというところ、押しまくっている西歐側にあるのではなく、押しまくられているほうにある。押しまくっている西歐側は、トインビーによれば精神的にはやや枯れているというか何というか、ともかく上がりしてきたような感じである。ところが押しまくられているほうは、それぞれ自己のもっているものの性質とそのときの環境とによつて、それぞれ違つたリアクション（反応）を示している。しかしいずれも押しまくられているのだから、ものすごく悩んでいる。東洋のわれわれにしる、インドにしる、回教圏の人々にしる、ソ連にしる、ものすごく精神的に悩んでい

るが、その悩みの中から「新しい文明」が生まれるのではないかとトインビーはいつているのです。「意味ある事件」は押しまくられている側、負けておる側に起こりつつあるのだというのが、彼のご宣託です。そうかもしれないと思いますね。

そこでその五つの文明がそれぞれ西欧文明にリアクトしている。そのリアクションの仕方としてはヒンズー文明が一番頭の下げ方がひどい。インドはイギリスに完全に征服されたし、その期間も二百年の長きに及んでいる。したがって悩みはここが一番ひどいので、ここから新しい文明が生まれるのではないかと、トインビーは思っているかのように私には思われます。回教文明は、ついこの間まで、逆にヨーロッパを押えていた。だからヨーロッパ人は回教がこわかった。もっと昔の十字軍でもヨーロッパは大体負けている。サラセンはスペインまではいってきたし、そのあとトルコになってからは、ウィーンがまさに陥落しそうになったのを辛うじて免れたという事件もあった。そこでこの回教を迂回するような形で、いきなりインドに現われる。したがって回教と西欧文明のほんとの接触は遅かったのです。しかしその後第一次大戦で、トルコが敗者の側に立たされたときから、急に騒ぎになってケマルパシャという人が、すごく乱暴な改革をやった。これはルネサンスと宗教改革と産業革命とフランス革命と明治維新を一度にやったようなもので、ブルータルとかサヴェージとかいう言葉で、トインビーはそれを形容しています。

ところで東洋は東洋で、その接触の仕方がゆっくり行なわれてきたために、得をしているわけで

す。支那は半分征服されたようになったけれども、これも独立を保ちえた。タイも独立を失わないで済んだ。日本はなにをやったかというところ、そういうときのリアクションの仕方は、トインビーによれば、二つしかないのです。（トインビーを盛んに引用しますが、これらのことは、全部、彼の「世界と西欧」"The World and West" という本に出ていることです。この本は、たった九十二ページの短い本です。訳もありますが、どうぞ原文でお読みになることを切にお勧めします）一つは、国を鎖（とぎ）して身を守ろうとする。自分よりも強いすぐれた文明と接触する場合、劣っている弱いはうは、その影響からのがれようとする、徳川時代がそれです。もう一つは、国を開放し、彼らから学び取り、同じように強くなることによって、自己を守ろうとする。明治以来の日本の場合です。歴史始まっていろいろ、文明が接触する場合のリアクションの仕方は、この二つしかないとい彼はいつているが、ソ連におけるビザンチン文明において、そのリアクションの仕方では同じであって、はじめは逃げていたんでしょうが、後に国を開放し、西欧化することによって対抗しようとしたのがピーター大帝の時代です。それいろいろモダンロシアが始まり、ロシアの西欧化が始まったのです。それがソ連の前身ですが、かわいそうにロシアは何度も西側から侵略されたのです。普通の人知っておるのは、ナポレオンの侵略、ヒトラーの侵略でしょう。しかし、その前にもポーランド、スウェーデンから侵略されている。つまり過去二百年ほどの間に、ロシアは五回も首都が危いところまでできているのだから、アタックされていたのがロシアなのであったということは知

っておく値打ちがある。さてそこでソ連に新しい現象が始まったのは、これはレーニンからでしょうが、西欧が作ったマルクス主義という一つの教義、クリードという言葉を使っています。そういうものを武器として、西欧をアタックした。軍艦や大砲もいいが、そのほかに教義をとって武器としたのは、ソ連の発明した歴史上きわめて珍しい、おそらく稀有な事件だというのがトインビーの解釈です。彼の言によれば、マルクスイズムは、西欧文明が作り出したところの一つの異端邪説にすぎませんが、いわゆる資本主義の欠陥とか弱点とかを衝いたことにおいてはすぐれたものです。だから、武器としては非常に有効であって、大きな成功をおさめた、おさめつつあったのだというのが——いまではもう少し過去の話になりますが——彼が説明しているところです。

とところで「東西の対立」の原因はどこにあるかを考えるのには、このトインビーの解釈は、私にとって非常に参考になります。大体、彼の説明どおりだろうと思います。世界史上において、意味のあることが起こっているのは、アタックされている側の四つの文明のほうで、日本のように進んで完全に西欧化の態度をとっている国もあるし、インドのようにまったく頭を下げてしまった国もある。この中でソ連は、そういうクリードをもって反撃に出るといふ態度をとっているのであります。その理由はソ連が一番ヨーロッパに近いし、いろいろな関係上自然そういうことになったのでしょうが、ともかくもいまは、そこに猛烈なファイトが発揮されているわけでありませう。これを大きな歴史的な眼光からなんと眺めるか、めいめいその解釈をもつことが絶対に必要です。私もそう

いうことを自分では一生懸命勉強しているつもりです。私の勉強は、必ずしも本を読むことではない。本は少し読めばいいので、読んだら、寝ても醒（さ）めても、それを考えている事が大切です。本当に深刻になにかを感じれば、全然忘れたと思っても頭のどこかに残っていて、妙なときに、うそう、こういうことがあって昔から思い悩んできたのだけれども、あの解決はここにあるのだ”と思うことがよくあります。小さな問題では常に類発している現象です。頭脳はほかの事を考えているときでも、チャンと仕事をしていくれるものだと思っているのですが、そういう意味で何十年も同じことを考えているわけです。私どもはソ連の問題、マルクシズムの問題は、あなた方の年輩のときにも考えたわけです。私は大学三年のときに「共産党宣言」を読みましたが、当時はもちろん秘密出版です。それを読んで、そのときから頭のどこかにはいつているわけです。こういうのは本当にガッタンとききますから、そのあと銀行でソロバンをはじいていようが、インドにいようが、アメリカにいようが、何か練り合わせが常に行なわれている。そしてそのうちになにかの回答ができてくるのであろうと思います。私はそういう意味においてソ連がああいう態度をとっていること、共産主義がこういうことになっていることの世界史的位置づけは、これだと思ふものがないとなく漠として頭の中にできかかっている感じですよ。

しかしきょうのお話でそれにはいることはしません。今日の話は要するに、そういう思想的背景も含めて、いまの米ソの対立とはそういうものであるということ、そしてそれがいまの世界の政治

経済を規制しているということ、それを申し上げるにとどめていいかと思ひます。

二、三十年代以後のアメリカの変容

アメリカは建国いらい非常な長足の進歩をしてきたが、一九二九年に始まった大不況を受けて、ルーズベルトがニューディール政策を実施した。その試練を経てアメリカは、はつきりと生まれ変わったような国になった。思想問題からこれを眺めてみれば、アメリカ自身が「おれの国は社会主義の国だ」といっているような国になった。それはつまり資本主義の欠陥というものをとおおむね正し終わったというに近い。一九三〇年前のアメリカ、殊に一九〇〇年にはいったころ、すなわちロックフェラーだとかカーネギーだとかが出てきたころと、いまのアメリカとは全然違っており、欠陥を含んだ資本主義から脱皮し終わったといつていいことを特に申し上げたいのです。

ニューディールが始まる直前のアメリカの経済は大危機に遭遇していた。一九二九年から三年ばかり続いたこの不況によって、二万四千ほどあった銀行のうち一万の銀行が破産した。人々は文字どおり青くなり、だれしもマルクスの予言どおり、資本主義の末路がいよいよきたのかと思うような状態であった。それを救ったのは、大体のところでは、ルーズベルトのすこぶる勇敢な政策であつて、それがすなわちニューディールといわれたものです。

その結果、アメリカは、いま申したように、資会主義の欠陥と称せられるものを「是正し終つ

た」と言ってもいい。この事実を知らないならば、およそアメリカを論ずる資格はない。現代の世界も米ソの關係も論ずる資格なしです。

どのように変わったかといえは——細かいことを知らなくてもいいが、大ざっぱにわかつて、それが確信的な信念にならなければいけない——それまでは、恐慌というものがあり、そうなるど破産倒産が起こって失業者がほうり出される。その結果、多数のプロレタリアートができる。一方恐慌を出し抜いた資本家は一層肥えふとるから、そこで社会は少数の大金持ちときわめて多数のプロレタリアートに分裂する。だからやがて革命が起きる。それが資本主義の没落過程であるというのがマルクスのご宣託ですが、昔のアメリカはいわばそういう過程を踏んでいたようにも見えた。

ところが現在のアメリカには階級も階級観念もなくなった。アメリカは一括して大中産階級の国になったのです。あるときアメリカで、ある社会科学研究所が道行く人を誰彼の差別なく、「お前さんはどういう階級に属していると思っっていますか」という質問をした。そうすると、大部分の人は質問の意味がわからないという。それで、「いや、こういうことを聞いているのです」といって説明すると、「ああ、そうか。それならば」といって「月賦ではあるけれどもわが家はやがてわがものになる。自動車はもちろん持っている。子供は大学に行っている。保険はついている。失業したって困らない。養老保険もチャンとかけておる。おれは工場の労働者であるけれども、こういう生活をしている人間は、お前さんの言葉でいえばミドル・クラスというのでしよう」ということで、中

産階級のところにマルを書いて行く。こういうケースは実にたくさんあったというのですが、それによつてもアメリカ人には階級意識がなくなったことがわかる。いまではほとんど全部のアメリカ人が、アメリカという国を自分の国、自分たちが治めている国だと思ひ、自分たちのようなのがアメリカ人であり、国中大体おなじだと思つている状態です。

どうしてそうなつたかという、まず第一にアメリカには大金持ちはもうできないことになつたし、すでにある大金持ちはだんだん中金持ちになりつつある。なぜかという、もともとアメリカという国は、自由にみんなが羽根を延ばすのがいいと思つている国ですから、どんなお金持ちができて、それをうらやむよりは、おれもやりようによつてはあなれるのだと楽しみにする。ですから金持ちが何か悪いものであるように考える思想的根柢から、金持ちをいじめたということはないのです。が、所得税ばかりでなく相続税もばかに高くなつた結果、大金持ちはいなくなりつつある。

このニューデイルによつて、アメリカはうんと仕事をした。貧民をなくすには金が必要だつたし、失業保険その他いろいろな保険もやらねばならなかつたし、たくさんの社会施設を作り、公共事業もやつた。とにかく、こうして経済の体質を変えたのですから、ものすごく金がかかり、税金は大変高いものになつた。アメリカの税金がどのくらい高いか、一つ標準を申し上げますが、アメリカでは七千二百万円、二十万ドル以上の所得の税金は、九割二分とか九割五分とかいいます。七

千二百万円以上は、それからいくら取ってもみんな税金にもって行かれてしまう。そこまできたのはニューディールばかりではなく、その後第二次大戦の戦費を賄まかわなければならなかったたので、国の借金がふえたためです。いまは軍備もやらなければならず、後進国も援助しなければならぬ。だから税金が高くなってしまったのです。相続税も非常に高いから、父親が死に、息子も死んで、孫の代になったら、どんなに大金持ちでも小金持ちになってしまう。だからアメリカには大金持ちは出来ず、あつたものも減りつつあるのです。

大金持ちがなくなったことよりもっと大事なのは貧乏人がなくなったことです。これは救貧的な社会政策の結果でもあります。同時にアメリカが長い間非常な繁栄を続けてきた結果でしょう。その結果アメリカは、中産階級の国になった。国民は階級意識というものさえもたなくなったのです。これを知ってほしい。それを知ってはじめて、たとえばアメリカの二大政党というものの政策が、相互にあのよう似ているということがわかるのです。アメリカでも、昔は政策がイデオロギー的に違つたことがあるが、いまは両党の政策は、やり方の上手下手は争うが、イデオロギー的な戦いはない。『それではインフレになるではないか、この辺が限度だ』。『いや少しぐらいなくても構わないからやるのだ』とか、または『おれにやらせればインフレを起こさずにやってみせる、その技倆はおれならばある』といったことで、民主党、共和党は戦うので、そこにイデオロギー的なものはない。

次にアメリカは巨大産業の国と想っている人が多いと思います。US スチールだとか、ゼネラルだとか、ゼネラルモーターだとか、あるいはゼネラルエレクトリック、デュポン、そういうものが頭にあるから、アメリカはばかに大きな産業の国だと思っておられるでしょう。ところが、アメリカ自身は「おれの国は中小企業の国だ」と想っているし、事実そうである。なぜかというところ、雇用量からみれば中小企業で生きている人間のほうが多い。おまけにこれからはオートメーションになるから、大企業で生きている人間の数は、ますます減ります。二万人使っていた工場が一万人で済むようになる。投下資本の総量でも中小企業のほうが大きい。年々の利益の総量も中小が大きい。しかもこれら三つの数字——雇用、資本、利益は、中小のほうが伸び率が大きい。これは実に意外な事実であります。そのうえアメリカ人のセンチメントからいって、自分が親方だということが、アメリカ精神なのです。ですから、アメリカ精神の本当の姿は中小企業だと昔から言っているのです。

以上のようなことが、「知られざるアメリカ」について知って置くべきことですが、さて世界におけるアメリカの位置づけはどうか。アメリカは二度の戦争の間に、その戦争の被害を受けなかつたばかりか、戦争をしたことによってその経済力は大変強くなった。一生懸命になつたから国のスケールがうんと伸びたわけです。戦争というものはそういうもので、日本の例を見ても、ヨーロッパの例を見てもみなそうです。いまの文明は、少なくともヨーロッパが作った文明は、戦争に負う

ところ大なるものありといえます。東洋でもそうでないとはいえないでしょう。アメリカは二度の戦争によって本當にふとった。そこで現在のアメリカの世界における位置づけとは、大体次のように考えていいと思う。これは四、五年前に私が考えたことですが、心の中に大きな尺度をもつ必要がある、アメリカがえらいことは誰も知っているが、どのくらいえらいのか、それを測る尺度をもちたい、考えたあげく、大ざっぱにいつてアメリカのウエイト——このウエイトの中には政治も軍事もはいります。ほかのいろいろなこともはいります——とにかくアメリカの国力というか、その世界におけるウエイトは、共産圏を除いて、非共産圏だけをとってみれば、アメリカたった一国で半分のウエイトがある、という判断に到達した。それほどアメリカはどえらいのだと考えていいと思つた。あとの半分を二つに割つて、つまり全体の二五パーセントは、ヨーロッパをうつて一丸とすればその程度であるということができる。アジア、アフリカ、日本、中国、南米を合わせて二五％、すなわち全ヨーロッパと同じウエイトだと私は思つたのです。

だからたとえばイギリスに事件があるとすると、その事件の世界的の意味の判断というものを、アメリカと雁行がんしている国の事件として考えてはいけない。ヨーロッパにたくさんあるが、イギリスもドイツもフランスもみんな入れて、うつて一丸としてもアメリカの半分のウエイトしかないのだから、その中でイギリスが、いかに大きくなったってヨーロッパの半分とはいえない、三分の一もあやしい。こう考えてはじめてアメリカにおける同種の事件の世界的意味とのバランスがと

れる。アメリカの半分のうちの三分の一もない小さい国であるイギリスにあつた事件、ドイツにあつた事件を、アメリカに起こつた事件と、同じように考える誤りを訂正するためには、いまの尺度をもつのが一番いい。私自身がものを見ていくのに必要な判断として、そのようなことを考えたのですが、それがとりも直さずアメリカの位置づけです。

ところが、これは次にお話することですが、いまではヨーロッパが猛烈な勢いで伸び出し、急速な勢いでアメリカに追いつきつつあります。これは実に大事なことです。これはまた実にハッピーなニュースでもあります。アメリカとはかの国とのギャップは開くばかりで、アメリカがクシャミをすれば欧州は肺炎になる”という言葉が、大変なやり言葉になったことがあつた。こういう言葉も非常に欧州を軽視した言葉ですが、事実はそうではない。特にいまは米国との差を、どんどん追いつめているのが、現在の欧州ですから、いまお話ししたアメリカが一国で五〇パーセント、全ヨーロッパが二五パーセント、その他二五パーセントという大局的な比率も、欧州の動きから変わってきたというのが最近の姿であります。

三、新しい欧州

次に「新しい欧州」についてお話ししますが、みなさんは「欧州経済共同体」のことをどの程度に知っていますか。大変失礼だが欧州共同体の国の名前を知らない人もいるのじゃないですか。ドイ

ツ、フランス、イタリアにベネルルクス三国、つまりオランダ、ベルギー、ルクセンブルグを合わせて六つ、それが欧州経済共同体です。「欧州共同市場」ともいいます。それに対してイギリスが大將になって七カ国連合をつくった。それはイギリス、スカンジナビア三国（デンマーク、スエーデン、ノルウェー）、オーストリア、スイス、ポルトガルの七カ国です。いまの欧州は、この六カ国と七カ国のグループに二分されていますが、まず、六カ国から成る欧州共同市場を説明しましょう。共同市場内の物資の交換は十五年以内に絶対に自由になる。無関税、無統制になる。資本交流も、旅行も、労働の交流も自由になる。つまり、イタリアに失業者があつたら平気でドイツ人が雇えるようになる。そういう状態を作ろうとしております。一口にいえば、欧州経済共同体とは、アメリカ合衆国のようにヨーロッパがなることと思えばいい。合衆国は本当は独立国の集合体なのです。が、とにかく合衆国のなかでは、各州の間に経済的差別はほとんどありません。しかしフロリダに行けば相続税が安い、だからアメリカ人はなるべくフロリダで死のうとするといったくらいに差別はあります。だが、それはよくみればの話であつて、大体どこでも同じことです。それと同じようなものに六カ国共同体がなろうとしている。それに対して七カ国が対立抗争しているというのほうそであつて、その六カ国が急ピッチでうまいことをやっていくので、昨年の秋イギリスが「おれたちにもなんとか同じような利益を受けさせる」といって、フランスと大激論し、けんか別れになつた。

しかし口では対立抗争しながらも、実際の経済は六カ国と七カ国との間もだんだん密着しているのです。その意味において欧州が二分されていると私は思わない。しかもこのけんかは勝負にならないのであって、六のほうがずっと強く、しかもやろうすることは天下の公道に乗っているのですから、イギリス側に文句があるなら、その「英連邦特惠関税」といった古い制度、古いからまあ大目にみてやってもいいが、あまり天下の公道とはいえない制度を清算してこい、ということになつて、このけんかはイギリス側に勝味はない。それに七カ国のほうは、力も弱く、分散している。ですからこの六と七との対立は、いつの間にか七のほうが目立たないように頭を下げるることによつて解消すると私は思います。しかしそれよりも大事なことは、現在けんか口論しながらも経済は緊密化しつつあるということであつて、要するに欧州は二分割されてはいないということを知っていただきたい。経済が緊密化するということは、物資の交流がより自由になり、したがつて交流の分量もより大きくなる、資本の交流がより自由になり、より大きくなる、人間の交流、技術の交流、アイデアの交流といったものが、国境を越えて自由に行なわれるようになることです。六カ国グループは、これを正面切つて協定を作つて徹底的にやろうとしている。それとけんかしていると同称している七カ国グループといえども、六カ国との経済的緊密化はこの意味で進んでいるのです。しかもけんかしたのはイギリスであつて、スカンジナビア三国にしても、オーストリアやスイスにしても、どうしてドイツやベルギー、オランダ、イタリアなどと分裂してけんかができますか。これら

の経済はまったく融け合った経済です。ますますそれが融け合いつつあるのです。これが欧州なのです。

その欧州がいまアメリカに急速に追いつきつつあるのは、お手もとのプリントにも書いてあるように「列強意識の消滅」が一番大きな原因だと思う。「列強意識」と私が名づけるものは、「いざ」という場合には戦争に訴えてわが道を行く」心構えといったらいでしょう。昔の強国はみなその心構えであったこと、戦前の日本を思い出してくださればすぐわかると思いますが、欧州諸国はこの列強意識を捨てたのです。すなわち、いざという場合に戦争に訴えるつもりで、平常から国を経営したのが、その戦争に訴えるつもりをやめてしまえば、平常のやり方も変わってくる。その事実が実に尊いのです。

私はこれこそ最近の世界に起こった一番大きな変化であって、この変化に人々が目をつけてくれないことを実に残念に思う。昔の列強の対立というものはなくなつた。しかし入れ替わつて出てきた米ソの対立はあまりにも激しい。しかもそれが武力を背景にした対立であるところから、人々はそれに目を奪われて、欧州がまるで変わったことに気がつかない。

ところで、この欧州に起こつた変化の意味を知るためには、少し歴史に遡さかのぼつて考えていただく必要がある。近代欧州ができる過程、つまりルネッサンス以後の欧州の歴史を考えると、彼らは相互に非常に多くの戦争を繰り返した。当時は戦争をするのはあたり前の現象であつた。そうい

ば人類の文明とは、戦争をやった結果進歩したものともいえます。われわれはみなその余恵を受けているわけですが、いまは戦争概念がまるで変わってしまった。だから戦争はやってはならないことになったが、昔の戦争概念で判断しなければいけない。

ところで日本はどうであるかという点、この欧州の列強にあと仲間入りをしたわけです。アメリカもあとからでしたし、ロシアもそうであった。このアメリカ、ソ連、日本を加えて前からの列強であったイギリス、フランス、ドイツの六つが六大強国などといわれた。そのころの日本人の心構えこそ、さっきいったように、いざとなれば戦争をするのだという心構えでした。そのことを知っていただくのに一番いい例は、一高の寮歌です——私も昔の一高生ですが——「ああ玉杯に花うけて」の一節に「行く手を拒ばむものあらば、斬りて捨つるになにかある」という歌詞があります。あれが当時の列強の心構えなのです。いま戦争という大変なことですが、昔はなんとも思わなかった。そういう心構えが世界の「列強意識」だったわけです。

この列強のなすところによって世界は形成されて行った。なぜかという点、欧州はルネッサンス以後、いろいろな理由によって科学にめざめる。その結果軍事的にも経済的にもばかに強くなり、その力をもって全世界を押しまくった。そこで各所にリアクションを起こしていることはさっき申し上げたとおりですが、その押しまくりによって世界をシェーブアップ（形成）しているのです。

日本は列強の仲間として満洲、朝鮮、北支に手を出した。当時としてそれは必要と考えられたとこ

ろであつたが、その列強としての日本の行動によつて、満洲国ができたり、東亜というものがシェーブアップされたわけです。その他インドを考え、インドネシアを考え、どこを考えたってみんなそうです。そういう力のもつてあつた列強が、その心構えを捨てたことによつて、世界の姿は変わらざるを得ない。たとえば最近、昔の列強が植民地をほとんど手離すのもそれです。

私は戦後の日本の経済復興が非常に早いその一つの理由として、満洲、朝鮮が日本の手から離れたことをあげています。満洲、朝鮮さらに北支などに、戦前の日本はいかに膨大な国費を注ぎ込んでいたか。台湾だけは取り分のほうが大きかつたかもしれないが、ほかのところは持ち出しのほうがずつと多かつた。その点本格的統計的研究があるわけでもないが、われわれの年輩のものならば誰でも自分の目で見て知っている。いかに満洲、朝鮮に日本は国力を注いだか、どれほど持ち出しが多かつたか。戦後はそれがなくなつたうえに、軍備もやらないのだから、これからは楽になるに決まっていると、この点に私は終戦後三カ月ほどで気がついた。そして日本の経済の復興は楽だ、戦争の痛手は五年もすれば忘れたようになる、ただし精神上の復興は恐らく二十年仕事だろうといつたものです。

ところでその後わかつてきたことですが、復興著しいのがオランダです。オランダにとつてインドネシアはきわめて大事な植民地でした。だから戦後インドネシアが独立するといひだしたとき、オランダはなけなしの力を振りしぼつて戦つたのです。しかしとうとう力及ばずインドネシアに独

立を与えることになったとき、オランダはまったく途方にくれた。われひとともにオランダは再び起つ能わずと思つたのです。しかしがっかりしてばかりもいられないので気を取り直し、アメリカから金と技術を借りてあの小さい国を工業化してみた。ところがそれからあのオランダはものすごくいい。

私もオランダに戦後何回か行きましたが、あるとき、あるオランダ人にしかられた。『お前たち日本人は、くる人くる人みんな西ドイツに感心して『奇蹟の復興』などという言葉の一つ覚えでいつているけれども、このオランダをよく見てくれ、西ドイツと少しも違いはしない』とこういうことをいわれたことがあります。それからそう思つて眺めてみるとなるほどそのとおりで、ロツテルダムの港などはいまは世界第二位になりました。ロンドンもハンブルグも抜いたのですが、一般的にみても大変な繁栄で溢れるばかりの充実ぶりです。

そういう状態を見ると、インドネシアなんかは、もともと必要ではなかったのじゃないかと思えてくるわけです。私は前から日本と満洲の関係を知っていましたから『それみる、インドネシアというものはマイナスだったのかも知れない』とすぐ思いついたわけですが、ちょうどそのときオランダで会つたあるアメリカのエコノミストに、『私は日本についてこう思っているのだが、オランダについてもそのセオリーは当てはまらないか』と聞いてみた。ところがそのアメリカ人はニコリと笑つて、『それなんだ。実はオランダでもそのことに気がついて、アムステルダム大学に

研究班を作つて、「バランシート・オブ・インドネシア」という題目で研究をはじめている、それはつまりインドネシア領有の当初から、一体持ち出しと持ち帰りどつちが多かつたのかを、実証的に研究してみようということだ」といって話してくれた。私はもちろん、それみる、そうあるはずだ」と思つたわけでしたが、この事実はなにを物語るかというところ、列強の構えを捨てた新しい情勢のもとにおいては、「植民地は不要だ」ということです。それに加えてもう一つは「国の大小は問題にならない」ということです。またもう一つ「国の中に資源のあるなしも問題にならない」ということです。「金のあるなし」もあまり問題でない、金がないなら、オランダのように借金をすればいい。技術がなければ、技術を借りればいい。借金に対する利払い、技術に対するロイヤリティーの支払いは、その技術なかりし場合、その資本なかりし場合の非能率に比べて格段に安いから、借金もロイヤリティーも支払いもつまり得につく。

ここが大事なところで、現代において一国の経済力を決定するものは、その国の大きさでもなければ資源の有無でもなく、ただ単に近代科学技術を組織に乗せて駆使する能力だけだ、という真理がそこに示されているのです。日本人はそういう能力が非常に高い、だから日本にはいま現にみる進歩があるわけですが、オランダは国も小さく資源もゼロといつていい。平たくてチェーリツプができる以外になんにもない。そういうところでありながら、国も大きく資源もあるドイツと変わらない生活状態になり得たのは、オランダ人が技術を駆使する力において、ドイツ人に劣らないか

らにほかならない。オランダ人は非常にすごく勤勉だし頭がいいから、どっちかというところドイツ人の上かも知れない。ところでこの原理、それこそが世界の平和の基礎だということがわかりますか。資源がなくても金がなくても、勤勉で技術を駆使する能力がありさえすれば、どんなに生活でもできることとなったら、どこに領土や資源のために戦争をする必要がありますか。

だから私はそれを「世界平和の原理」というのですが、そういう状態が実現されつつあるのがいまヨーロッパの姿です。昔あのように争っていたドイツとフランス、それがいま経済共同体になりましたが、その六カ国の人々の生活は同一レベルになります。もつともそれには若干手数がかかるので、賃金の低い国があれば高い国へ移住すればいいが、そういうふうには労働力に動く自由を与えるには、社会保障を一つにしなければいけない。税金も大体同じにしなければいけない。なぜなら税が安い国、社会保障のよい国にばかり人間が行くと困るから、本当の経済性で労働が動くようにするためには、そういうものを大体平均させて置かなければならない。そういうことを現に六カ国はやろうとしているのです。それができあがれば、イタリアであろうとオランダであろうとベルギーであろうと、その生活のレベルは大体同じにならざるを得ないので。

ただしそうかといって彼らの個性がなくなるとはいきません。私は、彼らはますますその個性を発揮しやしないかと思う。日本がアメリカナイズされていると同じように世界は一つになっていくのは事実ですが、しかし、半面やっぱりドイツはドイツ、イタリアはイタリアでとどまるだろうと

思う。私をしてそう思わせる最大の理由はいまのスイスです。スイスという国は、イタリアゾーン、フランスゾーン、ドイツゾーンと、大体三つに分かれています。

誰もみんなその言葉をしゃべる。しばしば相互に結婚もする。それでいてドイツゾーンはドイツゾーンとして少しも変わらないのです。スイスのこの三つのゾーンの状態は、ヨーロッパ六カ国共同体の今後の姿の縮図であろうかと思う。そして私はそう考えることが非常に好きなのです。独仏伊などが、めっちゃくちゃにごちゃ混ぜになってしまふのでは、まったくつまらない。世界中の人間がみな同じものになってしまつてはやり切れない。あるアメリカ人が私にヨーロッパ共同市場について、彼らの将来はすばらしいと思う。Because they are so different、といったことがありました。まことにその言やよしです。共同体の中において個性が十分に生かされるだろうから、その全体はすごくいいものになるだろうということを、その人は予想しているのです。そんなことを考えてヨーロッパの状態を思っていたのですが、話をもとにかえて、一番大事なのは、列強がお互いに戦争し合うという心構えをなくしたことであって、それと同時にそのことが植民地を必要としなくなった理由でもあるということです。そして、そうやってきたからこそウェイトは、しばらく前にアメリカの半分と思われるものが、いまは六〇パーセントにも六五パーセントにもなっているであろう。やがてアメリカに雁行し、アメリカを追い抜くこともあるかもしれないと考えられる、とこういうことです。

六カ国のことばかりお話しましたが、七カ国のほうもすこしハッキリしないだけで意味は同じと、同じようになってきます。つまりヨーロッパ全体として一体化してくる、急速に一体化しつつある。そしてその全体の力は、あるいはアメリカを抜くかもしれないのです。日本にとって欧州の繁栄はもちろん非常にいいことですが、そのように欧州はなりつつある。欧州の仲間に、日本も加わったらどうだという呼びかけ、それが日本の「貿易自由化」要請の本当の基礎にはかならないのです。

四、後進国の現状

後進国にもいろいろタイプがあるが、まず中南米を考えてみますと、中南米には国が二十あります。それらの国ができたのは大体アメリカの独立、フランス革命、ナポレオン戦争という一連の事件のあとです。平たくいえばナポレオンが中南米の主人であったスペインをやっつけてくれたお蔭で独立できたわけですが、もっと深い原因はアメリカが独立したりフランス革命が起きたりした当時の思想です。その思想の波が彼らを独立させたわけです。しかしそうしてできた中南米諸国は、その後百何十年間眠っていたも同然で、あまり変わっていない。最近になってようやく少し変わりました。古いだけあってまあ大体あまり大きな問題がないのが、特徴といえるでしょう。

ところで、第二次大戦後にまた一つ大きな波があつて、いわゆる民族主義が大きく登場し、その

波に乗って多くの独立国が誕生したが、それらは南アジア、東南アジア、中近東、ごく最近になってアフリカにも独立国ができ、ここに世界の大部分はみな独立国になってしまふという近代歴史上の大変化が起こりました。そこで、これらの諸国がこれからどうなっていくかということが、世界にとって大問題となった次第です。

これらの新興独立諸国を眺めてみますと、概して独立後は「停滞もしくは低下」というのがその悲しむべき現実です。その理由はどこにあるか。ネールにしてもスカルノにしても、大体ロンドンのスクール・オブ・エコノミックスというようなところで勉強し、昔流の社会主義思想を非常に大きく取り入れた人ですが、彼らには自分たちが貧しいのは搾取されていたからだ、イギリスが富み栄えたのはインドを搾取したからだ、したがって搾取者を追い出せば自然によくなるだろう、という思想が多分にあったと思います。ところが、搾取者を追い出して独立してみたところがいつころによくならない。インドネシアはオランダがいろいろ施設や道路、プランテーションなどを置いていったが、それをそっくりもらってもやはりだめなのです。インドはイギリスの置いていったものの中に、人間を教育してくれたということがあったからまだ幸いしている。しかしそのインドですらあまりいいとはいえない。インドはことし第二次五カ年計画の最終年ですが、この計画の半分どころで国際的には破産状態に陥った。仕方がないからワシントンで債権者会議を開いて、一段と援助を強化することを決めてどうやらやっているが、この支えがなかったらインドはいわばめちやめ

ちゃです。インドと中共とは経済開発競争をしているので、その競争にインドが負けたら大変だという人が沢山あったが、これは負けるのが当たり前であるし、現に負けている。そのわけは機会があったら別に説明しますが、話をもとにかえて、権取理論を信じていた人たちが、独立したら自然によくなると思っていたのは当てがはずれた。この事実をネールなりスカルノなりが、どう心なかに収めたかは、非常に価値ある研究題目です。私はまだそこまでは知りませんが、それはそれとして、次に彼らはどう考えたかという、自分たちの国は農業国だからいけない、先進国はみな工業をもっている。だから自分たちも工業化しようと考えて、農業一点張りの国から脱け出ようとして工業化することに一生懸命になりました。

私はそれはいいと思います。しかしその工業化とは何か、それをやる順序方法はどんなのかということになる、遺憾ながらここでも彼らは間違いを犯している。何よりも先立つものは機械だ、機械を作るには鉄がいる。ということでもみんなスチールミル（製鋼工場）をもつことに大変な熱を入れたものです。たとえばインドでも、第二次五カ年計画をこうやっけては外貨が足りないとわかった。そこでほかのものは片っ端からカットして、スチールだけを残している。第三次五カ年計画はそれを大幅に修正するらしいですが、このようなスチールミル偏重の経済政策をやっていたのは、うまくいくはずがない。

私が自分の目でみたスチールミルは、ビルマのラングーンにあるものですが、ドイツのデマーズ

という大会社が作ったすばらしいものです。そこには超近代設備がズラリと置いてある。ところがそれを動かしてみるとそのコストに耐えないのです。ビルマ政府の勘定ですが、政府はやりきれないので、私が見に行きましたときも工場は休んでおった。現状は残念ながら、そういう状態にあります。

なぜそうなるかという点、いかに超近代的設備を置いたとて、これを動かした場合、能率はその国の民度相当のところまで落ちてしまう。だからビルマのようなところへいきなり超近代的設備を置くとする、つまりその設備はカネばかり食って成績は上がらないことになる。ですから後進国の工業化は結構ですけれども、その道筋についての考え方を直さねばならないのです。

このようなわけで、現在多数の後進国は、ほとんどその全部がうまくいっていないといいますが、ここに一つの例外がある。それは明治らしいの日本です。そこで、日本研究の熱意、日本だけがなせうまくいったのか、その探究が世界の学者の間に盛り上がり、三年ぐらい前から「ジャパンモデル」という言葉まで作られています。要するに明治以降の日本は、工業化には十分な時間をかけ、その前に国民全体に十分な教育を実施しながらやっていった。どこの国でも同じことで、要するに工業化はその国のベースに乗りながらやらなければだめだと私は思っております。またそれは同時にその国の文化水準全体のレベルアップが必要ですが、いわゆる民族主義でいきり立っている国は、その国民全体が強い向上心に燃えているかと思うと、必ずしもそうではない。いまの東南

アジア・南アジアを含めて、それらの後進国の最大の悩みは、国民に働く意思がないこと、向上心がないことです。彼らはハードレーバー（骨の折れる労働）を嫌うばかりでなく、必ずしも物質的繁栄を求めない。日本はインドネシアを占領したことがあるから、そこで工場経営などやった経験をもった人もあるが、少しいい給料をやったら一週間四日しか出ない。これはいけないと思って、もっといい給料をやったら、三日しか出なくなつたというような話はザラにあります。いい給料をもらつても、それを元手にいい生活を築き上げようという熱意が起こらないのは、いままでそういう経験がなかつたせいもありましょうが、要するにトロピカルエリア（熱帯）に住んでいるためだと思ふ。この点、欧州人はまことに対照的で、すごくグリーンデュー（強慾）です。日本人はずつとてん淡ですがまた一面大いに働いて向上しようという強い意欲も持っており、両方のメンタリティーを同時に備えているからすばらしいと思ふのです。例の「仮の宿り」の思想で、現世的な富に対してはあまり気にしないけれども、また一面、あくまで最上級のものを求めてやまないところがある。田舎の農家に行つても、カラーテレビができればそれを持つとうとする、その熱意。日本人はその両方のメンタリティー（精神作用）を持っていると考えます。

インドの発展が中共の発展に遅れては大変だ、と声を大にしていった連中がたくさんいたが、インドは二重構造どころではなく、何重構造でもある大変な国です。言葉も何十種かある。ただ宗教的にはヒンズーイズムによってまともなまといつていいが、そのヒンズーイズムの基本的な考

え方は、『現世で苦しい目にあうのは前世の悪業の結果である』ということ。そして現世における最大の道徳は「忍従」です。『苦しみをじっと我慢していれば、その功德によって、来世はいいところに生まれる』と信じている。もちろんインドも変わりつつあるが、ヒンズーイズムの基本的な考え方はこのようなものであり、それで国民の態度は少しも変わっていない。そういう国であるインドが、どうして中共と同じにやっていますか。中共の方は後で話すけれども、漢民族はものすごく現世的な国民です。彼らは現世的な欲望を満足させるためならいくらでも働く。その意味で彼らはヨーロッパ流の物質的繁栄を作りうる素質をもっている。しかしインド人はそれをもっていない連中であることを知らずにいては、インドのことはとうていわからない。同様に、どの後進国をとつても、それぞれ歴史的、社会的、文化的にいろいろの因縁があつて一様ではありませんが、その多数性を理解することを忘れて、一概に後進国はこうだと決めてかかる態度、そして後進国が後進性をもつのは、すべて先進国が悪かつたからだと考えること、工業化さえすればそれでいいように考えること、それらはすべて大きな間違いです。

この後進国問題は、いま全世界が悩んでいるという問題ですが、私の解決策を少し述べてみますと、私の考え方の出発点は、『よくなるうと思わないものに、なぜ無理によくならねばならぬようにいうのか、それはいけないこと、よくなることではないのか』という着眼です。よくなるうと思わないのなら放っておいたらいいのではないですか。いまの世の中はありがたいことに他人の繁栄

はずなわち自分の繁栄になる。アメリカが繁栄していたから、戦後の日本の復興は早かった。だから、ドイツがよくなったといえ、私ならばああ、それはありがたい。それなら日本も、このままにしている、ある程度はそれに引っぱられてよくなる、とこう考えます。しかし世の中の人たちは、他人の国がよくなると、『さあ負けたら大変』と、思つて心配する。しかし実際には、日本人にとって早くよくならねばならない理由はない。「列強の心構え」を各国が捨ててしまつた現在、弱小国であっても誰も取つて食おうというものはない。したがつて、日本ばかりではない、どの国も強いて急いでよくなる心配はない。ただし、よくなりたのならばその道はいくらでも開かれています、また他の国がよくなれば黙つていても自分もある程度は自然によくなるというのが、まことにありがたいことになつたいまの世界の状況です。

しかし一方、現状の世界は相互依存ですから、もしどこかの国が転落することがあれば、それはそのままこつちの悩みになる。コンゴはめちやくちやになる。インドがめちやくちやになるということは、われわれにとって非常に困る、サワラ砂漠の石油が開発されるまでは、中東の油は欧州にとっては生命線の問題でした。だから、もし中東を本当にソ連がかく乱して、油を一滴も出さないようにしたら、それは欧州にとって死活問題になる。サワラ砂漠の油が出てくるようになったら、もう大丈夫ですから、いまでは中近東の重要性はぐつと減つた。それがナセルがこのごろ氣勢が上がらない一つの理由です。

話が横にそれたが、要するに、後進国が本当によくならないのなら、われわれが周囲から喜んで助けてやるけれども、よくなりたくないものに、無理になれという。その結果よくなりそこなつたら、為政者が悪いようにしてしまふのは、憤むべきであるというのが、私のこのごろ悟つた考えです。その悟りを得ると、後進国問題はパーッと明るくなります。なぜなら、現在はその悟りのないところから、できないことを無理にやろうとして、後進国自体はもちろん、先進国側にも各種各様のトラブルを作っている、といつていいからです。

次に必要なことは民族意識の反省です。民族意識は非常に大切なものです。それがなければ国が作れませんし、したがって近代国家にはなれません。近代国家にならなければ生活程度も上がりません。しかし、民族意識さえあればいいのだということ、そればかりを無暗におおることは、わざわざいひの思ひます。さつきいつたとおり、民族とは形成されてはじめて成立するものです。その形成がないのに、民族であるとして一國を形成しなければならぬようにいう。それにコンゴならコンゴ、インドネシアならインドネシアが、一つの民族であるように考えるのははじめからおかしい。コンゴという國の範圍というのは、ベルギーが治めた範圍というだけの意味のものであり、インドネシアは旧オランダ領をもつてわが領土としてゐるだけの話で、インドネシアのあれだけの多くの島が、一つの國をなす合理性が本當にあるかどうかは大きな疑問です。それにもかかわらず、民族主義を偏重してゐる人々が、まったく無批判に、インドネシア民族というものがそこ

にあるように、ベルギーが作ったコンゴという境界線の中にコンゴ民族と称するものがあるように思うのは非常な間違いというべきです。これが民族意識というものについて考え直さなければならぬ反省点の一つです。

もう一つ民族主義について考えるべきことは、人種と民族とは違うということです。ネーションとは何かということがある席上で問題にした折に、フランスのある学者が「ネーションとは一しょに生活していこう (live together)」という念願をもっているグループ・オブ・ピープルだ」といったが、これが一番いい定義のようです。一しょに苦しんでもいいから、一所に生活していこうという連帯性をもつものを民族というのでしょう。しかし実際にそうなるのは大変なことです。その民族を形成するのに、人種が単一であることはけっして要件ではない。アメリカ、ソ連、インドなどみな多人種の国です。さきほどもいったとおり、日本のように島国でいろんな民族が、長い歴史によってうまく固まっているのは、世界に稀な例だということを知ってほしいのです。いろいろ述べたが、それらの見方が心のなかに熟してくることに、私はそれが後進国理解の要件であると考えます。

五、先進国と後進国との離ればなれの現状

後進国の状況はそのようでありませんが、一方先進国は超スピードで上昇しており、特に欧州共同体でみられるとおり、各国の中味は同じレベルになりつつある。その原因は前にも申したとおり、

各国はその経済を一体化しつつあることにある。それは昔の列強意識を捨てることによって、先進諸国はその経済を本当の意味で緊密化・一体化させることになったからにほかならない。

それに対して後進国は、停滞もしくは低下しているのですから、おのずからそこに大きな開きが出てきます。これが私が見ている現在の世界経済の最大の問題、一番困る問題、したがって一番注目を要する問題です。ですからその事実を知り、かつそれを分析解剖して明瞭にすることが必要です。ところで、共産圏を除いて先進国とは、欧州共同市場の六カ国と、まわりの七カ国、合わせて十三カ国。そのうちポルトガルは後進国の部類にはいりませんから十二カ国。アメリカとカナダを加えて十四カ国。それに日本を加えた十五カ国が先進国です。この十五の先進国のうち、ルクセンブルグは人口わずか三十万の小国ですから、これはベルギーと一緒に考えていいとするなら、世界に先進国はわずかに十四しかない。この事実をどうぞ知っておいていただきたい。ほかに問題になるのは、ニュージーランドとオーストラリアですが、この二国はあまり工業がないから、まあ先進国の中に入れないともいいと思う。フィンランドは相当な工業国ですから、先進国といていいですが、逆にスカンジナビア三国はあまり小さいから除いてもいいくらいのもです。そうすると世界に先進国は十一カ国ということになるが、いずれにしても日本はこの中で国力の大きさ特に人口からいっても指折りの国ですが、近代科学技術を全面的に駆使する能力からみて実にすばらしい。日本みたいは何から何まで作っている国は、世界広しといえども他にないといっている。その点では

アメリカ・ドイツにもまざっているでしょう。近代的、西欧的なものも作っているが、たとえば西陣織とか漆器の類だとか、東洋的なものもやっぱりたくさん作っておって、けっしてそれを捨てない。ますますそれが盛んになりつつあるのですから、日本人の多様性といったらすぐいいものです。そこへいけば、アメリカやドイツはずっと単純です。食べている食料を考えても、日本人ほどありとあらゆるものを食べている国民はない。料理の種類だって日本料理のほかに、支那料理もあれば西洋料理もある。魚の種類でも通常食膳に上るものが二百種類以上あるということです。野菜の種類、果物の種類どこをみてもすごいヴァリエティーです。それを受けて日本人の頭は本当に複雑怪奇です。古今東西の多様性をチャント頭の中におさめているのですから、実際不思議といっているくらいです。近代科学技術だけについても、日本人はあらゆるものを駆使する能力において実に秀でています。船舶は一種の綜合製品ですが、その輸出についても日本は世界一です。その他いろいろな近代的なものについて日本は世界一になります。だから日本は上から教えて三番目か四番目というところでしょう。

以上先進国の話ですが、それに対して後進国は、遺憾ながら追いつく代わりにますます離れつつある。全世界の貿易は伸びているように見えますが、実際は先進国同士の貿易が伸びているので、先進国と後進国との貿易、および後進国同士の貿易はあまり伸びていない。ですから、先進国は有史らしいの超繁栄であるといっているが、それは後進国に関係なしに繁栄しているといってもい

い。これはさきほど、搾取者であったはずの先進国を追い出したが、後進国はよくならないといった、ちょうどその裏に当たたる事実で、先進国は後進国の停滞もしくは低下にかかわらず、また対後進国貿易が格別伸びないにかかわらず、どんどんとよくなって行く。たとえば日本をみよ、です。

もつとも世界は相互依存的ですから、世界のどこにどんな動乱が起こっても世界全体が困るし、後進国が総じてもつとよくなってくれたら、先進国はもつともつとよくなれるのも事実です。しかしそこまで行かなくとも、現在の趨勢からみて、やがて先進国グループは、人類始まっていらいの戦いであつた貧困に対する戦い、物質的欠乏に対する戦いに勝利をおさめることができそうに思います。そうなると暇をどうやって過ごすかに苦労することになります。アメリカの経済をながめていても、現に暇の経済ということが大問題になりつつあります。日本でもレジャーブームとか、暇の設計とかいう言葉が流行語になってきております。こういうのが、人類の進歩がいまどこにきているかを示す事実です。

これに対して後進国はなんという違いでしょうか。先進国は後進国がよくなることを希望する。またインドのマハラノビスなどの経済学者は、先進国が当然税金を出すようなつもりで後進国を助けるべしといひ出しているけれども、そう簡単にはいきませぬ。もう方方のインド人が何をやっているかという、ヒンズーでは牛は神様だから殺せない。それで野放しの牛が何千万頭といふ。殺生をしてはいけないから猿も殺さない。だから野生の猿が無数にいる。牛と猿を殺したらインド

人の食生活はそれだけで解決できると、インドの経済学者がいつている。そういう点をそのままに
して、税金をとるような気分では他国のカネをくれといえるものかどうか。

それにまたいま後進国は一般に大変な人口増加です。インドネシアのジャバ島は過去百二十年ばかり、三十年ごとに人口が倍になるということを四回続けてきている。これは人口増加の特に著しい例ですが、いまは方々でそういうことになってきている。戦争で人を殺さず、疫病で殺さず、飢饉で殺さないから、ものすごくふえるのです。しかも後進性の強いところは産児制限などということはやらない。だからたださえ経済の上昇がむずかしい後進国は、この人口増加で一層問題を大きくしつつあるのです。したがって後進国と先進国との間の格差は一層拡大する。両者がはなればなれの動きをするという現状は、疑いもなくそこに現代の世界の最大の問題を見なければならぬといえましよう。

六、ソ連の攪乱攻勢

ソ連は五月の巨頭会議が流産に終わったあとちよつとの間静かにしておいた。しかしそのあと間もなく猛烈な攪乱工作を始め出した。たとえばソ連は、「キューバのカストロの行動を妨げるものがいれば、それに対してロケットを打ち込む」とまで言明した。つまり、アメリカがカストロに対して手を出したら、アメリカにICBMを打ち込むといったわけです。そういうことをいわれては

アメリカも黙ってはおられません。アイゼンハワーは即時に「アメリカは西半球の中に国際共産主義に支配される国が存立することを許さない」といった。これもずいぶん激しい言葉です。

私はカストロはすでに国際共産主義によって支配されていると思う。カストロが出てくる前は、二十五年にわたってパチスタという独裁者がいた。このパチスタという人は、元来反米で立ち上がって政権を取ったのですけれども、時がたつにつれてだんだん親米になった。また型の如く汚職政権になった。その独裁をけしからんといったのがカストロであり、それにある程度反米気分を加えたものが彼の基本的態度であつたのです。だから革命が成功したときはアメリカも喝采を送つた。彼がニューヨークに行つて演説したときなど「あのひげのおやじさん、なかなか面白い」と非常に評判がよかつたものです。ところが、そのカストロはだんだんソ連の思うとおりに動くようになって。そういうふうに住組んであつたのでしょう。あそこにはアメリカの海軍基地があるが、その基地を返せと本当にいい出したら危いです。発火点になるかもしれない。アメリカは黙つてその海軍基地を返すことはできませんから武力を用いる。そうしたらソ連が約束によつて介入する。そうすると戦争という事態になる危険性があります。

最近、アメリカでは戦争不可避論が非常に出てきたらしい。いかに努力しても、やっぱり戦争になるのではないかという考えです。これは世界経済の行き先を考えるために、非常に大事なことです。このごろのソ連の行動をみればコンゴには手を出そうとする、オーストリアに出かけたフルシ

チヨフは、そこで実に激しい挑発的な演説をする、その他証拠はいろいろあるが、これらが世界を故意に脅かそうとする攪乱工作であることは、現在ではもう疑う余地はないと考えます。

なぜソ連はそういうことをやるか。まだ的確にはわかりませんが、とにかくソ連が攪乱工作を新しくやり出したということは、是非いまの世界をみるためには知っておいていただかなければならないのです。

七、共産圏の内部事情

ところで、それではそのソ連の内部事情ははたしてどうなのだろうか。

フルシチョフになつてからのソ連は、非常な勢いで変わりつつある。どのように変わっているかといえは普通の国、すなわち日本とかアメリカといった国と同じようになりつつあると私は思う。

つまり、スターリン時代のあの特殊なソ連ではなくなりつつあるということです。そのことは、フルシチョフがゲーベール（秘密警察）の組織を非常に緩和した一事をみてもうかがえる。つまり、スターリンのような弾圧政治はもうやっていけない。人間というものの本性がそうさせるといふのでしょうか。とにかくあの弾圧政治を非常にゆるめて、相当な自由を国民に与え、かつ生活水準向上の約束をした。現にソ連の生活水準は相当向上したし、気分も非常に明るくなった。昔はアメリカ人なんか笑顔でも見せたら、その晩にコッコツ玄関を叩かれて、どこかに連れて行かれるとい

つた恐怖心は、いまは解消してしまった。だからいまソ連の国民は、割合平気で政府の批判もすれば、希望も述べ得るといった明るいつ連になったのです。それ故にこそ、経済能率も上がっているといつていい。この状態は、今後ソ連はいままでのような特殊な国としてではなく、普通の国になつて行く前兆だと思ひます。要するに、世界は共産化されねばならない、そうならなければおさまらない、人類の行くべき道は資本主義打倒だ、そのためには何をやっても構わない、強い軍事力を作るとともに、世界のどこで攪乱行為をやつても、少しも差し支えない。差し支えないどころか、そうすることが自分たちの崇高な義務だとさえ考へている、そしてその義務遂行のためには自由の彈圧ぐらい何でもない、と考へているならば、それはきわめて特殊でしょうが、そういう特殊な考へ方の国ではあり得なくなつてきた。もちろん為政者はまだそう思つている。しかし為政者がいくらあおろうとしても、もう民衆は思うようについでこないといつた国に、存外急速になりつつあるのがいまのソ連だと思ひます。

その大転換の契機は、実はフルシチョフ自身が作つてゐるのです。フルシチョフがスターリンを氣遣ひであつたといひ、スターリン的なことをやめ、国内的に多少の自由を許すとともに、対外的には鉄のカーテンをややあけてくれたので、アメリカ人でもイギリス人でもソ連のなかへ行けることになつた。また一方、ソ連人も文化交流といつた形で、多少とも人を外国に出している。アメリカ人だけですでに延べ三万人の人が行つてゐるということですが、数よりもっと大事なのはその

質です。各種各様の人が実に大勢行っているが、それらの人々が異句同音に語っているところは、四十年にわたる共産教育にもかかわらず、民衆の心は少しも変わっていない、ということ、ソ連の民衆は昔ながらの愛すべきスラヴ人であるということです。そして彼らは外部の世界に対して大変な好奇心をもっている。政府の為政者のいうことは概して信用しない。もちろん彼らの祖国愛は猛烈であるから、人工衛星が飛んだ、ソ連はアメリカよりもえらいと聞かされれば、それには手を打って大喜びをする。一九七〇年になったら、生活水準はアメリカを追い越すのだと聞かされれば、もちろん大いに喜ぶ。がしかし、為政者のいうことは概して信じないのがその本心で、両者の間には非常なギャップがある。だからソ連の民衆には、ぜひとも自分の目でなまのままのアメリカを直接見たいという強い願望があるわけで、海外旅行熱は大変なものだそうです。

そういう変化はいい変化ですが、悪い面では、これは資本主義の悪い面でしょうが、ソ連でもチップとかワイロというものがものすごくはやってきた。また若い青年はロックンロールですか、ロカビリーですか知りませんが、そういうものに浮き身をやつす。その状況は、驚くほどだということです。そこで面白いのは、昨年のアメリカ博覧会のことです。アメリカはこの博覧会を通じて、自分の方から戦争を仕かける意志は毛頭ないことを、ソ連の民衆に直接呼びかけようとした。それが成功すればソ連の民衆はいくら為政者が戦争協力にかりたてようと思っても、なかなか動かなくなるわけで、これは相当の平和攻勢だったわけですが、その博覧会にアメリカはジャズを持って行

こうとした。そうしたらソ連政府は「それはご免だ」といつて断わった。なぜかというところ、それをやったらソ連の青年が興奮して狂態を演じる、そういう姿を民衆に見せたくない。なかならず中共に見せたくない、というのでしょう。ところでジャズほどアメリカ的なものはないが、「ジャズはアメリカ的でない、この博覧会にはもつと本当のアメリカ的なものを持ってきてくれ」という理由で断わった。面白くはありませんか。アメリカは手を叩いて喜んだ。このような事件はすべて、ソ連が予想以上に変わりつつあることを示すもので、私の考え方からすれば、そういうところに、本当の平和の基礎があると思うのです。

ところでソ連は自然科学の面で大変に進歩したのは事実ですが、社会科学のほうは、驚くべきことに、しかしまた当然の理由によって、進歩がストップしたような状態にあるということを知らねばなりません。その最も顕著なものが、経済原論とか近代歴史とかいう学問でしょう。それらはマルクスのいったことをそのままリピートする教育が行なわれていて、そのマルクスのいったことに對して疑問をもつことはスターリンによって禁じられてしまった。だから進歩は止まらざるを得ない。疑問を起こすことを許されないなら、人間は考えることを止めてしまう。だからあるイギリスのソ連学者の言葉によると、「彼らはちょうど中学生で進歩が *arrest* (阻止) されたような状態だ」という。おそらくはそうならざるを得ないでしょう。これがソ連をみる非常に大事な点で、たとえば一九三〇年代以後のアメリカは、非常に変わったといつてきかせても、彼らはその言葉を理解す

ることはできない状態である。これは、考えることを止めた当然の結果だが、自然科学はいざしらず、社会科学の分野では、いまのソ連はそういうものであるということは、ものを考える場合、この上なく有用な知識といわねばなりません。

ところで、ここに面白いのはフルシチョフという人間で、彼の實質、その国際社会における役割については十分考えておく価値がある。彼は一時盛んに国外に出かけたものですが、例のアメリカ訪問の直前には、わざわざフォレン・アフエーズというアメリカの雑誌（一九五九年十月号）に、「平和共存について」という論文を寄稿し、その考えを述べています。このなかにフルシチョフの全思想が現われていると思うが、その思想とは実に貧弱です。またこの論文を読んだうえで、彼の訪米中の発言を聞いていると、実にその實質がよくわかるので、彼の言論の内容の中には、現在の先進国と、後進国に対しての正しい洞察、それに基づいてマルクス主義の必然的な指導性を説くといったような思想的なものは全然見当たらない。彼の口から出てくるものは、ただ単にソ連の軍事情力、科学力がご自慢であり、それに基づく脅かし以外の何ものもない。この二つを實にうまく使わけている。彼は駆け引きの親方としては、大変な人物ですけれども、社会思想・経済思想の面から見るならば子供のような感じを受けます。昔のとおりでちっとも脱皮していない。實際の世の中は変わっているのだから、これは実に変なことですが、その指導者の頭の中はそういうふうだといふことがいまのソ連の現状です。

ところで私はさきに、東西の対立は恐怖の均衡であって、それ以外にはいまのところ平和の保ちようがないといったが、もともとこの対立はイデオロギーの対立であるので、これからは、断乎として思想戦の分野に対決の場を移すべきだと思います。その思想戦の分野における対決とは、いわゆる共産主義イデオロギーといったものを学問的に分析するといったことばかりやっていたのでは現実の動きを的確にとらえることはできない。むしろ彼らのイデオロギーはいかに時代遅れであるかを、日常生活と日常現実の世界の動きの中において実感することが大切だと思います。

エジプトのナセルは、もとは相当共産主義的であつたが、今は反共です。インドでは、ケララ州が一時共産化しましたがけれども、実際にやってみたらすぐわかることですから、なんだ共産主義だといっても、ちつともよくならないじゃないか」ということで、共産政府は退場させられてしまつた。これらの動きをよく見ることです。日本人は実に複雑なメンタリティーをもっている国民ですが、その特徴のひとつに、空漠たるイマジネーションの世界に長く住むということがあります。その結果として、この思想戦は日本ではなかなか片づくことがむずかしいのですが、もし共産主義という一つの主義に対する思想戦が日本で結着するなら、それはこの問題の世界的結着を意味するものだと思います。

さて中共はどうかというところ、毛沢東政権が民衆に希望を与えることに成功してから、国民は非常

な勢いで、いわば氣狂いのようになって働いているのがいまの状態です。人民公社については、いろいろ悪いこともたくさんあるらしいが、そのような面を超越した功績に対して、国民がある程度酔っているというのが今の状態ではないかと思えます。なぜそれが可能か。中国人の氣質がインド人とは違って現世的であること、つまり現世の幸福のためには、何をすることもいとわない、働いてよくなれるなら、いくらでも労を惜しまずに働くといった国民性に、その一斑の理由がある。

もう一つの理由は彼らの生活の位置からくる。これは中国が本当に好きで満洲のためにも北支のためにも長く現地で働いていた日本のある農学の大家から聞いた話ですが——私もある程度北支で実際に見聞した——北支の農民の生活とは本当に想像を絶するほど悪いものだった、この事実を日本人は知らないから、中国のことがわからないのだとその先生はいうのです。その最大の原因はつまり山に木がないことでしょう。漢民族という民族は悪い民族で、山が丸裸になるまで木を伐ってしまう。山に木がないと、雨が非常に少なくなる。降った雨は一度に流れて行ってしまふ。北支は日本の三倍か四倍あるでしょうが、その広い地域に降る雨は日本という島に降る雨の五分の一しかない。五分の一という少ない雨が毎年必ずかたよったところに降る。だからある地域は必ず洪水ですし、ある地域はかんばつです。何百年の昔から毎年々々それを続けてきているのです。だからその氣候と天災に対して戦い続けている生活は実に苦しい。ところがいまこの政府の命令どおりに働けば、このドロ沼のような苦難から抜け出せるのだという希望をもったとすると、民衆は本当に骨

身を惜しまず働く。それがいまの北支、いや全中共を通じていえることだというのが、その先生の解釈ですが、私もそのとおりだろうと思います。だから、中共をみるにはその事実、すなわち中共の民衆の生活はどん底の生活であることを知らなければならぬ。私もどうか早く彼らがそのどん底の生活から抜け出してほしいと思います。そうなれば彼らも、いまのソ連がそうなり出したように、だんだん普通の国になって、周辺を脅威しなくなってくるだろう、そのときこそ話し合いができると思っております。いまのように気が狂ったみたいに働いている期間には、話し合いはできないのです。あれは大きな国で七億も人がいるから、あばれ出したら大変だというわけで、脅威を感じて、いまから手を伸ばしておこうという考えの人がいますが、そういう卑屈な心情であってはなりません。相手の国が大きいからといって、そこに不安を感じたり態度を左、右することは断じていけません。国の大小にかかわらず、いやしくもそれが一つの民族である限り、安心して独立を深めていく世の中にするのでなければなりません。

八、日本の経済について

さてそこで日本の経済についてですが、これはいままでの話の中で触れてきたことによって大体は済んでいます。すなわち日本の経済の規模がいかに大きいかということについては、人口的には五番目、工業能力も五番目、近代科学技術を駆使する点については、ほとんど世界で一、二を争う

ところにある。欠けているのは資本力——一人当たりの投下資本量は先進国の中ではまだ高くないのですが、大体それらのことが日本の位置づけです。

「その構造変化」と講義要旨に書きましたが、これははじめて挙げなくてもよかった項目です。日本の経済が、どんな構造の変化をしているかということとは簡単にいえるものではない。というのは、変化を知るには、昔の構造を知らねばならないが、それを正しく知ることが非常にむずかしいのです。しかし大きく変わっているということは言えます。一つはつきりしていることは、昔の日本は新参の列強のひとりとして、当時の列強の心構えをもって満洲・朝鮮・北支の経営に心血を注いだ。それが日本の行くべき唯一の道であると思っていました。現在の日本は完全にそれを捨て去ったということにおいて大いに変わった。これこそ最大の構造変化というべきものです。

それにつづいて、いま新しく起こりつつある変化は、日本が優秀な先進国であるという自覚の発生、それに伴って、その先進国同士は欧州が一体化して行くだけでなく、アメリカとカナダはもちろんです。ますます一体化して行く。実は先進国はすべて一つの経済単位とでも呼べるものになろうとしている。その仲間に日本もはいるのが当たり前だというのが、今の「貿易自由化」の呼びかけの背後にある本当の事実なのです。すでに日本が優秀な先進国である以上その仲間にはいらざるを得ないのです。だから日本もあと三年もしたら、いつの間にか驚くほど自由に世界経済の相互交流の中にはいつているでしょう。これも一つの構造変化ですが、そうなったときの日本の経済は、世界に対

して、労働移動の自由とまではいえないにしても、資本は自由にかつ十分に移動するでしょうし、貿易も人の行き来も、思想の交流なども、いまとは比較にならないほど自由になるでしょう。そういうことを「構造変化」という言葉によって考えていただきたい。軽工業が重化学工業になるとか中小企業による二重構造が解消するとか、普通世間でいっていることは、私は特にあげつらう必要のあるほどの重要なことと思わない。殊に二重構造に関しては、そこに収入上の格差があるのは感心しないが、西欧流と東洋流、古いものと新しいものとが渾然と入り混じっているのは日本の特殊性、日本の強さ、ありがたさであって、三重構造でも四重構造でもいっこう構わないのだと私は思う。しかしこれは長い話になるからここではこれだけにします。

ところでもう一つ。日本の世界における経済上の位置づけは高いと申しましたが、それは経済ばかりではない。たとえば安保体制からすべり落ちるようなことになれば、それはアメリカのみならず、ドイツもフランスもイタリアもイギリスも猛烈な勢いで日本に対して怒りを示すに相違ないと思われるほど、日本の世界におけるいまの位置づけは高いのです。日本ほどの国が何だつて集団防衛の責任を回避して中立なんかにすべり落ちるのであろう、われわれが協力してスクラムを組んでいなければ、この平和は守れないことがわからないのか、お前ほどの大国が、お前ほどの知識力の高い国が、どうしてそれがわからないのかということ猛烈に怒るでしょう。それほど日本の世界における位置づけは高いのです。日本人は自己の過小評価が大変好きですが、すなおに自国を評価

してみればこういうことになります。

九、通覽して何がいえるか

いままでお話したことを振り返っていただいて、さて何がいえるか。特に学生として、これから勉強をしなければならぬあなたがたに、何をその中から掬み取ってほしいか。第一に、「既成概念」の打破の必要があるということです。

振り返って考えて下さればすぐわかることと思いますが、私がお話したことのすべてを通じて、その底に流れている主張は、「既成概念」に対する反対です。もう少し正確に言えば、「既成概念はすべて一応疑ってみる必要」を私は感じているのであり、疑ってみた結果、私の到達する結論は、「大体いつも反対になる」ということです。

私のいったことが間違っているなら、話はそれまでのことです。みなさんはどうぞ私の申し上げたいいろいろの判断の当否について、自らイエス・ノウを言おうと試みてほしい。いますぐは無理と思います。ですからどうぞ忘れずに心に止めておいて、これからの世界の発展の経過に徴して、その当否を知ってほしい。

その関連においてちょっと触れておきたいことは、なぜ私の結論は大体いつも既成概念、すなわち通常世間が正しい判断として受け取っているものの反対になるかという理由についてです。私は

現代の社会科学は、その全体の風潮としてみるときそのアプローチ（学問にはいるみち）むずかしい言葉でいえば、その研究方法論において間違いを犯しているからだと思う。どう違っているか。つまり現代の社会科学は自然科学に押されている。自然科学の方法論を無批判に受け入れすぎているのがその原因だと思う。

そこをもう少し説明しますと、経済とか政治とかいう人間の社会の出来ごとを知るにも、いわゆる「科学的分析」なる言葉——正しくはその思想——に捉われすぎて、すべて物的に実証することができるもの、平たくいえば「数字によつてつかまえる」ことができるものだけを、思考とか、論証の対象にすべきであつて、それ以外のこと、すなわち人間の心に関することがはいつて来るのは、それは科学的でないという考え方、それに現代の社会科学は押されすぎている。マルクスの唯物論は論外です。しかしケインズに始まるという近代経済学の学徒といえども、同じタイプの弊害に陥っている。私のお話したことを振り返つて味わつてくだされば、現実の動きというものは、政治はもちろん経済といえども、著しく「人間の考えるところ」によつて支配されていることがおわかりと思う。現実がそうなら、なぜその現実をそのままに捉えようとする学的態度を社会科学としないか。——これが私の現代の社会科学一般に対する批判です。平たくいえば、物的に捉え得るところばかりでなく、人間社会がコミュニティーとして動いて行くその全体を、心の面も込めて考へて行くのでなくては、要するになにごとも本当のことはわからない。特に経済学においては、いかに精

密なる客観的資料に基づく数学的分析をしようとも、それは要するに経済の一部における部局的現象、それも一定の条件を前提とした場合の現象の解明にすぎないのです。ですから、そう思っている私が経済問題を説明しようとかかる場合にも、政治も経済も社会も思想も、ゴチャまぜに研究して行くことになります。特にこの点を取り出していえば、それが現代の社会科学の欠陥の指摘になるのです。どういう欠陥かというのと、「分析にすぎる」という欠陥です。自然現象なら、分析して知ったことの総和が全体の知識である、といえないこともない。しかし社会科学の分野ではそうはいかない。部分の総和ならざる別の全体のようなものがあるのだから、これを直接につかもうとしない限り、ほんとの知識は得られない。そう申すのは、分析を排斥するのではない。分析は分析として、部分的知識を鍛えるには役に立つが、あくまで部分は部分で、それをいかにたくさん集積しても、全体の知識、すなわち生きた社会の実際を説明することにならない。いいかえれば、分析の学問のほかに、それと矛盾せず、むしろその上に立つものとして「総合の学問」というものがあるはず、現代はその事実を忘れているところに欠陥があり、私は及ばずながら、直接にその総合の学問に取り組んでいるのです。今日お話ししたいいろいろのことを覚えてくださるよりも、私はこの事実を感得してくださるの方がどんなにうれしかわらない。

さて最後に、「これからの日本を構想して行くための参考」としてもう一つ述べておきたい。これはいまままでお話ししたこととはやや異なる話ですが、同時にいま申した「学問の欠陥」といった話の

延長でもあるのです。

それは何かというと、日本の文化には独特の欠陥がある」ということです。その欠陥は、歴史の必然から出て来たものですから、日本人として恥じる必要もなければ歎くこともいらない。しかしその欠陥に気がついてそれを直さない限り、「日本の文化、特に社会科学がカバーすべき分野の日本文化」は奇妙に弱体である」という現代日本の欠点を正すことはできない。

その歴史の必然とは何かというと、「黒船」に驚いて急に西欧化を始めたのが、近代日本の主要な特徴ですが、その西欧化は「早く強くなるとやられてしまう」という当時としてまことに正しい判断の結果ですから、国民の願いは、早く西欧をまねて強くなることにあった。それを「富国強兵」の四字がまことによく現わしているのであって、それが明治いらい今度の敗戦に至るまで続いた本当の国民的アスピレーション（熱望）であった。

それはよかった。望み通り日本は——日本人はえらいから——非常な大国になったが、文化的悲劇はここにはい胎するのであって、日本のやった西欧化は「富国強兵のための西欧化」であって、個々の西欧化の条項それ自体のためでなかった。たとえば憲法・議会制度・基本的人権、それらのどれをとってみても、憲法がほしいと思つて明治の日本人は憲法を作つたのではない。ただ「西欧化の一環」としていわば自動的にはいつてきたのである。しかしこれは政治上の制度であるから、それを動かさないことには国の動きは止つてしまう。だから日本人はそれを動かしてきた。選挙も

裁判制度も何もかもみな同じである。動かしてはきたが、これは「求めて得たもの」ではなくて、「富国強兵」のために、自動的にはいつてきたものであったから、それを動かす日本人の心には、熱意もなければ理解さえもなかった。すなわちここに、前代未聞の「うわすべり」が始まったのであって、それいらい七十年、あまり長いから日本人はそれを普通のことと心得て、気にすることさえしない。これが「現代日本の根本的な欠陥」、むしろ「現代日本文化の特異性」と名づけた方がいいようなものである。

私はこの現象を説明して、「心がそこにはないのだ」といつてきた。特にこの特異性は外国人に説明してやる必要があるのだが、私にはその「心ここにあらず」という言葉の適当なる英訳がみつからないで、実はまだ苦勞している。要するにそこに気がつく現代日本の不思議な現象が実によくわかる。たとえば日本の経済学、それは日本の現実の生きた経済現象を誤りなく捉えたいという国民の念願に基づいて発達してきたものではなくて、西欧に追いつくため、西欧化するためには大学というものが必要であり、大学には講座というものがなければならぬ、というところからできた。だから私は、これは「心ここにあらず」というよりも「一種の飾りのようなものだ」と形容した方がよいと思つている。要するにそれは飾りにすぎないものの性質を多分に持つところから、日本では、いまもあの「事実」をぶつつけて検査してみれば、到底支持できないところのマルキシズム」という学問が講座では幅をきかしている、とこういふ説明になるのです。

この問題は実に面白い問題であり、また大切な問題である。これは掘り下げれば無限に広がって行く問題ですが、これからの日本を構想しようというのが、この集まりの終局的の目標であるならどうぞ十分に取り上げていただきたいと思う。また私の申し上げたいいろいろのこと、特に私のものを見る態度の根本には、この認識があるのだということ、今日のお話をきいてくださった上からも、知っていただきたい。

十、補 講 ——主として研究方法論について——

さきほど私は、経済学に限らず社会科学一般の方法論について反省が必要であるということを上げた。また私がお話したことは、ずいぶん乱暴な独断に満ちたもののように聞こえたかも知れない。そこでその間の事情を明らかにするために、もうすこし私の考えている社会科学の研究方法論というものについて述べるようにというのが注文です。さらにその前に、マルクスの方法論、もしくはマルキストの方法論についても何か話せと注文なされた方もあったわけです。

そこでこれからそのご注文に従ってお話しますが、私はマルクスの方法論というものはよく知らない。しかしおそらく彼は一つの断定をもって、世の中を見ていた。資本主義というものはいけないものだという断定にまず到達して、そのあとどこがいけないのであろうということを探ってみて、剰余価値説のもとになる一つの思想を得て、それが実際に当たっているかどうかを確かめるた

めに、ブリティッシュ・ミュージアムですか、ロンドン図書館にはいつて歴史の文献を調べあげ、あの体系を組み立てたものであらうと思ひますが、よく存じません。

マルクス自身の方法論はどうであつたかといふことは、大事なことです。研究なさることをおすすめますが、私はいまのところそう思つておりました。それをひどく悪いとはいひません。なにか一つの「こうであらう」と思ふ判断があつて、それを確かめるために事実を調べて、やっぱりそうだと思つてそれを主張する。しかも事実の調べ方が、彼のように広範にわたつたことはえらいものであつて、私はマルクスのやり方をそれほど悪いとは思わない。彼の悪いところは、その予言の基礎の中に足りないものがあつたことでしょう。人間といふものはいろいろ変わりうるのだと考へ、いろいろくふうして自分といふものを規制していけるといふ判断が一つ欠けていた。人間といふものを、物質的に規制されていくものとだけ考へた。つまり生産構造といつたものが、人間の心をも規定していくと考へた、その断定が間違つていたのでしよう。そこがひとつ間違つたと、それからそれと間違つたことになるが、しかし彼があつた時代に資本主義が悪いと考へたことは、かなりいいのじゃないですか。悪い点は、それからあと、いまいつた人間はその心によつて考へること、希望によつて自分自身をいろいろ変えていくといふことを、いわゆる唯物史観でもつてエクスタルド（排除）してしまつたから、その後の変化といふものを全く読み取れないことによつてしまつた点にあらうと思ひます。

そこで実際にマルクスがいったことを事実によってチェックしてみると、彼がいった主なこと、たとえば資本主義というものは発展すれば自潰作用を起こすのだという断定、これが一番大事な断定でしようが、そういう判断は実際どうなったかというところ、資本主義のもつとも発展したアメリカにおいて自潰作用を起こさない。マルクスは資本主義というものは、その必然の作用として、恐慌が避けられない。その恐慌を起こすたびに多くの人が破産する、失業者が出る、プロレタリアートの群にはおり込まれる。一方恐慌を出し抜いた資本家はますます肥ることになる、だから社会は非常に少数の大資本家と非常に多数のプロレタリアートというものに分かれてしまう。したがって当然革命ならざるをえないという彼の判断は、さきほどお話ししたとおりまったく反対になった。アメリカでは大金持ちは減ってきたし、大多数のプロレタリアートの代わりに、非常に広範な、自己に高度に満足している中産階級が出てきた。

なぜ彼の判断が違ったのかを考えていくと、いま私が申したとおり彼の判断の中に、人間は一種の自主性をもっているのであって、自分の頭で考えることによって悪ければ直していくことができるといふこと、簡単にいえば、資本主義に悪いところがあれば、その悪いところを直していくのだといふことを、マルクスは見落としている。だから自然そこに革命理論を出してくるわけですが、そこが違ったといふことでしよう。

事実、彼のいったことは證じつめれば、資本主義が自潰して行くといふこと、その自潰を正当な

ものと見るために、その中に不正が含まれている剰余価値説を出してきたこと、そしてその自潰すプロセスとしては、恐慌論というものを描き出したことに尽きるといえるでしょう。ところでその自潰を回避せんがために、資本主義国は帝国主義になるのだという理論がある。これはマルクス自身はあまりそれをいわないで、レーニンがいったのだそうですが、要するに資本主義国は帝国主義というものになることによって、しばらく自潰というものから免れることができる、自潰を延ばしていくことができるという理論をレーニンが出したのでしょう。そのレーニンの帝国主義論というものによって、マルクス主義の全面破綻というものが、辛くもいまのところは救われている。なるほどアメリカを見れば、マルクス理論はまるで破綻したように見えるけれども、それは資本主義諸国が、植民地というものでそっちへ問題をかわしているからだといういいのがれをする。つまり追いつめられたマルクス理論は、いま辛くもそこへ逃げ込んで余生を保っているといったらいいでしょう。

ところが、すでに述べたとおり資本主義国は植民地をどんどん捨てている。捨てていってもいっこう平気なのです。平気どころではない、いわゆる資本主義国は驚くべき繁栄に到達して、いよいよ人類は「貧乏克服」ということに相成るかも知れないという学説さえ出てくるような状態が現出しているわけです。そこでマルキストたちは仕方がないから、植民地は失っても、投資だとか貿易だというもので何とかごまかして、資本主義は生き延びているのだという。私から見れば、まさに

彼らは孤城残塁を守っているにすぎないが、まだそのところをピタッと証明するような事実が出てこない。私の心の中ではその証明は立派にできていると思うけれども、まだ全世界の人がみてそうだとってくれるほど、彼らの理論は全面的に破綻していない。しかしそうなるのはもう間近のことと思う。これがマルクスについて私が考えていることの大体です。

以上はマルクス自身の話ですが、マルキストの方法論は、また別に考えてみる必要があるでしょう。マルキストは、欧米の諸国においては大体消滅に近いのです。イタリア、フランスなどにはまだ共産主義者は残っているけれども、これはほんとにわずかなものだし、イタリアの共産主義なんかは、あまりマルクスを振りかざしたりしない。ただ共産主義という名が付いているだけで、政府に対して、現状に対して、不満な連中は一応そっちに投票しているというだけのものでしょう。

ドイツの社会党はこの間綱領の大変更をやりました。それでマルキスト的考えの残りをほとんど清算してしまった。その結果つまりドイツの二大政党は、アメリカの二大政党がそうであるように双方きわめて近接したものになった。それはドイツもアメリカと同じように中産階級の国になって階級意識などはどこかに消えてしまったという事実を押されて、そうなったのだと思います。

ですから、外国のマルキストはちょっと別に論じなければならぬ。だが日本のマルキストの方
法論はどういうものかという点、私はもともとマルクス主義について、はじめからさきほど申し上げ

げたような判断に到達している。私は大学卒業ごろ、コンミュニスト・マニフェストなるものを原文で読んだとき、そんな馬鹿な話はないと思った。大体そのときからいま申したような判断に到達しているわけです。ですから私にとっては、これはとつくの昔に勝負をつけている問題であって、あんまり気にしていいない。したがって日本のマルキストたちは、どういうわけでもまだマルクス主義にステイック（固守）しているのか不思議でならない。一体彼らはどういう方法論をもっているのか、私はあまり気にしていいない関係上ほとんど知りません。ですから間違っていたら教えていただきたいのですけれども、ご注文だから申しますが、大体彼らは概念規定から出発するのだと思いません。その概念規定が非常にやかましい。たとえば、商品とはなんだ、労働とはなんだというふうにやってくる。価値とはなんだ、資本とはなんだというふうに概念規定を綿密にやる。その概念規定に出發して、いくつかの原則的断定というものをやる。実はそれからあとが彼らマルキストの仕事であって、その概念規定と原則判断自体は大体カール・マルクスその人によってなされているか、あるいはその後の理論家によっている。ところがその原則的判断はいろいろとひねり回して、そのつじつまを合わせようとする。それに浮き身をやっしているのが彼らであろうと思います。うまく説明ができないと、概念規定にバックしてますます細かい規定をする、いろいろ条件をつけるといったようなことで、非常に微に入り細をうがった議論になる。議論にはなるけれども、概念規定そのものの不明確さ、——もともと私は概念規定というものをあまり尊ばない。というのは、事実と

いうものは本当は言葉によつては現わせないのだと思う。いま現に私は、私の思っていることを言葉に現わそうとしていのですが、その言葉に現わすということは、実際にはできないのです。考えてごらん下さい。実際に、本当に思っていることが現わせますか。どんな綿密な概念規定しても、むしろそれが綿密になればなるほど事実から遠ざかつて、受け取るほうのイメージというものは別なものになってくる。だから、言葉を人に通じさせるといふことは、非常にむずかしい芸当です。それは、何度も話をしてるうちにお互いが親密になる、つまりその人の立っている基盤というものを了解することが深くなることによつて、ようやくその人の言葉の了解度が深くなってきます。だから、あなた方がここで合宿するというのは非常にいいことなのです。ですから、言葉は絶対に通じないとはいいません。絶対に通じなかつたら話はしませんけれども、言葉というものは全容をきつちりつかんで正確に現わせば、その全容が伝わるものであると思つたら間違いで、必ずねじれる、必ず十分にはいけません。これは、経済学や社会学ばかりの問題ではなくて、学問全体の問題、すなわち哲学の問題であつて、学問をするには、まず各人の言葉というものに対する哲学を鍛えてかかる必要があると考えます。

話が横にそれましたが、私は大体そういう考えをもつておるから、概念規定に出発してやるやり方は、はじめからご免をこうむっているわけです。いくら綿密にやったつもりでも要するにだめだし、第一、時間がかかつてかなわない。だからそれよりは事実を平明に見ながら綿密に思考して行

け、という考えになるわけです。

ここまでが大體マルクスならびにマルキストに対して私が思っていることですが、これは違っているかも知れません。これは私のあまり気にしていない領域ですから、あまり正確に考えておりません。多分そうだろうと思っただけです。

ところで、マルキストに限らず、そういう行き方——いま申した概念規定に出発——いくつかの原則的判断をやつて、それからあとはそれを当てはめて行くというやり方をとると、これは実際には非常に間違いが多いのです。事実をまず常識的に眺めるといふほうから出発しないで、雲の上の概念のほうから出発するから、非常に間違いが多いのです。

そこで有名人を一人引き合いに出したい。それは大内兵衛さんです。私は、戦後彼のいったことがあまりにもひどいので大いに憤慨したことがあります。しかも彼のいったことは、状況をよくしたいためではなくして、状況を悪くするように悪くするように、意識的であつたかどうか知りませんが、とにかく事態をますます悪くするような言論をなさつたのです。それは何かというところ「日本の戦後のインフレ」です。これは非常に面白い例だから申しておきますが、第一に大内さんは、インフレというものはこういうものだといふ概念規定に基づく基本的な断定をもっているのです。それに基づいて日本が戦後に陥つた状態は、第一次大戦後のドイツと全然同じである、もしくはそれよ

り悪いという。だから日本のインフレはドイツの場合と同じにならなければならないと彼は断定をしたわけです。これが概念規定に出発した断定であって、それからそれといろいろな議論が続くのです。あの当時——私が戦後追放になったころですが——彼のいわゆる学者グループ、美濃部亮吉氏とか高橋正雄氏とか、脇村、有沢氏なんかもはいつていた。そういう連中のグループでデスクツションをやつてそれを高橋君がまとめて、「インフレーションの話」という本になった。そこでいつていることは、要するに日本の状況は第一次大戦後のドイツと同じなのだから、ドイツのおりになるといふのです。その議論の進め方は、インフレとはこういうもので、こういうことが起これば、こうなるものだといふ一つの基礎断定があつて、次に小前提として、日本の状況はドイツと同じだ、もしくはもう少し悪い、こういう第二の判断があつて、だからドイツのとおりにならざるを得ないといふ結論が出るという、いわゆる三段論法的な考え方でした。彼のいつたことはどういふことかといふと、ドイツは第一次大戦の敗戦後、国がどうなつて、どう賠償をかけられたか、そしてその結果、通貨は潰滅状態になつたという説明です。そのドイツのインフレは戦争が終わつてから五年ばかりたった一九二三年にクライマックスに達したのですが、そのインフレたるや——ドイツの昔のインフレのことは、近ごろの方はその後事件が多いからあまり関心がないかも知れないので、ちょっと申しますが、終戦が一九一八年、ベルサイユ会議で賠償が決まつたのは一九一九年の春、この賠償がいわゆる天文学的数字であつた。その数字は実に始めに確定しなかつたのです

が、あとで決まったわけです。それからいろいろいきさつはあったが、要するに為替相場が下落する、物価が上がるということで、大変なことになった。途中で若干回復したこともあったのはむしろ不思議なくらいですが、一九二三年にはいつて最後にはつるべ落として為替も通貨も下落した。どのくらい物価が上がったかと申しますと一兆倍になった。一円していたものが一兆円になったのです。日本の物価騰貴は三百倍というのです。大内さんがそういうものの言い方をしているところはまだ三百倍にもなっていないかった。その日本がドイツのとおりになるはずだとおっしゃるのでしたらあきれたものです。日本も一兆倍になるといいます。私は日本の状態を一目見て、そんなことは絶対にないといえたのです。敗戦後のインフレとはこういうものだ、という断定を初めにしないで、事実を万遍なく常識的に眺めると、大内さんの考えている論理の中に事実の下落としがザラにあるわけです。その抜けているものが一つあっても、この場合はたった一つでよかったです。日本のインフレは一兆倍にならずに三百倍で止まってしまう。それはなにかというと「ドイツがそういう経験を持ったという事実」です。ドイツがそういう経験を持ったことによって、人々は目がさめる。知恵がついた。インフレとはどういうものか、通貨はどういうものかということは、そのおかげで本当にわかることになったのです。

私はドイツのインフレのあった直後に正金銀行に入行してしばらく調査部にいたのですが、私は学部が独法なものですから、ドイツを研究し、ドイツのことをみんなに伝える仕事を調査部でしま

した。ドイツのインフレが一兆倍になって、まるで通貨というものなき状態になった。そのとき、初めにレンテンマークというものが出て、それを踏み台にしてライスマークというものが出てピタリと安定する、その仕事をやったのがドクター・シャハトという有名な人だということになっておるのですが、そのマーク安定のとき賠償とは「ドーズ案」というもので処理されることになるわけです。いわゆる天文学的数字を、払える数字に直し、また払えるようにして取るというスタイルに代わるわけで、そのドーズ案が実行されて二年になるけれども、ドーズ案実行の成果はどうなのかということをおドイツの雑誌のなかから拾って、それを正金銀行の雑誌に書くことが私が最初に手けた仕事だった。ですから私はかなりその当時のことは知っておったのですが、特にその一九二三年につるべ落としになるときのときは、人々はただ「あれよ、あれよ」とみていたにすぎない。なぜそうなるか。またなぜ安定したか、本当の理解は当時の人にはなかったわけです。そこで為替というものは神秘不可思議なもので、わけがわからない。そのころはアメリカ人などでも、「お前が為替銀行にはいったのか。為替というやつは、あれはヘッドエイクだ、お前はよくそんなところへはいったものだ」という言い方をした。いまは世界中どこに行っても文明国なら——もともと日本にはまだちょっとそれが残っています——為替をむずかしいなどといったら笑われる。為替とはこういうものだ、こうやればこうなり、ああやればああなるということはすっかりわかってしまつた。だから為替問題を別にむずかしいと思つている人はないわけです。

私は「外国為替の話」という小さな本を書いたことがあります、それに為替というものは、少しもむずかしいものではないということをしきりに書いた。むずかしいと思っている人があるかも知れないけれども、説明の仕方によってはなんでもなくわかるのです。ところでそうなのはなぜかという、ドイツのインフレが非常に寄与したのです。あれは全く人を驚かし、恐ろしがらせまた不思議だと思わせたから、猛烈な研究心が湧いて世界の認識は大変進歩した。だからこそこんどの占領軍は、前から相談して、日本を無条件降伏させても賠償は取らないと決めていた。大きな賠償を無理に取ることは、その国を目茶苦茶にする。その国民を全部殺してしまつてもりならば結構だけれども、そうは思わない以上は、かえつて勝つたほうに負担をかける。だから賠償は取るまいということを決めていた。すなわち、人間は勉強することによって進歩するもので、第二次大戦のころにもなれば、そんなことはえらい人ならみな知っていた。その事実をたつた一つ知っておれば、大内さんのいわれたようにはならないということは、ただそれだけでわかるわけです。

私は、きのうお話しした次第によつて、正金銀行の総務部長として、終戦の年の九月二十日ごろ呼び出されて司令部に行った。そして正金銀行の仕事を説明した。それから大蔵省の役人になったのは十月の半ばごろでしたが、そのころになると、アメリカは日本を復興させる意思であるということがはつきりわかった。そこがそう決まっているなら、なにを好んで通貨をぶち壊わすのか、通貨をぶち壊わしてから復興させることはばかな話だから、はじめからアメリカは日本の通貨をぶち壊

わざないに決まっている。それはひと目見てわかる。そのひと目見てわかることがわからないで、大内兵衛氏ともあろう人が、わざわざ自分のお弟子の学者のグループを集めて、ああいう本にまでして、日本の通貨は潰滅するに決まっているのだということを感じに言いつらした。何ということですか。その言いふらしたことは自然人を脅かす。通貨の価値は人間の心理状態によって動くのです。物的条件で動くものではないのです。通貨や物資の分量だけで動くものではないのですから、この通貨はだめだと人が思えば、それで物価が上がっていく。この通貨はだめになると思ったら、誰でも早く物を買っておこうとするから、どんどん値段は上がる。だから大内さんたちのああいう本が出たことはずいぶん当時の人心を悪くしました。それは余談ですが、概念規定を断定に出発する、いわゆるマルクスの考え方というものは、そういう誤りをしばしば犯しているのです。ほかにいくらでも例があると思います。しかし記憶に値する極端な例はそれだというのであります。

では、その反対の行き方はどういう行き方かというところ、概念規定や基礎判断に出発しないで、まず万遍なく普通に世間を眺めるといふことです。そうしていつて、どこに学問的セオリーを求めるかということ、何か問題がクローズアップしたときに、それに対して理論的な思考というものをやる。それが学問というものです。ここで、学問とはなんぞやということになります。いったい万遍なくものを見ているその心の状態というものは学問的ではないのですか。セオリーらしいこと、

概念規定らしきこと、抽象的な言葉、あるいは数学の式などを使って思っていることをいえるときに始めて学問というのですか。これは学問というものの定義の仕方でもありません。しかし私は経済学というものは、そのセオリチカルなところ、数学の式にでもなるような、あるいは抽象的な言葉によって語られるような局面に——抽象概念もいい、それも学問の一つの仕事だとは思わなくても、しかし、そういう局面ばかりが学問なのではない——私にとっては学問というのは、これからさき私は、私自身がどういうメトードをとっているのだということを自己反省しながら、お話しするので、——これは反省しないとわからないのです。自分は何をやっているかということ、それを自分で知る前から自然にもうやっているのですから、自分のやっていることはなんだろうと考えて、すなわち自己反省をしてみても、はじめて自分のやっていることがわかるのです。それです。から私は、いまその自己反省をしながらお話しするのですが、私の出発はどういうことかということ、正金銀行に二十年いましたから、その間に世界を眺め、日本を見つめてきた。その間の日本はだんだん大東亞戦に突入していく日本でしたが、正金銀行にはいったころは昔のドイツの復興です。それからアメリカのニューディールの時代になってくるのですが、そういう時代は今から思うと実に不思議です。当時一九二九年からしばらくの間は、本当に資本主義は破滅に陥いるのかと思つたのですから。そのころ私は銀行にはいつて五、六年して上海支店に転任したのですが、そういう時代もあつたのです。そのころから満洲事変、上海事変でだんだん日本は日支事変にはいつて行くので

すが、そういう激しい世界に、自然に目を向けた。そういう点で私は非常に得をしている。当時の上海は自由為替で、銀という金属そのものを通貨にしていたのです。紙幣じゃない。コインでもない。銀の塊です。馬蹄銀ばていぎんといってちょうど手のひらに乗るぐらいの大きさですが、それが一つ一つ分量が違い、重さが違い、品質も違うのです。それを目のきく人が一つ一つ鑑定して、これは純分いくら、重さいくらということが一つ一つの銀塊に書いてある。それによって取り引きするわけですが、こういう不便きわまりない通貨でした。これはメタルそのものの通貨ですが、そういう時代でした。もちろん貨幣もあり、ノートもありましたけれど、本体は馬蹄銀だったのです。その銀を相手に世界各地で相場が立ちますが、それを銀為替といった。そういうものに対して世界に起きるいろいろな事件がピンピンと響く。ことにアメリカの銀産地区の上院議員たちに銀の値段を上げようとする連中がいて、その連中は銀の値段を上げたら支那の民衆は助かるのだと主張した。そういう連中がおつて、銀の値段つり上げ操作をやった。それが支那の経済にいいという理由だったので、実際は逆に支那の経済には悪いことになった。銀の値段の上昇は一般物価の下落、すなわちデフレ強行と同じようなことになったからです。面白いことですね。そういうことを目のあたり見ているのは、ものを考えざるをえません。

その後、私はヒトラーのドイツに行った。彼はすでに首相になって、隆々たるものがあつたのですが、やがて第二次世界戦争になるわけです。そういうのをずっと眺めさせられておれば、いやで

も考えてしまいます。そういうことはむずかしくておれには取り組めないと思つたらそこから脱落するのですけれども、ともかくもそれに取り組んでさえおれば、ちょうど波乗りでうまく波に乗っているようなことになる、落ちないで済むのです。その波にずっと長い間乗っておれば、自然に全体がよく見られるようになるのです。それをよく見られるようになれば、たとえば戦後の日本がインフレになるかという問題がクローズアップしたとき、私が過去長い間に蓄えてきた全知識が、意識されると否とを問わずそこに自然に動員されてきて、大内さんのいうことは違うという判断がポンとそこに出てくるのです。それは判断の成立ということですが、それを説明するという技倆はまた別の問題です。

そういうふうにものを考え、そういうふうに判断をいつでも得られるようになるために、いつも万遍なく知識を集積しようとしているのが、私のいまやっていることなのです。私の頭の中を自分で反省し解剖して考えてみて、そこに学問的なものがあるかといえ、そこに一つの「体系化」ということがあるでしょう。つまり私の考えていることの全部、知っていることの全部が、自分のもっている問題意識——これも体系化されていなければだめですが——その問題意識によって相互に矛盾なく、相互に援け合うように配列されている。そういう知識を学問的知識というのに異議がありませんか。私は、そういうのも一つのタイプの学問と思ひ、自分ではそういう学問をやっているつもりです。

もう一つ言いたいことは、私は、百パーセント正しいと思う解答というものはつねにもたないということ。ほうつとしてしているのです。ほうつとさしておくのです。多分こうだろうと思っただけです。ただし必要に際しては、イエス・ノーをいわねばならない必要が起これば、すなわちたとえば日本が敗戦したようなとき、これはインフレになるかならないか、イエスカノーかの回答を持たねばならない必要に迫られることがある。また「どうすればインフレを止められるのか」ということに、答えを出さねばならない地位に自分が置かれるときがある。そういう必要に迫られれば、不思議なもので、大体いつでもイエス・ノーかピタツといえる。私もそういう必要に際したときはハッキリと断定します。しかし、そうでないときはただほうつと、多分こうかな、と思いつつ、その判断を融通のきく状態のまま心の中に流しているだけです。しかしそれはほうつとしていうのであっても、体系的な知識もしくは判断として、体系化された問題意識の中に秩序よく収まっているわけです。この体系化された問題意識の中に、自分の体系化された多数の判断というものが、相互に関連し補完し合う形、すなわち体系化されたスタイルにおいて、重なり合っていることが非常に大切なところです。それらの判断はまだほうつとして必ずしも固定的でない。それでもいい、それがいいのだと思っただけです。その固定せずほうつとしているところが、進歩と融通性の基礎で、頭はつねに楽々としていられる。新しいこと、未曾有のことに感受性をもっていられる。そして何かハッキリ断定しなければならぬことが起これば、そういう知識は、直接間接に全

部が動員されてくる。勿論そういうときには、特に確かめなければならぬ事実が出てくる。いまの例でいえば、アメリカは日本を潰さないつもりであるということは知っていたけれども、日本のインフレはたいしたことにならないということをいよいよ断定しようとする前には、はたしてアメリカは本当に潰さないつもりかどうか、本当に賠償は取らないのかどうかということ確かめる必要がある。それにもう一つ、日本人が自分の通貨は潰滅すると思ってしまったらだめですから、通貨は潰滅しないのだと国民に思わせる技術、それは評論家でもできる仕事ですが、大事なものは政府です。特に当時の例でいえば、アメリカの進駐軍が、その技術をもっているかどうかというようなことが問題になる。それらのことを本当につかまえればハッキリと答えが出てくるのです。

大体のところまずこのようなものが私のもっている学問体系です。これでほんとにいいのかどうかは存じませんが、私はいまのところそういうつもりでやっている。そういうアプローチは、多分東洋的であるといっているように見える。第一、ものはほんとうにわからないのだということが発する。言葉というものによっては正確には伝えられないのだということが発する。自分が知っているということでは出発しない。自分は知ってもいるけれども、本当は知らないのだということろで出発する。これは東洋的な考え方でしょう。

またもう一つ申しますと、私も毎日々々数多くの判断をしておりますが、そういうのはみな小さな部局的な判断です。人間というのはこういふものだとか、歴史というものは唯物的に考えるべき

ものだとか、そうでないとかいうような大きな判断は、めったにすべきものではないのです。必要があればやらなければなりませんけれども、そういう大きな判断というものはあんまりすべきではない。「たぶんこうだろうと思う」という漠然たる答えでいいと思います。そこはキチンとしないままで、その「たぶんこうだろう」という考え方に乗せて、ものを万遍なく、自己の問題意識が捉えてくれるに任せて眺めて行く。それでいいのだと思います。したがって世界を眺め、政治と経済との関連を正しく捉え、そのほか思想なり何なりの関連も全体的に組み入れ、歴史に遡さかのぼって、今日の世界が相互にくっつき合って、そこに非常な大きな未曾有みぞうの姿の展開ということが起こっている。この状態をできるだけ簡明に理解し、人にも理解してもらおう、こういう仕事をするのは専門家でなければできませんから、私はその専門家なのです。いまは私の全精力というものをそれにささげている次第です。そういうことを知り得る立場にない人のために、それを説明して差し上げるのが私の人生にとって——偶然にそうなったので、そんなことをやることになるとは夢にも思っていなかったのですが、いまのところは適当な仕事だと思っているわけです。またそれは面白くてやらすにはいられないようなものなのです。それが私の考えている学問というものの説明、したがってご注文の「私のメトード」の説明でもあるわけです。



体験することによって、参加者の心はさらに通い合って行く。

夕食・入浴（午後六・〇〇～七・三〇）

中食・休憩（午前二・三〇～一・三〇）

登山（午後二・〇〇～六・〇〇）

加藤会員の指揮で班ごとに分かれ、仁田峠登山を試みる。近道をとったため石ころが多く、かなり登りにくいコースである。だが両側の木々の濃い緑に、全員心が解き放たれるような思いがする。いろいろ語り合いながら登ってゆく姿は、そのまま『合宿教室』の延長という感が深い。雨もよいの空、時々樹間に霧が流れる。ほとんど眺望はきかない。しぼるような汗をかき、三時すぎ頂上に着く。三十分間の休憩中も熱心に話し合ったり、討論したりしている。帰途はバス道路を通り、ともどもに語り合いながら下る。『地獄』を回って六時ごろ帰着、直ちに浴場に飛び込む。温泉の湯が疲れたからだにしみ入るようだ。同じ苦しみ、喜びを



夜は七時から約一時間、別府大学学長花田大五郎氏が「良識について」と題して語られた。民主主義は、それを支える良識がなければ崩壊することを、王陽明の格物致知の言葉を引いて説明された。八十歳のご老齢にもかかわらず、昨年の阿蘇合宿に引き続き今回も参加され、終始変わらない愛情をもって、学生の指導に当たられるご熱意は、深く全員の心を打つものがあった。

良識について（講話）

別府大学学長 花田大五郎

私は一番年長者だそうで、ここに腰掛けて話せということですが、これは年寄りをいたわるお心遣いであると思います。それで腰掛けて話をするをお許しいただきたいと思っています。（拍手）

私になにか締めくくりの話をするようにという司会者のお言葉ですが、私は諸先生ならびに学生のみなさん方のお話を聞くことを主たる目的としてきたのですから、私はそれをむさほり聞いたつもりです。それで私のさなきだに老衰しておる頭が疲れ、どうも締めくくりの話ができないだろうと思います。

みなさん、きょう山にお登りになってこのあとには懇親会が待っておる。その間私に与えられた一時間でまとまりをつけるということは、疲れた散漫な頭ではなかなかできにくい。言いたいことはいろいろありますが、それを整理することができない。それにきょうの私の話は、講話となっておりません。これはなにか堅苦しくない話をしろという意味であると思います。それなら講話とするよりも、むしろ講談とでもしたほうがよかった。（笑）しかし、私は不器用ですからそういう講談な



とはできません。しかし、講談に代わるような面白い話を、司会者のほうでは期待されておったかと思えますけれども、それもできません。ですから、なんだか野暮なつまらない話になると思いますが。これはあらかじめお詫び申しておきます。

ここにまいりまして私が喜びに耐えないことは、佐藤先生、羽田先生、木内先生などから非常に具体的なお話を聞き得たことです。これは大変ありがたかった。みなさんもおそらくこれらの話をよくお聞きになったことと思います。これからの日本人、あるいは日本国民は、結局みなさん方です。——みなさんはこれからの人ですから——どのような心掛けをもってこれからの日本を背負っていくべきか、それは私がいうのではなくしてみなさんに考えていただきたいのです。私はなにも注文はありませんが、ただそういう心持ちがするのです。

きょうの話は、「良識について」という題になっておりますが、最初の考えは、「良識について」をサブタイトルにして、王陽明の陽明学、良知説にすこし言及しようと思ったのです。しかし、それではどうも堅苦しいのみならず、長くなる恐れが

ありますから、一応良識としておきました。「良識か常識か」と司会者から聞き返されたので、私はコモンセンスではなく、「良識」ですと答えました。良識という言葉についてはっきりした定義は私も存じませんが、私はみなさんよりもっと若いころ、つまり中学五年から旧制高校入学のころすこし陽明学に凝ったことがあります。陽明学にいう良知に近いものをさしてお話するつもりです。

良識という言葉は近ごろよく使われていますが、われわれの青年時代には良識とはいわず良知といった。良知を磨くことを陽明学では「良知を致す」といっていますが、そういうことにいま郷愁を感じて、そのことを私の過去の思い出として申してみたい。そういう意味での話をしたいと思えます。

最近、新聞雑誌などに良識という言葉がちょいちょい出ていますが、これは自分が良識を磨くとか、良識によって、ものを判断するという意味に使われている場合もありますが、より多く相手方に向かって、たとえば「国民の良識に訴える」とか、「相手方の良識に訴える」というような意味に使うほうが多いようです。

私は、いままでも良識というものが大事であるということをよく申してきた。私はただいま別府大学に名前だけ連ねていますが、その前大分大学をやめるときに学芸学部のある諸君には「教育は良識を育成すべきものである」ということを置きみやげとし、また告別の言葉としました。またその後

新聞記者などと座談をしたときにも「解散もいけれども、国民の良識が発達しないと何度解散してもだめじゃないか」という話をしています。ことしの安保反対運動のときも「直ちに解散して国民の意思を問え」というようなことを田舎の新聞に至るまでいっていた。そのとき私は「国民が良識をもっていなければ、そして正しく判断する国民でなければ、ただ解散して選挙を繰り返したところで同じことではないか」といったことを記憶しています。

民主主義についても、私はそれがたいしていいものであるとは思っていません。率直にいえば一番いいものとは思いません。民主主義も比較的いいのであって、民主主義よりもさらに比較的いいのは私としては皇道であると思います。みなさんは、これには妙に反発を感ぜられるかもしれませぬ。あるいはそんなことはもうとうの昔に忘れられたような言葉かもしれませんが。しかし私はやっぱりいろいろ考えますと、どうも政党政治は国民を二つ、三つあるいはそれ以上に小さく分けて、国民の思想的分裂を来たすものだと思います。「主義」でも「方針」でもなく、国民が一体になる気持ちはやはり皇道であると思うのです。このことを私は少し申したいと思えますが、戦時中に軍部が「八紘一字」ということをいった。ところが、軍部は大東亜戦争を始めたのち、八紘一字の精神ということをいったので、その言葉がややもすれば、軍部の侵略の言葉のように解されたのではないかと思う。また軍の一部もそういうふうにとっていたのではないかと思えます。私は内心それを非常に心配していた。それで、私は当時和歌山にいたのですが、「八紘一字の精神について」と

いう文章を書き、和歌山県の教育雑誌に載せた。それを載せることについてその雑誌の編集者は相当ためらったようです。「こういうことを書くとき軍部から生まれやしないか」という心遣いのようでした。しかし私の八紘一字の解釈は軍部とは違うのです。私はその文章によって軍部を戒めたつもりだった。その私の気持ちは今日も同じで、やっぱり八紘一字の精神がいいのではないかと思つています。八紘一字というのは日本書紀に出ている言葉ですが、神武天皇が大和を平定されて都を橿原の宮にお定めになり、位につかれたときにおっしゃった言葉だとされています。「六合を開いて都とす、八紘をもつて一字とする」ということで、「八紘」には「あめがした」というかながついています。「一字」は一つの家。つまり「天が下を一つの家とする」ということです。これは、それが侵略戦争の合言葉、日本が東南アジアその他を征服して、それを日本に併合するかのとき意味に取られがちでしたけれども、私どもは神武天皇のそのときの心持ちを察するのです。高天原はどこであったかについては、いろいろの説がありますが、やはり大和平野であると思います。そして、高天原民族は出雲民族と同じ血族ですが、出雲民族は山陰道から北陸道のほうにかけて発展し、そして朝鮮の南に移住した民族と同じです。つまり朝鮮海峡を経て日本海にはいり、両方の陸地に移住発展した民族です。

大和民族というのは、前はどこにおったか知りませんが、大和から発展して、そして淡路島から瀬戸内海を通過して西の方にだんだん勢力を延ばし、九州から支那海に出て、そして朝鮮海峡から日

本海に入り、老岐、対島、隠岐、佐渡、それから越後の方にかけて勢力範囲としたようです。そして、そのときに、出雲を中心にしておった大國主命を説得して併合したわけです。「ことむけやわす」という言葉があるが、それは武力に訴えたのではなく、つまり言葉を向けて和睦をしたということです。ことむけやわして、つまり出雲民族と大和民族とが平和裡に併合して、版図は九州その他にまで及んだのです。こう遠くなると、大和朝廷はこれを統治するのはなかなか困難なので、瓊杵ヒビギの尊ミコトを下されたわけです。たとえば、台湾を統治して台湾総督を置くとか、あるいは朝鮮を併合して朝鮮総督を置くというように、大和朝廷から総督のような形で派遣されたものと想像されます。

ところが、その当時の大和にはアイヌがおった。それから出雲民族がはいつてきて、大和民族の勢力が衰え、大和民族、出雲民族が入り乱れて（勢力を争ったかどうかはわからないが）、大和民族、出雲民族はいまの法隆寺あたりを中心にして大和平野の北側に兵力をもっておった。そのほかはいろいろな豪族が各地に蕃居ばんこして、統一がつかなかった。それをはるかに神武天皇が聞かれて、大和が乱れているようならば自分がそれを平定して、本家を継ごうということで、ご東征になったのだろうと私は思う。その辺は私の想像ですから、あまりはっきりした学問的な話ではありません。それで、九州から大和におはいりになり、大和を平定して皇后を迎えられたが、この皇后は大國主命の娘とあるのはうそでしょう。その孫かあるいはその子孫であつたらうと思うが、とにかく出雲

民族の出の人を皇后に立てて、そしてそれまでに大和民族でいろいろの勢力を揮っておったものどもを鎮撫し、反抗するものを討伐された。そしてそのあとに橿原の宮で位につかれた。こういう順序であると思います。そのときのお言葉が「八紘をもつて一字とする」というのであります。八紘といつてもどの辺の範圍まで及んでおったかわからないが、とにかくいろいろな民族が雑然としておった。そして統一のなかつた大和平野をとにかく統一し、それを一つの家の家族のようにしようといわれたわけです。その言葉を拡張すれば、これは平和工作であつて、征服ではないのです。そうして、民族は違つておつても——といつても出雲民族とか大和民族というほどの民族ですが——それを一つに結合し和合して、一家のごとき国家——その当時は国家というものはなかつたかもしれませんけれども——としよう、こういう意味の言葉であらうと思います。

ですから、大東亜戦争のとき軍部はしきりにああいうことを言つたのですが、私は和の精神をもつて臨まなければならぬといったのです。私は占領地において略奪をしたり、みだりに人を殺したりするようなことはすべきではない。私の解する「皇道」（すめらぎの道）は、平和な「和」をもつてすべきものであつて、聖徳太子の十七条憲法の第一条にある「和をもつて貴しとなす」という言葉——これは仏教の精神でもありますが、これこそ本来の日本精神です——「まつろわぬもの」反抗するものに対しては「撃ちてしやまん」と武力をもつて征服するのですが、そうでないものが相和して、一族のごとくなごみ合い親しみ合うという心であつたと思う。

それが日本民族の偉大なる抱擁力であったと思います。その後朝鮮からも支那からも多くの異民族がはいつてきて日本に帰化した。支那の福建、広東方面やおそらく南洋の方からもきたのでしようが、みんなしばらく一しょにおりますと、すべて日本人になり切つて、異民族であるかどうかからないように同化してしまつたのです。

アメリカの黒人は、皮膚の色が違つたためいつまでも差別されている。今日といえどもなお黒人の問題は解決されていません。日本にきたところの異民族は、長い間に渾然として日本民族に同化してしまつた。そして日本が島国であつたために、たとえば船に乗つて海の中に出た、すると同じ船に乗っている人たちが感じ合うように、いつの間にか利害とか、艱難を一しょにし、心を一つにしなければならぬような関係になつて、それで自然に国を愛する精神もわいたのであろうと、私は解しています。

話がだいぶ長くなるけれども、たとえば日本の神社は白木でできている、支那から渡つてきた寺のように、赤や青なんかでいろいろ塗るなどということはしない。これは白というのは、色がついていないということです。日本の神道の神事には、あまり色のついていない白いものを用いる、非常に素朴といへば素朴、単純といへば単純ですが、それはまた染めるならどんな色にでも染まるということです。日本精神は清明心、つまり清き明き心、清らかで明き心でありますから、どういふものでもそれを中に取り入れることができる。それで外国——といつても、あの当時の朝鮮半島、

支那あるいはインドの思想、文物、文化を日本はほとんど取り入れていったわけですが、本来の日本人の心はただ清明で、清く穢（けが）れを嫌う、そして明るい、そういう潔白な心、純粹な心であります。昨年もそういうことをちょっといったと思いますが、他国の文明その他を日本ほど抱擁して自由に取り入れ咀嚼（そじやく）し、自分のものにした国は、ほかにもあるかもしれませんが、日本はそれのもっとも珍しい国ではないかと思っております。

ちょっと話がわき道にはいりましたが、民主主義は敗戦後アメリカが押しつけた思想です。民主主義がいいか悪いかは、日本人でもわかっている人もあればわからない人もあるだろうと思う。しかし、アメリカから押しつけられて、わかっている人もわからない人もみんな「民主主義」「民主国家」「民主政治」という。民主主義といわないと、なんだか現代の日本に住めないような気持ちでいるのではないか。私は民主主義というものは必ずしもいいとは思わない。それよりもいまも申しました皇道、皇国の精神がすぐれていると思います。これは堅苦しい内容ではなくて、ただ清く明るい精神をもって、世界のあらゆるものを取り入れて同化し、そして和の精神をもって、民族が違ってもそれを一家族のようにしていくという精神であります。議会制度とかあるいは政党政治というようなものは、二大政党であれば二つに分かれて一方が勝てば一方が負ける、負けたものが恨む、あるいはこの次にはこうしようといって、そういう争いの心をいつも包蔵している。国民の心が絶えず分裂し対立することは、「和をもって貴し」とする国がらにおいては望ましくないと思う

のです。それで、そういう政治や民主主義は最上のものではない。それよりも皇道のほうが日本としてはまさっていると思ふのです。ところで、民主主義には全然反対かというところ、そうでもないのです。条件つき賛成です。条件つき賛成ということは、国民がみなおのおの良識をもって判断し、良識をもって行動するということになってこそ、そのときはじめて、本当に民主主義が生かされるのだと思うのです。民主主義の意味もよくわからず、たとえば選挙しても選挙民が自分の正しい判断と思ふもの、少なくとも自分はこれが正しい、この人がいい、この政党のこの政策がいいということをみずからの判断、みずからの良識で投票する。——つまりほかから買収されたり強要されたり、あるいは供応されたりすることなく、自分の判断で行動する。これを良識によって行動するということです。そういう良識によって国民の多数が行動しうるようになる、それくらいに国民の資質が上がってきて、はじめて民主主義がいいということになるのです。

元来、多数決ということは数をもってものごとを決めるもので、やたらに多数を獲得しようとして買収したり、あるいは権力で脅かしたり、利益で誘惑したりする、あるいは組織の力によって指令を出し、各自の判断を無視して投票を強制する、このようなことは民主主義ではないのであります。さきほど佐藤先生もお話されたように、ソ連や中国では共産党が専制的に命令を出し、その党の主義を貫こうとするわけですが、そのような組織は民主主義でないと思ふ。国民が特定の一つの党に組織されているということは、国民の自由な考えを妨げる。国民が自分の良識によっていいほう

につこうということで流動する——いまは多数党がいいと思つてゐるが、議会などにおける言論その他から考へて、少数党の意見のほうがいいやうだと、自分の良識で判断すれば少数党につく、それを私は流動といつてゐるのです。そのように自由に流動しうるような国民であつてこそ、ある問題について議會を解散して国民の意志を問ふことも意義があると思う。解散してもやっぱり相変わらず多数を制しようとして買収したり、利益をもつて釣つたり、組織の力でおのおの自由判断を許さず、一方的に強要するのでは、本当に国民の自由で正しい良識による判断は出てこないと思ひます。それでは、解散して民意に問うといつたところで、ほんとうの民意は現われるものではない。それでは本當の民主主義ではない。

良識によつて各自が行動しうるやうなところまで、国民の程度が高まつたときこそ、民主主義は非常にいい制度になる。もう四十年前と思ひますが、吉野作造先生（みなさんも名前ぐらいは聞いておられると思ひますが）が東大におられた大正四、五年当時デモクラシーを提唱された。そのとき先生は、民本主義といつておられた。これは、孟子に「民をもつて本とす」という言葉があるから、これならばさしつかえないだろうといふので、民本主義といつておられた。ちょうどそのころ吉野先生が推奨された書物に「デモクラシー・アット・クロスウェイ」——十字路に立つてゐるデモクラシー——といふ本があつた。私も丸善に注文して一冊買ひ、いまでも持つております。これはいま読んでもいい本です。それに民主主義發達の歴史的記述、学者や思想家の意見などが書かれてい

ますが、英国では民主主義は、日本のように無批判に受け入れられたものではありません。実に数十年にわたって学者や思想家の間でいろいろ論争されたのです。いわゆる反対論もあれば、賛成論もあり、なかなか決定に至らなかったが、その反対論の中にはカーライルとかラスキン——この二人とも私の尊敬する人です——の意見もあります。カーライルの意見を一、二ご紹介すると、民主主義は元来英雄によって指導され、神に近づくように民衆が指導されるべきであるのに、その代わりにすべてのものを民衆の低さまで押し下げてしまう制度である。英雄によって神のほうに導かるべき政治を、逆に低い民衆のレベルまでそれを低下させる政治であるから、民主主義は衆愚政治であるといっている。そうしてデモクラシーはノーブル・サイレント・セントルマン（上品な人であるけれどもしかし黙っている立派な人）をネグレクトし、そうして出しゃばりの厚かましい、品の悪い政治家のさばる政治であると書いております。これが私の反対の理由です。カーライルの時代の英国の政治もそうであったかもしれませんが、この言葉はいまの日本にも当てはまらないことはないような気持ちがあります。

もつとも、カーライルの「英雄によって指導されて神に近づくべき政治」ということばの中の英雄は、ナポレオンやアレキサンダーなどのような武力をもって征服する英雄ではない。神の意志を代表するような政治を行なって、人間を神に近づけるように導くという考え方ですから、英雄によって指導されるということは、つまりそういう意味であります。武力を用いる英雄ではなしに、神

に代わり神の意思を代表して、民衆を率いるようなそういう神聖な心をもって政治をする、それが英雄であるといっております。彼はたとえばクロームウエルのごとき人をそういう意味の英雄と思つたかも知りません。そのようなカーライルからみますと、いかにも政治は墮落している。墮落するような政治にもつていくのがデモクラシーである。大衆—民衆の大部分は程度の低いものである。そういう低いものの意思なり気持ちに迎合しなければいかん、そういう民衆に迎合するようなことは、東洋の言葉でいうと、「君子」はそういうことをやらない、だから下品な厚かましい、出しゃばりのそういうデマゴークというか、政治屋どもがのさばる政治である。だからあれはいけなしいというのです。

それは現代の日本にもある程度当てはまるのではないかと思う。だから民衆の程度が高まって、さきほどいったように、良識をもって国民が行動するようになれば、そこではじめて民主主義が実現されると思います。

だいぶ時間が経ちましたが、国民が良識によって政治を判断し、それから自分の去就を決定することになると、多数者が多数をたのんで横暴なことをやれば、良識のある国民であれば多数党から離れるべきです。また、少数党が多数決という議会政治のルールを無視して、実力をもって議決を阻止するようなことをやれば、これもまた良識ある国民はそういう少数党を非難し、見放すでしょう。いまの少数党のやるようなことはおかしいと思います。あれで国民の多数の同意を得ていると

いってみても、それは良識なきものの付和雷同であつて、扇動に乗るような国民ならいざしらず、良識ある国民であれば、とても納得できるものではありません。国会で決めた法律を無視して、勝手に力づくで行動するようなことは、少なくとも民主政治においては許されたいことはいうまでもなく、民主主義をよく体得している国民であるならば、そういうことは許さなはずです。ですから、こんどの安保反対デモなどは、国民がおのずからあんなったのか、社会党や共産党が合作してあのように工作したものであるかどうかは別としても、その工作に多くの人々が、しらずしらず踊らされたのではないかという点に疑問が感ぜられます。日本の民主政治については、日本国民がある程度までそれに成熟しているかどうかが大切と思います。ですから、たとえば、ある政治家の一人が、中共に行つて中共の要人と一しよに共同声明を発表し、自国の内閣を糾弾するような行動をとつたことに対して、良識のある日本人であるならば、その人の行動を非難するか、そつぽを向くか、いづれにせよそういう人については行かなくなるはずで、そうならなければ、政治家の間違った言動を是正することはできない。そういうことを是正するのが国民の良識であると思います。

良識を養うことが民主国家としては先決問題で、まず大多数の国民が良識をもつような国民にならなければならない。教育も子供のときから良識を養うことを眼目にすべきであります。

そうして、次の時代になうみなさんが、日本を正しく間違いないように、立派な国に仕上げようじゃないかという良識があつてこそ、日本が立派になるのです。

ところでその良識とは一朝一夕にできるものではないから、子供のときからその良識を育成しなければならぬ。つまり小さいときからしつけないといけないのですが、いまの日教組は、そういうことをやるのがいけないといっている。私は子供のときからよき習慣がつき、比較的公平な、正しい考え方をするように、教育していかねばならないと思う。まだものごとをどう判断していいかわからない時代に、一方的な考え方に追い込むようなことをやれば、それがその子供の信念になってまう。長ずるにしたがってその人はますます頑固な考え方になっていき、良識を失ってしまふ。そして、頑^{かた}な、誤った、しかもそれを頑強に固執している人々が多くなりやがてそれが国民の多数になったら、それこそ国として非常に憂うべきことであります。その意味において、教育は子供のときからその子供の良識を育成する、はじめはそれを育てる、それからだんだん大きくなるにしたがって、自分の判断でものごとを考えつつ、それが同時に、良識を発達させるということになるように教育すべきであります。私はまだみなさん方のような青年のときに、相当心を傾けて勉強した陽明学を思い起こし、それにすくなからぬ郷愁を感ずるのです。

この機会にちょっと申しますが、陽明学に「大学」という書物があります。「大学」に、「大学の道」というのが三つほどあげてあります。明德を明らかにするにあり、民を親しむにあり、自然に止まるにありという三項目です。明德を天下に明らかにしようとするものはまず国を治める、国を治めようとするものは家を整う、家を整えようとするものはその身を修むる。身を修めようとす

るものはその心を正す。心を正そうとするものはその意を真にする。その意を真にするには知致格物にあり。この知致格物の読み方によって陽明学が朱子学と分かれるのです。朱子学のほうは知を致すというのは物に格るにありと読んでおります。「知」というのは知識の「知」であります。ものを知るあの知、自分がいろいろなことを知るといふことは、その物に自分の知識が格ってその物の理をきわめる、こういう意味に解しております。陽明学のほうは、知を人間がもともと固有にもっている良知の意にとっており、そして格物の「格」は、物を正すにあり、知を致すは物を格すにありと読ましております。良知を致すのは、物というのは、親に孝行をするというようなことでもすべて、それを物と解しておるのですが、それを格すにあり、それが間違わないように正しくすることであるということである。自分の行為もそれを正しくするということである、そういう解釈から出ているのですが、それですべて自分の心、心というよりも、もともと本来人間がもっていると解している良知を、生まれながらに持っているとしておる。その良知を致す、致すというのは、隠れているけれどもそれを引き出すという意味もありましょう、それは物に格るにあり、物を格すにあり。友人とのつき合いにしても、どのようにつき合うことが一番正しいか、というように考える。自ずから良知がそこに出てくるというか、正しい友人関係の交際の道というものが出てくる。こういうふうに解するのであって、それで知を致す、あるいは良知を致す、そういうことが一番大事である、といっているいろいろなことを書いています。元来、人間は立派な明らかな良知があるけれど

も、それを妨げておるものは人間の欲望である、だから、欲望を去って、良知を明らかにしなければならぬ。

それは、たとえば名月に雲がかかったようなものである、その雲を追い払えば月はいせんとして明るい、そのようにして良知を明らかにする、そうしてどうするのが最も正しく、もっともいいかということを一々自分の良知に反省して——反省という言葉を使っておりますけれども——自分の良知に問うて、正しい、最もいい言動をする、それによります良知が明らかになる、このように説いているのです。

それから、なお、哲学的なものにはいるかもしれませんが、「天人合一、知行合一」などといっていますが、その「知行合一」ということ、行ないを知というものが一致しなければ本当の行ないではない、そういうのであります。実際にそれを錬磨する、良知を実際ことに当たって磨き上げる。これは学というよりも行です。その行を積んでそして良知が明らかになる、それが人間としての正しき道を修めるといふか、行なうといふか、一生を送るといふか、そういう道であるといふことです。

王陽明のことについては時間がありませんから略しますが、まさに死のうというときに門弟どもが、「なにか言い残すことがありますか」といったら「この心光明またなにか言わんや」といっております。自分の心が光り明らかであるのでなんにもいうことはない、といって死んだという

ことになっております。これは、自分の心を平素磨いておって、曇りのない姿にしておったからであります。私は、良知と良識とが同じものであるかどうかの研究はしていませんが、少なくとも似ているものと思います。それで、これは行、——最近の学問は知に偏しておって、行を怠っておりますけれども、知と行とを一致させて、つまり、実践によつて自分の良識をますます明らかにするようにしていくことが、何よりもわれわれのなすべきことではあるまいかと思ひます。(拍手)

懇親会(午後八・三〇〜一〇・〇〇)

大食堂のテーブルを並べ直し、まん中をあけて懇親会の会場をつくる。ほどなく一人当たり一合余の清酒とつまみものが配られる。登山で疲れているためか五臓六腑にまで酒がしみ通る。あちこちのテーブルからわくにぎやかな笑声。かくて青春の饗宴が始まる。熊本大学の津下先生が、このほど球磨川河畔に建てられた花田先生の歌碑について説明され

かくのごと球磨の早瀬もむせびけむはるに吉野をおがましとき



と朗詠された。懐良親王のご胸中を偲ぶ花田先生の測々たる心情、いのちこもる歌の調べに万場凜然として、そぞろに懐古の情に誘われる。班ごとのコーラスやパントマイム、さては個人で飛び入りするくろうとはだしの落語と、相次ぐ競演に爆笑の渦が巻き起こる。最後に寮歌や校歌の交歓になり、全員起立して「荒城の月」を歌う。その沈んだ静かなメロディは雲仙の山々にこだまし、「栄枯は移る世の姿」の感慨をしみじみと全員の胸に刻みつけた。実果てても語り尽きぬものか、一時すぎまで各班の部屋から歌声が続いていた。

開かれた日本人へ

——ともに国民同胞感を——

(第五日)



起床・体操・朝食（六・三〇～八・〇〇）

いよいよ合宿最後の日を迎えた。昨夜はおそくまで話し合ったためけさは少し疲れているようだ。軽い体操をする。あと半日で合宿も終わるのだという安心感と、最後までがんばろうという緊張感が漂う。朝食をとりながらも班員たちの話し合いは尽きない。

木内講師の補講と小田村講師の合宿所感の話にはいる前の会場には、一語も聞きもらすまいというピンと張りつめたものが感じられる。

木内講師による補講（八・〇〇～九・〇〇）

前日の講義の最後に言及した学問の研究方法をさらに深めていただいた。木内講師はマルクス主義を中心に、社会科学の研究方法が間違っていることを鋭く、しかも明解に指摘された。とくに戦後のインフレ論の誤謬ごびょうから始まって、ことごとく現実と背反したマルクス経済理論の弱さは、方法論の根本の間違いによるものであり、講師の柔軟敏感な現実感覚と対比して、問題点はいよいよ明瞭になった感じである。（速記要旨前掲）

起伏の多かった合宿も最後の数時間を残すだけとなった。小田村氏が登壇して、主催者側の合宿目的と問題点を集約して述べる。体験的な言葉と、緻ち密な分析が、複雑であった合宿体験を正確に整理し、あすへの進路を示唆したようであった。講師はとくにこの所感発表で時代の責務は青年の双肩にかかっていることを説き、相共に国民同胞感の確立をめざして邁進しようとして静かに、しかも力強い言葉で全員に呼びかけた。その内容は紙数のつごうで、やむなく割愛するが、要旨は次のとおりである。

五日間の生活をともにして（九・〇〇～一〇・〇〇）

国民文化研究会 小田村 寅二郎

今回の安保をめぐる国内政治は、内閣の交替と解散の約束によって一応正常化されたが、学園の正常化はまったく手がつけられていない。この合宿の目ざしたものは一つはそのことであつた。第三日の全体討論で示されたM君とF君の対立は現代日本の姿である。この合宿を主催した私どもの立場から見ると、二つの対立がイデオロギーの対立のままである点を最も遺憾とする。イデオロギーや思想が、それを信奉する人の直接経験から離れている場合は、どこまで行っても対立は解けない。それは相手の気持ちにはいつて考えることがないからである。もし真に人間として共感できるなら、そのことによつて、イデオロギーや思想そのものも必ず変わってくるはずである。

いま一つ現代の重大な問題は、組織と個人の関係が明確に認識されていないことである。労働組合や学生自治会の組織は、待遇改善や生活上のために作られるものであつて、その点では何人といえども異存はない。しかし、それが政治的要求を掲げて、組織として行動することは明らかに間違ひである。労働組合や自治会の中の人々の政治的見解は自由であり、もし政治的行動をする場合

は、組織の中の有志が、別に団体を作り、組合費や自治会費とは別個に資金を求めねばならない。それが「日教組」や「全学連」の名で行動するところに現在の混乱の大きな原因がある。

リンカーンは南北戦争を「内乱」と呼ばずに「分離戦争」と呼んだ。これは本来「ユナイテッド」であるべきものが「セパレート」されていることを悲しんだ言葉である。われわれは日本人である。伝統を断ち切るべきだと考える人も、伝統の中の生命あるものを継承せねば生きられぬことを学んでほしい。伝統を是認する人も、伝統の重みに乗っかって安易な生活を送るところからは、何物も生まれ得ないことを身にしみて考えてほしい。日本人という言葉にもし反発を感じる人があるならば、私はそれらの人々に一つの言葉を贈りたい。それはお互いに「開かれた日本人」になるという言葉である。そうしてわれわれは、この日本の国土の上に、お互いに喜び悲しみ嘆き合う共感・共鳴の世界を築き上げ、相共に国民同胞感を確保し、拡大してゆこうではないか。

感想文執筆（一〇・三〇〇～一一・三〇〇）

合宿体験を反省整理しながら、一人一人さまざまの思いをこめて感想文を書く。その合い間をみて記念写真と班別の写真を撮影する。

昼食（一一・三〇〇～一二・三〇〇）

閉会式（一二・三〇〇～一二・四五）

学生を代表して九大の横田勲夫君、一般を代表して神奈川の沼野哲司氏、大教協を代表して黒岩助教授、国文研を代表して山田輝彦会員があいさつを述べた。

かくて五日間にわたる合宿は終わった。各人の内心に生起した反発と共鳴と、喜びと迷いと、さまざまの心の移り変わりを伴った激しい精神生活は一応終着した。性格や思想やイデオロギーの対立はあったにしても、各人の肌身にしみた雲仙のいで湯のごとく、こんこんとわく友情は動かすことのできない体験的事実として、各人の記憶に鮮やかに残るであろう。われわれはいま忘れがたい思い出と尽きぬなごりを惜しみつつ、現実の社会に帰る。合宿で実現された一体感を永続的なエネルギーに転化させるための努力を誓って――。

バスが出るとき遅れて出発する人たちは、先に出発する人たちを「螢の光」で送った。車中の人たちは手を振ってそれにこたえた。五日前、ためらいがちな視線を交わした人々の中に、消えがたい連帯感が生まれていた。雲仙の山々の上の空はこの日も突き抜けるように青かった。

はしりがきの感想文から

——ここにおさめた感想文は、合宿最終日の開散式の直前に、あわたたしくまとめられたものの中から選んだものである。それだけに意を尽くさない個所も数多くあるうと思われ
るが、参加した学生青年の決意の一端は読みとっていただけるものと思う——

ほのぼのとした思い

鹿児島大学 O

楽しい五日間の共同生活だった。安保闘争のあらしの中で傷ついた僕ら学生の心に、何かしらほのぼのとしたものが芽ばえつつあることを痛切に感ずる。全学連の行動をきめつける前に、これまで戦後なされて来た教育について、深く反省の必要があるように思う。すなわち戦後の教育には、心と心を結ぶ情操的教育の欠けていたことを特記したい。この合宿に参加して、同じ年齢の同胞が、それぞれ現代の思想、教育、政治の混沌に不安と危ぐの念を抱きつつ、これらをいかに打開したらよいのか思い悩みながらも、積極的に明日の社会を一步でも前進させようとしている熱意にふれ、自分の消極性をきびしく反省させられた。お互いに話し合う事によって、必ず共通の場は見出されると思う。思想的対立が決して人間的対立であってはならぬと信ずる。この合宿で得た感激を生活の糧としてこれからの学生生活を送りたいと思う。

痛烈な体験

熊本大学 K

この五日間、未知の人々の間にあって、さまざまな疑問と違和感と、それとは全く逆の感動と共感との交錯

した奇妙な自己矛盾の中で過ごした。その矛盾は私をさいなんだ。あたかもそれは相いれない精神の両面、理性と感情とのかつとうにも似たものであった。「それは一体どういふことなのだ。具体的に言え」と言われたところで、明確に答えらるべきものではない。私という人間の本质に根ざしたもので、ここで講義され、討議し合った種々の問題の前提となるべき性質のものであった。班別討論で一つの意見を述べる。しかし、そのうしろには常に別の自分がそれに首をかきつけていた。

私はこの研修会を、他の人たちとは違って、自分の内部に没入することに心を注いだ。三日、四日と日を経るに従って、そういう態度が間違ひであると感じはじめた。自分をさらけ出すことで、自分というものを確立していけるような気がしてきた。そして自分の今までの生き方があまりにも安易で不徹底であり、あまりにも勉強不足であったこと、また自分の視野のいかに狭いものであったかに気づき、痛切な悔いがひしひしと感じられた。「真剣に生きること」——結局、私を今支配しているのは、この決意である。この合宿が私にもたらした最大の贈り物である。自己分裂、懐疑、それに伴う安っぽいニヒル感と無気力、過去の私はそんなムードの中にあつた。講師の方々の信念に打たれた。自分なりの生き方を見つけようと思う。

楽しかった合宿

九州大学 F

国文研の合宿に参加して三回目。私は今度ほど楽しい合宿はなかった。こういう立派な会の運営に努力して

いただいた諸先生方に心から感謝します。私の大学ではマルクス経済学の講座がほとんどなので、諸先生方のマルクス批判には耳をおおいたくなるような事もありました。しかし私はそういう事にはなるべくこだわらぬように努めました。なぜならこの合宿にはそれ以上の何ものかがあるからです。それは「同国人としての親密感」がひしひしと感じられることです。いろいろなイデオロギーを持った人がおりました。しかしそういう人々をいちように包みこむ何かがあったようです。ただ戦後の民主主義教育なるものをたたきこまれてきた私にとって、同胞感の中心として天皇を持ってこられることがどうもしっくりしないのです。帰ってよく考えてみるつもりです。

誠実な言葉がうれしかった

福岡学芸大学 Y (女子)

いろいろな疑問が頭の中で雑然と起こってくる。皆の意見を聞いたらず少しはどうかなるだろうと思って参加したのですが、消極的な性格のために突っ込みが足りませんでした。しかし日ごろの学園生活よりもずっと充実し、楽しかったのは事実です。中でも一番うれしかったことは、年長者諸氏の誠実なお言葉がいただけたことです。この会の趣旨は、民族意識の高揚と友情を深めることだったと思います。懇親会の席上全員で「荒城の月」を合唱したあのへだたりのない気持ちをいつまでも忘れずやっつけていきたいと思えます。

青春の歎喜

福岡大学 F

流血の三池争議、全学連の血の行動、血で血を洗う現実の中で、私は強い憤りを感じていた。同じ日本人じゃないか！ この現実の中で、私は居ても立ってもおられぬ毎日を過ごしていたある日、私の敬愛する教授から贈られた「国民同胞感の探求」を思い出した。読みながら私は涙も流れるばかりの感銘を受けた。これが私の雲仙合宿に参加した動機であった。下界は三十四度から三十六度の猛暑だったが、ここは別天地だった。夜は山々の間から満月が雲一つない星空にのぼる。谷川のせせらぎが、遠く近くにきこえ、かじかの鳴く声も、人の心を夢心地に誘う。ここには静けさがあった。研修会にはもってこいの場所であった。講義はまず聖徳太子の憲法十七条から始まった。「和を以て貴しとなし、忤^{さか}うことなきを宗^{もと}となす」——日本人の心の根本は和の精神である。大和の精神である。次に「現代の思想的課題」と題して斎藤先生の講義、国の利益と個人の利益は相反するものではない。中国問題についての佐藤先生の講義、経済評論家木内先生の世界経済の動き、いづれもすばらしかった。健全な考えを持ったわれわれ若き者同士が立ち上がり、日本を立派な国家としなければならぬと堅く信ずるようになった。またこの合宿は友情をおいては論じられない。昨日までの未知の学生が、心をさらけ出して裸になる。こんな楽しいことはない。友あり遠方よりきたるといった感じだった。

青春の歎喜にあけくれた五日間であった。十年の知己にめぐり合ったその喜びよ。こんとんとした生活を送

っていた私にとって、画期的変革とまではいなくても、大きな示唆を与えられたことは確かである。この感激を周囲の友人に訴えてゆきたい。この合宿で日本国民の一人であるという自覚をもつことができたことを深く感謝する。

新しい学生運動を

岡山大学 M

私は自治会代議員として驚くべき事実を目撃し、このままでは学園の自治のためにも、日本の将来のためにも、真に憂慮すべき事態を引き起こすのではないかと思いつつ合宿に参加した。さきの安保闘争には、地方の平穏な私どもの学園にさえ、数次にわたる授業放棄、抗議集会、市中デモが、自治会の名のもとに行なわれた。今春早々年度方針を決定するに当たり、自治会幹部がまずやったことは、世界情勢の分析である。ところが一読して私を驚かせたのは、いわゆる自由主義諸国を反平和勢力、中ソを中心とする共産圏諸国を平和勢力とすることであった。その後、自治会幹部のほとんどが、民青同のメンバーであることを知った。この情勢分析が大前提となって、すべての身近な問題が全部政治目的に結びつけられた。すべての問題を安保へという目的が余りにも明白であった。ごく少数の幹部が強引に組織を引きずり回した。不可解なことに、このような学生総会に平素は何の関心も有しない学友が、今度の抗議デモに多数参加した。これらの学友の大部分は、自治会の組織がどのように動かされているかも全然知らず、平和中立・民主主義擁護のスローガンを信じ、その本

質を見きわめることなく赤旗の下に結集したのである。

今度の合宿の中で、安保反対・無防備中立を唱えながら、「他国から侵略されれば、侵略されてもよいではないか」という発言をめぐって論議がわいたが、私は一番の問題はそういう言説の出て来る所にあると思う。現在の学生運動がかくまでゆがめられているのは、一部のエリートの存在に対して一般学生が懸念をもちながらも、あえて正論を吐くだけの勇氣をもっていないことと、正しく指導する者が少ないことだと思われる。それゆえ、一般の学生の中に本当に考える者を一人でも多く作ることが大切だと思う。合宿の目的がこういう方向に進んで行くことを切に希望する。

忘れ得ぬ友

神戸大学 S

講義は予想以上に多彩な内容であったと思います。私は講師の先生方が堂々と自信をもって説明された態度に敬服しました。ある時はきびしく、またやさしく、あるいはユーモラスに人間の道をさとされました。今後は決して高慢にならず謙虚な気持ちで、裸になって話したい気持ちです。今日の世情は乱れています。この合宿で得たものは、必ず危機に直面して台頭して来るものと思います。また全国津々浦々から集まってこられた学生と、腹を割って話し合えたのはうれしくてたまりません。心のすがすがしささえ覚えました。忘れ得ぬ友であり、美しい友情であったと思います。

かけがえのない体験

東京大学 N

最初の日の講義中、僕は本当に居たたまれないような気ですわっていました。何という一方的な偏見であろうか。これまで僕が真理として信じこんできた事柄と何と相反していることか。これが僕のその時の気持ちでした。これ以上かかる講義を聞くのはムダであるとさえ思いました。五日目の今日、僕の心境に大きな変化があったことを認めます。五日間の講義を通して、これこそ僕のささえとする道であるとか、これは正に真理であると感銘した事は一つとしてありません。しかし、僕の心をヒヤリとさせた事が一つあります。今まで僕が信奉して来たイデオロギーなり事実なりは、全て同じように先生の講義や活字を通じてのみではなかったか。僕は今までかかるものを何の批判もなく信じこんでしまっていた。実に恐ろしいことではないか。僕は今までとおよそ性格の異なる講義に接して、これまでの軽卒さに気づきました。自分の身で体験し、自分の心で判断し、そこから正しく自分なりの道を見出し、いかねばならぬということを、この合宿によって初めてさとりました。和気あいあいとした友情と、本当の意味における日本主義ということを教わったこと、同時に批判精神を学んだことはかけがえのない体験でした。

学生委員として

早稲田大学 F

今回の合宿では学生委員の役をおおせつかり、その任務を果たすため、自分なりにいろいろと苦しみました。「学生委員なんかになるんじゃないか」と切実に考えたものですが、いま静かに思うと、学生委員という立場がいろいろなことを教えてくれたようです。私が一番心を用いたことは、班の空気をなごやかにすることでした。重苦しい空気で、言うべき事も言えぬようでは真の友情の発生も望めないのは当然のことです。この方針に誤りはなかったと思います。しかし余り自由な空気を求めたため、何となくしまりがなく「仲良し会」的なものになったという感じはぬぐう事ができません。それでもよいではないか、雑談でもよむか話しか合う空気を作ることから真の友情も育つのだという考えもありませんが、この会を単に「仲よし会」的なものに終わらせるのは絶対に誤りだと思えます。そうした態度からは真理を追究する真剣な態度、ひいては自分の信念として、自治会正常化へ立ち上がる決意もわき上がってこないはずで

この会はマルクス主義を信奉する人にもその門を閉じてはけません。反共の理論武装をすることではなく、もっと広く国民的立場を訴えていくことも十分承知しています。しかしこの運動が拡大するにつれて、意識的なマルキストが、明確な目的を持って参加しないとも限りません。よほどの確信と決意が必要であるし、勉強せねばということを感じました。私は東京大学に合宿案内のピラ配布にいった手前もあり、会の運営にはひ

とかたならず心を用いたつもりです。三日目の夜は、どうしても班が思いどおりにいかず、ペランダに出て一人で泣いたこともあります。ただ初めはうまくいかなかった班も後には順調で、皆さん一応満足して帰られたことが唯一のなくさめです。

感想

早稲田大学卒 F

例年こうした意義深い研修会を意欲的に開催して下さる国文研の皆様から感謝の気持ちを申し上げたいと存じます。いま私がこの五日間をふりかえって、非常に深い感動をもってこの一文を書いていることを申し上げたい。今日、よく学生は不運な立場に置かれているといわれております。事実この研修会に参加された学生諸君の多くも、学生生活に対して強い喜びや希望がないと申しました。その原因の一つとして、学生同士の間で共通の場がないことが最大の原因ではないかと思われます。学校が存在するのだから、学生こそ共通の場があるのではないかと思われがちですが事実はずいと思ひます。学生同士が何の気がねもなく、心から話し合える機会は余りに少ないし、それが学生の気持ちを不安定にしているのです。

この研修会に参加して、学生が共通の場を発見し、喜ぶ気持ち、学生生活を終えて間もない私にはよくわかる気がするのです。「自衛」の問題をめぐって、東大のM君と私との論争について、小田村先生のご意見を本当に意義深く拝聴させていただきました。とかく議論の対決が、同時に人間関係の対立となりがちな風潮は

確かにあると思います。今後大いに議論はやっても、人間的対立・感情的対立は断じて避けてまいりたいと思っています。いろいろとありがとうございました。

参加してよかった

高崎経済大学 〇

初めてこの合宿に参加して感じたことは、「参加してよかった」ということです。何がよかったかを考えますと、「何か心に得るものがあつた」ということです。混乱した世相に立たされていくわれわれには、将来の日本を背負う義務があります。私の心には、まとまりのつかない、もやもやした煙のようなものが動揺していました。安保条約というものは結んでいいのか悪いものか、この問題に対して全学連やインテリ層が激しい反対闘争を始め、到る所で安保反対の叫びが起こったが、この人たちは本当に将来の日本や現実の世界の様子をながめたくてで行動しているのか、幹部の人達におどらされているのではないかと疑問をもったのです。しかし、余りにも激しい反対運動を見ると、意味がわからないままにその闘争が正しいのではないかと考えたこともあります。

いろいろなことで迷いました。何の解決策ももたず、もやもやとした気持ちを少しでも解決する糸口が見つかればよいと思って参加したのです。解決策というものは見つからなかったが、何か糸口のようなものがおぼろげながら浮かんだような気がします。われわれにとって古典の中の伝統がいかにたいせつであるか、世界の

中の日本という広い視野がいかんたいせつかわかったと思います。言葉ではよく言い表わせませんが「心のよ
りどころ」のようなものが得られたと思います。

想像以上の成果

亜細亜大学 S

私は過去において幾回かこのような会や合宿に参加いたしました。しかしそれらは皆遊び半分の気持ちで来
る人が多かったため、成果は何もなかったようです。このような経過をたどって来た私としては、今回の研修
会にも期待はしていませんでしたが、想像とは全く異なった空気と成果がありました。だがまだ腹を割って
話すという点において、日数が少ないせいか不十分であったようです。来年度からは講義もたいせつですが、
班別討論の時間を増して下さるとよいのではないかと期待以上の勉強とふんいきを与えて下さった関係各位に
お礼申し上げます。

残るは地熱、祖国のいのち

神奈川（教諭） O

「もの皆枯れて残るは地熱、祖国のいのち」。飛び交うえい光弾、耳をろうするさく裂音の中に、祖国の無窮

を信じて倒れていった多くの同信の友と私の世代は、敗戦とともにその息吹きを止めたかのごとく思われた。しかし、世代を越えた今日の合宿に参加し、その地熱は雲仙の泉の如く、地上に噴煙をあげて脈々として民族の生命がわき出しつつある確信を得る事ができました。この事は、講習によって得た多くのものに増して、明日への生きがいであります。現在の日教組に対して、その革命倫理を批判し、教育の正常化を叫んで新組合を結成し、日夜その運動に努めている私たちに、どれほどの確信を与えてくれたか、はかりしれないものがあります。

私たちが日本文化の創業と、その今日までの伝統を護り抜いた先人と、名もなき民の心を真に憶念したとき、祖国への帰属意志はおのずから生じ、世界文化単位としての日本文化を開いてゆく道が生まれると存じます。今日までの苦難の道とさらに明日からのいばらの道を、ただひたすら祖国と民族のため進んでおられる小田村先輩はじめ、国文研の方々には感激のほかありませんし、いかに今まで私たちが怠慢であったか、一日一日と身にしみて思わせられ、心の中では苦しい思いでした。「友よとよばば友は来りぬ」——。今日の確信をもって明日からの神奈川の教育正常化の戦いに生き抜きます事をお誓いする次第です。

真剣に生きよう

長崎（会社員） S

日々全く考える事のないガツガツした生活を送って来た一年半、自分でもいけないいけないという自己批判

を持ちながら、現実生活のきびしさに圧倒されて来た毎日。そこにちょうどこの四泊五日の共同生活。全く違った合宿生活に飛びこんで来た最初の二三日間は、實際息苦しく、おれが来るような所ではなかったという感じで、全然なじむことができませんでした。しかし、各講師の講義が進むにつれ、班員の方々のやさしい、また真剣そのものの毎日の生活を実際にながめるにつけ、自分でも全く忘れてしまっていた学問に対する情熱、それにもまして正しい人間生活の探究——この事が胸の底よりあとからあとからわきあがって来ました。「これではよかったです。いま私の心の中は清浄な気持ちでいっぱいです。」

明日からはまた、きびしい現実の生活が待っています。しかしこの合宿で得た生活に対する真剣な態度は、私の体のすみからすみまでにじみこんでしまいました。生きよう、清く正しく。そして努力しよう。雲仙の山々にこだまする大声でこう言いたい気持ちです。

十日後に書かれた感想文から

——合宿が終わって静かに家郷で旬日を過ごしたのち、長崎大学有志学生は改めて合宿をふりかえって感想を記し、これを謄写ずりの小冊子にまとめた。以下はこの感想集から集録したものである。長崎という一地域にもどった学生たちが、これからのまじわりの出発点として、感想集をまとめたことは、いろいろな点で参考になるものと思う——

前進へのきっかけ

合宿後十日をすぎいま今静かに回顧すると、昨日のように五日間の出来事が思い出される。實際あの合宿に参加してもっとも感じたことは、このように有意義にすごした日々が今までに果たして幾日あったろうかと、自分の不勉強、いたらなさを思い知らされた気持ちだ。たとえ意見は異なっても、同じ気持ちで毎日を送っている人々と語り合うことができたのも、近ごろ珍しいことではなからうか。

講義内容は僕には到底、理解出来ない禅問答や、全く新しい資料に基づいた中共の現状などあり、それらはまた強く考えさせられるものがあつた。大学生活の味気なさを感じ、どうしたら有意義にすごすことが出来るかと深く考えてもみなかった僕には、全く試練の場だった。講義はたしかにかたよったとも思えるものがあつたが、入学いらい安保反対のデモにはすべて参加し、それに対する批判をきいて是非はともかく思慮という広い視野に立った判断力に欠けていたことを認める。騒然たる社会状勢の中に日本古来の伝統的精神はぜひ心要だと思うが、マスコミその他が十分信じられないとき、自分らの判断資料は果たしてどこから得られるのだろうか、「社会」を離れて個人の考え方が存在しうるだろうかなど、疑問に感じた点がいろいろあつたが、これらの問題はこれからじっくり考えて生活したい。

とにかく、マンネリズムに陥りがちな僕の生活を、もう一度反省し前進させるきっかけを作って下さつた方々には感謝の念で一杯だ。ぜひ来年も参加したい。(一年S)

有意義な体験

合宿参加の申込用紙に併記する事項の一つとして「学生生活において何をよりどころとしているか」という質問があった。これに対して僕はただ「運動」という二字で片づけてしまった。実際今までにこのような問題について自分で考えたことはしばしばあったが、結論となって出てくるものは「なし」ということであった。

この合宿参加前に前回の合宿記録である「国民同胞感の探求」をよみ、「天皇」とか「記紀の文章」に何だかとりつきにくい感じがなかった。いま合宿について回顧してみると、何だか心の片すみにもやもやしたものであるにはあるが、学生時代の一つの体験として非常に有意義なことであったと思う。朝は六時半の起床から夜は十時半の消燈時間まで——実際は個人的な話し合いで二時ごろまで——講義に、班別討論にぎっしり時間が組まれていた。僕らの班には最初の二日ばかりは活発な意見も出なかったが、その後は時間外にも個人的に話し合った。班別討論の時間はた然なかったが、限られた時間を最大限に生かすということにも意を用いるべきであったと思う。さらにこれら討論の場で活発な意見が出なかったり、意見を發表しなかったことについて考えると、自分の考えていることを故意に發表しなかったのではなく、それ以前の問題があったようである。すなわち日常生活において、いろんな出来事に対して真剣にとりくむ態度に欠けていたということ、また何事にしても考える以前に主観的に事を処理しすぎていたようである。

講義については、現実の問題として「新中国の建設の原動力」「現代政治の批判と新しい指標」に関して特に興味をもって聞くことができた。これに反して、思想に関するものについては、体験にのっとって話が進め

られたため、体験のない自分らにとって理解しにくい面があった。しかし現在は過去につながるものであるから、古人がたどって来た道を再考することによって、社会に共通する道をくみとり、現在の社会に照らしていく必要があることを痛感した。(三年G)

“開かれた”気持でいっぱい

七月中旬、同じゼミナリストの友人から合宿参加の申込書が送られて来た。同君は過去数回九州各地で催された合宿参加の経験を持っている。かねてから合宿にも、また研究会にも、参加しないかと勧めてくれた。が僕はそのたびに自分の都合を言って断わっていた。内心ではなぜこれほど熱心に勧誘するのかという疑問もあった。雲仙合宿参加の申込書をもらったとき僕は一つの期待を持つに至った。きっと何かあるに違いない。それは自分にとって重要なことであるに違いないという期待であった。一方、僕にとっては学生生活最後の夏休みであり、他の学生以上に頭を痛めることが多いため、前後を含めて一週間をさくことは実につらい思いがした。

しかし「合宿に参加したこと」によって、「救われた」「開かれた」という気持でいっぱいである。疑問と期待と、今のこの気持ちのつながりを考えてみると、あらゆる物事は解明できていくような気がする。問題意識を持っている人は、すべてこのような期待と不安と疑問と、それらに真正面から取り組んでいってこそ、道は開けてくるのではないかと思う。講義の一つ一つ、討論の内容一つ一つ、あるいは言葉のはしをとらえて説明することはできないが、いま合宿に参加したという事実から率直に感じたことはすなわちこれである。

また雲仙合宿は数え切れないほど感謝の言葉を私自身心の中から発した。部屋の中で食堂でロビーで、合宿全体が自分の今まで経験したことのない人間的触れ合いにみちみちていた。そしてそれは現代の社会とは全く別のもののような気がした。これらのことは自分だけであつたかと再度考えてみたい。そして合宿に参加したすべての学生青年は、日本人として本来もっている最も大切なこと——それは現在心のすみの方に小さく押しやられてしまっている——を呼び起こしてくれたのではないかと思うのである。(四年〇)

印象深い講義

「大学生生活の最初の夏休みだから、何か生涯に残るような思い出をつくりたい」と考えながら、特に計画もたたないまま雲仙合宿に参加しないかと誘われ、何か意義深い会のような印象を受け申し込んだ。私の考えは必ずしも固まったものとならず、確固たる信念をもちたいと思つていた矢先、安保改正をめぐるいろいろな事件が起こった。私は学生集会でも安保新条約を支持するためデモには参加しないと断言した。しかし社会はいよいよ混乱してデモの指導者は、学生はみな新安保条約には反対すべきだという考え方に変わり、中央でのさまざまな大衆行動は相当の誇張を加えて報道され、またデモにかりたてようとしてマスコミも口をそろえて政府自民党を攻撃した。果たして事実を正確に伝えているものかどうか疑わしく、加えて警察の暴力虐殺などの言葉も使用され、私の考えも四面楚歌(てつご)になつたようだ。警察が実際に暴力を使ったのなら許せない。学生も警察とともに国民に謝罪すべきだ……など私の考えもまた混乱した。これが合宿参加前の私の心境であつた。

第一日学生の全体討議では、当然のことながら安保問題、全学連の問題が取り上げられた。東大の某君いわ

く、安保反対、全学連支持、自分も授業に差しつかえない限りデモに参加したと。「侵略されたらどうするか」という質問に答えて大内兵衛の言を借り「侵略されたら、それでもよいではないか」と同君は言った。これは実に卑屈な考え方だと思ふ。大部分の日本人はたとえ素手であっても、それを食い止めるために戦わねばならぬ。また「アメリカの虜国になつても……」という無責任な不真面目な考え方もあつたようだ。

夜久先生の「思想と体験」というお話を聞くころやや疲れも出たが、気持ちをひきしめ努力して聞こうとした。先生が力説された聖徳太子の「和を以て貴しとなす忤うことなきを宗とす」という言葉は、いまさらながら熟考する必要がある。「日本と中共」と題する佐藤先生の講義は初めて聞く内容が多かつたので、果たして本当かどうか少々疑問を抱いたが興味深く聞いた。「人民公社」は恐ろしい。中国人は日本人と違って民族意識が低いのではないだろうか。日本にも人民公社のようなものができたらじつとしていないであらう。当面、新安保条約によって、われわれは日本の共産化を守らねばならない。木内信胤先生の講義も教室では到底聞くことのできないものであり、諸講師のまじめな態度に心打たれ、学生の態度にしても好感を抱かされた。次から次へと大変むずかしい問題が出たが、皆熱心に話し合った。たれの意見も快く受け入れてくれたのもうれしかった。

最後の小田村講師のお話は特に印象深く、日教組といい、全学連といい、本来自己の政治に対する意見信条は、各自それぞれ異なるにもかかわらず、スローガンに統一されてそのワク内でしか行動せず、勇敢に自己を主張し得ない現代青年学生はもとより、国民全体が考え直さねばならぬ重大な欠陥を指摘されている点、今後の課題として追求されねばならぬと思う。(二年S)

とても考えさせられた

私は、この研修会に対してある程度の子備知識をもって参加したつもりであった。だが実際には私が考えていた以上に盛会であったことにまず驚いた。参加者はほとんどが大学生であり、そしてその方々が真剣にあらゆる方面にわたって取り組んでいる姿をみて、何だか頭が下がる思いがしました。それに研修会を主催していらっしゃる先生方が、皆とてもご熱心にこの会のために尽くしておられるし、参加した方々も、きつと満足しておられることと思う。ただ参加者の中には、先生方のご苦勞も考えないで、規則に従わなかった人もおられたようで残念でした。

私はお手伝いの関係で、諸先生のご講義を聞かせていただく機会が少なかつたけれども、私が聞くことができたご講義にとっても考えさせられるお話があったこともまた事実でした。また学生の意見発表の中では、意見が二つに分かれていたことも大変驚きました。だが現在の状態を語る場合、やむを得ないことかもしれない。そんなこともかく私にとっては、この会は社会というものの、人間というものはいかにあるべきかを考えさせられました。できることなら今後何度も参加させていただいたら、どんなにいいだろうと思っております。

この研修会が、これからさきもっと広範囲に及んで、人間の本质を知り、生きてゆく私達への指標を与える会として発展してほしいと思います。(高校女子三年、合宿事務アルバイトA)

自己表現のむずかしさ

合宿も二度目の参加とあって張り切って雲仙に向かったが、今年もやっぱりらの底からすっきりした気持ちで終始し得なかった。なぜかと考えているうちに次のことが思い出された。第一に、自分自身を余すところなく表わすことの困難さ、第二には、生きて来たという体験の尊さ、第三は、幅の広い考え方を持たねばならぬということである。以下この点について反省してみる。

第一Ⅱ班別という団体生活の中で痛感したことであるが、学校も地域も考え方も違う学生が十三人一緒に寝泊まりし共に生活している中で、自分を完全に生かしかつそれが対立に終わることなく、その中から触れ合うものを見出せると期待したのだが、自分自身どうしてもその壁を打ち破ることができなかった。班のふんいきの中にとけこもうとするとき、自然自分自身を強く主張できなくなるのだが、この気持ちこそ尊く、必ずみな心に生きてくるのではないだろうか。個と全体の融和の中に自分を見出し、生きがいをもつて感ずるとは、かかるふんいきの中にのみ実感されるのではなからうか。

第二Ⅱ諸先生の講義を聞きながら自分の生活を省みると、自分の経験の浅さが強く感じられた。「自分の生き方についての語り合い」が、この合宿の基本的性格の中にあると思う。われわれのように経験の少ない者にとってたいせつなことは、やはり先人の体験を知り味わい、それを現代の実生活の中に生かすということ、すなわち「温故知新」という精神ではなからうか。その意味ではもっと伝統というか古人の生活の中にしみこんだ生きた思想を研究する必要があると痛感した。

第三「自己をはっきり見きわめ、広く体験を積み上げただけ幅広い物の見方、考え方が身につくであろうが、それなればこそ、われわれはさらに努力を続けいく必要がある。学問は学園のみではなく、一生をかけて努める意思を持続してはじめて大きな成果を生むものではないだろうか。これからの人生に、幅広く知識を吸収し、同時に自己というものを確立していくには大変な努力が必要であろうが、それがすなわち生きるということではないだろうか。

合宿の目的はともかく、この合宿で身をもって受けとめた体験を、今後の生活、これからの人生に生かしていくところにその目的があり、またあらしめねばならぬと思う。そしてそれが一人でも多く、少しでも長く伝えられるところに、今後の方向が生まれると思う。(長崎大四年B)

あ と が き

昨年春、本書の前編ともいふべき「国民同胞感の探求」を出版したところ、予想外に各界識者をはじめ学生諸君のご好評を得て、またたく間に三版をかさねることができた。「合宿教室」の運営に心労をかさねた同人はもとより、参加した学生諸君の喜びもひとしおであった。ここに各位のご声援にたいして、心から感謝の意を表したいと思う。いまここに続編の刊行ができたのも、見知らぬ多くの方々を含めて、全国各地からのあたたかい激励とご期待によってのことであった。あわせて謝意を表したい。

本書は、昨年夏の合宿終了後、福岡で原稿を収集、整理が行なわれ、当初はごく簡単なレポート式の編集がなされた。東京に届けられたのは昨年末であったが、そのころになって前年と同じ程度のものにまとめた、という意見がよくなってきた。というのは、各講師の講義は、要約するに余りにも貴重な体験的内容を盛っていたからである。昨年夏の記録をいまごろまとめたのか、というお叱りもきつとあることと思う。それでも、これでせいっぱいの努力であった。生業の余暇に編集と校正に従事したわれわれにとつて、幾晩かのぶっ続けの作業は容易ならぬ苦勞でもあった。校正などに周到を期す余裕もなく、したがって、そのできばえについては、編集委員自身、決

して満足すべきものと思つていない。なお印刷費の高騰のため、定価を低廉におさえることができなかつたことは、残念に思う。たくさんの若い学生諸君に本書を手にしていただくために、このことは編集委員にとつても大きな苦痛であつた。だが、それでも現在の一般図書よりかなり格安な価格にとどめたのは、一に理想社のご理解によるものであることをお伝えしておきたいと思う。

また、出版印刷界がひどくたてこんでいるいまの状況のなかで、理想社の佐々木社長と井上智行氏が、本書のために、力いっぱいご協力されたことに衷心から謝意を表したい。

今年の夏の「合宿教室」は、八月十三―十六日の三泊四日間、昨年と同じく長崎県「雲仙」のユースホテルで開催されることに決定した。本書に長講の記録を掲載した経済評論家木内信胤氏が昨年ひきつづいた連続講義の形において「続・世界の経済と日本の経済」を、また文芸評論家小林秀雄氏が、現代思想その他について講義を担当して下さることに決まつた。年々充実さを加えていく「合宿教室」の今年の成功を祈りながら、真剣な学生諸君の参加を期待したい。（この夏の雲仙合宿についての問い合わせは、鹿児島市山下町一七、川井修治氏（鹿大助教授）または、熊本県八代市横手町七八二、加藤敏治氏（市教育委員）あてに願ひしたい）

昭和三十六年五月二十二日

編 集 委 員

昭和三十六年六月一日 第一刷発行◎
昭和三十六年七月一日 第二刷発行

定価 五六〇円

千 一〇〇円

〔続 国民同胞感の探求〕



編者

大学教育有志協議会
国民文化研究会

編集委員代表

小田村寅二郎

東京都港区赤坂青山南町四の二一

発行者

東京都新宿区赤城下町四六番地
佐々木隆彦

発行所

東京都新宿区赤城下町四六番地
株式会社理想社

落丁・乱丁のものは
お取替えいたします

印刷 日東紙工株式会社・製本 大宝製本株式会社

— 本書の前編 — (既刊) B 6 判 改訂定価 450 円
365 頁 千 90 円

国民同胞感の探求

— 阿蘇における大学生との“合宿教室”から —

目次

- はしがき
- 『合宿教室』誕生の背景
- 一 現代の国民思想について
 - 二 全学連の動きについて
 - 三 全学連にどう対処すべきか
 - 四 時代の断層と取り組んで
- 『合宿教室』運営のあらまし
- 一 講義と班別討論の関連性
 - 二 チェーターシップ
 - 三 人生観に裏づけされた諸講義
- 阿蘇『合宿教室』の記録
- 一 未知の者ここに集う(第一日)
 - 二 緊張する心を講義と討論に(第二日)
 - 三 心の揺らぎと青春の歓喜と(第三日)
 - 四 『時代の断層』をふみ越えて(第四日)
 - 五 国民同胞感の生成へ(第五日)
- はしりがきの感想文から
- あとがき

— 写真 —

講義

- 人生・学問・祖国……………川井 修治
- 学生生活に対する要望……………宝辺 正久
- 現代と心理戦……………今立 鉄雄
- 学生運動への疑問点……………植木九州男
- 社会思想の構造とマルクス主義……………
- 長野 敏一
- 学問論……………戸 川 尚
- 陶淵明の詩における東洋的人間像……………
- 津下 正章
- わが国固有の人間観の特徴……………野口 恒樹
- 日本人のこころ……………花田大五郎
- マルクス経済学の生成と近代経済学……………
- 石村暢五郎
- 畏と敬と恥……………水野 武夫
- 第二次大戦論……………中 山 優
- 歴史なき現代に思う……………木 下 彪
- マッカーサー憲法と国民主権……………
- 森 三十郎
- 平和国家建設の基本的課題……………
- 小田村寅二郎
- 班別討論・意見発表会・検討会等

